

# 神 樓

研 究 紀 要

第 6 5 号

平 成 5 年 3 月

身 延 山 短 期 大 学 学 会

# 神 按

研 究 紀 要

第 6 5 号

平 成 5 年 3 月

身 延 山 短 期 大 学 学 会

## 秋山智孝先生の古稀寿を迎えて

本学園高等学校長、本学教授秋山先生は、今年満七十歳の古稀寿をむかえられましたので同学・後学の諸先生が集い、相議して本学機関紙「棲神」六十五号を先生の古稀記念号として出版し、ささやかながら先生の学恩の一端の報恩に擬し感謝の微衷に資し奉りたいと、先生縁故の諸先生に記念論文の献呈をお願い申しあげたところ、賛同の論文を多数お寄せいただきました。関係者一同、あつく感謝申しあげている次第でございます。

先生の本学園御就任は昭和二十一年で、このころは大東亜戦の終戦時の混乱期で、先生の御追憶によるとその講義は英語・国漢・日本史の多岐にわたり、更に体操までうけ持たされ、陸軍中尉で原隊復帰をされた先生は軍隊式の体操で一時間をどうにかすませた、と笑っておられました。

加うるに当時、敗戦後の日本の経済情態は最悪で、食糧不足はいわずもがな、給料の遅配は普通、まごまごすると欠配も珍らしからぬ有様でした。食料不足ですから闇米を買い出しに出れば、経済警察が戦中の特高のように暴力をふるい、苦勞してかついできたわずかな米や野菜を没収する、我々は何もできずに涙をのむ、こうした四苦八苦の生活がつい先日のように思い出されますが、こうした生活の中に祖山学院から現在の短期大学になり、一千余の生徒を送つて今日に至りました。

今、我々はこの伝統の上に更に四年制の大学へ改組転換して新時代に即応する教育体制をととのえ、四海帰妙の一翼たらんと日夜奮闘しています。

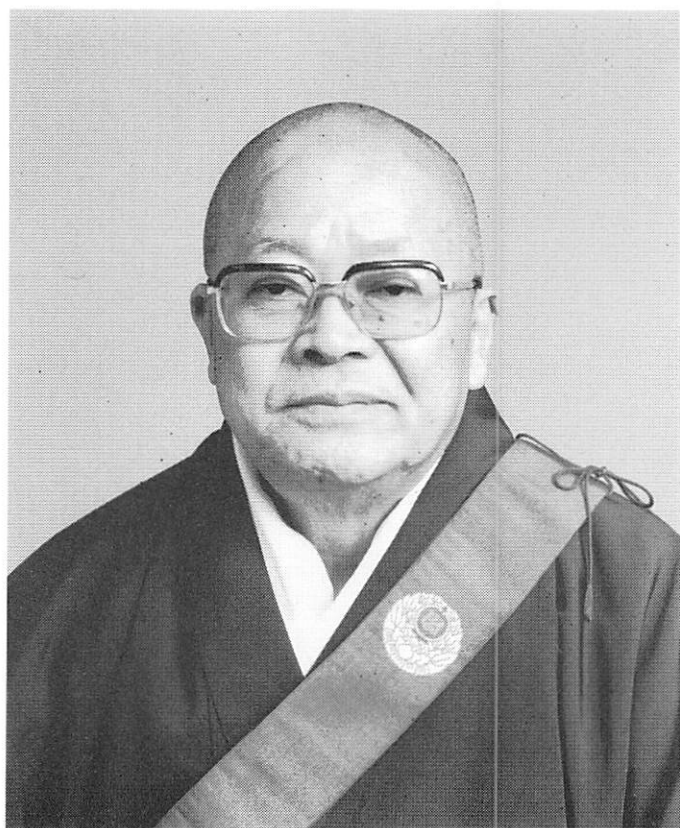
身延山総務、本学理事長藤井教雄先生は本学教職員並びに本山役員の先頭に立って勉勵指導され、昨年十月の本学同窓会総会では、四年制大学改組転換に全会一致、全面的援助を確約し、これを決議されました。

高等学校も本年中には新しく三階立ての新校舎が設立され、秋山先生は新校舎の初代校長として臨まれます。先生が壮者をしのぐ活力をもって更に新しい任務を遂行されますよう心よりお祈り申しあげます。

平成五年三月

宮 崎 英 修





秋山智孝教授

## 秋山智孝先生歴年譜

一、本 籍

山梨県身延町下山二二七一

一、得 度

大正九年九月十二日秋山智照・茂里志の長男として生れる  
昭和十年四月八日藤井日静上人に就いて

学 歴

一、昭和十三年三月

山梨県立身延中学校卒業

一、同 年 四月

立正大学予科二学年編入学

一、同 十七年 九月

立正大学文学部佛教学科卒業

職 歴

一、昭和二十一年十一月

身延山専門学校講師・祖山中学校教諭

一、同二十三年 四月

身延山高等学校教諭

一、同二十五年 四月

身延山短期大学講師・学生主事

一、同二十八年 四月

身延山短期大学助教授

一、昭和三十年七月 身延山短期大学教授

一、同 四十二年 学校法人身延山短期大学学園理事

一、同 四十七年七月 身延山短期大学図書館長  
一、同 五十四年三月

一、同 五十六年六月 同  
一、同 六十年一月

一、同 六十年二月 身延山高等学校長

一、同 年三月 山梨県私立中学高等学校連合会理事

一、平成 三年四月 身延山短期大学図書館長

一、同 四年十月 山梨県私学協会理事

### 宗門・久遠寺関係

一、昭和十九年九月 山梨県本國寺住職

一、同 二十一年 十九教区乙参事

一、同 四十二年 同 協議員

一、同 五十六年十月 第三回住職担任認証式管長名代

一、同 五十七年一月 制度研究委員会委員

一、昭和五十七年五月 昭和五十七年度特別信行道場訓育主任

一、昭和五十八年 五月 祖山中心体制調査委員会委員

一、同 六十二年 十月 日蓮宗勸学院講学

一、平成 二年 五月 宗宝調査委員会委員

一、同 三年 四月 立正大学日蓮教学研究所有客員所員

一、同 四年 四月 立正大学法華文化研究所特別所員

## 社会関係

一、昭和二十一年 四月 民生委員（三期）

一、同 二十三年 九月 下山立正保育園設・理事長

一、同 二十五年 四月 少年保護司

一、同 下山村社会教育委員

一、同 二十八年 四月 下山村社会福祉協議会副会長

一、同 三十年 四月 身延町選挙管理委員

一、同 郡保育連合会会長

一、同 三十一年 四月 身延町社会教育委員（三期）

一、同 三十二年 四月 郡社会福祉協議会副会長

一、昭和四十六年 四月 下山公民館長

一、同 四十二年 四月 身延町文化財審議委員

### 受賞

一、昭和四十二年 四月 宗務所長感謝状

一、同 三十八年 十月 県社会福祉協議会会長表彰（保育事業功勞）

一、同 四十四年 十月 山梨県知事表彰

一、同 五十二年 十月 全国社会福祉協議会会長表彰

一、同 身延山短期大学学園永年勤続表彰

一、同 五十五年 七月 宗祖七百遠忌記念保育研修身延大会管長表彰

一、同 五十六年 三月 宗會議員永年勤続管長表彰

一、平成 二年 十月 文部大臣表彰（短大四十週年記念大会）

一、同 年十二月 山梨県知事表彰（私学教育功勞）

### 研究論文

同廣中師について

宗歌の曲譜について

棲神二九号 昭和二八年九月

同 三二号 昭和三一年十月

六牙潮師と川口巴禪師について

大崎学報一〇八号 昭和三年六月

仏教保育の基本問題

棲神三六号 昭和三十七年十月

宗教と教育について―日蓮聖人に関連して

同 三七号 昭和三十九年一月

宗教と音楽―宗門の現代化に関連して

同 四〇号 昭和四十二年十二月

日伝上人堂供養法則について

同 四二号 昭和四十五年三月

身延に関する紀行について

同 四五号 昭和四十八年二月

身延裏参道考

同 四八号 昭和五十一年三月

草山要路考

同 五九号 昭和六二年三月

西溪楡林談義録目録

日教研紀要二〇号 平成五年三月

### 資料紹介

西谷楡林先聖録、西溪学校妙玄庵歴世目録

棲神六〇号 昭和六三年三月

御本尊筆法等之事

日朝上人御義日伝上人御講

同 六一号 平成元年三月

摩訶止観円頓章私記

同 六二号 平成二年三月

樓 神 第六十五号 目 次

序 文.....学長 宮 崎 英 修

秋山智孝先生歴年譜.....

「円教の意味」——円頓章釈.....浅 井 円 道 (13)

日蓮聖人後期の曼荼羅について(一).....上 田 本 昌 (25)

——授与者を通しての動向——

日蓮聖人における「顕本」の意義.....庵 谷 行 亨 (43)

宗祖御遷化に関する二、三の問題.....宮 崎 英 修 (51)

——御遷化記録を中心として——

中世における日蓮遺文の書写について.....冠 賢 一 (73)

日蓮聖人御真蹟に見る「料紙」の用法.....中 尾 堯 堯 (91)

法華経における信.....望 月 海 淑 (111)

クシヤンに於ける宗教の大衆化(その一).....高 橋 堯 昭 (129)

——律蔵に於ける背の高い塔・二仏・團泥の意味するもの——

研究ノート

智慧と慈悲（承前No・3）……………町田是正（155）

——実践としての智慧——

明治四年・岡山県における農民騒擾に関する裁判資料四……………中山勝（171）

ノート

新「大学設置基準」についての一考察……………渡辺寛勝（185）

身延本『本朝文粹』の伝来過程……………中尾真樹（199）

Ratnakaraśānti's Sūtrasamuccayabhāṣyaṃ Ratnālokalāṃkāra (I)……………望月海慧（1）

学園彙報……………（219）

編集後記



# 「円教」の意味

——円頓章釈——

浅井 円道

はじめに

天台智顗によると、法華経は「純円」の経である。例えば

当レ知華嚴兼、三蔵但、方等対、般若帶、此経無、復兼但对帶「專」是正直無上之道。故称为「妙法」也（玄義、会本一上7）

と。中の「專」＝「純」である。

では、円教とは何か、その意味を包括的に認知することが天台思想の特徴、引いては法華経の特徴を知る所以である。そこで周知の「円頓章」を手掛りとして、このことを調べてみることにする。

## 一

① 円頓者初縁二実相。造レ境即中無レ不二真実。一。繋二縁法界。二。二念法界。一。一色一香無レ非二中道。一。已界及仏界衆生界亦然。陰入皆如無苦可レ捨、無明塵勞即是菩提無二集可レ斷、辺邪皆中正無二道可レ修、生死即涅槃無二

「円教」の意味（浅井）

「円教」の意味（浅井）

滅<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>証<sup>ス</sup>。無<sup>レ</sup>苦<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>集<sup>ス</sup>故<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>世間<sup>ニ</sup>。無<sup>レ</sup>道<sup>無<sup>レ</sup>滅<sup>ス</sup>故<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>出世間<sup>ニ</sup>。純<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>実相<sup>ニ</sup>。実相<sup>ニ</sup>外<sup>ニ</sup>更<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>別法<sup>ニ</sup>。法性<sup>④</sup>寂然<sup>ニ</sup>名<sup>レ</sup>止<sup>ス</sup>。寂<sup>ニ</sup>而<sup>ニ</sup>常照<sup>ス</sup>名<sup>レ</sup>觀<sup>ス</sup>。雖<sup>モ</sup>言<sup>フ</sup>「初後<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>二<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>別<sup>ニ</sup>。是名<sup>ニ</sup>円頓止觀<sup>ニ</sup>」（止觀、会本一ノ二九～11）</sup>

はじめに「円頓」とは止觀第四摂法章の中で漸頓を明すところによれば

漸名<sup>ニ</sup>次第<sup>ニ</sup>、藉<sup>リ</sup>淺<sup>ニ</sup>由<sup>リ</sup>深<sup>ニ</sup>。頓名<sup>ニ</sup>頓足頓極<sup>ニ</sup>（略）三教止觀悉<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>漸<sup>ニ</sup>、円教止觀名<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>為<sup>ス</sup>頓<sup>ニ</sup>（会本三ノ四33）

と、妙案の説明によれば「足極」一名有<sup>レ</sup>通有<sup>レ</sup>別、通則俱通<sup>ス</sup>初後<sup>ニ</sup>、別則極後足初<sup>ニ</sup>、初心所觀萬法具足<sup>ス</sup>、惑<sup>ニ</sup>尽<sup>ス</sup>德<sup>ニ</sup>滿<sup>ス</sup>至<sup>リ</sup>後方極<sup>ニ</sup>（同）と。故に蔵通別三教の止觀は空仮二觀を方便として中道觀に入る（特に通別二教）次第の漸次止觀であるが、円教の止觀は初心より「頓に足り頓に極まる」止觀であるという意味である。

次にまた妙案によって円頓章を分段すれば、①は「所觀妙境」、②は「能觀」、③は「無作（四）諦」④は「結無作諦」、⑤は「功用有<sup>ニ</sup>淺深<sup>ニ</sup>性徳<sup>ニ</sup>行体<sup>ニ</sup>始終無<sup>レ</sup>二<sup>ニ</sup>」を謂うという。以下順を追って天台・妙案の更なる説明を窺おう。

二

①の「縁」「造」は「觀ずる」の意味。「実相」、「中」、「真実」は妙境である。「初めより実相を縁ず」とは初心から実相を所觀とするの謂、「境に造るに即ち中にして真実ならざるなし」とは円教の所觀の境は中道であり、従って一切が真実であるの謂である。つまり別教では地前は從仮入空・從空入仮の二觀を修し、これを方便道として地上に進み中道觀を修するが（類文多出）、円教では初心から後心まで一貫して中道を觀ずるのである。

そのことは法華玄義で宗（因果）玄義を明すとき、はじめに宗玄義と体玄義（諸法実相）との同異を考えるが、な

かにおいて先ず種々の異見を述べ、次いで

今言不異而異、約二非因非果二而論因果二、故有宗体之別耳。釈論云若離二諸法実相二皆名二魔事二、普賢觀云、大乗因者諸法実相、大乗果者亦諸法実相、即其義也。当レ知実相体通而非因果二、行始并レ因、行終論レ果（略）開二仏知見一名二円因二、究竟妙覺二名二円果二（会本九下4〜5）

という。中において普賢觀經の本文は「汝今應レ當觀二大乗因二、大乗因者諸法実相」（平樂寺本、真訓両読開結六三頁）であるが、天台はこれに「大乗果者亦諸法実相」の一句を添加したわけである。

法華の宗と体とは「不異而異」である。なぜなら法華の宗は非因非果なる実相中道の理体に約して因果を論じるからであると。さすれば法華の行は初心より後心に至るまで諸法実相を所觀の妙境とすることになる。唯仏与仏乃能究尽の諸法実相を法説周では仏知見と称し、仏知見の開示悟入を行相とするから、また換言して初心の円因から後心の円果まですべて仏知見の開発に外ならないともいう。

同様のことは法華玄義の位妙のところでも述べられる。

今実相平等雖レ無二次位一見二実相二者判二二次位二何咎（略）若見真判レ位如二江河深淺二、若実相判レ位如二入レ海深淺二、故普賢觀云大乗因者諸法実相、大乗果者亦諸法実相（会本五上7）

と、中道実相の理は非因非果であり平等である。その理を初心から後心に至るまで觀じるのであるから、元來は位次の隔たりはない。しかし実相の見え方には浅深の差があるから、位次を設けても矛盾にはならない。空の見え方での判位（藏・通）は江河の浅深の如く深みがない。実相中道の見え方での判位は大海の浅深の如く淵底を極めると。

法華玄義の最初（七番共解の標章段）に妙宗とは何ぞやということについて、

仏自行因果以為レ宗（会本一上17）

「円教」の意味（浅井）

と銘打っているのも同意である。

では初心より実相を観じるといふのは、一体どういう行相なのか。宗玄義で鹿妙を明すところでは

決了鹿因<sup>スルニ</sup>同成<sup>ヲ</sup>妙因<sup>ヲ</sup>決<sup>スルニ</sup>諸鹿果<sup>ヲ</sup>同成<sup>ス</sup>妙果<sup>ヲ</sup>、故低頭挙手<sup>キヤ</sup>善法<sup>サ</sup>之衆<sup>シ</sup>皆成<sup>リ</sup>仏道<sup>ニ</sup>更無<sup>レ</sup>非<sup>ズ</sup>仏道<sup>ノ</sup>因<sup>ニ</sup>、仏道既<sup>ニ</sup>成<sup>ス</sup>、那得<sup>ズ</sup>猶有<sup>ル</sup>非<sup>ズ</sup>仏之果<sup>ニ</sup>、散善微因<sup>ミ</sup>今皆開決<sup>スルニ</sup>悉是<sup>ニ</sup>因<sup>ナリ</sup>、何況<sup>ヤ</sup>三乘<sup>ヲ</sup>行<sup>フ</sup>、何況<sup>ヤ</sup>菩薩<sup>ヲ</sup>行<sup>フ</sup>（会本九下14）

体玄義の末尾にも

開<sup>キハ</sup>横<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>低頭<sup>キヤ</sup>挙手<sup>サ</sup>、歌詠散心<sup>カ</sup>皆已<sup>ニ</sup>成<sup>ス</sup>仏道<sup>ヲ</sup>、三藏<sup>ソウ</sup>最淺<sup>シ</sup>尚被<sup>レ</sup>開<sup>キ</sup>即妙<sup>ナリ</sup>、況<sup>ヤ</sup>通別<sup>ヲ</sup>等<sup>ヲ</sup>、可<sup>シ</sup>以<sup>レ</sup>意<sup>ヲ</sup>得<sup>ル</sup>、開<sup>キハ</sup>下<sup>ニ</sup>依<sup>ル</sup>二小<sup>ノ</sup>乘<sup>ヲ</sup>、常<sup>ニ</sup>行<sup>フ</sup>等<sup>ヲ</sup>方法<sup>ヲ</sup>上<sup>ニ</sup>小小<sup>ノ</sup>微善<sup>ミ</sup>無<sup>シ</sup>三<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>成<sup>ス</sup>仏<sup>ニ</sup>（会本九上52）

と。要をとっていえば、低頭挙手（方便品の人天開会の文）、著法之衆（不輕々毀衆）、散善微因（人天開会）、歌詠散心（人天開会）等の小々の微善もこれを「決了」「開決」「開」すれば皆妙因となるという。法華に開会されれば、いかなる小善も皆妙因となる。開会とは実相中道観による法界観に外ならない。このことは亦のべる。

因みに「横行」とは守脱の講義によると「横該三所行」つまり、横に広く大小の諸行を該括するの謂である。

### 三

②は能観。「法界」とは妙案によると「中道即法界」である。つまり法界とは実相中道の拡がりであり、中道のままでの界差別である。万差の法界を中道として観ることを「繫縁法界一念法界」と表現したものと思う。すると「一色一香無非中道」という観方が生れる。

妙案はこれを一色一香にも皆仏性があるという意味に拡大解釈して、ここで「無情仏性感耳驚心」の名句を発し、以下十義を立てて無情有仏性を論じたことは有名である。要は、中道において一切の存在価値を認めるということ

ある。そこに円教の立場がある。

#### 四

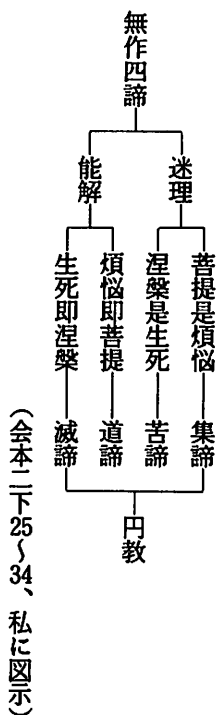
③は無作四諦。五「陰」・十二「入」も「無明塵勞」も「刃邪」も「生死」もみな真「如」「菩提」「中正」「涅槃」であるから、捨つべき「苦」も、断すべき「集」（煩惱）も、修すべき「道」も、証すべき「滅」もない。故に迷の「世間」と悟の「出世間」との差もない。一切は「純ら一実相」であり、実相以外には何もないと。

このことを最も簡明に表現しているのが、法華玄義の境妙段において四諦を説くところである

生滅四諦——三藏教

無生四諦——通教

無量四諦——別教



註 摩訶止観第一大意章の発大心の顯是（会本一ノ三25〜28）

大本四教義第一章釈四教名（正統三ノ五415オ〜416オ）・第四章明判位不同（同、四447オ）にも見える。

「円教」の意味（浅井）

「円教」の意味（浅井）

つまり簡単にいえば煩惱即菩提・生死即涅槃を円教教理の特色とするわけである。なお大本四教義の四教判位のところでは、涅槃即生死・菩提即煩惱は理即、生死即涅槃・煩惱即菩提を「知」るは名字即以上である（同447ウ下）と判位している。

煩惱即菩提であるならば煩惱は断じなくてもよい。生死即涅槃であるならば生死の苦から出離したいと念願する必要はない。諸教においては煩惱を断じたところに菩提がある、出離生死したところに涅槃があると教導するから、我等凡夫は一体どうすればよいのか、我々は煩惱を断じることなど到底不可能である、仏教を信仰する資格は我々にはないのであるかと思ひ悩む（菩提是煩惱）。ところが円教では煩惱は断じなくてもよいのであるから、我々にとつては大変親しみやすい、大いに心丈夫である。

信解品第四に、幼稚にして父城を逃逝した窮子が「五十余年」にわたつて四方に衣食を求めて傳旨展転したあげく、「遂に其の父の所止の城に到りぬ」という。こういう偶然から父城の前を通ることになり、而も父の目にとまることになったのかということについて、天台は法華文句で

從<sub>リ</sub>退大<sub>ニ</sub>已後処々遊歴備<sub>ニ</sub>聖<sub>ニ</sub>辛苦<sub>ニ</sub>（略）以<sub>レ</sub>苦為<sub>レ</sub>機扣<sub>ニ</sub>於大悲<sub>ニ</sub>故言<sub>ニ</sub>遂到父城<sub>ニ</sub>（会本十六46オ）

他国の処々を遊歴して備さに辛苦をなめた、その苦が機感を育てたのが縁となつて仏の応を克ちとることができたのであるという。苦は捨離の対象であるよりは機の熟成の資けである。「かわいい子には旅させよ」というか、生死即涅槃とはこの謂である。決して中古天台のそれではない。

円<sub>ニ</sub>五品不<sub>レ</sub>断<sub>ニ</sub>五欲<sub>ニ</sub>而淨<sub>ニ</sub>諸根<sub>ニ</sub>、具<sub>ニ</sub>煩惱性<sub>ニ</sub>能知<sub>ニ</sub>如来秘密之藏<sub>ニ</sub>（玄義智妙、会本三上33）

二乗怖<sub>ニ</sub>畏生死<sub>ニ</sub>（略）菩薩不<sub>レ</sub>爾、於<sub>ニ</sub>生死<sub>ニ</sub>而有<sub>レ</sub>勇、於<sub>ニ</sub>涅槃<sub>ニ</sub>而不<sub>レ</sub>味<sub>ニ</sub>（略）不<sub>レ</sub>断<sub>ニ</sub>煩惱<sub>ニ</sub>而入<sub>ニ</sub>涅槃<sub>ニ</sub>、不<sub>レ</sub>

斷<sup>ス</sup>五欲<sup>ニ</sup>而淨<sup>ム</sup>諸根<sup>一</sup>（止觀、觀煩惱境ノ觀不思議境、會本八ノ一21、22）

所<sup>レ</sup>言<sup>フ</sup>者義<sup>ニ</sup>乃多途<sup>一</sup>、略說<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>八、一教円、二理円、三智円、四斷円、五行円、六位円、七因円、八果円（略）  
斷<sup>ル</sup>円者不斷<sup>ニ</sup>而斷<sup>ニ</sup>無明惑斷也（大本四教義、已統三五ノ五416）

若<sup>シ</sup>約<sup>シ</sup>別教<sup>ニ</sup>多就<sup>ニ</sup>實相<sup>ニ</sup>論<sup>ス</sup>斷<sup>ニ</sup>即是思議智斷明位<sup>一</sup>、大乘之拙度也。若<sup>シ</sup>円教明<sup>レ</sup>義多說<sup>ニ</sup>不斷<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>斷而斷者即  
是不思議斷<sup>ニ</sup>非<sup>ニ</sup>次位<sup>ニ</sup>以明<sup>ニ</sup>次位<sup>一</sup>、正是大乘巧度之義。故此（維摩）經云姪怒癡性即是解脫、又云不<sup>レ</sup>斷斷<sup>ニ</sup>痴  
愛一起<sup>ニ</sup>於明脫<sup>一</sup>。（同446）

道滅即苦集、苦集即道滅。（玄義行妙、會本四上34）

と「不斷五欲」「不斷而斷」「苦集即道滅」等と説くところは、すべて煩惱即菩提・生死即涅槃の円教意である。な  
お摩訶止観第一大意章・修大行の中の非行非坐三昧のところで観惡を説くところ（會本二ノ四1）も住見のこと。

## 五

この円教相即論のことを天台は亦「相對種」の開会とも呼んだ。法華文句の藥草喻品「唯有<sup>ニ</sup>如來<sup>ニ</sup>知<sup>ニ</sup>此衆生種相  
体性<sup>一</sup>」の釈文に

種者三<sup>レ</sup>道是三<sup>レ</sup>德種。淨名（仏道品）云一切煩惱之縛<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>如來種<sup>一</sup>、此明<sup>ニ</sup>下由煩惱道<sup>ニ</sup>即有中般若<sup>一</sup>也。又（弟子品）  
云五無間皆生<sup>ニ</sup>解脫相<sup>一</sup>、此由<sup>ニ</sup>不善<sup>ニ</sup>即有<sup>ニ</sup>善法解脫<sup>一</sup>也。（又菩薩品云）一切衆生即涅槃相、不<sup>レ</sup>可復滅<sup>一</sup>、此  
即<sup>ニ</sup>生死<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>法身<sup>一</sup>也。此就<sup>ニ</sup>相對<sup>ニ</sup>論<sup>ス</sup>種（會本十九15）

ここに「煩惱道」、「五無間」業道、「一切衆生」の「生死」苦道が法身・般若・解脫と相即することを「相對種」

「円教」の意味（浅井）

「円教」の意味（浅井）

と呼んでいる。なお妙楽はここで相對種のことを「敵對相翻」と呼び、「別教唯有二種類之種、而無相對二」「藏通兩教全無此義」とて敵對種の開会は円教にのみ有ることを念注している。いうところの「種類種」とは、天台は「就類種」と呼び、小善即大善と開会することを指す。

これをさらに実例を挙げてわかり易く解説するのが、法華玄義の三法妙の中の類通三道のくだりである。

資成即業道者惡是善資、無惡亦無善。文云惡鬼入其心、罵詈訶辱我、我等念之故皆忍。忍是事。惡不來加、不不得用、念、用、念、由、於惡加。又威音王、所著法之衆、聞不輕言、罵詈訶辱、由惡業、故還值不輕。不輕教化皆得不退。又提婆達多是善知識。豈非惡即資成（会本五下37）

勸持品の偈によれば強敵が罵詈訶辱の惡を加えるということが、行者に仏を念う信心を發させるのであるから、これは他の惡が自の善を資けたわけである。不輕々毀衆は不輕菩薩への加害、聞法が縁となつて遂に不退を得たということとは、自の惡が自の善の資成となつた例である。提婆の生々世々にわたる加惡が釈尊にとっては善知識であつたとは、他の惡が自の善を資けたことになる。提婆の「惡即資成」論は弘決二之四11、淨名疏九8等にも見える。

ここに純円教の生死苦即涅槃滅の真面目がある。日蓮聖人がこの教學を常に心に抱いて日常の克苦に活現しておられたことについては日蓮宗事典の「相對種・就類種」の項等に述べておいた通りである。

六

④は且く措く。⑤は「功用有淺深、性徳行体始終無二」だから位妙に相当すると考えてよい。円頓章の「初後」は初心と後心、その「無二無別」が円教法華の位妙である。



この面を天台に広く求めると、まず法華玄義の行妙のところでは

円、五行（病行・嬰兒行・天行・梵行・聖行）者大經云復有、一行是如來行、所謂大乘大般涅槃（略）如、二大論云、從、二初發心、二常觀、二涅槃、二行道。亦如、二大品云、從、二初發心、二行生修、乃至坐、二道場、二亦行生修、畢竟發心、二不別、皆如來行意也（會本四下1〜2）

また位妙のところでも

（十住位）華嚴（旧經八22）云初發心時便成正覺（略）大品明從、二初發心、二即坐、二道場、二転、二法輪、二度、二衆生、二當、レ知此菩薩、為、レ如、レ仏、亦是阿字門、所謂一切法初不生也、即是今經為、レ令、二衆生、開、二仏知見、一、亦是龍女、於、二刹那頃、二發、二菩提心、二成、二等正覺、一、即是涅槃明、二發心畢竟、二不別、一（會本五上21）

このことは大本四教義の積円教名のところでも

雖、三復初臨、劣、二於後臨、一本末、二曾異、一（正統、同416右下）

同じく嚴定円教のところでは

円教所説、戒定智慧、皆約、二真如実相、仏性涅槃、二而弁（略）種々法門、位行階級、無、レ不、二与、二実相、二相応、二撰、二一切法、一、從、二初一地、二無、二不、二具、二足、二一切諸地、一（同416左上）

等、「畢竟發心、二不別」「初發心時便成正覺」「發心畢竟、二不別」「初臨後臨本未曾異」「位行階級、無、レ不、二与、二実相、二相応」とて初後不、二を詠う。

もし謂うところの「初發心時」「發心」が初發心住の意味であつて、必ずしも名字、初隨喜品の初心の意味ではないといふのであるならば、同じく法華玄義の位妙のところに

「円教」の意味（浅井）

「円教」の意味（浅井）

円行者二行一切行（略）謂一念平等具足不レ可二思議一、傷三昏沈二慈及二切一（略）是名二円教初随喜位一（会本五上9）

初円信二法界一、上信二諸仏二下信二衆生二皆起二随喜二、是円家慈停心（同14）

五品已円解二実（無作）四諦二、其心念々与二法界諸波羅蜜二相応、偏体無二（二乗）邪（僻）、（蔵通菩薩）迂曲、（別菩薩）偏（依仏界）等倒一、円伏二枝客根本（惑）一、故名二伏忍二、諸教初心無二此氣分一（同33）

円教発心雖レ未レ入レ位（一名字即）能知二如来秘密之蔵一、即喚作レ仏、初心尚然、何況後位乎（同69）  
等というところには、明かに初後不二の初は名字、初随喜位にも亘ることを示している。

## 七

以上、円頓章の指示をたよりに、天台章疏の中から名玄義・迹門十妙の中の境妙・行妙・位妙・三法妙および宗玄義の文を検索して円教の何たるかを略説したが、類文は甚だ多い。またまだこれで完全だというわけにもゆかぬが、天台の円教理論は大体において以上のような筋で一貫している。

最後に煩惱即菩提を円教の極意とした天台の意趣を窺うに足りると思われる言葉を出して締めたい。摩訶止観第一大意章において修大行を締めくくって、仏意に達しないで恣意に「非道即解脱道」を解釈し実行に移した場合の悪例を挙げ終り、次にこれを戒めて

仏説二貪欲即是道二者仏見二機宜二知二一種衆生底下薄福決不レ能ト於二善中二修上レ道、若任二其罪一流転無甲レ已、令ト於二貪欲二修中習止観上、極不レ得レ止故作二此説一（会本二ノ五12）

と。中に「一種の衆生」とあるが、省みれば全衆生が底下薄福であり罪障持ちである。そこで貪欲即是道の仏説が大きな意味を持つことになる。それは教弥実位弥下の建前である。〈以上〉

## 日蓮聖人後期の曼荼羅について（一）

——授与者を通しての動向——

上 田 本 昌

まえがき

身延在山九年間の日蓮聖人について、西谷に於ける動向を知るとは、晩年の最も重要な時期で、人間的にも教義の上でも完成の域に達した時なので、その意義はすこぶる大きいものがあるといえる。

従来、聖人を取りまく人間関係は、専らその遺文を通しての考察が主であったが、本論では既に観察してきた如く、身延期の曼荼羅を中心として、その授与者を通し、当時の聖人と関係の深かった僧俗を探りつつ、聖人の身延時代を更に詳しく考究しようとするものである。

本誌の第六〇号に於いて初期の曼荼羅を拝し、更に第六一号で中期の曼荼羅を拝見してきたので、本論では後期（弘安年間）についての曼荼羅を通し、授与者との人間関係を探ってみようとするものである。立正安国会編の『御本尊集目録』を、前回同様参照することにした。

一、

建治四年二月二十九日改元となり、弘安元年となったが、聖人によれば「疫病故歟。」<sup>1</sup>とある如く、悪性の流行病が当時は猛威を示していたことがわかる。改元するまでに至ったことから考え、幕府は全国の社寺に疫病退散の祈願を折りあることに命じていたことは、既に文永十一年の「文永の役」以来、龜山上皇が諸宗に対して、毎年の如く異国降伏を祈願させたの<sup>2</sup>と平行して、実施されていたと考えられる。

国内では病魔に攻められ、国外からは大蒙古国からの攻略による脅威を感じつつ国民は神仏に縋るしか生きる道のないことを知り、俄かに祈願の情が盛んとなっていたのはむしろ当然のことであつたろう。身延山の西谷に居られた聖人のもとへも、こうした世情は日々伝えられていった。

弘安年間に入ると門下からの要請も加わり曼荼羅の執筆回数<sup>3</sup>は、次第に増加して七十七幅にのぼっている。既に本誌において文永年間の二十五幅と、建治年間の二十一幅については、考究を終えているので、これより弘安年間の七十七幅について、引き続き考究を進めていきたいと考えている。即ち聖人の後期における曼荼羅について、その執筆された時代背景も考慮に入れながら、どのような人に如何なる目的で授与されていたのかを考え、もって聖人の曼荼羅がどのような意義をもったものであるのか、を考究しようとするものである。

先ず弘安元年のものとして、明確に図頭の年時が示されているものが九幅あり、元年頃のものともみなされるものが二幅、計十一幅ある。『御本尊集目錄』の第四七には左下に「弘安元年<sup>4</sup> 三月十六日」とあり、首題と釈迦・多宝の二仏の他に本化の四菩薩が左右に分れて各一行に配され、天台・伝教の両大師のみで右下に日親の署名と花押が添えられている。右上に「不老」左上に「不死」とあり、更に「此経則為 閻浮提人 病之良藥 若人有病 得聞是經 病即消滅」の経文が配されている。特徴としてはこの曼荼羅から以降は「南無十方分身諸仏」の列座が姿を消すこと

になる。讃文から考えて前例もある如く、門下の病人に対し、その当病平癒を祈念されての曼荼羅であつたろうことは間違いないものといえよう。したがって『御本尊集目録』でも通称を「病即消滅御本尊」としている。一紙に書かれたこの曼荼羅は現在市川市中山の法宣院に所蔵されているが、特定の授与者が記されていないので、広く門下の当病平癒を祈願された御本尊であつたとも受けとめられるし、又は中山方面の人々を特に対象とした病即消滅の祈願をされたものとも考えられよう。

弘安と改元せざるをえない程に疫病が蔓延していた事を考えると、門下にも相当数の病人が発生していたことは充分ありうることである。西谷の聖人はこうした人々に対し当病平癒の祈願をこめて、染筆されたものと考えられる。曼荼羅は本尊であると同時に、御守護を蒙ることのできる「お守り」としての意味も、充分に加味していたことが、こうした讃文からも汲み取ることができよう。尚、この曼荼羅より首題の「經」の字が第三期に入るといわれている。次に四月廿一日に優婆塞日專に授与された二枚継ぎの第四八曼荼羅がある。現在京都の立本寺に所蔵されている。日專については詳細不明であるが、この頃西谷の聖人から親しく教化を受けていた檀越の一人であつたろうと推察できる。特に讃文は付されていないが、十界勧請で、四天王のうち東方の大持国天王と、北方の大毘沙門天王が漢名で書かれ、南方に大毘摩博叉天王、西方には大毘摩勤叉天王を配している。右下に「優婆塞日專」とあるのでそれが授与者名と考えられる。弘安後期の曼荼羅と比較すると、首題と四天王並に梵字もほぼ同じ大きさで、全体的に調和のとれた型となっている。

## 二、

弘安元年の七月には三幅の曼荼羅が図顕されている。他にもう一幅この頃のものと考えられる曼荼羅があるので、加えると四幅となる。先ず『御本尊集目録』第四九の曼荼羅であるが、左下に「弘安元年<sup>（一）</sup> 七月 日」とあり、首題の他に釈迦・多宝と四菩薩、鬼子母神十羅刹女、日月天子、天照八幡、及び天台伝教の両大師と二梵字のみであり、第四七と同様に「此経則為 閻浮提人 病之良藥」の薬王品が讃文として書き加えられていることから、この御本尊もまた富士方面の檀信徒に対し、病魔退散の祈願をこめて授与されたものと考えられる。現在、岩本実相寺に所蔵されている。尚、この曼荼羅より花押の変貌を『御本尊集目録』では認めている。また天照・八幡の二神についても、従来その位置が多少の移動をみせていたが、この図顕以降は専ら「経」の左右に定位置をえるようになったことも指摘されている。

次に七月五日には二幅の曼荼羅が図顕されている。即ち第五〇と第五一の二幅で、この中の第五〇は七月三日に妙法尼御前から、法華経について不審の点をあげ、質問をしてきたのに対し、御返事を記した直後のことであり、十界勧請の大曼荼羅で三枚継ぎである。現在は京都の頂妙寺に保存されており、左下に「沙門日門授与之」と記されているので、門弟の日門へ与えられた御本尊である。日門については詳細不明であるが、頂妙寺の旧記によると「竹内御本尊記」という一文書があり、一本の竹筒の中から発見されたので、「竹内御本尊」とも称され、下総若宮の法華堂で感得したので、「若宮御本尊」とも別称されているという。頂妙寺の開祖日祝は正中山第六世の日薩に師事したと、法華堂に詣て得ることができたことなどを考え合せると、日門もその方面の門弟の一人であつたろうと推察できるが、『仏祖統紀』によると、日門は一乘阿闍梨と呼び、中老僧の一人で常州妙光寺開山だとしている。果して同一人物であるか否かはさだかでない。

第五一も同様に五日の図頭で、同日一緒に筆を執られたものであるが、こちらは授与者名が削損しており、誰に与えられたものか不明である。第五〇と同じく三枚継ぎであり、現在は京都の本圀寺に所蔵されている。十界勸請で座配も第五〇と全く同様で、同日一対をなすものといえる。表装の裂地の紋様から「輪宝御本尊」とも称されている。

また第五二の御本尊も前二幅と同型式であり、大きさもほぼ類似しており三枚継ぎであって筆蹟も相似している点から考えてみるとこの御本尊もあるいは同日の三幅対の一つではないかとも考えられる。但し左下の授与者名「比丘日賢授与之」の上に、図頭の年月日があったものを、誰人かによって削損された形跡があるので、明確ではないが前二幅と同様七月五日の染筆とも考えられうる。日賢については前記日門と同様に、詳細は不明であるが、比丘とあるので門弟の一人であつたらうと推察しうる。佐賀県勝妙寺に現存している。七月七日に「種種物御消息」が記され、翌八日には「時光殿御返事」が、また十四日には妙法尼宛の書簡が、それぞれ書かれており、西谷への僧俗門下の出入りは此の頃頻繁であつたことがわかる。遺文には名の出てこない僧俗、殊に僧について曼茶羅にしか名の出てこない人々が西谷を訪問し、聖人から直接法門を教授されていたことが、こうした授与者名からわかるのである。更に御本尊の授与は相当な信仰心を持った人々でなくてはならないと考えられるので、西谷の聖人を実際に訪れた人々の中では、従来遺文や曼茶羅の授与者として、名の知られている者の他にも、相当数の門下僧俗がいたことが推察されてくることになる。

八月に入ると清水市海長寺所蔵の第五三番目の曼茶羅がある。これは右下の「大毘摩訶又天王」に接して「日頂上人授与之」とある。しかし左下の「大毘摩訶又天王」に接して「因幡国富城五郎入道息伊与阿闍梨日頂 舍弟寂仙房付囑之」と日興筆の添書がある。この点について『御本尊集目録』では、日興が寂仙房日澄に對し、文永十一年十一



月と弘安元年八月の当御本尊の両幅を付与されたことについて、聖人が日昭・日向の兩名に重ねて授与された例をあげ、「深甚の留意を要する事項」だとしている。同一人に追加されて曼荼羅が与えられるということは、たしかに稀なことであるが、この御本尊の場合には、「有供養者福過十号 若惱乱者 頭破七分 謗者開罪於无間 讀者積福於安明」の讃文が付加されているので、祈願をこめての図頭であることがわかる。法華経並にその行者を供養した者は、仏の十号に過ぎたる福があるということは、『隨自意御書』の中でも、「山中の法華経へ孟宗がたかな(笋)ををくらせ給。福田によきたねを下させ給か。」<sup>①</sup>とあり、更に『上野郷主等御返事』<sup>②</sup>などその他の御書の中でも、同様の趣旨が述べられているところである。したがって讃文から推察すると、西谷へ供養の品を届けてきた事に対するお礼の意味を込めての授与と考えられよう。もしそうであるとしたら、西谷の聖人へ種々の供養をした人々は祖書に出てくる僧俗の他に、曼荼羅を授与された人々の中にもいたことがわかるのである。

従来、身延期における聖人との関係者は、専ら祖書の上から主として考えられてきているが、祖書に名をつらねていない人々でも、こうした面からの考察によって、また新たな人間関係を知る上での手がかりとなるであろう。

八月には更にもう一幅この形式と同様で讃文も全く同文の曼荼羅第五四番がある。特徴としては前の第五三と同じく「天台智者大師」と「智者」が加わり、「章安大師」も加えられている。また右下に授与者名が記されていたのを削損した形跡があることが指摘されている如く、<sup>③</sup>当初は或る人物に与えられたものといえる。何故に消去したかは不明であるが、個人の所有とせず、講社又は特定の信仰集団等で共有するためであったのかもしれない。聖人が記入した授与者名を、わざわざ削損するからには相当の理由があったものと考えられるが、聖人との人間関係を知る上では誠に残念なことである。恐らくはこの曼荼羅も身延山から地方の供養者である檀越に、祈願をこめての授与であった

ろうことは、その讃文から見て首肯できよう。京都本能寺に所蔵されている。

次に図頭の年時は不明であるが、富士の日興による「因幡国富城寂仙房日澄母尼弘図三年九月申与之」と添書された第五番の曼荼羅がある。また右下に「可為本門寺 重宝也」とも記されているので、日興にかかわるものであり、寂仙房日澄母尼にまつわるものと考えられる一幅で、これは京都の妙覚寺に保存されている。第五三の曼荼羅が日頂の弟寂仙房に付嘱されたことから考え、これはその母へ与えられたのであり、日興と日頂・日澄・母尼といった一連の人間関係が、相当に密接であったことがわかる。寂仙房日澄は兵部阿闍梨と称し、新六人の一人に数えられている。初めは日頂について学んだが、後に日興の弟子となる。「金吾殿御返事」などの写本があり、真蹟の欠失部分を補う箇所があって、貴重な写本となっている。重須談所の学頭であったことから推して、富士派では重寶を担っていたことがわかる。恐らく日興らと共に西谷を訪れ、聖人から直接講義を受けた者の一人に数えられることができるであろう。『仏祖統紀』によると、重須常林寺第二代として、詳しく伝記を記している。

### 三、

弘安元年<sup>1818</sup>、翌後十月十九日には、通称「駕鸞御本尊」という一幅がある。京都本圀寺の所蔵となっているが、これは第五一番と同様に表装の紋様によるものである。この第五六番は、一紙にやや細目の筆跡で四天王も前六幅と比較して小さく、勧請の諸菩薩も本化の四菩薩の他は普賢・文殊の二菩薩のみと簡素化されている。また讃文については建治三年十一月ご染筆の第四六番に「仏滅度後二千二百一十余年」と「二十余年」になっており、それ以後は「三十余年」と記されていたものが、ここでは又「二十余年」となり、この後も三十年と二十年が並用されるに至っている。

次に十一月二十一日付の大曼荼羅が沼津市岡宮の光長寺に所蔵されている。丈が二四三穂、幅が一二四穂という最大の御本尊で、第五七番目に当っている。「優婆塞 藤太夫 日長」に授与されたもので、左下の花押のそばに小字で記されている。大小二十八枚の紙をつなぎ合せたこの大曼荼羅は、首題と四天王が紙幅一杯に大書されており、諸仏諸尊は首題に比較して細字である。この優婆塞藤太夫日長なる人物が、如何なる人であつたかは不詳であるが、伝承によると「古く甲州南津留郡小立村妙法寺に護持せられたもので、同村の渡辺藤太夫に授与したもう」といわれている。従つてこの曼荼羅の授与者は、小立村の住人ということにならうか。『高祖年譜』によると、弘安三年十一月の項に「二十一日接二十八紙筆本尊、授渡辺藤太夫」とあり『攷異』では、渡辺藤太夫について、「法名日長、甲州鶴郡小立村人、子孫今尚蕃昌」と記している。この弘安三年については、「明らかに訛伝である」とされている。「元年」を「三年」と見あやまったものと考えられる。また『年譜』によると、文永六年の項の中に、聖人が法華経の全帙を書し、「以瘞富嶽半嶺、以為後世流布之苗根、世名経嵩、環路過小立村、乞二本尊、者二十八人、乃書而授焉」とあり更に『攷異』では、この本尊に関して「文永六年木立求本尊者、二十八人各供一紙、大士接為二幅書焉、是称岡宮大曼荼羅」とあり、「後弘安三年十一月廿一日火初廿八幅、為墨以新接、廿八紙為二幅、以書本尊、代廿八人、以与渡辺藤太夫者、健如岡宮問寺主、如土人語、而火本尊、難信、恐忘伝耶、」とも伝えている。いずれにしても二十八紙に図顕されたという大曼荼羅であるため、それによつて由來も生れていったものと考えられるが、渡辺藤太夫とその人にまつわる人々が、共に聖人の信徒として存在していたことは間違いないものといえよう。尚、「藤太夫の裔藤兵衛」なる者もいて、信仰は相続されていたものの如くである。但しこの御本尊が如何なる由來によつて岡宮へ伝えられていったかについては不詳である。推察

してみるに先ず大小二十八枚の紙を使用し二四三・九櫃の長さ、一二四・九櫃の幅を持った御本尊を奉安する場所は、当然のことながら相当の屋敷を持った者でないと不可能である。一般家庭は勿論、寺院でも大堂伽藍でないとなすことは困難であるといえる。表装した場合を考慮に入れると尚更である。従って当の渡辺藤太夫は当時、その地方の豪族であり大きな家屋敷を構えた人物であつたろうと考えられよう。

次に弘安元年といえば身延へ入山されて四年目であり、各地から西谷を訪れる人々も増加してきている頃に當っている、藤太夫もその中の一人であつたと考えられる。『攷異』の文からすると二十八人を代表して藤太夫に授与されたことになっている。当時は勿論のこと紙が尊かつたので、二十八人が大小所持の紙を持ちより、これを継ぎ合せての大曼荼羅となつたものであろうが、小立村までの帰途は折りたたんでの所持となつたものと考えられる。同村の妙法寺に奉安され、一族並に近隣の人々によって格護され信仰の対象とされたものといえるが、後に法縁の関係から岡宮光長寺へ移されたものと考えられる。

何れにしても長大な御本尊であるので、個人を対象としたというよりは、檀越講中へ宛たご染筆ということができよう。従つて当時甲斐の南津留郡には小立村を中心とした法華集団が存在していたことを物語っているものといえよう。藤太夫がその中心人物であつたことも推察できる。尚、中尊と四天王並にご署名と花押は大書されているのに対し釈迦・多宝を始めとする諸尊は、小細で讃文も同様であるが、祈祷本尊であつたことは「若惱乱者、頭破七分」といった讃文の上から首肯できよう。

この一幅の御本尊を通して、当時の南津留郡下における信徒集団の一群があつたことがわかるが、恐らくこれは一例であり、その他の地域にも、こうした信徒の集団があつたろうことは曼荼羅の数から考えても推察できるといえよ

う。御遺文に名の出てこない信徒が西谷を訪れ、聖人からの教化に浴していたことの一例として貴重な証拠となるであろう。また曼荼羅は一幅であっても、このように代表者へ宛たものもあるので、信徒の実数は相当に多く存在していたことも合せて考えられるのである。優婆塞とはいえ「日長」と日号を名のっている点や、特大の曼荼羅が授与されている点等を考慮に入れると、豪族の中でも篤信の徒であったことには相異なるものといえよう。

次に第五八の曼荼羅は丈八三・六、幅四〇・三、とほ普通サイズにもどり絹本である。しかし下部が摩耗していて天照・八幡以下は読みにくい状態となってしまうている。京都の要法寺に所蔵されているが、年時も授与者もさだかでない。わずかに花押の筆跡をたどることにより、弘安初期のご染筆として拝することができるのみである。

#### 四、

弘安二年に入ると二月に妙心へ授与された第五九の御曼荼羅がある。三枚継ぎで市川の浄光院に所蔵されている。首題が上段におさまり四天王も「持国天王、広目天王、毘沙門天王、増長天王」とあって「大」の字は冠されていないし、従来の東・北・西・南の二天は漢名で書かれ、南・西の二天は梵名で表されているのが多いのに、四天王共に漢名である。また「有供養者、福過十号、若惱乱者、頭破七分」という讃文からすると妙心が西谷へご供養の品を届けに来た折りに授与されたものといえる。妙心については詳細は不明であるが、駿河の高橋氏又は西山氏の妻ともいわれている。聖人からは建治元年に二通と弘安三年に一通、計三通の書状が送られている。夫の病中に尼となり、夫の死後はその菩提を弔って信仰を深くしていったことがわかる。

同二月には第六〇のご染筆がある。「釈子日目授与之」とあり、桑名の寿量寺に保存されている。「有供養者 福

過十号 若惱乱者 頭破七分」という讃文が右側にあるのに対し、左側には「讃者 積福於安明 謗者開罪於無間」と記されている。特徴としては「提婆達多」の左側に「龍王女」が配列されている点である。これはこの曼荼羅に限っていることである。尚、大広目天王のそばに日興の添書があったのを削損している形跡が窺える。『本尊分与帳』によると、「新田卿公日目者、日興第一弟子也。仍所申与一如件。」とあるので恐らくは同様の添文が記されていたものと考えられる。日目が西谷を訪れご供養の品を届けた際の御図頭とみてよからう。後に日目は日興と共に身延を下し、大石寺の第二祖となった。「号蓮藏房、豆州波多郷人也。」といわれ奥州に縁が有って布教し新寺建立を行っている。

続いて四月八日の釈尊降誕会に当り、「日向法師授与之」の第六一御本尊がある。茂原の藻原寺に格護されているが、讃文は「若惱乱者 頭破七分」と最初にあり、その後は前の第六〇とほぼ同様である。『高祖年譚』の弘安二年の項には「四月八日授曼荼羅于朗回三子」とあるので、この外にも日朗宛並に次の第六二の三幅が同日図頭されたことになる。ただし『攷異』には「本尊未詳所在、英管拜其模幅、各長幅也」とあるので、日朗授与の分については、既にその所在が不明となっていたようである。かくて朗回二師を始め直弟子等も折りある毎に身延へ登山していたことがわかる。

第六二の曼荼羅も同日の図頭であって、こちらは「優婆塞日田授与之」となっている。日田については不詳であるが、先の朗回二師と同日の授与から考えて、恐らくは二師のいづれかに従って西谷を訪れ、釈尊降誕会に参列した折りの授与と考えられよう。玉沢妙法華寺に所蔵されている点から推すと駿河近辺の人であった可能性もありうる。広目、増長の二天は再び梵名になっている。

四月にはもう一幅、第六三の図額がある。日付は不明であるが「比丘日弁授与之」とあるので越後房日弁に与えられたものである。日興の『本尊分与帳』によると、「越後房者日興弟子也。仍所二申与一<sup>フ</sup>如<sup>レ</sup>件。但弘安年中背二白蓮一了。」とあるので本尊の分与はなされたものの後に日興に対し違背したようである。また千葉県多古町の妙興寺に所蔵されているが、『当家諸門流繼図之事』によると、日忍が驚栖から日弁に授与された三枚統の御本尊を持参して下総へ来たことが記されており、中山日祐が在世の頃であったということである。どのような経緯で日興に背いたかは不明であるが、日弁が祖滅後に北総中村の地へ布教し、妙興寺を創してこの御本尊を奉安したことは間違いないがなからう。いづれにしても四月に西谷を日弁が訪れていたことに相違はないものといえる。尚、日弁は「駿州富士郡之人父姓者源氏熱原基四郎国重長男也。」とも伝えられている。

次に六月に入ると第六四の曼荼羅がある。比丘尼日符へ授与された三枚継ぎで、市川市の法宣院に所蔵されている。女性宛の御本尊は珍しいわけではないが、「比丘尼」を冠した授与者名は数少ない。西谷へは女性信者並に比丘尼の訪れも多かったことであろうが、日符についての詳しいことはわかっていない。御本尊の授与があったことから考えるに、比丘尼の中でも特に篤信の代表的な存在であったことが推察できる。

翌七月には「沙門日法」宛の三枚継がある。岡宮の光長寺所蔵であるが、「若於一劫中 常懷不善心 作色而罵 仏獲無量重罪」（以下略）という一連の讃文が全紙に渡って記入されていることは、第五七の曼荼羅と同様である。恐らくは日法を代表とする法華信仰者一団への授与とみなしてよいのではなからうか。讃文の「其有説誦持是法花經者」とあることからみても、又先の渡辺藤太夫の例から推しても、日法個人というよりはその同信の一団へ与えられたと考えることもできよう。西谷へ日法とその信仰者らが訪れた折りの染筆としてみたとき、供養者を讃えると共に

謗法者を誡しめる讃文となっていたことが当然窺えられるのである。日法は周知の如く中老僧の一人に数えられ、甲州立正寺の開山である。和泉阿闍梨と呼び、岡宮光長寺へ往き、大いに布教に専念している。

ただし日法については、後出の弘安三年十一月に図顕された第一〇〇番では「比丘日法」となっており、この沙門日法と同一人物か否かは判然としないが、ほぼ同一人とみなしえよう。もし一年四か月後に同一人に再び授与されたとなると、この第六五の方は、集団の代表者に対して、第一〇〇の方は日法個人に対しての授与と考えることもできよう。「沙門」と「比丘」の微妙な差を感じることができる。即ち「沙門」は「本朝沙門」というように法華信仰者の日本における代表といった響きが強いものであり、比丘の方は出家者の一人としての個人を意味する場合が強いと考えられる。いづれにしてもこの頃の西谷は、集団の代表者ら或いは個人の僧俗らによって、大勢の出入りが多かったことが推察できるのである。

九月には「日仰優婆塞授与之」の御本尊がある。第六六番だが首題と二仏（釈迦・多宝）並に四大菩薩のみで署名と花押の部分が誰かに削除されている。和歌山蓮心寺の所蔵で讃文は「今此三界皆是我有」の経文であり、諸尊の勧請は略されている。何んの為に署名と花押の部分が除かれてしまったのか判全としない。謎を秘めたままである。何れ後人が何かの理由で行ったものであろう。日仰についてもいかなる人物であったか不詳である。讃文からすると「お守り本尊」即ち祈願の為の御本尊であったらうと推察できる。

十月には「沙弥日徳授与之」の御本尊がある。第六七でこれも三枚継で戸田市妙顕寺に所蔵されている。通称は「子安御本尊」といわれているが、『高祖年譜攷異』によると聖人が佐渡へ渡る時に武州新曾城主の黒田時光の妻が難産であったので、聖人に安産の祈禱を願ひ無事に出産することができたので、後に弘安二年身延へ参詣し「祝髪



日蓮聖人後期の曼荼羅について(一)(上田)

号<sup>ス</sup>日徳、大士与<sup>二</sup>手書本尊<sup>一</sup>、俗称<sup>三</sup>子安本尊<sup>一</sup>。」とその縁起を記している。従って沙弥日徳は武士で城主であったことがわかる。但し「統紀九老伝曰、時光<sup>即</sup>総州黒田村高橋五郎時光<sup>此</sup>説未<sup>レ</sup>詳」ともあるので、果して高橋五郎であったか否かは速断しがたいものがある。いづれにせよ弘安二年の十日に日徳が西谷を訪れていたことは相異ないものといえよう。尚、『蓮公行状年譜』<sup>(3)</sup>にも聖人が武蔵の来目川へ着かれた時に、難産の女性へ大曼荼羅を授けて助けられたことが記されている。『本化別頭高祖伝』<sup>(4)</sup>並に『仏祖統紀』<sup>(5)</sup>にもほぼ同様の記載がある。この御本尊では「華」の字体が、他の曼荼羅と異っているのが特徴である。

十一月に入ると三幅の染筆がある。即ち第六八・六九・七〇の三幅である。先ず六八の御本尊は「優婆塞日安授与之」であり、沼津妙海寺所蔵である。特別な讃文も見られず、日安が如何なる人物かを知る手がかりもないが、優婆塞であるので駿河方面の篤信ではなかったかと考えられる。当時既に日号をもって呼ばれていたことは、余程の信行に励んでいたことが推察できよう。もうこの頃になると四天王と両脇の梵字が、すっかり雄大になり弘安型の図頭の特色を示している。

第六九は右下に「沙門日永授与」とあり、京都の立本寺所蔵である。日興の『本尊分与帳』によると、「因幡房者、日興弟子也。仍所<sup>三</sup>申与<sup>二</sup>如<sup>レ</sup>件<sup>一</sup>。但今背<sup>レ</sup>了<sup>ス</sup>。」とある。因幡房日永は最初日興の弟子であったが、後で離反したことがこの一文でわかる。日興は甲斐の出身であるので甲駿両国が地盤であり、弟子信徒も多いので日永もその手づるで入信したものと考えられる。何に故に背いたかは詳しいことが不明であるが、先の越後房日弁や波木井氏との例もあるので、「背<sup>レ</sup>了<sup>ス</sup>」の理由は一方的な判断のみでは決め難いものであるかもしれない。

次の第七〇は優婆塞日久宛の一紙小型であり、千葉市の随喜文庫所蔵である。この御本尊は頭初伊豆菲山の江川吉

久に授与されたものとする説がある。即ち「是月書曼荼羅一授、豆州江川吉久、其四天王者畫工大威図之」とあり、更に『攷異』によると「称太郎右衛門一泉州人後來、豆州韭山ニ而居、弘長中依二大士ニ受戒、弘安二年賜二本尊及法名二号二日久一」とあるので日久の人物がわかる。また『御本尊集目錄』によると、その後「明治の初年に故有て京都の村上家に移ったが、再び転じて現在では、随喜文庫ニ立正安国会に護持されることとなった。」としている。特徴は御本尊の上方に瓔珞が毘沙門天と持国天が描かれ、下方には華台と広目天と増長天が共に多彩で描かれている。後人が絹で加えたものといわれている。御本尊には四天王はなく大書された梵字と略勧請の諸尊である。

十一月にこうして三幅が優婆塞と沙門に与えられていることから推すと、この月は西谷への人の出入りが相当にあったことが察せられよう。御本尊の授与者のみでも三名あったことから考えると、この三名の随行者はもとより、他にも身延へ足を踏み入れた人々の数は少なくなかったものといえる。即ち弘安二年は正月三日は上野殿から正月用の餅九十枚と薯蕷五本が「わざと御使をもって」送られてきたのを始め、二月に日眼女、三月に松野殿後家尼御前、五月に新池殿・窪尼御前・富木殿、七月に乗明上人、八月に曾谷殿、九月に四條金吾・寂日房・伯耆殿、十一月に持妙尼・富城殿女房尼御前・兵衛志殿女房・中興入道、十二月には右衛門大夫、窪尼等其の他の僧俗からの御使者や本人自身が来訪している。主な出入りに限ってみても右のような毎月の参詣であり、これに曼荼羅の授与者を入れると、相当の人数になることがわかる。

尚、この年は八月に熱原法難が起り、弥四郎が打ち首となり、九月には農民の信徒ら二十名が不当に弾圧を受けている。十月に神四郎ら三人は斬罪となり十七人は入獄されるに至っている。曼荼羅にも行者守護の讃文が多くみられるのも、その為の影響とも受けとれよう。当然のことながら西谷への出入りも、いつもの年よりはげしくなってい

たことが考えられる。

駿河方面の僧俗はこの法難の対応について、西谷からの指示に依り、団結と信仰を益々深いものとしていったことであろうが、人の往来は法難関係の要件をも含め、従来より一層密度を増していったことが考えられる。

初めにも述べた如く、本論では聖人の曼荼羅そのものについての考究ではなく、曼荼羅を通して西谷に於ける聖人との弟子や檀越との人間関係を探ることに主眼があるので、曼荼羅それ自体についての縁起は、既に究明もされている点も多いので、なるべく省略することになっている。従って讃文についても「仏滅後二千二百二十（又は三十）余年之間一閭浮提之内未曾有大曼荼羅也」とあることについても、直接授与者との関係があること以外については、爰では他へ譲ることにした。

弘安三年以降の曼荼羅については、また次の機会を待つことにしたい。

〔註〕

- （１） 弘安改元事 定通一四五四頁
- （２） 『仏教史年表』（法蔵館） 二〇〇頁
- （３） 「棲神」第六〇号並に第六一号を参照されたい。
- （４） 『御本尊集目錄』（立正安国会）を参照。
- （５） 『御本尊集目錄』（立正安国会） 七一頁
- （６） 同 七四頁
- （７） 同 七六頁
- （８） 『本化別頭仏祖統紀』 十一—十五

- (9) 『御本尊集目錄』 七八頁
- (10) 同 八一—八二頁
- (11) 隨自意御書 定遺一六—一八頁
- (12) 上野郷主等御返事 同 一六—二三頁
- (13) 『御本尊集目錄』 八三頁
- (14) 『本化別頭仏祖統紀』 十二—十三
- (15) 『御本尊集目錄』 八七頁
- (16) 『高祖年譜』 四七
- (17) 『高祖年譜攷異』 下三九
- (18) 『高祖年譜』 一九
- (19) 『高祖年譜攷異』 中一四
- (20) 妙心尼御前御返事(定遺二—〇二頁・一一〇五頁・一七四七頁)によると、西谷へ御供養の品を送り、聖人に深く帰依していたことがわかる。
- (21) 『宗全興尊全集』 一二—二頁
- (22) 『本化別頭仏祖統紀』 十二—九
- (23) 『高祖年譜』 四五
- (24) 『高祖年譜攷異』 下三四
- (25) 『宗全興尊全集』 一二—二頁
- (26) 『宗全史伝旧記部二』 一六—三頁
- (27) 『本化別頭仏祖統紀』 十一—十三
- (28) 同 十一—一
- (29) 『高祖年譜攷異』 中二九
- (30) 『蓮公行狀年譜』 四五

日蓮聖人後期の曼荼羅について(二)(上田)

日蓮聖人後期の曼荼羅について（二）（上田）

- |      |            |              |
|------|------------|--------------|
| (31) | 『本化別頭高祖伝』  | 下—九          |
| (32) | 『本化別頭仏祖統紀』 | 六一—二五        |
| (33) | 『宗全興尊全宗』   | 一一—三頁        |
| (34) | 『高祖年譜』     | 四六           |
| (35) | 『高祖年譜攷異』   | 下—三七         |
| (36) | 『御本尊集目錄』   | 一〇—六頁        |
| (37) | 上野殿御返事     | 定遠<br>一六—二二頁 |
| (38) | 『新編日蓮宗年表』  | 三四頁—三五頁      |

# 日蓮聖人における「顕本」の意義

庵 谷 行 亨

## 一 はじめに

日蓮聖人の宗教が法華經本門の教えに立脚することは周知のとおりである。末法の衆生を救済せんとされる久遠釈尊の御本意を法華經本門に覚知した日蓮聖人は、仏教思想史上、類を見ない本門法華の仏教を樹立したのである。

法華經本門は久遠釈尊の實事を説き明かされた教えであることから、本門仏教とは釈尊の純粹精神を顕揚した宗旨であるといえよう。日蓮聖人は釈尊の教えに身心を投入し、依法不依人の態度を貫徹して「釈尊の眞實」に生きようとされた。日蓮聖人の行動とその思想信仰は、久遠釈尊への絶対隨順のなかに生まれ、そして確立されていたのである。そこに、久遠釈尊に身を逗じ、久遠釈尊において生きた日蓮聖人の宗教的実存の世界をみることができる。

この小稿では、以上のような視点から、日蓮聖人の宗教における顕本の意義を概観してみたい。

## 二 顕本の意義

日蓮聖人の宗教における顕本の意義を大別すると、およそ次の三点に集約することができよう。

(一)久遠の人の開顯。(二)久遠の法の開顯。(三)久遠の土の開顯。

日蓮聖人における「顕本」の意義（庵谷）

本門は久遠実成の釈尊が開顕され、仏の絶対性・永遠性・普遍性・真実性が明らかにされた。釈尊が久遠であるということは、とりもなおさず、釈尊所説の法と釈尊所住の土もまた久遠でなければならない。したがって、釈尊の久遠開顕は法と土の久遠開顕でもあると考えられるのである。

### 三 久遠の人の開顕

久遠の人とは久遠実成の釈尊をいう。しかし、法華經本門「正宗分では、地涌菩薩の久遠教化についての疑念（略開近顕遠動執生疑）が本師釈尊の久遠実成を開顕していくように、本師の久遠開顕は所化の久遠教化開示と一体になっている。したがって、久遠の人の開顕とは久遠の師弟の開顕とも言いうる。

久遠の本師は「寿量品の仏」「三身即一の仏」「久成の三身」「三徳具足の仏」「久遠実成実修実証の仏」「五百塵点乃至所顕の仏」「無始の古仏」などと表現される教主釈尊である。この教主釈尊は一切の諸仏を能統一した絶対的な仏<sup>1</sup>で、法華經本門の教相によってその真実性が証明される<sup>2</sup>。

久遠の教主は一切衆生を救済する慈悲の体現者であり、本尊として帰依尊崇される。したがって、教相によって詮顕された教主は衆生の信心と感応道交することによって本尊としての真実義を成就することになる。すなわち、本門の教相に裏づけられた衆生の信心に道交する教観相即の教主こそが、閻浮の衆生を済度する末法の本尊（本門の本尊）である。

久遠の弟子とは法華經從地涌出品に涌出し、如来神力品に別付属を受けた本化地涌菩薩である。

本化地涌菩薩は如来滅後末法時に出現し、如来別付の大事を成し遂げる使命を帯びた如来所遣の導師である。

本化地涌菩薩は歴史上の特定の人師を指すものではなく、大地より涌出する菩薩であるから、社会大衆を意味している。したがって、本師に久遠教化された本弟子とは、「三五の二法」（久遠下種）を被った一切衆生を意味する。三五の無始久遠に本師釈尊から下種を受け、不滅の結縁を成じた一切衆生こそ本化地涌菩薩でなければならない。すなわち、本師の久遠開顯によって明かされた久遠の弟子とは本師釈尊の「久遠の愛子」である一切衆生である。

一切衆生は本師の久遠開顯によって、久遠下種結縁の本事を開顯されたのである。したがって、一切衆生は久遠釈尊の「種」を受けた「久遠の愛子」であり、ここに一切衆生が救済されるべき必然の理があるのである。

とくに、逆謗の重病者である末法の衆生を療治するために、久遠釈尊は偏重の慈悲を寄せて救済の力を強化される。末法惡世の謗徒が救済される根拠は無始久遠の下種結縁にあり、衆生が信心を発起することができるのはこの仏種を因とする。衆生の信心は仏種であるから、本師の久遠開顯は衆生の信心の開顯でもあるといえよう。

久遠釈尊によって開顯された衆生の信心が妙法五字の受持を喚起し、さらに衆生教化の仏事を促すのである。

すなわち、久遠教化の弟子は本師釈尊から末法弘教を付属された本化地涌菩薩、久遠下種の衆生は本師釈尊から代慧の信心を頂受した久遠の愛子である。この自覺と信心に生きる末法の仏子こそ末法の導師であり、眞の法華經の行者である。

日蓮聖人は、本化地涌の自覺のなかで、如説に法華經を行じていかれた。その具体的信行は唱題・立正安国の宗旨に表象される法華經の実践であった。題目受持の実践に興起した数々の法難を行者の眞実性を証する如来のはからいと領受された日蓮聖人は、法華經に生きる法悦のなかで、宿罪の消滅を実感し、即身成仏・靈山往詣の自然得益と立正安国の実現を確信されたのである。



#### 四 久遠の法の開頭

久遠の法とは法華經本門の肝心「妙法蓮華經の五字」をいう。法華經本門の久遠成道は久遠釈尊の開頭であると同時に久遠本法の開頭でもある。これを經典に即して表明されたのが「寿命品文底」<sup>3</sup>「内証寿命品」<sup>4</sup>であり、釈尊に即すれば「本因本果」<sup>5</sup>「因行果徳」<sup>6</sup>となる。天台大師はこれを「五重玄義」「四句要法」と釈し、法華經には「良藥」「宝珠」等と喩顯されている。

日蓮聖人は五重相對・五重三段（四種三段）<sup>7</sup>などの独自の教判に立脚してこれを論証し、本化地涌への別付属の要法が「妙法蓮華經の五字」であることを明瞭にされた<sup>8</sup>。それは単なる客観的論証ではなく、本化地涌の自覺のなかに醸成された宗教的分別であったと言える。本化地涌に付属された久遠の大法が本化地涌の自覺者によって詮顯されたのであり、それは法華經世界における必然の歴史であったのである。妙法五字の開示は久遠釈尊が法華經の行者に付託された末法の仏事であったと言っても過言ではない。法華經に生きる日蓮聖人の主体的実践に末法の大法「妙法蓮華經の五字」がゆだねられたのである。

「妙法蓮華經の五字」は末法の教法であると同時に一切衆生の信心受持すべき行法でもある。なぜなら、教法は衆生の信行によってはじめて教としての意義を有するからである。法華經本門に開顯された久遠の妙法は末法の衆生にとって受持必然の道法であったのである。教法の開頭が行法の開示であるところに、教に即した衆生の信心と信行が喚起されるのである。

教主釈尊の久遠本事の開頭は久遠の妙法の開頭であり、久遠の妙法の開頭は久遠の道法の開示である。教と行と

もに釈尊の久遠開頭に立脚するゆえに、教観は釈尊本壞の久遠の大法として末法の衆生に提示されたのである。これが教観相即の一大秘法「南無妙法蓮華經の五字七字」である。

釈尊の顕本を行者の信仰の視点から論じれば、末法の観心「南無妙法蓮華經」の開頭と表現することができよう。すなわち、釈尊の顕本は久遠の教法「妙法蓮華經の五字」の開頭であり、それは同時に末法の観心「南無妙法蓮華經」の開頭であると考えられるのである。

## 五 久遠の土の開頭

釈尊の久遠開頭は、同時に釈尊所住の国土の常住不滅を証したもので、本土の開頭とみることができよう。『開目抄』の「今爾前迹門にして十方を淨土とがう（号）して、此土を穢土ととかれしを打かへして、此土は本土となり、十方淨土は垂迹の穢土となる」の言はまさにそのことを表明されたものである。

すなわち、久遠釈尊は不生不滅の仏身を現じてこの娑婆国土に常住し、永遠に一切衆生を教化される。その久遠釈尊常住の土こそが久遠の淨土であり、これを本国土と称するのである。

五濁充滿の娑婆世界は釈尊の久遠開頭によって常住不滅の淨土となり、そこに一切衆生の成仏の道が開かれたのである。一切衆生は久遠釈尊御教示の久遠本法を信心受持することによって、久遠の因果を自然頂受し、得脱の利益を得ることができる。

行者の本法受持は仏意隨順の菩薩行であることから、久遠釈尊の慈悲に生きることでもある。そこに立正安國の実践が要請されることになるのである。

日蓮聖人における「顕本」の意義（庵合）

唱題と立正安国の実践を表裏一体とした五字受持が久遠釈尊に随順する信行であれば、受持はそのまま仏の久遠淨土に生きることでもある。

久遠釈尊と信心行者の感応道交に本時の娑婆世界が事実として活現するのである。これが一切衆生の永遠の救いを實現する本国土妙である。

これを『立正安国論』では「実乘之一善」に帰すことによって實現する「不衰の仏国」「不壞の宝土」と表現し、『観心本尊抄』には「所化」もまた「不滅不生の仏」と「同体」となる「常住の淨土」、すなわち「本時の娑婆世界」と表明されている。<sup>①②</sup>

## 六　む　す　び

以上の通り、法華經本門の開顯は、一人教主の久遠成道にとどまらず、久遠の人（師弟）、久遠の法、久遠の土を開顯されたものと考えられ、ここに、末法の教主・末法の道法・末法の本土と正統なる末法の導師、末法の衆生のあべき姿が詮顯されたのである。

このような、末法の宗教の全体にわたる法門の開顯が日蓮聖人の宗教における顕本の意義であり、ここに本門一念三千の本質的意味があると思われるのである。

〔註〕

（一）『開目抄』五七六～八頁、『観心本尊抄』七〇五～一一頁、七二～三頁、『法華取要抄』八二頁、『一代五時圖』二

(2) 三四一―三頁等参照。(日蓮聖人遺文は『昭和定本日蓮聖人遺文』による)

法華経寿量品で開顯された「久遠の仏」をどのようにとらえるかについては先師の多くの研究がある。古くは無作三身の法身顯本論などが主張されてきたが、近年においては日蓮聖人遺文の文献学的研究の成果に立脚して、三身即一正在報身論が主流の説となっている。なお、顯本論についての主な関連論稿は次のとおり。瀧田在庵稿「顯本論より見たる成仏」(『棲神』第八号所収)、菊地泰旭稿「当家顯本論概要」(『棲神』第九号所収)、堀内義光稿「寿量本仏論」(『棲神』第十七号所収)、望月敏厚稿「寿量所顯本覺三身論」(『大崎学報』第三・一四・一五号所収)、高田惠忍稿「日蓮上人の寿量本仏觀」(『大崎学報』第六三号所収)、執行海秀稿「日蓮の『觀心本尊鈔』に現れたる仏身觀について」(『印度学仏教学研究』第一卷第一号所収)、田村芳朗稿「親鸞・日蓮両師における久遠仏思想の対比」(『印度学仏教学研究』第五卷第二号、『日本仏教論』所収)、同稿「日本仏教の仏身論―久遠仏をめぐって―」(『仏の研究』、『本覚思想論』所収)、同稿「理顯本と事常住」(『法華思想と日隆教学』、『本覚思想論』所収)、浅井要麟稿「祖書に交錯せる無作三身思想」(『日蓮聖人教学の研究』所収)、浅井円道稿「日蓮聖人の仏身論の特徴」(『印度学仏教学研究』第二八卷第二号所収)、北川前肇稿「日蓮聖人における寿量本仏觀」(『日蓮教学研究』所収)、他。

(3) 【開目抄】五三九頁。

(4) 【觀心本尊抄】七一五頁。

(5) 【開目抄】五五二頁。

(6) 【觀心本尊抄】七一一頁。

(7) 【開目抄】五三五―九頁。

(8) 【觀心本尊抄】七二三―四頁。

(9) 【觀心本尊抄】七二二―九頁。【曾谷入道殿許御書】九〇二―三頁。

(10) 【開目抄】五七六頁。

(11) 【立正安國論】一二六頁。

(12) 【觀心本尊抄】七二二頁。

日蓮聖人における「顯本」の意義(庵谷)

## 宗祖御遷化に関する二、三の問題

——御遷化記録を中心として——

宮 崎 英 修

御遷化記録は宗祖の伊豆伊東の流罪と、佐渡流罪、身延入山と、身延を出て武州池上に入られたことを略記し、弘安五年十月八日、一弟子、即ち本弟子六人の定め、同十三日の入滅、ひきつづいて御葬送次第、宗祖御遺言の条目を、十月十六日付で白蓮阿闍梨日興がこれを記録し、なお一弟子六人の定は「此状六人面々可<sup>レ</sup>帶<sup>ヌ</sup>等云々 日興一筆也」としているから、六人それぞれが一部ずつ所持したようである。

而して、葬送後に御遺物の配分が行われ、翌年正月、百廿日忌は二十三日に当るから、このころ諸弟子は日昭・日朗等を中心に身延に集まり守塔輪番を議し定めた。これらの記録を取りまとめたものを「御遷化記録」という。

この記載の順序は

一、宗祖の御一代略記

一、本弟子六人の定 十月八日

一、御葬送次第

宗祖御遷化に関する二、三の問題（宮崎）

一、御遺言 十月十六日

一、輪番帳 弘安六年正月 日

一、御遺物配分 弘安五年十月 日

以上が弘安六年正月日まとめられ、この記録は長老たちが、継目々々にそれぞれの花押を裏判として押している。その判は次の通りである。

花押 花押 花押 他行 他行 花押

即ち一番上の花押が日昭、次が日朗、次が日興、一番最後が日持である。他行・他行とあるのは日向と日頂が花押を据える場所であるが、欠席のため据えていない。<sup>3</sup>この記録は

本弟子がそれぞれに所持しているはずであるが、欠席していた日向と日頂は果して所持していたであろうか。六人の嫡弟日昭は当然所持していたにちがいないが、日昭の本拠である玉沢妙法華寺には現在は格護されていない。戦国動乱の時に紛失したものと思われるが、室町時代中ごろには嚴存していたようである。かの久遠成院日親は「伝灯抄」に玉沢十世常楽坊日伝にあい玉沢の重宝、註法華経、撰時抄と共にかの「番帳をも披見致し訖ぬ、去ル程に当門家にも元来かの番帳ありといへども、在所は浜の法華寺、執筆は富士の日興の御手跡にて正本たる間、即ち写して所持候」といって中山には正本のなかったことをのべているから、伊予房日頂は御遷化記録の配布をうけていなかったことが知られる。日朗所持の分は散逸して御遺物配分のうち一紙しか現存していないが、もとは自蔵していたことがわかる。日興所持分は西山本門寺に格護されている。日向の分は日頂と同じく配分にあずかっていなかったであろうが、身延

山にはこれが伝承されていたことは寂照日乾の「身延山久遠寺御靈宝記録」に

御葬礼次第等折紙二紙

裏ニ昭・朗・興・持ノ四人ノ御判有<sup>レ</sup>之<sup>3</sup>

と記し、遠沾日亨の「西土蔵宝物録」に

御葬送次第記 一卷

すなわちそのころは軸物に装幀されていた一巻を記録しているから、身延に一本を蔵していたことは明白である。但し、明治八年正月十日の大火で焼失してしまった。なお、日持の分は伝えられていない。或は日持の分は、日持の海外布教出発の時、或は身延山におさめたのではないか、とも考えられる。

さて、本記には身延をたつて池上宗仲の館につかれたのを

弘安五年丙午九月十八日武州ノ池上ニ入御<sup>地頭頼朝大夫妻</sup>

と書き、次に十月八日に本弟子六人の定状をあげ

同十三日辰ノ時御滅<sup>御年六十一</sup> 即時ニ大地震動ス

同十四日戌ノ時御入棺<sup>日昭</sup> 子ノ時御葬也

とある。次の葬送行列は池上・四條・富木・大田・南条・大学等十六人が輿の前後にそい、輿は

次御棺 御輿也

宗祖御遷化に関する二、三の問題（宮崎）

侍従公

左

治部公

下野公

蓮華阿闍梨

前陣  
大國阿闍梨

出羽公

右

和泉公

但馬公

卿公

信乃公

伊賀公

左

摂津公

白蓮阿闍梨

後陣  
辨阿闍梨

丹波公

右

太夫公

筑前公

帥公



と行列が組まれている。

次に御遺言二カ条

仏者 釈迦 墓所傍可ニ立置ニ云々

經者 私集經文  
名注法華經

同籠ニ置墓所寺ニ六人香花当番時、可レ披見之ニ自余聖教非ニ沙汰之限ニ云々  
仍任ニ御遺言ニ所記如レ件

弘安五年十月十六日

執筆日興花押

而して御遺物の配分は

註法華經一部十卷

辨阿闍梨

御本尊一体 釈迦  
立像

大國阿闍梨

御馬一匹、小袖一

佐渡公

御太刀一、小袖一、袈裟代五貫文

侍従公

衣一、小袖一、袈裟一

越前公

御馬一疋 鞍具、脚足  
袋一、頭巾、小袖一

白蓮阿闍梨

御腹巻、錢三貫文

伊豫阿闍梨

御馬一疋、小袖一、手鉾

蓮華阿闍梨

御小袖一

卿公

宗祖御遷化に関する二、三の問題（宮崎）

宗祖御遷化に関する二、三の問題（宮崎）

御馬一疋、小袖一、御念珠 筑前公

御小袖一、衣一、帷一、 治部公

御小袖一、頭帽子 根津公

御馬一疋、小袖一 大夫公

その他に

御小袖一 八人

衣一 一人

錢一貫文 十人

錢二貫文 四人

きぬ一 二人

染物 一人

馬一疋鞍皆具 一人

この配分から見ると、御経、御仏等の法財は日昭・日朗へ、世財は日興・日向・日頂・日持等諸僧俗に配分されていることが知られる。以上で御遷化記録の内容の一斑と伝承、それに葬送と遺物配分を見た。

△宗祖御臨終について

御遷化記録には宗祖の臨終の模様については何等記されていないが、「元祖化導記」に

或記云、十月十二日酉刻（六時）北ニ向テ坐シ玉ヘリ、御前机立、供レ花焼レ香年来御安置立像釈迦仏、立参セン

ト申シタリケレバ、目ヲアゲテ御覧有<sup>ウ</sup>面振<sup>ウ</sup>リ玉フ、アル御弟子御直筆大漫茶羅ヲ可<sup>レ</sup>奉<sup>レ</sup>懸耶ト伺イ申サレケレバ、最モ、ト答サセ玉フ間仏像ヲ少シ傍ヘ押シ寄せ參セテ、其ノ後ニ御直筆ノ妙法蓮華經ノ漫茶羅ヲ懸ケ玉フヲ御覧有<sup>リ</sup>。

と或ル記を引いて説明している。ところで化導記の成つた文明十年（一四七八）より十八年ばかり前、寛正二年（一四六一）に中山本妙寺学僧本成坊日実の著「当蒙宗旨名目」には

十月十二日、北向御坐時、御前ニ文机立<sup>ツ</sup>焼香散花致<sup>ス</sup>、釈迦像立<sup>ツ</sup>進セ、同御本尊懸進セテ候ト申時見上御覧ジ面ヲ振ヒ給時、白蓮阿闍梨、御筆漫茶羅懸進セ候テ此ノ釈迦像ノ方ヘヨセ妙法蓮華經ノ御本尊ヲ懸ケ奉ル、御覧アリテ後と、二書殆んど同じで當時この所伝は一般的なものであつたらしい。日興の新弟子六人いわゆる新六の一人、西山本門寺開祖藏人阿闍梨日代（<sup>秘録</sup>一三九七九八才）は日尹（大夫日尊の弟子）に与えた書状に、立像仏をよけさせて大漫茶羅を掛けたことをのべて

御円寂ノ時、件ノ漫茶羅ヲ尋ネ出サレ懸ケ奉ル事顯然也<sup>③</sup>

と<sup>②</sup>しているのを見れば漫茶羅をかけさせられたことは真実を伝えていると見てよい。また宗祖の遺骸を舍利として身延へ送るや否やについても「化導記」は

或記云、御終焉近クナテ日朗以下ノ老僧達ニ対シテ仰セラレケルハ、我死スルナラバ全身ヲ瓶ニ奉納シテ其儘身延山ニ送り之ヲ置クベシ云々、日朗申サレケルハ、一日半日ノ間ナラバ仰セノ如ク可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之歟、既ニ三日、四日ノ路次ノ傳テ野ニ臥シ山ニ臥ス様ニテハ届ケ申シ難ク、存生ノ折節サヘ謗者充満ノ国ナレバ路頭モ輒スカラズ、況ヤ御身骨ヲ左様ニ致サンコトハ叶難カルベシ、簡要隱便ニ葬送シ奉テ、御身骨ヲ残サズ身延山ニ入レ奉ルベキノ由申

宗祖御遷化に関する二、三の問題（宮崎）

サレケレバ、此義最モナリ、然レバ日朗等宜シク相計ルベキノ旨、仰サレケリト云々。此趣ハ下総本土寺開山日典ノ記録抄物ニコレアリ、日朝懺カニ之ヲ見、注シオク者也<sup>⑧</sup>

日典は日朗門家九鳳の一人、のち典を傳に改め大円阿闍梨日傳といい、宗祖御入滅の弘安五年は三十六才の時、日朝はこの人の抄物によつたという。即ち宗祖ははじめ生身の遺骸をそのまま身延にとどけさせたかったが、世價不穩、道中困難であらうという日朗等の申し入れによつて茶毘しておくことにしたといわれる。日朝とほぼ同時代の円明日澄は「日蓮大聖人註畫讃」にこれとほぼ同様の伝承をうけ

終焉近ヅク時ニ臨ンデ朗公等ノ長弟ニ歴告シテ曰ク、我レ死セバ全身ヲ瓶ニ納レテ身延山ニ送り置ケト、日朗ノ云ク一日半日ノ道ナラバ尊命ニ任スベシ道ステニ三、四日ニ及ベリ、謗法充滿ノ国ナレバ御存日ノ往復ノ路、尚ヲ容易ナラズ、只如法ニ茶毘シ奉テ御身骨ヲ残サズ延山ニ納メ奉ラント、聖人然可シ玉フ<sup>⑨</sup>

としるしているが、徳川時代に入り身延三十二世智寂日省は享保五年（一七二〇）本化別頭高祖伝を著わしたが、この段を記すに當つて大体註畫讃により

全身瓶ニ収テ以テ空壙<sup>コンコウ</sup>セヨ、塚ヲ守ルコトハ昭朗興向頂持コレガ上首トシテ輪次奉事セヨ、衆皆ナ低頭、又手シ謹テ命ヲ聞ク、日朗進デ云ク、我師折伏徳邵シ怨嫉モ随テ強シ多日ノ駅次魔障計リ難シ、シカジ茶毘シテ以テ祀ニハ、之ヲセンコトイカン、高祖曰ク、衆等相議シテ宜シク夫レ之ヲ修スベシ<sup>⑩</sup>

と記し、三十六世六牙日潮はその著、本化別頭仏祖統紀に日省の別頭高祖伝をそのままこれをうけた記事をのせているが、安永八年（一七七六）建立日諦・玄得日誓の共著になる高祖年譜は

日朗ヲ顧テ曰ク、我が滅後必ズ屍ヲ延山ニ送レト、朗泣テ曰ク在世猶闍提有リ、況ヤ滅後脩途豈ニ虞リナカラン、

シカジ閣維シテ以テ遺骨ヲ送シニハ、大士ノ曰ク善シ<sup>③</sup>

宗祖の身延山の還帰について遺骨とするや否やは化導記の所伝がそのままに伝えられている。

〈御遺骨収取について〉

宗祖御遺骸入棺について御遷化記録は

十月十三日辰時御滅

十四日戌時御入棺<sup>日明</sup>子時御葬也

日昭・日朗の二人が御入棺の諸儀を執行したとある。ところで、後に中老、別頭統紀には十八祖の一人にあげられている治部公日位は葬儀には前陳の左に列し、御遺物の配分には御小袖一・衣一・帷一を頂いている。この人には別に「大聖人御葬送日記」があり、これに「大聖人御遷化次第と、御葬送次第、御遺物配分事」が記録され内容は御遷化記録と殆んど同じである。ただ、葬列の「先火 二郎三郎<sup>鎌倉ノ住人</sup>とあるが「鎌倉ノ住人」が「米町」と町名を明記し、次の「大宝華 四郎次郎<sup>上野ノ住人</sup>とある所は「上野ノ住人四郎三郎」とかわり、御遺物配分に御遷化記録に「御きぬ一 かうし後家尼」の一人が脱落しているのが目につくぐらいであるが、ともかく直接当事者である日位の記録が現存（静岡県 村松海長寺蔵）していることはまことに貴重である。この日位は蓮華阿闍梨日持の弟子で、日持ははじめ日興の弟子、のち宗祖に直参して本弟子六人に列なったが、日興は自分の初発心の弟子であるからとて自分の弟子分としてあつかい、その弟子治部公日位も自分の弟子分とし、宗祖にとりついて御本尊の授与にあずかせている。日興が宗祖御本尊をとりつき、分与された目録を「白蓮弟子分与申御筆御本尊目録事<sup>永仁</sup>」略して本尊分与帳といい、永仁六年（一二九八）宗祖滅後十七年に整理されたものである。これによると

宗祖御遷化に関する二、三の問題（宮崎）

宗祖御遷化に関する二、三の問題（宮崎）

駿河国四十九院ノ住、治部房ハ蓮華阿闍梨ノ弟子也、仍テ日興之ヲ申与フ、但シ聖人滅後ニ背キ了ヌ<sup>①</sup>とある。ついでに師匠日持の条を見ると

松野甲斐公日持ハ日興最初ノ弟子也、而テ年序ヲ経テ後チ阿闍梨号ヲ給ヒ六人ノ内ニ召シ具セラル。蓮華阿闍梨是也、聖人御滅後白蓮ニ背テ五人一同天台門徒トナレリ

という。日興が日昭・日朗・日向・日頂・日持を鎌倉方といい、自からを富士方と称し訣別するのは正応元年（一二八八）十二月以降のことである。このことはいまはおいて、宗祖の御入棺の儀について

同十四日辰時御入棺輓公役也、同子時御葬送<sup>②</sup>

という。御遷化記録は日昭・日朗が奉行したといい、これには「筑前公、越中公の役」とある。恐らくこれは日昭・日朗が指図をし一般におこなわれるであろうお頭剃り、お湯灌等は筑前公・越中公がその役をつとめたことをいうのであろう。なお筑前公は葬列には後陣の右に列し、御遺物は御馬一疋、小袖一、御念珠の配に預かり、輪番は七月伊賀公と共に勤仕することになっている人であるが、越中公はこのいずれにも名は挙げられていない。なお筑前公、越中公の日号は不明である。

子の刻（真夜中十二時）に葬送の儀が行われ茶毘ののち収骨され身延山へ送られることになった。ところで、最初の御分骨と考えられることが和泉公日法によって行われたようである。上総鷲巢鷲山寺三世日忍は同寺相伝の宗祖御舍利を三粒、中山法華堂（本妙寺、今中山法華経寺）に分与し奉ったという、その伝授状によると

右御舍利ハ武州池上茶毘ノ庭ニ於テ和泉公日法号曰性勝ハ悲歎恋慕ノ余リ、竊ニ火中ニ於テ之ヲ盗ミ取り当山上總鷲巢ニ入レ奉リ畢ヌ、凡ソ正直ノ波羅門ハ竊ニ仏舍利ヲ身中ニ納ム、弘法沙門ハ忍テ導師ノ御骨ヲ火中ニ

得。爰ニ故先師日辨ヨリ以來二代相伝ノ間安置スル事年久シク崇敬日ニ新ナリ、然リト雖モ所願成就ノ旨ニ任セテ御舍利ノ内三粒ヲ下総国中山法華堂ニ分奉セシムル所也、且ハ後輩ノ疑ヲ除カンガ為、且ハ崇重ノ誠ヲ致サンガ為、誓狀ノ語ヲ載セ之ヲ録スル者件ノ如シ。

曆応二年己未 十一月廿六日 大法師日忍花押<sup>16</sup>

即ち和泉公日法は宗祖の御遺骨を火中に得てこれを師匠越後日辨<sup>17</sup>の草創した鷺山寺におさめた。のち日弁は下総多古に妙興寺を創したが、ここにも鷺山寺奉納の分から遷したらしい。日辨の弟子日忍は鷺山寺三世、妙興寺二世であるが、中山本妙寺三世日祐に深く帰依し、かつ私淑したようで、自身の所願成井の好機にまかせて御舍利三粒を分奉したのである。日祐もその記録「一期所修善根記録」の中に

多古日忍阿闍梨御堂供養 延文二年丁酉四月三日

千田莊多古日忍遺蹟堂供養 応安二年己酉六月十四日<sup>18</sup>

と日忍の堂供養に際して導師をつとめている。以て日忍と日祐の交誼を知り得よう。

これが文献上に御分骨を物語る最初のものであるが、その前に池上祖師坐像の胎内に納められた唐金経筒に注意する必要がある。即ち本像は、宗祖七回忌に造立されたもので唐金経筒には宗祖御遺骨が納められていて

正面

裏

弘安五年壬午十月十三日辰刻御遷化

南無多宝如来

大別頭 大国阿闍梨日朗

南無妙法蓮華經

大施主 散位大中臣宗仲

南無釈迦牟尼仏

大施主 清原氏女<sup>19</sup>

宗祖御遷化に関する二、三の問題（宮崎）

宗祖御遷化に関する二、三の問題（宮崎）

とある。即ち池上本門寺祖師像胎内に奉籠された御遺骨をもって一般的には最初の御分骨とすべきであろうか。

池上本門寺の祖師坐像は古くより和泉公日法の作として知られている。しかるに同像の底銘には

敬白御修理

敬白

大願主二人

大進阿闍梨日嚴花押

大式阿闍梨日大花押

侍従公日淨花押

大願主一人

蓮華阿闍梨日持花押

正応元年六月八日

康永元年十月十三日

絵師 静珍花押  
（2）

応永九年五月十五日

と記されている。正応元年（一二八八）は宗祖七回忌に当る。大願主一人のうち侍従公日淨は葬送には日持と共に前陳左に列し、御遺物配分には御太刀一、小袖一、袈裟代五貫文という上位の配分に預った人である。この人が蓮華阿闍梨日持と共に大願主となっている。本像には日法が造立したということを示す何ものもない、従ってこの像が日法の作であるということは全く証蹟のないことである。而して本像は宗祖滅後第一還暦康永元年壬午、第二回忌応永九年壬午に補修彩色が行われている。もっとも宗祖の像を造立したということは元祖化導記に或記の説として

十月二十九日御ソ木ヲ取り御影像建立在之作者御弟子日法、七々日ニ御仏事御入堂在之<sup>（1）</sup>

をあげ、日法は聖人御影を造立して身延山に安置したといい、註画讃も



同キ二十九日ニ日法眞影ヲ刻ミ四十九日ニ影堂ニ遷ス

とのべている。なお、日省の本化別頭高祖伝日潮の本化別頭仏祖統紀は共に十二月二日、七七日に

浄壇ニ似像ヲ安ス

と日法の名を出さないで御影の造立されたことをのべている。思うにこのころ日法作の所伝は天下周知のことであつたから記さなかつたものか。日法が彫刻の名手であつたことを記すのは京都四条門家の学匠で「寛正盟約」を締結し諸門流和融をなしたとげた真如日住である。日住は関東の中山本妙寺の支院浄光院某にあてた書状に

大聖御存生御影ヲバ岡宮日法聖人御作云々細工ノ人ニテ御座候間、細々ニ御首ニ参ラレケル時、大聖人アル時仰セラルル様ハ、我ガ影ヲ作ルカト思フト御掟アルニ付テ色々物語リアリト宿老申サレ候ヲ日住幼若ノ時承リ覺エ候と日法が彫刻の名手であり

日法聖人御作ノ大聖、身延・池上ノ御影ニテ候

と池上・身延の御影は日法の造立であるといっている。元祖化導記の著者日朝は日住に学んだ事があるから日朝の著書の中には当然日住の説がとり入れられたであらうと思われる。更に日法については応永十三年（一四〇六）九月十三日、相模六浦上行寺に安置されている宗祖坐木像の胎内納経には納経書写意趣文並に奥書には一巻から八巻にわたつて「御身之御経書写之人々」の名が記され経筒銘には

筆者 中山三世日祐并御弟子衆

奉納 妙経全部

御身形相作者 中老日法

金物施主 一瀬氏<sup>28</sup>

とされるから室町初期、宗祖滅後百年ごろには日法の名が一部に知られそめていたようである。江戸時代になるとなると少し有名な祖師像は殆んど日法上人作となり、富士門流でも日法上人を取り入れて自山の靈宝を權威づけようとするに至るのである。即ち、楠板本尊製作の紛飾がそれで、大石寺十一世日有の物語について同三十一世日因（一六九八、八三才）が註解した「<sup>日有</sup>御物語聴聞佳跡」第五十二段の註によると、

日因私ニ云、身延山九カ年ノ間常随給仕シテ能ク細工ニ長ズ。…蓮祖御存生ノ弘安二年ニ板本尊ヲ彫刻シ奉ル。本門戒壇ノ御本尊コレナリ。又一体三寸ノ御影ヲ彫リ奉リ、後御免許ニテ大聖人等身ノ御影ヲ之ヲ彫刻シ奉ル。御本尊ノ寸尺、長サ四尺七寸五分、横二尺一寸七分、厚サ二寸二分、御首題、御勸讀皆金薄入也。仏滅後二千二百廿余年等ト云々、御端書、右為現当二世道立如件、本門戒壇之願主弥四郎国重敬白 法華講衆等、弘安二年十月十三日云々<sup>29</sup>

日法の盛名は他門流においても等閑視し得なくなったことが知られる。祖滅百五十年ごろ（行学日朝のころには身延祖師像は日法製作ということは定着していたようで、これと共に応安八年（一三七五、祖滅九四）のころ池上家の末裔某、退転して池上の寺領三町六段を南小路の道場（禅宗であろう）に寄進し、寺を寿福寺（臨済宗・五山の一）の末寺にせんとはかったことがある。そこで池上当住三世日山は鎌倉管領に訴え、祖師像を比企谷妙本寺まで遷座して折り頸益を得て勝訴した<sup>30</sup>がこれは池上祖師像の靈験を門家は勿論、一般庶民の間に轟かせ、中老日法の彫刻の伝承と結合し、ついに池上祖師像に身延祖師像と共に中老日法の作であるといわれるようになったものと見える。

〈御遺骨身延出立について〉

御遺骨の出立は普通十月二十一日といわれるが、これは元祖化導記に由来する。

或記三云ク、御身骨ヲバ御遺言ニマカセテ十月二十一日池上ヨリ飯田マデ、二十二日湯本、二十三日車返シ、二十四日上野南条七郎宿所、二十五日甲斐国ニ入り玉ヘリ、同十月二十九日、御ソ木ヲ取り御影像建立コレアリ、作者ハ御弟子日法、七々日御仏事御入堂コレアリ、一百ケ日御墓建立了ヌ、ヤガテ御舍利奉納等云々<sup>31</sup>

この十月二十一日出発のことは化導記の或記の説はこの後に出る諸書の先驅をなしている。

註画讃 二十一日出発 二十五日身延着、蓮公行狀・別頭高祖伝・別頭統紀等はすべて二十一日出発としている。

十月十九日は初七日にあたるが何故に初七日の十九日に出なかったであろう。別頭高祖伝・別頭統紀は十九日に初七日忌を修し、六子（六老僧）更交説法し能化所化涕淚連如たるものがあつたとのべているが、六子中、日向・日頂はこの座にいないことは御遷化記録によって明らかであるが、そのことはまずおき、御遺骨の出立は初七日の十九日で、化導記が「或記」に依つた或記は後日の調整されたものではなからうか。すでに前述した治部公日位の「大聖人御葬送日記」には

御遷化 御舍利ハ同月十九日池上御立チ有リ<sup>32</sup>

十九日出立と明記している。御葬送に直接参与にあつた人の記録である。この人の十九日出立の方が史料として有力であろう。即ち十九日は初七日にあたるから十八日のお速夜<sup>たぐ</sup>には門徒集會して法要を執行し翌十九日御遺骨奉遷の旅についたのである。化導記所載の宿々の日程に従えば身延到着は二十三日となる。従つて翌二十四日は少憩、二十五日は二七日忌速夜にあたるから諸弟子門徒等群集して通夜法要をつとめ、翌二十六日は法要虔修のち納骨されたと見るべきで、化導記所引の或記は、二十五日・二十六日の速夜と納骨の日取りを記憶していたので、宿々の泊り、

宗祖御遷化に関する二、三の問題（宮崎）

日数を逆算考慮して二十一日出発と記録したものだと思われる。

諸書には納骨について極めて簡略にこれをしてしているが、御遷化記録には墓所傍・墓所寺とある、当時の状況を考えると墓と寺と二つが一所にあったようである。白蓮日興が弘安七年十月美作房へ送った消息によると

何ごとよりも身延沢の御墓の荒はて候て、鹿かせきの蹄に親りかからせ給候事目もあてられぬ事に候

と宗祖の墓が鹿や鹿の類の獣たちの蹄に墓所が蹴り散らされてあはてているのを九月輪番にあたつて登山した日興が見て慨歎しているが、これと共に墓所寺があり、遺言によれば宗祖生涯の隨身仏である立像の釈尊が安置され、註法華經がおかれていた。日興は幕府の本宗への抑圧、諸弟子各自の教線の維持の上から輪番制の護持が不可能であるのを見、地頭南部実長と相談しその結果自身並びにその門下をもって身延を譲り、自から身延山院主として臨まんとし、仏安八年末より常住することとなり、したがって釈尊と註法華經は日興が執筆した御遺物配分帳の約束の如く日朗と日昭にそれぞれ渡されたようである。所で正和三年（一一三四）宗祖三十三回忌に当り時に十七才にして中山本妙寺貫首となつた同寺三世日祐はこの年から毎年身延参詣を企てたが

康永元年<sup>壬午</sup>（一二三二）卯月三日六浦ヲ立チ同七日登山、同八日御塔頭ノ柱立これを拝し奉つて下向、大聖人御舍利ヲ拝し奉ル

と記している。日祐は御塔頭というがこれが墓所の寺であることは間違いない。この御塔頭は禅宗では祖師の墓所のそばにたてた僧坊を塔頭といい、のちその寺域にある支院を総じて塔頭とよび、塔中と記すようになったが、日祐の記す塔頭はいうまでもなく祖塔で、宗祖滅後六十一年目にあつて墓所寺―塔頭の建て替えが行われ、その柱立の儀を拝し、あわせて御舍利を拝し奉つたという。日祐は御塔頭を通常の呼び名「おとうとう」と称し「おたちゅう」

とは呼ばなかったであろうと思われるが、康永元年より九年後の観応二年（一三五二）には

身延山久遠寺、同御影堂、大聖人御塔頭、塔頭板本尊金剛造像ノ結縁

康永三年七月十九日 先師塔頭修理畢。

応安元年戊申（一二三八）日高塔頭查替畢。

等と塔頭の修造についてのべているが、「たっちゅう」でなくこれは「おとうとう」「とうとう」と呼んだのではないか。塔頭の「頭」を「ちゅう」と唐宋音で読む禅宗風の読み方より呉音の「とう」の方が当時の仏教諸宗の読み方としては親しいからである。

#### 〈池上本門寺の建立〉

御遷記録に「弘安五年丙午九月十八日武州池上入御

塔頭御門  
太夫宗仲

同十月八日本弟子六人被二定置一

此状六人面々可レ帶云々日興一筆也

とある。

十八日に武州池上に到着、地頭池上衛門大夫宗仲の館に入られたとあるが、日位治部公の大聖人御葬送日記には「於武蔵国江原郡千束郷池上村本門寺 御年六十一歳御遷化也」という。御遷化記録の書かれたころは、まだ寺とはいわなかったのであらうか。前述した如く、正応元年、七回忌に宗祖坐像が造立されたが、この時、御遺骨が唐金経筒の中におさめられ胎内に内蔵された。この経筒の銘に

弘安五年壬午十月十三日辰時 御遷化

大別当 大国阿闍梨日朗

大施主 散位大中臣 宗仲

大施主 清原氏女

宗祖御遷化に関する二、三の問題（宮崎）

と記されているが、これに「大別当」という。少なくとも正応元年には池上本門寺が建立されており、日朗は大別当として住持していたことがわかる。池上宗仲・宗長の兄弟は右衛門大夫志に任じた宗仲、兵衛志に任じた宗長であるが、宗仲は御遷化記録には衛門大夫とある。これで見るとこのころ宗仲は衛門尉に任ぜられ、位階も従六位より五位に昇叙され衛門大夫になっていたようである。経簡に散位とあるのは散官ともいい位階だけで職務のない者をいうから宗仲は衛門大夫には任ぜられたものの別に職務に就かなかったから散位と記したのである。中臣氏は藤原氏であるから池上氏は藤原氏の流れをくむ氏族であろう。宗仲の妻は清原氏の氏族の女であるから清原氏女と記したのである。ともかく池上氏は宗仲夫妻によって本門寺を建立し、夫妻は大施主、日朗は別当に請ぜられたもので、宗祖滅後三、四年にして本門寺は成ったものであろう。

日位が御葬送日記をうつしたころは本門寺はすでに門家に知悉された寺であったから、「池上村本門寺」と記したのであろうか。池上本門寺建立については諸書に見る所はすくないが、後世智寂日省の著である高祖伝によると宗祖は秋の初めに病氣になられた。門人多く集まったが比企大寺能本、池上宗仲も馬に乗り馳せ見舞った。人々は身延は不便で良い医師がいまいがどうしようかと話しあったが宗祖は「我に思ふ所あり、池上本門寺に往て病を養はんと欲す」といわれたので宗仲大いに喜び池上に迎えることとなった。こうして池上に着かれたが宗仲は「本門寺未だ開堂あらず、飲んで乞ふ、病の暇に吉日を卜して之を修せんか、高祖聡許す」こうして一日開堂の式並に仏事を修したといつて本門寺は宗祖在世中に開堂されたと伝える。六牙日潮の別頭統紀は日朗伝の中で、文永十一年三月、宗祖佐渡流罪より鎌倉へ帰り給うや大学三郎は館をすてて寺をたて、宗祖の開堂を請うて長興山妙本寺となし日朗を主たらしめた。翌建治元年、宗仲、能本の捨宅為寺の美挙を羨やみ宗祖に乞うて長栄山本門寺を創し、日朗をして両寺を監せ

しめたという。このように本門寺をもって宗祖在世中の建立という所伝は別頭統紀並に高祖伝の名声と権威によって殆んど定着したようであるが、その実際は後世の紛飾にかかるものであることが知られよう。

なお、「宗祖御遷化記録」は平成四年十一月二十日付をもって重要文化財に指定された。

〔註〕

- (1) 宗全一一〇一頁～一一〇頁
- (2) 同 二一〇七頁、この裏判は、去る昭和二十五年十月十八日西山本門寺で拝見、日蓮宗事典一〇二頁
- (3) 伝灯抄 宗全二八一二一頁
- (4) 定遺 二七四九頁
- (5) 同 二七五八頁
- (6) 化導記 日蓮聖人伝記集 四六頁
- (7) 当家宗旨名目 下廿九ウ
- (8) 日代より宰相阿闍梨日尹への状 宗全一一三三五頁
- (9) 化導記 日蓮聖人伝記集 四七頁
- (10) 註画讃 日蓮聖人伝記集 一〇七頁
- (11) 本化別頭高祖伝 日蓮聖人伝全集 五〇頁
- (12) 本化別頭仏祖統紀普通「別頭統紀」という。一八七頁
- (13) 高祖年譜 日蓮聖人伝記集 一七六頁
- (14) 本尊分与帳 宗全一一二三頁
- (15) 大聖人御葬送日記 宗全一一五三頁
- (16) 宗全一一四五二頁 正本中山法華経寺蔵

宗祖御遷化に関する二、三の問題（宮崎）

宗祖御遷化に関する二、三の問題（宮崎）

- (17) 日興の本尊分与帳第九・十項に日弁と日法の師弟關係が記されている。宗全一一一二頁
  - (18) 宗全一一四四八頁
  - (19) 昭和定本遺文第三卷 卷頭写真
  - (20) 同上
  - (21) 日蓮聖人伝記集 四八頁
  - (22) 同上
  - (23) 別頭高祖伝 日蓮聖人伝記集 五二頁 別頭統紀 一九〇頁
  - (24) 日蓮教団全史上 三〇〇頁
  - (25) 与中山淨光院書 宗全一八一八三頁
  - (26) 同 宗全八七頁
  - (27) 同 同
  - (28) 中尾堯 中山法華経寺史料二五七頁
  - (29) 富士宗学要集 疏釈之二一四一〇頁
- 当家諸門流繼図之事、成立は文禄・慶長のころ、このころ大石寺系には日興身延退出にあたって次の伝説があった。日興は「急に身延に帰って板御本尊と岡ノ宮日法御作の大聖人御影の木像を取って出山し玉ふ」という。すでに日法上人の名をとり入れられねばならぬ程、御影には大切な条件であった。またこのころにはまだ板本尊は日法上人作とは主張していなかった。宗全一八一四九頁
- (30) 当門徒繼図次第
- この事件は応安八年（一三七五）のころ、日山は永安寺殿に訴訟したという。永安寺壁山道全は貞治六（一三六七）から応永五年（一三九八）まで関東管領を勤めた足利氏満である。宗全一八一六七頁
- (31) 化導記 日蓮聖人伝記集 四八頁
- (32) 大聖人御葬送日記 宗全一一五七頁
- (33) すでに日蓮教団全史上五一頁にのべた如くである。



(34) 美作房御返事 宗全二一—四五頁

(35) この経緯についてはすでに「創価学会批判」日蓮宗々務院刊 四〇頁と、日蓮教団全史上 七二頁に論述しておいた。

(36) 一期所修善根記録の「身延山参詣之事」 宗全一—四四九頁

(37) 和田英松著 官職要解 衛門府 一一九頁

# 中世における日蓮遺文の書写について

冠 賢 一

はじめに

静岡県北山本門寺（旧富士門流）に一四〇九年頃、富士門流系の信伝なる僧が書写した写本遺文を格護する。ここでは、この写本遺文を信伝本と呼称する。合綴された写本に収録された十一通の遺文は、(1)定本番号92寺泊御書 (2)106 真言諸宗違目 (3)157 聖人知三世事 (4)170 曾谷入道殿許御書 (5)212 忘持経事 (6)232 道場神守護事 (7)255 富木殿御書 (8)277 始聞仏乘義 (9)310 富木入道殿御返事 (10)367 諸経与法華経難易事 (11)73 金吾殿御返事の諸遺文である。かつ、これらは中山門流初期の目録である日常目録・日祐目録に登録され、その真筆のすべてが現在も中山法華経寺に格護されている。ただし、(11)金吾殿御返事は両目録に未載であるが、その真筆は中山法華経寺に存する<sup>①</sup>。

そこで次のような問題が設定されよう。(一)日蓮聖人滅後もない時期に、中山法華経寺に格護された真筆を書写し、門流の異なる富士門流に伝えたのは誰か。(二)信伝本の内容は真筆と比較してどの程度の相違があるのか。また、その相違の有り様はどのようなものか。(三)この信伝本より、やや時代が下がる同じ関東系写本の平賀本録内御書（一四四三年頃の写本を底本とする）・日朝本録内御書（一四七〇年前後頃の書写本）収録遺文と比較し、その内容にいくかなる相違があるのかという書誌的問題を考察するのが本稿の目的である。

中世における日蓮遺文の書写について（冠）

一、信伝本の書写と富士への伝来

信伝本には、その書写年代と伝来を示す「奥書」と「本奥書」が記されている。奥書に、

私云于時明德第三曆林鐘十九日於重須大坊靈仙房遺跡自治部アサリ日伝相伝之、其後送十七年星霜佐州御代官ニ  
（同阿闍梨）  
下国之際、清書之奉ル処也、（御五十才） 釈信伝之  
（エナウ）

とある。この奥書によれば、明德三年（一二三二）六月十九日に、治部阿闍梨日伝よりこの写本遺文を相伝した信伝が、それから十七年を経て佐渡国の代官として下向するにあたり、清書したものであるという。その書写した年次は、相伝後十七年の星霜を送ったというから、一四〇九年頃であろうか。なお、この奥書にこのとき信伝は満五十才というが、信伝の誕生年が不明なため、その年次を確定することはできない。

では、信伝本は何を底本として書写したのか。信伝本の底本に記されていた本奥書には次のようにある。

已上十一通者因幡国富城庄之本主日常所賜也、於正本者当住下総国高鹿郡八幡庄内栗原村也、定有彼在所歟、此  
本者以御正本写校耳、日澄謹書

この本奥書を書いた日澄によれば、十一通の遺文はいずれも日蓮聖人の自筆をもって写校したものであるという。本遺文伝来のカギをにぎるこの本奥書を書いた日澄とは、富士門流の寂仙房日澄（一二六二—一三二〇）と考えてよい。日澄は兵部阿闍梨といい、はじめ日向に学んだが、一体仏造立を批判し、正安二年（一三〇〇）日興の弟子となり、富士本門寺重須談所の学頭をつとめた。日興の弟子となって十年、延慶三年（一三一〇）三月十日、四十九才で没している。

ただし、この本奥書を書いたのは日澄であるが、本書収録の十一通の遺文を、日澄自身が真筆から転写したものとすることはできない。その理由は、本奥書に十一通の真筆が格護されている場所を、「定有彼在所歟」のごとき表記は、日澄自身が、直接、真筆から書写したものでないことを示す。おそらく、日澄自身がある写本から転写したときにこの本奥書を書き加えたか、あるいは他者が書写したものに、日澄がこの本奥書を加えたものであろう。いずれにしても、日澄の没年は一三一〇年であるから、信伝本の底本となったものは一三一〇年以前の極めて古い書写本ということになる。そして、中山に真筆を有する十一通のこの書写本の伝来に、日澄が介在していたことは、本写本が中山から富士に伝えられていく理由を考える上で、極めて重要な意味をもつ。なぜなら、この寂仙房日澄の兄が中山を中心に活躍した六老僧の一人、伊与房日頂であったからである。

中山の日頂と富士の日澄が兄弟であることは、日蓮聖人が弘安元年（一二七八）八月、日頂に授与した本尊の日興添書から明らかで、

因幡国富城五郎入道息伊与阿闍梨日頂舍弟寂仙房（日澄）付属之<sup>②</sup>

とある。また、寂照院日乾の『身延山久遠寺御霊宝記録』曼荼羅の部にも、

<sup>三紙</sup>  
文永十一年<sup>甲</sup>十一月 日

但可為大本門寺重宝也

此廿八字非聖筆

因幡国富城五郎入道日常息寂仙房申与<sup>③</sup>之

とある。この本尊は明治八年の身延山久遠寺の大火で焼失したが、遠沾日亨の臨写本が現存し、『御本尊鑑』に収録

中世における日蓮遺文の書写について（冠）

中世における日蓮遺文の書写について(冠)

されている。立正安国会編『御本尊集目録』は、日乾のいう聖筆にあらざる廿八字を、先の類例から日興の添書と推定している。

以上の史料から、中山の伊与房日頂と富士の寂仙房日澄が兄弟であることは明確で、その関係から中山所蔵の真筆を書写した遺文が富士にもたらされたのであろう。そして、日澄が日頂のもとを離れて日興の弟子となり、富士へ来たのが正安二年(一一三〇)で、兄日頂が中山を追放されたのが正応五年(一二九二)九月から永仁二年(一二九四)とされ、富士に來たのもこの頃であったとされる。とするならば、中山から富士へ信伝本の底本である写本遺文を伝えたのは日頂その人ではなかったか。そして、それは日澄が没する延慶三年(一二二〇)三月十日以前に転写され、日澄によって本奥書が書き加えられたのではないか。

## 二、信伝本の書認的考察

次に信伝本の書誌的考察を行なってみよう。先述したように信伝本の底本をたどっていけば、中山法華經寺蔵の真筆にたどりつく。したがって、信伝本がどの程度、真筆の通り書写されているかを考察することは、初期における遺文の書写の有り様を示してくれることになる。

信伝本に収録されている十一通の遺文は、いずれもその真筆が中山法華經寺に伝えられており、その対照によって真筆との相違が明らかとなる。そして、信伝本が写本遺文中、いかなる位置にあるかを明確にするため、録内御書のなかで最古の写本である平賀本・日朝本所収遺文との比較をおこなった。〈史料1〉は、信伝本に収録する十遺文(金吾殿御返事は録外御書であり、録内御書の平賀本・日朝本未収のため除いた)について、真筆と信伝本・平賀本・

日朝本三写本との校異の結果を表示したものである。校異は用字・用語・補入・脱字(文)・漢字化・仮名化・漢文化・和文・転倒について真筆と比較し、その相違を数字として示した。斜線の部分は、当該遺文が欠本のため校合できなかったことを示す。当然のことながら、数字が少なほど真筆に近い写本であることになる。

すなわち、寺泊御書の真筆との相違箇所は、信伝本18、平賀本62、日朝本64箇所であり、真言諸宗違目は信伝本23、平賀本27、日朝本46箇所の相違があることを示す。しかし、ここに示した数字のみでは、諸遺文の分量に大幅な相違があり、諸遺文間の相違を明確にすることができない。したがって、それを明らかにするため、各遺文の相違箇所一箇所あたりの『昭和定本日蓮聖人遺文』(以下『定本遺文』と略称)の行数を算出してみた。△史料1√のカッコ内の数字がそれで、『定本遺文』行数52行の寺泊御書の真筆との相違箇所は、信伝本では2・89行に一箇所、平賀本は0・84行に一箇所、日朝本は0・81行に一箇所の相違があるこ

中世における日蓮遺文の書写について(冠)

# <史料 1>

定本 番号	遺 文 名	定本 行数	信 伝 本	平 賀 本	日 朝 本
92	寺泊御書 (漢文)	52	18 (2.89)	62 (0.84)	64 (0.81)
106	真言諸宗違目 (漢文)	47	23 (2.04)	27 (1.74)	46 (1.02)
157	聖人知三世事 (漢文)	16	7 (2.29)	7 (2.29)	
170	曾谷入道殿許御書 (漢文)	236	142 (1.66)	100 (2.36)	202 (1.17)
212	忘持経事 (漢文)	23	24 (0.96)	16 (1.44)	14 (1.64)
232	道場神守護事 (漢文)	15	0 ( 0 )	5 (3.00)	17 (0.88)
255	富木殿御書 (漢文)	30	4 (7.50)		24 (1.25)
277	始聞仏乗義 (漢文)	36	51 (0.71)	14 (2.57)	
310	富木入道殿御返事 (混交)	44	64 (0.69)	124 (0.35)	
367	諸経与法華経難易事 (混交)	33	38 (0.87)	60 (0.55)	
	合 計	532	371 (1.43)	415 (1.21)	367 (1.10)

とを示す。同様に『定本遺文』行数47行の真言諸宗違目では、信伝本は2・04行に一箇所、平賀本は1・74行に一箇所、日朝本は1・02行に一箇所の相違があることを示す。

そして、十遺文全体では信伝本は『定本遺文』の総行数532、校異箇所371であるから、1・43行に一箇所の相違があることになる。同様に平賀本は富木殿御書を欠くので、九遺文の総行数501、校異箇所415であるから、1・21行に一箇所の相違が、さらに日朝本は聖人知三世事等四遺文を欠くので、六遺文の総行数403、校異箇所367であるから、1・10行に一箇所の相違があることになる。これによれば、信伝本、平賀本、日朝本の順で真筆に近いことになる。この傾向は、△史料1▽に示した三写本とも欠本のない五遺文(寺泊御書・真言諸宗違目・曾谷入道殿許御書・忘持経事・道場神守護事)のみの比較によっても同様で、信伝本1・80行に一箇所、平賀本1・71行に一箇所、日朝本1・09行に一箇所と、その数字こそ変わるが、信伝本・平賀本はより真筆に近く、日朝本はやや真筆から離れるという結果に変わりはない。

以上は十遺文全体からみた結果であるが、十遺文を個別に検証したとき、遺文によって大きな相違があることがわかる。すなわち、全体では信伝本・平賀本・日朝本の順に真筆に近い結果であったが、△史料1▽に示したように遺文ごとにみたとき、170曾谷入道許御書・212忘持経事・277始聞仏乗義の三遺文では逆に平賀本の方が信伝本より真筆に近い内容を持ち、また、212忘持経事では最下位の日朝本が最も真筆に近い内容をもつ写本であることがわかる。

なぜ遺文によってこのような相違が出てくるのか。その理由は何か。その解明のために遺文ごとに検証してみよう。ただし、紙数の関係上、92寺泊御書・170曾谷入道殿許御書・232道場神守護事・367諸経与法華経難易事の四遺文について考察し、必要に応じて他の遺文にふれた。その理由は次のとおりである。

平賀本の底本は、第三十巻収録の「諫曉八幡抄」の巻末に「以日意御直筆奉写之也」とあるように、平賀本土寺第九代日意（一四二一—一七三）の写本である。日意の写本がいつ書写されたものであるかは定かでない。平賀本第廿九巻に収録する「妙法曼荼羅供養御書」の書末に、「自弘安五年至嘉吉三年百六十七年相當候也」とある識語を、日意の識語の写しとみれば、嘉吉三年（一四四三）頃には書写をはじめていたことになる。しかし、日意のときには録内御書の篇目がすべて整っておらず、これを大永七年（一五八八）に平賀本土寺十一代の日遊が書写したときに、一四八通に整足したものであるとされる。したがって、平賀本の奥書に「以日意御直筆奉写之」とことわる第十・十五・十八・二十・二十一・二十六・二十七・三十一巻こそ、平賀本のなかでも、日意の直筆本を底本にした古い写本とされる。信伝本に収録する十遺文のうち、ここにとりあげた92寺泊御書・170曾谷入道殿許御書・232道場神守護事・367諸経与法華経難易事は、平賀本のなかでも、この日意の直筆を底本にした古い写本である。したがってこの四遺文を手掛りに、信伝本・平賀本・日朝本の特色を考察した。

## 92寺泊御書の校異

本書は文永八年（一二七二）九月二十二日附、富本常忍宛書状。真筆九紙、中山法華経寺藏。漢文体（一部、和文体）。『定本遺文』で4頁（52行分）。ハ史料1Ⅴのとおり真筆との校異の結果、その相違は信伝本18、いっぽう平賀本62、日朝本64箇所と信伝本の内容が極めて真筆に近い。すなわち、信伝本は『定本遺文』2・89行に一箇所の相違であるのに対し、平賀本は0・88行に一箇所、日朝本は0・81行に一箇所の相違があることになる。その理由は、各写本の真筆との相違箇所を具体的に表示したハ史料2Ⅴで明らかのように、信伝本に対して平賀本・日朝本の用字・



中世における日蓮遺文の書写について(冠)

補入・脱字の相違がきわめて多いからである。

信伝本の相違箇所は18と大変少ない。

料簡(料棟)・給(賜)・須臾(由旬)——用字

此法華經(一字補)——補入

涅槃經(一字脱)・不得道理(二字脱)・不知機(一字脱)・安樂行品(一字脱)・可然用途(二字脱)——脱字

かたがた(旁々)・ハラ門(婆羅門)——漢字化

法門あり(有法門)——漢文化

しかも、これら信伝本にみられる相違は、転写の過程における初歩的な誤まりとすることができよう。

しかしながら、平賀本・日朝両写本にみられる特色の一つは、その顕著な相違のなかに多くの共通する相違箇所があることである。すなわち、真筆にない「追申」が、

鷺目一結給候畢、有御志諸人聚集一处、可有御聴聞歟(平賀本)

鷺目一結給候畢、有御志諸人一处集、可有御聴聞歟(日朝本)

両写本とも、ほぼ同文で補入され、「三世諸仏説法」(二字脱、平賀本・日朝本)と同一箇所を脱字し、衆度(教度)・圀僧(国僧)・可聴之(可読之)と平賀・日朝両本ともに同一用字に書き改めている。

もちろん、平賀本のみが「非為怨五通仙人一切天魔外道經文」の棒線の部分を補入し、日朝本が、

但暗可推度、又自本存知之上、始非可歎止之、法華經第四云(五二二頁)

今勸持品過去不輕品也、今勸持品未來可為不輕品(五一五頁)

<史料 2>

中世における日蓮道文の書写について(冠)

定本 番号	遺 文 名	写 本 名	用 字	用 語	補 入	脱 字	漢 字 化	仮 名 化	漢 文 化	和 文 化	転 倒	合 計
92	寺 泊 御 書	信伝本	4	1	2	6	2	0	1	0	2	18
		平賀本	24	5	24	5	2	0	0	0	2	62
		日朝本	22	4	16	12	2	0	1	1	6	64
106	真 言 諸 宗 違 目	信伝本	9	0	1	12	0	0	0	0	1	23
		平賀本	10	0	5	12	0	0	0	0	0	27
		日朝本	16	2	3	22	0	0	0	0	3	46
157	聖 人 知 三 世 事	信伝本	2	0	1	3	0	0	0	0	1	7
		平賀本	4	0	1	2	0	0	0	0	0	7
		日朝本	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
170	曾 谷 入 道 殿 許 御 書	信伝本	33	6	25	49	0	0	0	0	29	142
		平賀本	25	5	23	31	0	0	0	0	16	100
		日朝本	50	10	43	71	0	0	0	1	27	202
212	忘 持 經 事	信伝本	8	0	10	6	0	0	0	0	0	24
		平賀本	3	1	8	4	0	0	0	0	0	16
		日朝本	2	1	9	1	0	0	0	0	1	14
232	道 場 神 守 護 事	信伝本	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		平賀本	2	0	2	1	0	0	0	0	0	5
		日朝本	4	2	4	7	0	0	0	0	0	17
255	富 木 殿 御 書	信伝本	0	0	1	3	0	0	0	0	0	4
		平賀本	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		日朝本	11	1	5	7	0	0	0	0	0	24
277	始 聞 仏 乘 義	信伝本	11	2	27	7	0	0	0	2	2	51
		平賀本	8	0	5	1	0	0	0	0	0	14
		日朝本	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
310	富 木 入 道 殿 御 返 事	信伝本	8	1	5	29	15	1	4	0	1	64
		平賀本	20	4	13	35	38	1	12	0	1	124
		日朝本	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
367	諸 經 与 法 華 經 難 易 事	信伝本	6	0	2	11	18	0	1	0	0	38
		平賀本	10	0	11	11	15	0	13	0	0	60
		日朝本	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

中世における日蓮遺文の書写について(冠)

の棒線の部分を脱文するなど、平賀本・日朝本独自の相違箇所も多い。

ここでは、同じ関東系写本とはいえ、転写の系統を異にする平賀本・日朝本が、同じ用字に改め、同じ追申を補入するなど、その表記に特色ある共通性をもつことに注意しておきたい。

170 曾谷入道殿許御書の校異

本書は文永十二年(一二七五)三月十日附、曾谷・大田両氏宛書状。真筆四十六紙、中山法華經寺藏。漢文体。  
『定本遺文』で18頁(236行)の長篇遺文。真筆との校異の結果、その相違箇所は、△史料1▽に示したとおり、信伝本142、平賀本100、日朝本202と本遺文では平賀本の方が真筆に近い。すなわち、信伝本は1・66行に一箇所、日朝本は1・17行に一箇所の相違であるのに対し、平賀本は2・36行に一箇所の相違となる。

その理由は、△史料2▽に示したように信伝本・日朝本には用字・補入・脱字・転倒の相違箇所が多いからである。とりわけ、信伝本・日朝本が、

成就(常受)△信伝本・日朝本▽

眉(睫)△信伝本▽、(睫)△日朝本▽

被破(被貨)△信伝本・日朝本▽

と用字の書き換えを行なうとともに、

日本之内所本未出現大難也(未曾有と)△信伝本▽

以心不可量(難測と)△日朝本▽

乞・願・彼・門・徒・等（庶幾と）△日朝本▽

称徳天皇御時（治国時と）△日朝本▽

と同意の用語に換えることが顯著である。これは転写が重ねられる間に発生した誤写ではなく、意図的に改変したものである。さらに、その表記を意図的に改変した例として、日蓮聖人が省略して引用した経文を、經典のとおりに直したり、日蓮聖人の誤記を正した場合がある。すなわち、

涅槃經云譬如子七母非不平等（真筆）

涅槃經云譬如一人而有七子是七子中一子遇病父母之心非不平等（信伝本・日朝本）

と棒線の部分のように、日蓮聖人が省略して引用した涅槃經卷二十の梵行品の一節を、涅槃經の経文のとおりに書き直している。また、

六波羅蜜經唐末不空三藏自月氏（般若と）△信伝本・日朝本▽

のように、六波羅蜜經を不空三藏が渡したとするのは、日蓮聖人の誤記であるとし、般若三藏が訳したので、その表記を「般若」と書き改めている。このことは、遺文を書写するという行為のなかで、經典を書写することとは異なり、遺文の誤まりを訂正し、さらにはその表記を書き改める意図をもって書写されたことを知るのである。しかも、本道文でかかる訂正・表記の改変をしているのは三写本のなかでも最古の信伝本とそして日朝本であった。同じ関東系写本とはいえ、その関連が見出せない両写本に、全く同じ訂正・表記の改変がなされ、平賀本のそれには見出せないのはいかなる理由なのか。明確な解答をもっていないが、三写本が底本とした写本は一つ一つ異なるのであり、その底本の転写の段階で同じ系統の写本が用いられたとしか考えられない。

中世における日蓮遺文の書写について（冠）

中世における日蓮遺文の書写について（冠）

## 232 道場神守護事の校異

本書は建治二年（一二七六）十二月十三日附、富木常忍宛書状。真筆五紙、中山法華經寺藏。漢文体。『定本遺文』で2頁（15行）の短篇遺文。真筆との校異の結果、その相違は信伝本は全同、平賀本5、日朝本17箇所、平賀本は『定本遺文』3行に一箇所、日朝本は0・88行に一箇所と、日朝本の相違箇所が極めて多い。信伝本が全同、平賀本が、同名同生天是神能守護人（二字補）

雖常護人（雖を離と）

十方尊神不敢當但精進（三字脱）

南無驚覺之義也（傳と）

富木殿御返事（三字補入）

の五箇所のみ相違であるのに対し、日朝本は、盗人聞之稱南無仏得天親之礼明之處盗人如レ上申之（脱文）  
のように、長文の脱文をはじめとして相違箇所が多い。

## 367 諸経与法華經難易事の校異

本書は弘安三年（一二八〇）五月二十六日附、富木常忍宛書状。真筆十紙、中山法華經寺藏。和漢混交文。『定本遺文』で3頁（33行）。真筆との校異の結果、その相違箇所は信伝本38、平賀本60で日朝本は欠本。信伝本は『定本遺文』0・87行に一箇所、平賀本は0・55行に一箇所の相違があることになる。先に検証した三遺文に比較して本遺

文の校異箇所が多いのは、本遺文が和漢混交文で、用字・補入・脱字の相違に加えて、仮名の漢字化、和文の漢文化がきわめて多くなるためである。

すなわち、〈史料2〉Vに示したとおり、信伝本の漢字化18、漢文化1、平賀本の漢字化15、漢文化13箇所を数える。これは本遺文に限ったことでなく、〈史料2〉Vに示したように同じ和漢混交文の310富木入道殿御返事にもその傾向が顕著で、同遺文の信伝本の漢字化15、漢文化4、平賀本の漢字化38、漢文化12箇所と多い。そして、かかる漢字化・漢文化は、信伝本より書写の年代が下がる平賀本に、いっそうその傾向が強まる。

仮名の漢字化は早く、直弟子日興の写本に見られるところであるが、時代が下がるにつれ、漢字化・漢文化はいっそう顕著となる<sup>10</sup>。こうした傾向に対し、批判の声も出はじめ、室町期書写の録内御書の一つ、日成本収録の開目抄奥書には次のように記す。

此御書者於佐渡国御年五十一才而御作也、此写本者本覺寺日住上人之御本也、然住公仰云、大聖人御製作本者三大部共ニ仮名交ニ被遊也、爰ニ有人以少智除仮名成真名文候事僻義也、無勿体々々云云、可口伝云云

ここにいう「大聖人御製作本者三大部共ニ仮名交ニ被遊也」の三大部が何の遺文を指すかは定かでない。しかし、本覺寺日住は和文を漢文に改めることを僻義であるとして厳しく批判する。それは日蓮聖人が著者・手紙を書くとき、その内容や相手によって和文・漢文・仮名・漢字に書きわけた理由が存在したからと考えたからではないか。例えば、唱題による救済の論理を説いた『本尊抄』は漢文体で書かれた意味があり、また日蓮聖人の心のひだを披瀝した『開目抄』が和文体で書かれたのは、漢文体ではそれを表現できなかったからであり、それを後人が漢文体に直したのでは、日蓮聖人の意図するところが、正確に伝わらなくなると考えたからではないか。しかし、遺文の転写の過程のな

かで、漢字化・漢文化はすすむ。信伝本から平賀本に見るその増加は、かかる傾向を示すものである。

以上、信伝本収録遺文のうち、わずかに四遺文であるが、各写本の校異をおこなった。すなわち、信伝本の底本は、その転写の過程をたどれば、現存の中山法華経寺の真筆にたどりつく。したがって、真筆に大変近い内容をもつ写本ではないかという予想に反して、単純な誤字、漢字化・漢文化、そして意図的な改変を随所に見るのである。こうした意図的な改変がどの時期の転写の段階でなされたかは、残念ながら明らかになることができない。しかし、日蓮聖人滅後、かなり早い時期にこうした改変が始められていたことは間違いない。

また、平賀本は同写本のなかでも、日意の写本を底本にした古い四遺文をあえて考察の対象として選び、その校異をおこなった。それにもかかわらず、必ずしもそれらのすべてが、信伝本・日朝本より真筆に近い内容をもつ写本ではなかった。むしろ、それより後に集成された遺文の方がより真筆に近いものも多くある。

日朝本は、三写本のなかでは最も真筆から遠ざかる内容をもつ写本である。しかし、個別にみたとき、212忘持経事のように最も真筆に近いものもあった。これは信伝本・平賀本・日朝本を形成している個々の遺文の底本の善悪によるものである。したがって、信伝本・平賀本・日朝本の一部の遺文の検証によって、その写本全体の価値を論じてはならないということである。

例えば、日朝本収録の災難対治鈔は、その奥書に「御本云 康永四年<sup>乙酉</sup>八月六日 書写之 執筆弘法寺日宗」とあるように、本鈔は日蓮聖人滅後、六十三年後の康永四年（一三四五）に、真間弘法寺日宗が書写したものを底本としたものであった。したがって、『定本遺文』で、9頁（107行）におよぶ長篇遺文（漢文体）にもかかわらず、真筆と相違するところは、わずかに九箇所という極めて正確な写本である。それは、底本である日宗の写本が中山法華経寺蔵

の真筆を書写したものである。同じく、日朝本収録の250四条金吾殿御返事も、その奥書に「本云以御直筆写之了日祐在判」とある。この日祐は不明だが、あるいは中山法華經寺三代日祐か。本書は『定本遺文』4頁分程で、真筆断片が二箇所に散在する。その真筆断片現存箇所との比較によれば、日朝本は全く真筆と同一である。『定本遺文』は真筆欠失部分を、日朝本をもって活字に復元しているが、その部分も真筆に近い内容であると判断してよい。しかし、この二書が真筆に近い内容だからといって、日朝本全体が真筆に近い写本であるといえないことは、既に検証したとおりである。信伝本・平賀本・日朝本の価値は、収録する全遺文の書誌的検証を終えてのち、なされねばならないのである。なお、日朝本で底本を明記しているのは、上記二遺文ともう一点、諫曉八幡抄がある。その奥書に、

御本云 正安四年六月日於河崎書之

今云 文明十一年己亥六月一日於鎌倉本覺寺奉書之 有志者為妙秀聖靈第七ヶ年菩提擬之早 仰願者依此等功德  
無量劫來癡斷惑迷聞□□照恵日令遂証大菩提而已乃至法界平等利益 日朝（花押）  
とある。

宮崎英修氏は、中山法華經寺三代日祐、身延山久遠寺三代日進当時、兩寺の交渉により、身延・中山が所蔵した真筆はたがいに書写されて、兩寺それぞれの所蔵するところとなったという<sup>11)</sup>。確かに中山の日祐目録を見ると、中山に真筆の存する遺文のほかに、身延その他で書写された多くの写本遺文が記載されている。しかし、現存の中山法華經寺には、日祐目録に記載された真筆以外のこれら写本遺文は、残念ながら一点も存在しない。いっぽう、身延山久遠寺には日常目録・日祐目録に匹敵する目録が残っておらず、中山から書写されきたった遺文の実態は不明である。か

中世における日蓮遺文の書写について（冠）



中世における日蓮遺文の書写について（冠）

つ、現在の身延にかかる写本は伝えられていない。おそらく、日朝の在世時代（一四三二—一五〇〇）これらの写本は、もう身延になかったのではないか。なぜなら、もし身延にかかる写本が伝えられていたならば、日朝本集成にあたって、まず第一にこれらの写本が底本として使用されたであろう。しかし、既に見たように日朝本の奥書によるかぎり、初期中山の写本を底本とした奥書をもつ写本は、「本云以御直筆写之了 日祐在判」（これを中山日祐とすれば）の奥書を有す四条金吾殿御返事以外にはない。もし、これら初期中山の写本を底本としていたら、日朝本の内容はその遺文に関してはきわめて真筆に近い内容であったはずである。

おわりに

以上の校異から明らかのように、ここで取り上げた信伝本・平賀本・日朝本は、我々の予想した以上に真筆から離れた内容であったといつてよい。少くとも、写経のように一字一句を大切に書写したのではないかとの想いと、現存する写本の実態との落差は、我々が期待していた通りに、中世の人びとは日蓮聖人の遺文を書写しなかったことを示す。とするならば、中世の人びとはいかなる意識で、いかなる目的のもとに遺文を書写したのか。少なくとも、遺文の書写は写経とは異なるようである。おそらく、遺文を書写する者にとって最も大切なことは、当然のことであるが、日蓮聖人が示した教義・信條などを書写すること、伝受することであり、用字・用語など一字一句の違いなどに目角を立てる方がおかしいのであろう。

ここで取り上げた最古の写本録内御書である平賀本・日朝本は、多くの問題がある。しかし、『定本遺文』は、この両写本を真筆の欠失する部分を復元するための史料として多用する。それは両写本が、現時点においては日蓮聖人

の書かれたであろう文章に復元する最良の写本遺文だからである。しかしながら、今後、平賀本・日朝本の両写本のみならず、真筆を欠失する遺文の復元のための写本・刊本には、より厳密な書誌的考察を深めていかねばならないであらう。

〔註〕

- (1) 真筆四紙のみ中山法華經寺藏。録外御書。ただし、第五紙および追申を欠失しているが、この部分は信伝本によって補うことができる。本書は日常目録・日祐目録に未載である。なぜ一三〇年以前に中山藏の真筆から書写されたであろう本書が、康永三年（一二三四）成立の日祐目録に登載されていないのかは未詳。本書の名前が中山の靈宝目録にみえるのは、天正二十年（一五九二）三月十八日の日典の「中山靈宝之注文」である。そこに「大師講御抄一卷四丁」とある。その分量は一卷四丁で、すでにこの段階以前に第五紙・追申の部分を欠いていたことがわかる。以下、慶長三年（一五九八）正月十三日、日珖の「正中山御靈宝目録」には「大師講之御書四丁無御判」とあり、寛永九年（一六三二）九月廿四日の「正中山法花經寺御靈宝之惣目録」には「大師講御書四丁 従大師講驚目五連至余命イクハクナラス四十七行奥不足」（以上の諸目録は『日蓮教学研究所紀要』第十四号収録）とあり、その形態に変化はない。本書の写本としては、信伝本のほか中世録外写本である本満寺本・日興所持本があり、本文が伝わらず目録しか現存しない三宝寺録外御書目録には「七三 大師講事十一月廿八日」「七三 御消息 十一月廿八日」とあり、重複して収録されていたようである。刊本としては寛文二年（一六六二）刊録外御書第三卷・第五卷に重複して収録。なお、中世録外写本の日朝本、そして近時確認された日健本（七冊・京都端光寺藏）には未収録。
- (2) 立正安国会編『御本尊集目録』八〇頁。
- (3) 『定本遺文』第三卷 二七四六頁。
- (4) 中尾 堯『日蓮宗の成立と展開』八八頁。
- (5) 『定本遺文』第三卷 二七七七頁。

中世における日蓮遺文の書写について（冠）

中世における日蓮遺文の書写について(冠)

- (6) 『定本遺文』第三卷 二七七頁。
- (7) 宮崎英修「日蓮聖人遺文の文献学的研究」(望月歆厚編『近代日本の法華仏教』所収)
- (8) 宮崎英修「日蓮聖人遺文の文献学的研究」(望月歆厚編『近代日本の法華仏教』所収)
- (9) 冠 賢一「近世日蓮宗出版史研究」第五章参照。
- (10) 高木 豊「諸本解説」(日本思想大系『日蓮』六〇七頁)
- (11) 宮崎英修「日蓮聖人遺文の文献学的研究」(望月歆厚編『近代日本の法華仏教』所収)

# 日蓮聖人御真蹟に見る「料紙」の用法

立正大学教授・日本古文書学会常任理事

中 尾 堯

## 「御真蹟」の概念

日蓮聖人がみずから染筆して後世に遺された書は膨大な量にのぼり、これを「御真蹟」と呼んで崇敬している。この「御真蹟」という言葉は、「真跡」「真迹」などとも書き、同義語に「真筆」「親筆」などの語がある。これらはいずれも「紛れもなく日蓮聖人の自筆である」という厳しい判断を示すものであるから、どの語を用いても差し支えないはずである。しかしながら、私はこれらの中からあえて「御真蹟」の語を用いて論述を進めていこうとする。その理由は、次にあげるとおりである。

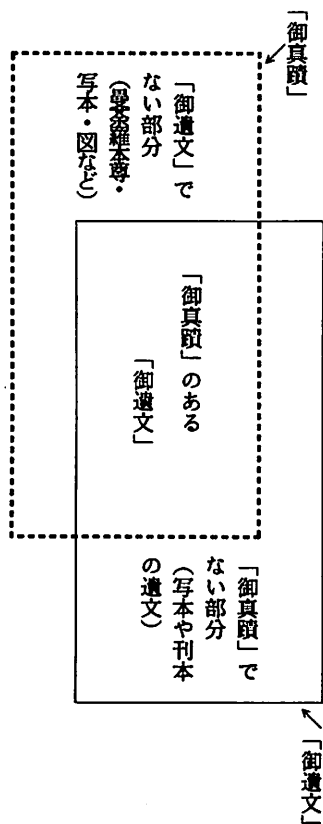
多様な形で全国的に散在する日蓮聖人の御真蹟を写真によって蒐集し、優れたコロタイプ印刷技術による影印本として刊行する大事業を完成したのは立正安国会（千葉市中央区長洲一―三三―三）である。昭和二十七年から昭和三十三年にわたって発行された本書には、『日蓮大聖人御真蹟』という題名が付けられ、御真蹟の基本的な文献として定立された。日蓮聖人御真蹟研究の基礎とも言える本書の題名に従って、数多くある類語の中から「真蹟」の語を選び取ったのであり、学術用語としても十分に通用しうる語といえる。

「御真蹟」と同様な語に「御遺文」がある。これは日蓮聖人が「叙述して後世に遺した文章」を意味するものであ

日蓮聖人御真蹟に見る「料紙」の用法について（中尾）

り、「御真蹟」に加えて写本や刊本をも含む広い範囲を指している。つまり、日蓮聖人の御真蹟として後世の写本や刊本（木版本）の形で今日に伝わっているが、原本は伝存していないものもこの範疇に入る。例えば、「三大部」の一として尊重される『開目抄』は身延山久遠寺に伝来していたが、残念ながら明治初期の祝融によって失われてしまった。したがって今日においては、『開目抄』は「御遺文」ではあっても「御真蹟」ではないのである。また五大部の一として知られる『報恩抄』はこれまた身延山において焼失してしまったが、わずかに三紙分ばかりが池上本門寺など四か所に分散して伝存する。この場合、『報恩抄』一卷全部は「御遺文」に該当するけれども、「御真蹟」にあたるのは現存する三紙分だけである。このように、「御真蹟」には「原本が現実存在するかどうか」という、きわめて客観的で厳密な判断が必須条件として要求されるのであり、「鑑定」という作業が基礎的な役割を担うものである。これとは逆に、「御遺文」から除外される「御真蹟」がある。つまり、「御遺文」とは先述のとおり日蓮聖人が叙述された「文章」であるから、これに該当しない「御真蹟」は除外されなくてはならない。その最も重要なものは、日蓮聖人自筆の「曼荼羅本尊」である。日蓮聖人が唱導される法華信仰の中心に位置するのがこの「曼荼羅本尊」であるから、聖人自筆の曼荼羅本尊はまさに御真蹟中の白眉といえる。立正安国会の『日蓮大聖人御真蹟』のうち「御本尊集」には、一二八幅にもよる日蓮聖人自筆の曼荼羅本尊が収録されている。これらの曼荼羅本尊には、「南無妙法蓮華経」の題目を中心として仏・菩薩・天・人師らの尊名をはじめ、日蓮聖人の署名・染筆の日付・被授与者などが紙面一杯に配置され、数行の讃文が散らし書きされている。このような曼荼羅本尊の構図は、本来はイメージによって描き上げられるべき靈山会の姿を、文字によって書き表わしたものであるから、文章表現とは異なる性格のものである。したがって曼荼羅本尊は「御真蹟」ではあっても「御遺文」の範疇には入らないのである。

同様な理由から、弟子や信者に対して教義を講義する目的をもって書かれた『一代五時図』も、「御遺文」と考えることは出来ない。ここには、五時八教の次第と印度・中国・日本の三国にわたる仏教の流伝を図示されており、経・釈・論の名称と人師の名、それに簡単な引用文があたかも系図のような形で書かれていて、決して文章に主体が置かれているものではないからである。また、日蓮聖人が、若き日の修学のために、著作の手控えのために、あるいは弟子の指導のために書きためた写本・抜き書・メモなど、冊子本の形で伝来している場合が多いが、いずれも厳密に言えば「御遺文」として位置付けることは出来ないであろう。弟子の筆写本に加筆して添削されたものも同断である。というのは、それらは「日蓮聖人の文章」として叙述されたものではなく、もしそれが聖人によって選択的に筆写されたとしても、叙述の主体は原本の筆者たる他者にあるからである。つまり、それがたとえ「御真蹟」であっても、「日蓮聖人の文章」の外は厳密に言えば「御遺文」の範疇に入らないが、実際にはいささかの混同が見られ、一応の原則として提示されているに留まっている。総じて、これらを図示すると、次のようになる。



日蓮聖人御真蹟に見る「料紙」の用法について（中尾）

日蓮聖人御真蹟に見る「料紙」の用法について（中尾）

以上の考察によってみると、日蓮聖人の「御真蹟」とは、「御遺文」をはじめ聖人の自筆と伝えられる総体の内で、間違ひなく日蓮聖人の自筆そのものであると断定された原本を指す、と定義付けられる。「御真蹟」に対する正確な判断と、その厳格な保存が強く要請されるのは、このような高度の価値判断にもとづくものである。

### 「御真蹟」の類別

日蓮聖人の「御真蹟」をその内容と形状などから類別すると、次の七種類に分けることができる。これらの各々が全体的に揃って伝存しているのは中山法華経寺（千葉県市川市中山二一〇—一）の聖教殿においてのことであるから、ここでは中山法華経寺所蔵の御真蹟を念頭に置きながら類別を試みてみたい。

一、曼荼羅本尊 立正安国会『日蓮大聖人御真蹟』の「本尊集」には、昭和五十二年の段階で一二三幅の曼荼羅本尊が収録され、その後さらに三幅が追加されて、全部で一二六幅が御真蹟の曼荼羅本尊としてリストアップされている（私はさらに中山法華経寺所蔵の「病即消滅の曼荼羅本尊」——弘安元年三月十六日——を付加すべきではないかと考えている）。初出は文永八年十月九日のいわゆる「楊枝本尊」（京都立本寺蔵）で、最後は弘安五年三月日付のもの（京都本圀寺蔵）である。「南無妙法蓮華経」の題目を中心とする仏・菩薩等の配列を基準とした分類については、山中喜八氏の『日蓮聖人真蹟の世界』上に譲るとして、その形状は一紙のものから二十八紙（実際には二十九紙）を張り合せたもので、大小様々の法量のものがあって注目される。とくに八紙・十紙と多くの料紙を張り合せた大型の大曼荼羅本尊は、それを掲げる法華堂の規模をも物語るものとの指摘がある（渡辺宝陽「大曼荼羅本尊と法華堂」——研究年報『日蓮とその教団』一所収）。

二、著書 日蓮聖人がその独自の宗教観を理論的にまとめあげて、一編の教義書として論述したのがこれである。一書的大部分が御真蹟として伝存している著書のうち有名なものは、『災難退治抄』『立正安国論』『観心本尊抄』『法華取要抄』『神国王御書』『撰時抄』など点数は多いが、全紙が完全に伝存するものは中山法華経寺の『災難退治抄』と『観心本尊抄』の二書のみである。書状にみるような著述の日付や自署（花押）についてはこれを欠いており、冒頭に掲げられる内題の下部に「本朝沙門日蓮 撰」（『観心本尊抄』）・「扶桑沙門日蓮述之」（『法華取要抄』）・「釈子日蓮述」（『撰時抄』）などと記す場合がある（玉沢妙法華寺蔵の日興筆になる『立正安国論』の写本には「天台沙門日蓮勸之」とある）。また、装丁の体裁について見ると、『観心本尊抄』が帖仕立てである外はすべて染筆の前段階からの卷子本である。このような事実によって、日蓮聖人は著書を浄書するにあたって、予め白紙の「帖」あるいは「継紙」を用意されたことを窺うことができる。

三、書状 日蓮聖人が弟子や檀越に対して与えられた書状の消息で、受取り者の立場と能力に応じた信仰の指針が豊かに折り込まれており、「対機説法」の要を得た内容にあふれている。御真蹟としての書状は、建長五年（一一五三）十二月九日付の「富木殿御返事」を初めとして、弘安五年（一一八二）とされる「筵三枚御書」（『昭和定本日蓮聖人遺文』による）に至るまで、甚だ多くのものが軸装・卷子本に仕立てられて伝来している。その総数についてみると、数え方によって多少の出入りはあるが、一通のうちのおおよそ三分の二以上が伝来しているものは全体で八十五点に上っている。そのうちほぼ完形を保っているものが七十三点を占め、御真蹟としての書状がいかに手厚く保存されたかをよく物語っている。

これらの書状の形状を見ると、いくつかの注目すべき特徴が認められる。まず、（一）御真蹟書状は全体的にすこ



日蓮聖人御真蹟に見る「料紙」の用法について（中尾）

ぶる長文で、原則的に一紙で用をたすべき当時の文書と作法を異にしている。最も長文なのは文永十二年三月十日付の「曾谷入道殿許御書」（厳密には「曾谷入道・太田金吾殿許御書」と言うべきか）で、四十六紙からなる大部のものである。次いで文永六年の「法門可被申様之事」三十五紙以上（中欠）・文永十二年四月十六日の「兄弟抄」二十六紙以上（初・中・後欠）が続き、以下おおよそ次表のとおりである（ただし、完形のもののみ）。（２）書状の形式についてみると、書き出し・本文・書き止め・日付・差し出し者（日蓮聖人）・充名など、勿論の事ながら書状の基本的な要件を踏まえつつも、執筆の状況に応じて日付以下を省略したり、私文書では原則的に省略される年紀の表記を、重要な内容を持つ書状においてはわざわざ加えたりするなど、意味的な変化を見せている。さらに（３）封式については、紙数が少ない場合には「切り封」（料紙の端を細く切ってコヨリとして用いる方法）とし、紙数が多い場合には畳んで上巻を施したうえで、コヨリを用いて上を結え封の墨引を施している。

書状の伝存保存については、全体的に綿密なデータを取るに至っていない。しかし傾向としては、一紙・二紙程度の御真蹟は軸装の形をとり、それ以上の紙数のものは巻紙本に仕立てられて伝わっている。例えば、弘安四年（三年ともいう）卯月十日付の「富城入道殿返事」（二紙）は堂々たる一幅に仕立てられている。弘安二年七月十三日付の「孟蘭盆御書」（十七紙）がもととちょうど障子の紙を張るように二幅の軸に表装され、掛けて拝みやすいようになっていたのは例外的である。三紙以上のものはその殆どが巻子本に仕立てられ、「題箋」を付けて大事に伝えられている。

21~25紙	16~21紙	11~15紙	6~10紙	2~5紙	1紙
4通	3通	4通	20通	26通	17通

また、御真蹟の文字が紙背に渡っているときには、「アイハ（へ）ギ」の手法によって表裏を分離したうえで順序に従って成巻している。

四、写本・要文 日蓮聖人は、御真蹟『辨殿御消息』に、「十住毘婆沙の要文を大帖にて候と、真言の表のせうそくの裏にさど房のかきて候と、そうじてせせととかきつけて候もののかろきとりてたび候へ」とあるように、広く内典外典に渡って渉獵し、その注目すべき文章を忠実に筆写し抄出して座右に備えられた。これをそれぞれ「写本」・「要文」と呼ぶ。現在に伝存している「写本」「要文」の形状を見ると、冊子本・卷子本・軸装本の三に分けることができる。これらのなかには、a、すべてが御真蹟のもの、b、御真蹟に弟子の筆が混入するもの、c、弟子の筆に御真蹟が混入するものという三種類があり、日蓮聖人の聖教書写と要文抄出についての姿がよく窺われる。これらを例示すると、写本としては『頭戒論縁起』（冊子本・a）・『一乗要決』（冊子本・b）・『貞観政要』（卷子本・a）などがあり、最近になって沼津の岡宮光長寺で発見された『山門申（奏）状』（十八紙・卷子本・a）も注目される（『日蓮宗新聞』平成五年四月二十日号所収「御真蹟に触れる」欄に紹介）。要文には『秀句十勝抄』（卷子本・a）・『天台肝要文集』（卷子本・c）など数多く見られる。

五、図表 日蓮聖人は、「五時八教」や仏法（法華經）流伝の次第などを弟子や信者らに説き明かす際に、しばしば「経・論・釈」の書名・伝法の人師・教説の要句などを図示しながら講義をされた。この時に用いられたのがあたかも系図の様に構成された『一代五時図』で、書き入れや磨消の跡を随所に残しながら今日に伝わっている。ちなみに、講義の姿は玉沢妙法華寺の「日蓮聖人画像」（重文）によって、彷彿と描きあげることができる。講義の場で図表を有効的に用いるという手法は、日蓮聖人の得意とするところであつたに違いない。また、建長六年八月廿五日

日蓮聖人御真蹟に見る「料紙」の用法について（中尾）

『不動・愛染感見記』もこのところに入る。

日蓮聖人の御真蹟についてその全貌を五の部類に分けて略述したが、おおよその見当はつけることができたと思う。この御真蹟を日本の古文書字の観点から見ると「私文書」の範疇に入り、その内容から考えると「宗教文書」に属するものといえる。また、御真蹟の部類別によってよく窺えるように、それが大量に伝存したという事実を考慮に入れないながらも、文書形式はまことに多様性に富むものとして注目しなくてはならない。まさに「文づかい、紙づかい」の面目躍如たるものがある。

### 御真蹟の料紙とその使用法

日蓮聖人の御真蹟を全体的に見渡すと、使用された料紙の殆どは「楮紙」で、これに「雁斐紙」が少し混じる程度である。中山法華経寺の聖教殿に伝存する多くの御真蹟のうち、料紙として雁斐紙が用いられているのは、『観心本尊抄』十七紙のうち最後の五紙と『秀句十勝抄』六十四紙のうち二十五紙、ならびに『一代勝劣諸師異解』の第三紙に過ぎない。同寺には、『双紙要文』『天台肝要文』『破禅宗』『秘書』という日蓮聖人の御真蹟の要文が伝わっており、全体で約一二〇紙程の紙背文書が見られる（中尾堯『中山法華経寺史料』『日蓮宗の成立と展開』）。これらすべて、下総国の守護千葉頼胤の家臣であった富木常忍のもとに集積されたもので、料紙は例外なく「楮紙」を用いていた。日蓮聖人は「楮紙」による関東の「紙づかい」の環境の中で多くの真蹟を創出したのであるが、自然木からしか採取出来ない貴重な「雁斐紙」を幾分か用いている事は、当時としては目新しい試みであったかもしれない。（『観心本尊抄』に雁皮紙が用いられていることに関連して、雁斐の北限は石川県とされ、佐渡には例外的に自生す

るということが注目される——金沢美術工芸大学教授柳橋真氏のご教授による）。

次に料紙の寸法についてみると、全体的に天地が三十センチ代で、幅は四十二から四十四センチというのが基準となっている。また、料紙の切り口にはたまに乱れがあるものの、概して正確に裁断されている。料紙の表面を木槌で綿密に叩いて筆が走りやすいようにしたり（打ち紙）、糊を用いて紙を継いだりする技術も優れており、日蓮聖人の周囲に紙の扱いに長けた人がいたことを十分に予想できる。紙の供給についてみると、身延引栖中の建治二年七月二十一日付『辨殿御消息』に「紙なくして一紙に多人の事を申なり」とある事によって、入手することがずいぶん困難であったようにも思われる。『観心本尊抄』の最後の五紙（第十三紙から十七紙まで）が、第一紙から十二紙までの楮紙よりも一回り小さい斐紙であることをもって、料紙の不足を指摘する論もある。しかしながら、身延における日蓮聖人の執筆活動から見ると、『辨殿御消息』に述べられた紙不足も一過性の事と考えてよいだろう。『観心本尊抄』のケースは、当時も貴重であった雁斐紙の利用法から見ると、かえって別の解釈が可能である。日蓮聖人の盛んな紙の消費量にしては、料紙を供養した記事が御真蹟に全くといってよいほど見えないのは、その供給ルートが一応整っていた事を物語るものであろう。

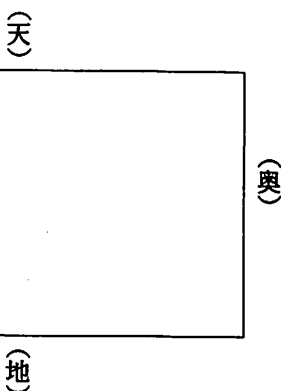
（広い意味での）文書を有効的に活用することによって、弟子や信者を教導し広く伝道の歩を進める日蓮聖人は、当時行なわれた文書形式と料紙の様々な使用方法について、細心の注意を払いながら積極的に活用した。その具体例を次に挙げよう。

一、曼荼羅本尊の料紙 日蓮聖人が染筆された紙本の曼荼羅本尊は、一紙のものから二十八紙を継ぎ合わせたもので、大小様々のものが現存している。これらを紙数別に数えたのが次の表で、大半が一紙と三紙で占められている

日蓮聖人御真蹟に見る「料紙」の用法について（中尾）

ことがわかる。曼荼羅本尊の料紙として用いられたの料紙の寸法は大小様々で、天地二十三・九×幅三十三・〇センチのもの（岩本実相寺藏）から天地六十七・〇×幅四十四・二センチのもの（鎌倉妙本寺）まである。これらの寸法の堅紙（図）をタテ長に置いて、題目と尊名を墨書したのが一紙の曼荼羅本尊である。二紙以上の曼荼羅本尊では、堅紙をそのまま上下

に継いで料紙を整えている。さらに紙数が多くなると、上下に継いだ細長い継ぎ紙を横に二枚並べて接着するという方法をとっている。



堅紙（たてがみ）はこのような形

御真蹟の曼荼羅本尊の修理にあたって、裏打ち紙を外した本紙を丹念に観察したことが幾度かある。これによると、料紙は厚めで持って手応えがあり、表面は木槌で丹念に打ち紙が施されていて筆が走りやすいように加工されている。

御真蹟の曼荼羅本尊の料紙におけるこのような状態から見ると、一般的に流通しているものとは別に、それ専用の紙を製作したのではないかと思われる。また、前述したように、「紙つかい」の専門的な技術を身に着けた複数の人物（恐らく弟子であろう）の存在を、日蓮聖人の周囲に想定することは決して無理なことではない。

二、著書の料紙 御真蹟の著書は、『観心本尊抄』の外はすべて楮紙を

計	一紙	二紙	三紙	四紙以上	絹本
二二七	五二	一〇	五二	一一	二

用いた卷子本として伝存している。その例として『立正安国論』（国宝・中山法華経寺蔵）を取り上げて検討してみよう。この一卷は、天地二十九・五×幅四十四・〇センチの楮紙三十八紙（第二十四紙欠）をつないだ継紙からなり、一紙あたり十六行の墨界が施されている。各丁の丁付は後世になって施されたものであることと、墨界と墨付の文字が明らかに継ぎ目を渡っていることを見ると、『立正安国論』の料紙はもとから継紙として日蓮聖人の手元に用意されていたことがわかる。これは日蓮聖人の他の著書においても同様で、著書と書状とを見分ける決め手になるだろう。（参考文献⑥）

先に例外とした『観心本尊抄』についてみると、この書だけが帖仕立てであり、かつ楮紙と雁皮紙の両方を用いている点が注目される。その形状は、第一紙から第十二紙までの十二紙が天地三十三×幅五十四センチの楮紙で、第十三紙から第十七紙までの五紙が天地三十×四十六センチの雁皮紙が料紙として用いられ、右端に仮綴と本綴が施されて帖に仕立てられたうえで、そのまま料紙の表裏すべてに本文が墨書されている（第一紙の標題をみると、文字の右端が窮屈そうになっていて、執筆の時すでに表紙をつけた装丁がなされていたことがわかる）。このような帖仕立てを当時どう呼んだのかについての定説はないが、日蓮聖人の御真蹟の『辨殿御消息』に見る次の記事は重要である。

十住毘婆沙等の要文を大帖にて候と……………

これによって、日蓮聖人が仏教書の要文を抜き書する際に、「大帖」の形式の「帖」を用いられたことがわかるが、『十住毘婆沙論』の御真蹟は伝存していない。けれども、「大帖」とは「紙を大きく使った帖」の意味と理解することが出来るから、そのイメージはまさに『観心本尊抄』にぴったりである。このような例はもう一つある。北山本門寺に伝わる御真蹟の写本『貞観政要』は、天地二十九・六×幅四十二・四センチの料紙に十二行ないし十五行からな

日蓮聖人御真蹟に見る「料紙」の用法について（中尾）

る本文を一面に墨書している。字配りの具合を見ると右端に余白があり、後筆になる丁付が右端下に記入されていることから、現在は卷子本の形式をとっているものの、本来は『観心本尊抄』と同様に「大帖」であったことがわかる。「大帖」とは、書誌字の上からみて日蓮聖人御真蹟に初めて見られる用語として注目される。これを保管するにあたっては左右から三つに折り疊んで、恐らくその上から畳紙をもって包んだものと思われる。（著書・論文⑤⑦）御真蹟『観心本尊抄』についてのもう一つの問題は、なぜ楮紙と雁皮紙が併用されているかということである。楮紙の紙数が足りなくなったのでやや小さめの料紙を用いられたとして、流罪地佐渡での困難な状況を物語ることはよく言われることである。けれども、雁皮紙が楮紙と比べて上級の紙であることを考えると、この見解は必ずしも説得的でない。その理由は依然不明である。

三、書状の料紙 数多く伝存する日蓮聖人御真蹟の書状は、すべてが楮紙を料紙として使用され、紙面に躍動する筆墨の滑らかな走りからみると、打ち紙の加工がなされていたはずである。料紙一紙の寸法はおおよそ天地三十一×幅四十二センチが基準となっており、なかには歪んで裁断されたものもあるが、あたかも書状用の規格品を見るような感がある。また、料紙の使用の仕方にしても、『天台肝要文』の紙背文書に含まれている（建長五年）十二月九日付「富木殿御返事」・（文永九年）七月廿一日付「辨殿御消息」・（弘安元年）五月廿二日付「霖雨御書」が「折紙」であるなど、わずかの御真蹟を除いては殆どが「罌紙」の形式で用いられている。

今一つ注目すべき御真蹟書状の特徴は、前述したように一通あたりの紙数が多いことである。これらの書状をよく観察すると、次の諸点が認められる。1. 日蓮聖人自筆の丁付がはっきりと打たれている。2. （卷子本に仕立てられて伝来するものは）文字が継ぎ目を渡らない。3. （同じく）ノリシロを施さないで、料紙の端と端を接続するい

わゆるツキアワセの技法を用いている。これらの三点について考えてみると、1. については、染筆された料紙の順序が乱れるのを防ぐために丁付が記入されたのであり、2. は、一紙ごと別々に染筆されたことを物語り、3. は、料紙一杯に染筆されてノリシロを付ける余裕がないことを示している。これらの事実によって、日蓮聖人は書状を認める時には、幾枚かの料紙を重ねて一紙つつ書き進めた上で、丁付を打ったものと理解できる。このような染筆の技法を、「重ね紙」の書式と呼ぶことにする。

日蓮聖人のこのような書状の特徴を見る時、中山法華経寺に伝わる日蓮聖人御真蹟の「要文紙背文書」約二二〇紙（通ではない）を思い出さないわけにはいかない。これらは、日蓮聖人の有力な檀越として知られる、下総に住む富木常忍の許に集積された文書群で、関東地方における在地武士の文書の様式を窺ううえで重要な意味を持つてゐる。これらのうちの一冊『天台肝要文』は紙背文書四十四紙を含む四十七紙の楮紙からなり、冊子の小口がわずかに切断されているものの、一紙の寸法は天地二八・五×幅四三・一センチと、御真蹟の書状とはほぼ同様な特徴を帯びている。このうち第十二号文書（年次未詳）十二月廿七日付「長專書状」は、幾紙か続く書状の末尾の一紙であるが、書止・日付・差出・充名などの配置が御真蹟の書状とじつによく似通った形式をとっている。

日蓮聖人御真蹟書状について以上のような形態からみると、これらは関東の武士社会における文書交流の中にしっかりと位置付けられるものといえる。しかも日蓮聖人の周囲には、紙を供給するルートが整えられ、料紙を調製する人物が常在していたことを窺うことができる。

ただここで一つ述べなくてはならないことは、御真蹟書状の中には継紙を料紙として用いたものも例外的にあるということである。その代表的なものは前述した「尊合入道殿許御書」で、四十六紙からなる長い継紙に、端正な筆致

日蓮聖人御真蹟に見る「料紙」の用法について（中尾）



で書かれた漢文体の書状である。いきなり本文から書き出された本書は墨跡が継目を渡り、「恐々謹言」の書止文言で終って、日付・差出（日蓮（花押））・充名などを備えている。日蓮聖人の書状としてはやや形態を異にする本書について、基本的に著書でありながら書状としての形式を合わせ持つものと理解している。そういえば、ここに用いられた料紙はポリウム感のあるしつかりした楮紙で、寸法も天地三十一・七×幅四十七・五センチと、書状の料紙としては幅広である。封式についても詳しく述べなくてはならないのであるが、上巻には本紙と同じ楮紙が用いられていることを指摘するに止め、別の機会に譲ることとする。

五、写本・要文の料紙 日蓮聖人が写本や要文を書写するにあたっては、その場その場に応じた料紙が使われたのであって、その形態も帖・冊子・継紙・一紙など様々である。紙質は楮紙が大部を占め、雁皮紙が少量ながら混じっている。

帖についてみると、前述した「大帖」の外は例がないので、ここではこれ以上述べない事とする。冊子は写本や要文抄出において重要な役割を果たしたもので、楮紙の袋綴を用いて染筆されている。その寸法についてみると、ごく初期の写本は、「五輪九字秘釈」（建長三年）が天地二十四・一×幅十五・一センチの小型で、狭い「折界」が施されて小さい文字が几帳面に記されている（二丁ごと片面九行）ように、当時一般の写本の形式をとっていた。ところが積極的な伝道活動を展開した文永期以後になると、にわかに様相が変わる。これを文永六年頃に成立した『天台肝要文』についてみると、天地二十九・〇×幅四十三・〇センチの料紙を袋綴じに仕立てた冊子に、一丁片面に五ないし七行の大きな文字が連なっている。また、本書には添削の跡が幾か所も認められることからすると、これを人々に開き示しながら教学の講義が進められたと考えることも容易である。したがって、このような小型の写本から大型の写

本への変化は、日蓮聖人の修学から伝道への転化、いわば「自行」から「化他」への移行を物語るものと見ることができる。

冊子本についてもう一つ注意しなくてはならないことは、反古となった使用済みの文書を裏返して袋綴じの冊子に仕立て、写本や要文の料紙として用立てていることである。『辨殿御消息』に「真言の表の、せうそく（消息）の裏にさど（佐渡）房のかき（書）て候と」とあるように、消息＝書状の反古裏を利用して「真言の表」などを弟子に筆写させることも多かった。中山法華経寺に伝わる御真蹟の『双紙要文』『天台肝要文』『破禅宗』、一部御真蹟が混じる『秘書』、富木常忍が筆写した『叡山大師伝』、岡宮光長寺の「某筆要文」（現状は二紙のみが軸装本二幅として残存する）などは、書状の反古裏を再利用した冊子本である。

継ぎ紙の代表的な例としては、『秀句十勝抄』上中下三巻がある。このうち上巻十紙を見ると、天地は三十一・五センチであるが、幅は次表のように著しい出入りがある。また、料紙の種類と筆跡、継ぎ目と墨痕などについて観察すると、a～dの四の部分に分けられる。このうちbとcは筆勢と書体が近似しているが、dは少し異なっており（行数も少ない）、aは執筆の年代さえも違う（aは弘安元年、b以下は文永六年頃と推定されている）。本書がこのような体裁で伝わっていることは、もともと一巻として完結した要文集を作成しようとしたのではなく、二・三紙継ぎの料紙を幾枚も用いて要文を断片的に抄出しようとしたことを物語るにちが

日蓮聖人御真蹟に見る「料紙」の用法について（中尾）

第十紙	第九紙	第八紙	第七紙	第六紙	第五紙	第四紙	第三紙	第二紙	第一紙
37.9 雁皮	51.6 雁皮	51.3 雁皮	51.8 雁皮	51.1 雁皮	10.3 雁皮	51.4 雁皮	33.4 雁皮	44.3 楮紙	幅44.0 楮紙
			継	継		継	白紙	(a-a)	継
	(d-d)	(d-d)	(c-c)	(c-c)	(b-b)	(b-b)			

日蓮聖人御真蹟に見る「料紙」の用法について（中尾）

いない。この継紙四枚の要文を整序して一巻の卷子本に仕立てたと考えると、第三紙にわざわざ白紙を挿入したことが、全体が一連の継紙ではないことを明示するためのものであるという意味を理解できる。

一方、卷子本に仕立てられた要文集を詳細に検討すると、一つの項目やひとまとまりのある要文が、それぞれ一紙の料紙にまとめて書かれていることがわかる。これらは、料紙の寸法が著しく異なっていたり、必ずしもその場になじまない要文が混入していたり、継紙の体裁を取らないのに丁付を欠いていたりする。御真蹟の『華嚴・法相・三論・天台元祖事』や『一代勝劣諸師異解』などはその例である。これから推察出来ることは、日蓮聖人は要文を抄出する時に一紙ごとに一項目をまとめて抜き書きし、教義の講義にあたってはこれらを論理が通るようにまとめて教案としたらしいという事である。今日でもよく行なわれるカードによる教授をされていたわけで、後世になってから一纏めになった要文がそのまま表装されたものと考えられる。このように一紙で完結する要文の抜き書きを「一紙要文」と呼ぶ事としたい。一紙か二紙の要文が軸装に仕立てられているのは、この「一紙要文」の本来的な姿をよく表わしているといえる。

五、図表の料紙 日蓮聖人が、弟子や信者に対する講義の際に、容易に理解できるように要点を図示するために作成されたのがこの図表であるから、料紙にもその目的に適うような工夫がなされている。いま、中山法華経寺に伝わる『広五時図』を見ると、書状に比べて一回り大きい天地三十一・五×幅四十六・一センチの、やや厚手で粘りのある楮紙が料紙として用いられている。二十紙からなる継紙には書名・人名・要文などが大書され、幾度も添削した書き加えや擦り消しの跡がある。第十一・十二紙の裏には他

(第五紙)	<div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="margin-right: 10px;">↑</div> <div style="margin-right: 10px;">(文字)</div> <div style="margin-left: 10px;">↓</div> <div style="margin-left: 10px;">(文字)</div> </div>	(第七紙)
-------	---	-------

筆の書き入れがあり、弟子たちもこれを用いたことが推測される。また、同寺の『略五時図』もこれと同様な体裁を持つが、一紙の幅が五十四センチと広い。西山本門寺の『浄土九品之事』は、天地三十九・一×幅（未計測）の料紙がタテ位置に継がれており、文字が中央から両端に向かって記されている箇所がある（図）。図表におけるこのような料紙の用い方と形状を合わせて考えてみると、一門の大衆を前に図表を掲げながら講義をする日蓮聖人の姿を、はるかに思い描くことができる。

図表は頻繁に用いられるものであるから、強靱な雁皮紙が用いられるものと予想したのであるが、むしろ粘りのある楮紙が使用されていた。それは、図表が消耗品として見られていたためで、関東では高価な雁皮紙をわざわざ用いる事は考えなかったからであろう。また、料紙の寸法が書状に比して少し大きい事は、図表用の料紙として特別に紙を裁断する意図のあった事を物語るものである。

## 結 論

多様な形で今日に伝わる日蓮聖人御真蹟について、料紙の種類・形式・使用方法などをめぐって検討を加えてきた。これらを結論的にまとめてみると、全体的に次のような点が注目される。

- 一、御真蹟の料紙の種類についてみると、楮紙が圧倒的な比重を占め、雁皮紙がわずかに用いられている。鎌倉時代の東国では一般に楮紙が主流で、雁皮紙が一部に用いられていたということがこれによってわかる。
- 二、曼荼羅本尊・著書・書状などの別によって、料紙の使い方にも厳密な使い分けがなされている。
- 三、料紙の寸法や厚さが使用目的によって異なり、打紙・継紙・紙背の再生などの加工が施されていることは、紙

日蓮聖人御真蹟に見る「料紙」の用法について（中尾）

日蓮聖人御真蹟に見る「料紙」の用法について（中尾）

をめぐる様々な技法が日蓮聖人の周辺で広く行われていたことを物語っている。また、ここでは「紙づかい」とも言うべき弟子の存在を予想できる。

四、文書・典籍の原形を復元する形で研究することは重要なことで、特に卷子本については現状をそのまま原形と見ることは危険である。

五、「大帖」「一紙要文」という典籍・文書の形式を設定することができる。

大要このような点を論じたのであるが、封式を初めまだまだ明らかにしてはならない事柄は多い。ところで、本稿では御真蹟を鎌倉時代中期における古文書・典籍との関連において、形態論の方面から検討を加えてみようとした。この試みは、最近になってとみに進捗した古文書学の研究成果を御真蹟の研究に取入れることによって、御真蹟をより確実に把握し理解を深化させるとともに、後世に伝存させるための基礎的なデータを整えようとするものである。また、東国を舞台に目覚ましい伝道活動を展開した日蓮聖人が、その途上において創出した豊かな古文書や典籍を、鎌倉時代中期における東国の「紙づかい」「文づかい」の世界を見事に映しだしているものとして捉えることにより、当代古文書研究の深まりを期するものでもある。このように御真蹟研究のもつ意義は、まことに大きいといわなくてはならない。

日蓮聖人御真蹟について、最近の著書・論文には次のものがある。

①山中喜八『日蓮聖人真蹟』の世界（「山中喜八著作選集」）上・下

②岡元鍊城『日蓮聖人の御手紙』一・二・三

雄山閣出版

東方出版

③岡元鍊城『日蓮聖人遺文研究』

山喜房仏書林

④寺尾英智「中山法華経寺における真蹟遺文の伝来過程について」

（「日蓮教学研究所紀要」一二号）

⑤寺尾英智「日蓮筆『観心本尊抄』の形態について」

（「立正大学大学院年報」四号）

⑥中尾 堯「日蓮筆『立正安国論』（国宝）とその紙背『本朝文粹』卷第十三の伝来をめぐる研究」

（「古文書研究」二六号）

⑦中尾 堯「日蓮真蹟遺文の伝承——中山法華経寺初祖日常（富木常忍）の場合」

（「立正史学」六七号）

⑧中尾 堯「日蓮真蹟遺文と日祐『本尊聖教録』」

（「立正史学」六九号）

なお、「日蓮宗新聞」の毎月二十日号に中尾が「真蹟に触れる」を連載中である。

立正大学の三、四年生の頃、秋山先生の奥様の郷里である東京葛飾区奥戸妙法寺の随身生であった。先生に親しくしていただくようになったのはこのような機縁によるもので、その後ながく公私ともに一方ならぬご高配も賜わった。このたび先生の古稀の賀にあたり、一文を捧げて長年の御高恩を謝することを無上の喜びとするところである。

# 法華經における信

望 月 海 淑

## 1

信ずるということとは、一体どういふことなのだろうか。どういう意味あいをもっているのだろうか………か。もの心ついてから、ずうっとこの疑問に悩まされて来た。忘れられないのは、まだ大学の学生であったころ、かねてからの知り合いであった日本山の尼さんに会った時だった。談論風発の結果、信仰の話になった。時まさに共產主義の全盛の時代だった。お堂の仏像、あれは単なる偶像だ、何の力も働きもありゃあしないとやっところ、その尼さん、それならば今から鉈をもって行って、お堂の仏さんを叩き割って来なさい、といった。これにはまいった。私には単なる知識があるだけで信念も何もありはしないし、今まで敵として在るものを破壊しようというような心など、最初からありはしなかったのだから。その尼さんは、その後、砂川の基地闘争で市民の先頭に立ち、その働きで婦人公論の巻頭にのった人だったから、知識ばかりの若僧の齒が立つような相手ではなかったわけだ。爾来、信仰というと、常にこの時のことを思いおこす。

そこで、信とは一体何なのだろうか、どうあるべきものなのだろうか、改めて考えて見ようと思いたった。その動機の一つとなったものに、昨年の春からの身延山の仏所護念会の葬儀の問題があるのも間違いない。しかし実はその

ようなことは枝葉末節、根本は法華經から見て、信を私自身がどのように受けとめておくべきか、ということを考えて見たかったということである。その意味ではあの問題はいきっかけとなってくれたものだ、といううるかもしれない。

閑話休題。普通、信というのは *śraddha* にあたるものであるが、信に関して言及されるものとしては、この外に *adhimukti* と *prasana* があることが知られている。このうち *adhimukti* は信解とか勝解とか訳され、*adhi*√*muc* が解き放つという意味合いをもっているの、*adhimukti* は迷いなどから解き放たれるという点で、了解とか理解とかいうふうな意味あいをもっているとなされている。*prasana* は淨信と訳されるが、*pra*√*sad* には心を静めるとか明白にするとかの意味あいがあるから濁った水を清浄にするというありかたで、清澄なる信としてとらえられている。

したがってこれらの三語は、ともに信に言及した語だとはいわれながらも、少しずつニュアンスが違ったものをもっているといい得る。尚、これらの三語のほかに *bhakti* といわれる語がある。前記の三語がそれぞれ仏・法・僧の三宝にたいするものとして使われているのに対し、*bhakti* の場合は信する対象を問わないといわれ、法華經には使用例を見ることがないので、今は取り上げないことにする。またそれらの詳細については、このことに言及した書物を読んでいただくことにして、ここでは *śraddha* に関わる信を中心として、信というありようがどのようなものであるのか、見て行きたいと思う。



信 *śraddha* というありようは仏教にとっていや宗教にとって基本的なものであるから、法華經においても実に多岐にわたる記述が見られるが、それは、基本的には次のように使われている。

*śraddhāḥ prasannaḥ sugate sagaurava jñāsyanti ye dharmam udāhṛtaṁ* (彼等は善逝を信じ、恭しく淨信し、その法を理解するであります<sup>(2)</sup>)

*ye śraddadhasyanti te dharma bhāṣtaṁ ...ye śraddadhasyanti tavaita dharmam* (彼等は語られた法を信ずるであります...彼等はあなたの法を信ずるであります<sup>(3)</sup>)

ここでの使用例は法華經の方便品に示されているものであるが、法華經を説かないほうがいいのではないかと峻循する釈尊にたいして、舍利弗が説いてほしいと懇願をしている、いわゆる三止三請と呼ばれる場面での言葉である。

そこで、ここにいう彼等とは、釈尊の説法の場面・法華經の説法の場面に集まっていた、舍利弗と仲間たる仏弟子を始めとする一切の人たちである。そして善逝といい、あなたというも、それは釈尊のことであるから、それは釈尊を信じ、釈尊によって説かれた法(教え)を信ずるといふ、仏弟子の心のありようの表白であるということが出来る。このように信 *śraddha* というのは仏とか仏によって説かれた法とかにたいする、心の中からの表白、ひたすらなる一念を表現するために使われるのが常であるといえる。それゆえに、釈尊は次のように舍利弗に対していわれている。

*nīpalava me Śāriputra parśad apagata-phalgūṇ śraddha-sare pratiṣṭhita* (舍利弗よ、私の集まりから不用なもの、無益なものが出て行って、信の核心に止まるもののみとなった)

法華經における信(望月)

これはいいことだと。そして増上慢のものがいなくなったからといって、釈尊は出家の本懐たる法華經を説かれ出している。すなわち説法の場合から出て行った人々は、不用にして無益なものといわれる人々であり、それは *abhimāna* 増上慢のものであり、真のものを得ていないのに得たと思い、証ってもいないのに証ったと思っている、自惚れの心の持ち主であることを示している。そしてこれらの自惚れの心に起因するありようを取り除いたところに残るものとして、信仰の核心 *śraddhā-sāra* を保持しているものが求められていることが明白になっている。

したがって、ここでの信は自惚れの心に相反するものとして、師の教えをひたすらに聞こうという姿勢に対して使用されている、ということが出来るであろう。そこで信は、自己中心のものの見方というものをかなぐり捨てて、仏や法に対してひたすらで一心なものでなければならぬ、ということになる。でもそれは、具体的にはどのようなことなのだろう。五千起去が終わった後に釈尊は、

*śraddadhātā me Śāriputra bhūta-vady aham asmi tathā-vady aham asmy ananyathā-vady aham asmi*

（舍利弗よ、私を信ぜよ、私は眞實を語るものであり、ありのままに語るものであり、変わらざるものを語るものである。）

と語っている。ここには我々が信すべきものの姿が、述べられているように思われる。まず、私を信ぜよといい、私は眞實を語るものである等という時、これをいう人は自分が体得した覺りと、それを言葉として表現した法とが、まったく同じものでなければ口には出来ないものだ、といわなければならぬ。仏陀だからこれがいいえたのであろうが、口にしたものと同じものでなければ、口には出来ないことであろう。

言行一致というのは広く世の人々に求められるありようであるが、方便品のこの言葉、釈尊と釈尊が口にした法と

は同じものなのだということは、法華經のありようを示そうとする基本姿勢の一つであろうと思われる。したがってこういう説きかたは、方便品に限るものではない。尚、このことに関しては、後に再び触れることになるであろう。

如来寿量品の冒頭には、釈尊が弥勒菩薩に語った言葉として、

avakalpayadhvam me kula-putra abhiśraddadhavām tathāgatasya bhūtaṁ vācam vyāharataḥ (普賢下、  
如来の真実の言葉をうけとめ、信じ、話すべきである)<sup>(9)</sup>

と語ったと示されている。ここを妙法華經は信解と訳し、正法華經は信と訳出しているが、これはサンスクリットの śraddhā を訳したものであるから、信の訳で良いと思われる。ただサンスクリットには他の āśraya (うけとめる・適する)・śrāva (話す) の二語が語られているために、それへの配慮から妙法華經は信解と訳出したものかとも思われる。しかしここでは、素直に信に言及したものと理解しておいてよいだろう。

このように釈尊が自ら如来の真実の言葉を信じよ、という時には、釈尊の覚りの内容と説かれた教えとが、まったく同一なものだという姿勢がなければならない。そしてこれに対する弥勒を始めとする菩薩たちは、如来のおっしゃる通りに信じますということを、繰り返して三度も述べている。同じ言葉を三度繰り返すという場面は、法華經においては方便品と如来寿量品の、先述の箇所以外にはないことであり、しかも如来は真実を語り、ありのままに語り、変わらざるものを語るものであるといい、如来の言葉を信ぜよというように示している。このように方便・寿量の二品が同じような内容のことを語った、しかもこのあとにおいて一仏乗と久遠実成という極めて重要なことが説かれるのであるから、ここでのありようには、これから先には重大なものの説示があると受けとめるべきであろう。

かかる点から考えて見ても信は、絶対なる釈尊とその教えとに対するものであった、ということがいえる。そして

このように信を強く打ち出すことが出来るのは、信が智のはたらきに変わるものとしての説示があるからであろう。この辺をおさえて勝呂信靜博士は、「菩薩の智のはたらきは（同時に声聞・縁覚の智も）仏智に対するときには、思考（*vin-cint*）あるいは思弁（*tarka* 論理的思惟）の段階にとどまるものであり、そのような智によっては、仏の境地はうかがい知ることはできない」ということを、方便品は述べたもので、仏智の優勝性・超越性を強調し、『般若経』の分別を越えた無分別の「空」であり、仏を智の対象としてよりも信の対象として見ようとするものであらうとなしておられる。

何故 釈尊とその教えとが同一だといえるのだろうか、ということについては次で考えてみよう。

3

法華経の見宝塔品は釈尊と多宝如来とが、多宝塔の中において並座したことを示しているが、釈尊はインドにおいて現実に生れ出た人であり、インドで覺りを開かれた人であったという大前提を忘れてはならない。もしもこれを忘れて、いきなり釈尊は絶対なものを説いた人だとだけなしたならば、それは天地を創造したという神とおなじようなものになってしまうであろうからである。一方、多宝如来は *prabhutaratna* といひ、沢山な宝が集まったという名前の仏であるがために、七宝で飾られた塔に住している。宝は多くても無機物であるから、自分から他に働きかけることはない。その出現はただ前世からの誓願の力によるのだという。そしてまた、サンスクリットの法華経によると、多宝如来は前世においてまだ菩薩道を求めていた時には、法華経を聞くことがなかったもので、なかなか仏にはなれなかった。しかし法華経を聞くことが出来たらすぐに仏になったという。そして、その報恩のために後の世において、

それが何時でも何処であつたとしても、もしも法華經が説かれることがあるならば、私は出現して善哉といい、その正しさを証明するのだ、と誓願したことが示されている。このことは多宝如来は、本来、この世に出現をしないのに、自分が前世においてたてた法華經への誓願力によってのみ、この世に出現したものであることを示していることになる。

そして妙法華經が「全身不散 如入禪定」と表現している箇所におけるサンスクリットの法華經は「禪定を終えたかのように、四肢は乾ききって、身体は一緒に集められて結ばれていた」としている。四肢が乾ききって全身不散だというのは、水気がないことであるから、それは生きているものではないということの意味するであろう。してゐると生きていることがなく、誓願力によってのみ姿を現す仏、それが多宝如来という仏であつたことになる。生きていることのない仏が誓願力だけでこの世に現れて、善哉といい法華經の正しさを証明しようという時、それは他の何者でもなく、法そのもの、法身仏そのものであることを意味するであろう。しかもそれが極めて素晴らしいものであることをいうために、沢山な宝（多宝）という名前と呼ばれたのであろう。

生きていることのない仏・法身仏は自分から法を説くはずがない。インドに出現した仏・現身仏は他のものに向かつて教えを説示する。この二仏が一つの塔の中において並んで坐つたということは、インド出現の仏によって説かれた教えは、真実の教え・法そのものと全く同じであることを暗示するものでなければならぬ。

4

そこでこの真実の教え・法とは何であるのか、についての考察を試みなければならない。方便品には仏の教えに

ついで、*bhūta-vadi* とあり、*tatha-vadi* とあり、*ananyatha-vadi*（真実を語り、ありのままに語り、変わらざることを語る）とあり、如来寿量品には、*bhūtam vācam*（真実の言葉）誠諦の言葉を信解すべしとある。ここで使われている *bhūta vaca* (*vadi*) というのを、真実の言葉と訳しておいたが、実はそれほど簡単なものではない。そこで *bhūta* とはどのようなものであるのか考えてみよう。

サンスクリットに *√bhū* という動詞の語根がある。（何かが）ある、存在するというような意味を示す語であるが、この言葉から *bhava* や *bhāva* が作られている。辞書によると *bhava* には誕生・生起・存在・生などの意味があり、漢訳されて有・生などの意を示すものとされている。*bhava* の方は、生成すること・在ること・などの意味があり、漢訳されて有・性・法・物などに訳されている。語根が同じであるから似通った意味を示していることは当然であろう。しかし鳩摩羅什の訳語の中には、この *bhava* を法としている例があることも知られている。<sup>29</sup> 前述したようにこの語には本来、真実とか法とかの意味は見られないのに、そのような訳がなされるのは何故なのだろう。

平川彰氏はこれについて、多くの法の意味のうち、「もの」を法と解釈する説が、仏教独自の解釈であり、最も重要であると考えてるので、といい、「もの」と言っても、ここでは「存在」と言いかえてよいと思う。何故なれば、その原語は「バーヴァ」(*bhava*) であると考えからである。「バーヴァ」には「有」という訳語もある、となしている。存在といい、有というも、それは（なにかが）あるということにかかわっているから、法というものもそれを離れてはありえないであろう。かかわり、そこに縁がある。

そこで平川彰氏は次のようにいう。善人とか悪人とかが、事実の世界において存在するのではない。同じ人が善をなす時には善人と呼ばれ、悪をなす時には悪人と呼ばれる。特殊な人間でない限り、善をなし悪をなすのが一般

である。実は善人・悪人などという実体は、この世にはありえない。物も人も絶えず揺れ動き、変化しているから、変化しない実体などは存在をしない。だから「諸行無常」なのである。あるのは観念としての存在であるのにすぎないのに、事実としての存在と混同してしまいがち。そこで、事実の世界の存在を問うのが仏教の「法」の思想であり、無常なる存在の中に、同じ状態を保つ「法」を認めようとしているのだ、と。

変化して揺れ動くものの中に、動かざるもの永遠なるものをみようというあり方、実はそこに縁起という仏教の基本姿勢がある。

この縁起に関しては *Samyutta-nikaya* (この経は北伝では『雜阿含經』に比定されている) の中に「比丘等よ、縁起とは何ぞや。比丘等よ、生に縁ありて老死あり。如来(世に)出づるも、若しは如来(世に)出でざるも、このことは定まり、法として定まり、法として確立し、即ち相依性なり。如来はこれを證り、(これを)知る。(これを)證り、(これを)知りて、教へ示し宣布し、詳説し、開顯し、分別し、明らかにし、(然して)『汝等、見よ』といふ」という有名な言葉があり、これが縁起の基本姿勢であるといわれてもいる。即ちこれは、仏の出世・未出世にかかわらずこの法は常住なり、と表現されるものである。

ここでの「このこと」と訳されたものはパーリ語の *sa dhatu* であり、この界とも訳され、本質をも意味する。そして二度繰り返される法としてと訳されたものは *dhamma* である。*dhamma* は、サンスクリットの *dharma* であるから *dhatu* すなわちこの界、この界を構成するあらゆるものは、法として定まり、法として確立しているということであって、それが相依性(縁起)においてあるということなのだと言ったものである。それ故、この *samyutta-nikaya* のこの言葉を取り上げた平川彰教授は、「この経では、「縁起」を「この界」(*sa dhatu*)と言いかえつ、

この縁の力は、如来の出世、未出世にかかわらず、確立しており、法の確立性・法の決定性・此縁性であると説き「縁によって行や何やらがあるが、このような如性（tathata）が真如ともいわれるとなしている<sup>13</sup>。すなわち仏の教えの根本であることを示したものだといえるであろう。

かくて、問題の dhṛta は dhṛ の過去分詞であるから、さまざまな物や人の心が織り成すこの世の真実の姿、法をありのままに見据えた上で、それらに対処すべき人のあるべき姿を、釈尊は教えとして語り出されたということになるであろう。それ故に、釈尊が語った言葉は、人が自己の理屈でこねくりまわした言葉ではなく、ありのまま、この世に存在するものの真実の姿、法に縁をもち繋がりにあっているそのままのことについて、語った言葉ということになるであろう。

勿論この外に、dharma を訳した法もある。この dharma は法華經の法にあたるものであるが、それはサンスクリットの語根 √dhr から作られたものであり、この語根は保つという意味をもっているから、dharma には「同じ状態を保つ」という意味があり、そこから「変わらないもの」という意味が出てくると思うといわれる<sup>14</sup>。この世のものはすべて変化し、移り変わるものであるとしても、すべてが移り変わるという法・理念・ありようは、不変にして何時までも変わらないものである。かかる法・理念・ありようと表現したものが、変わらないものというべき dharma 法そのものなのではなからうか。

こう考えて来ると、法と一言で表現しているものにも、ありのままなありようを受け止めようということと、一切は変易するという法・理念等々、考究すべき種々なものがあるといえる。しかし今は基本としての、この世にあるもののすべてのものは移り変わる、しかも一つだけで他と無縁にして存在するものは一つもない、すべては時間的にも



空間的にも縁においてある、という事実を明白に認識し、そこにおいてありのままに真実のものの見かたで、法のま  
まにものを見なければならぬということが大切なであろう。

ヘッセのシッダルタという作品を見るまでもなく、流れる河の水を眺めていると、その水の流れは瞬間も休まずに  
千変万化していることが分かる。しかも決して同じ流れ、同じ泡はあらわれない。しかし、まったく同じ流れとはな  
らなくとも、同じ河の流れであることには違いない。表面は変わっても本質は変わらない、本質は変わらなくても表  
面は変わっている。唯一の中の無限、変化と不変化、この同時的な存在の姿、これこそがこの世のありのままな姿な  
のであろう。したがってありのままにものを見通す心が求められなければならない。

画家の上村松篁氏が絵画の制作に関して、富士山は誰にでも描けるが、誰にでも描き尽くせるものではない、と語っ  
た上で、同じものを描いても決して同じ作品は出来ない。五十才の時は五十才の、七十才の時は七十才の絵であり、  
それらはまったく違うものだと言っていた。また加山又造氏は絵を描いている時は絵の中に没入してしまうが、自分  
の中の他人・観賞者というようなものが覚めた目で見つめているような気がする、ということを読んでいたことがあ  
った。

これらの逸話は、自然を含めすべてが変わらないように思えても、それに気がつかないだけで、実は常に変  
化し続けているものであり、それ故にこそ、自己から抜け出して、自己を外界の中に放り投げて見つめるような、も  
のの見かたが出来ないと繋がりの中の自己は見えないのかもしれないということを語っているであろう。したがって  
それは、今までとはまったく違ったものの見かたを必要とするであろう。

釈尊が繰り返された、私は *dhuta vaca* 真実を語るものであるという言葉は、この世のありのままな姿を見究め

つくされた釈尊の、法との一体観から発した魂の叫びであったのだろうが、同時にこれしかないというものの見かたを求める言葉であつたとも思われる。法とは絶対なるものであり、この世の眞のありかたそのものであり、釈尊はその法を色心ともに身に体得なされた。それが法として、釈尊の教えとして展開された。したがって、今我々がなすべきことは、釈尊と法とに対するひたすらなる信のみであるという。これこそが、求められていることなのではなからうか。

5

法華經における信のありようというのを見て来た。それでは法華經への信仰にすべてを捧げ尽くされた、日蓮聖人のありかたはどうだったのだろうか。宗学は専門外であるから、日蓮聖人の沢山にのこされた御書の中から、『観心本尊抄』の中にそのお心を素直に聞いてみたい。

『観心本尊抄』の第九番問答以降に、一念三千は情・非情界にまで及ぶのだという説にたいして、それならば草木に心があることになるが、草木も心があつて成仏をするのかとの質問を挙げて、天台の難信難解には二つがあつて、一つは教門の難信難解であり、二つは観門の難信難解であるとお言葉が示されている。

この内、教門の難信難解については、法華經以前の經典においては、二乗と一闍提は永不成仏だと説かれているし、釈尊はブッダ・ガヤで覺りを開いたと所々に説かれて来ているのに、法華經ではこの二つの見解を否定してしまっている。これは今までの經典とは反対の意見であるから、これを説いた法華經は信することが出来ないのだとしているものである。そして観門の難信難解については、一念三千が非情界にまでおよぶことであるが、草木には有情

にあるような心がない、心もないものが成仏するなどということは信ずることは出来ない、というものであった。これについては法華經以前の仏教やバラモン教でも、すでに木像や画像を作って本尊としているではないか、もしも草木には人と同じような色心の二法がないとするならば、それらを使って本尊を作ること自体がおかしいことで、無益なことになってしまふであらう、だから草木の成仏を説く法華經は難信難解なのだとしている。

この法華經が難信難解だということにたいする、日蓮聖人の一応の答えは次の第十二番問答に示されていると思われる。

すなわち、観心の心は何だと問われた日蓮聖人は、

観心者観我已心見十法界。是云観心也。

となして、たとえ他人の六根は見る事が出来たとしても、自分の六根は見たことがないので見れないだろう。自分の六根というものを見るのには明鏡に向かわなければならぬだろう。その明鏡とは十界互具・一念三千を説いた法華經であり、法華經の心を説き示した天台大師の摩訶止観等である、となしているが、このへんを手掛かりに検討を進めてみたい。

不成仏だといわれていた二乗と一闍提が成仏すると法華經は説いたが、これはいきなりの説示ではなく、法華經は最初から説示への準備を展開している。それは未曾有なことであり、今までの説示をひっくり返すことでもあるから、釈尊は説示を峻嶮し、三止三請が行われたということ。そして、ひたすらに信じますという舍利弗を初めとする人々の心の表白を待って、やっと一仏乗の説示が始められたということ。しかもそれだけのことでなく、五千起去において、ひたすらに信ずることの出来ない人、ひたすらな努力を続けようとの意志をもつことの出来ない人、こうい

うような人々の退去を待たれたという。いわゆる篩い落としを経たということ。また如来寿量品では釈尊が如来の言葉信ずべしと三度も強調し、弥勒菩薩等がひたすらに信じますと三度繰り返したことによって、久遠実成への説示が始められていること。これらのことがわざわざ説示されたということを忘れてはならない。

『観心本尊抄』によると難信難解だということであるが、この難信難解だといわれたのは、このような説示の質の転換をはかることを意味するからではなかったのだろうか。仏弟子のように釈尊と共に歩み、教えを聞き、いつも釈尊をあてにしているということだけでは、仏の滅後における広宣流布はおぼつかないであろう。仏滅後に思いをはせる時、釈尊の教えと法との一如の問題、教えや法にたいするひたすらなる信のあり方、それらにたいして歩もうという情熱が求められるようになって来たのであろう。

ここに三止三請が行われて、信 *śraddhā* の強調がなされたのであるから、心の切り替えがないかぎり、法華經は難信難解だといわれたのではないかと思われる。

草木成仏に関しては、法華經・釈尊の教えの基本姿勢たる縁起の理念を思い起こさなければならない。仏の出世未出世にかかわらず常住にあるという法は、この世のすべては変易するという理念、すべては繋がりがあって存在しているという理念におけるものでもあった。しかし法があるだけでは何の意味もないだろう。人の命もまた法の中においてあるならば、人は法の一つの要素でもあり、また人がなければ法そのものもなりたないであろう。縁起とは繋がりの中の一つの個を認め、個の中にすべての繋がりを見ることでなかろうか。

してみるとこの世で動き回る有情だけがこの世にあるのではなく、一見動かないようにも見える草木にも、繋がりがあるといわなければならない。したがって *dhava* というあり方や *dharma* というあり方を、初心にかえりじっ

くりと考えなおしてみなければならぬであろう。なぜ釈尊が方便品と如来寿量品との二品においてのみ、それぞれ三度も繰り返して信 *saddhā* を説いたのか、法 (*dhava*・*dharma*) への信を説いたのか。釈尊・法華経と我が身との繋がりの中で、見極めようとされなければならないのではなからうか。

『本尊抄』の中に示される「己心を観じて十法界を見る」の言葉に関して、茂田井教亨氏は、日蓮聖人は法華経を明鏡とするところから、すべて出発しているとした上で、対象の客観は知る働きを含んだ客観である。聖人は実在をかくすることによって把握された。実在は単に見られるものではなく、むしろ見る働きを内にふくむものである。明鏡はかくして始めて「明鏡」たるのである。明鏡は写映する能力とともに逆に照射する能力をもつ。ここに観心の立場は、見るが見られることであり、見られることは知ることであるということになる、と論述している。この論文で示される写映と照射の関係こそ、釈尊と法華経(法)とにあい対する人々に求められるものだと思われる。こうした伝え方がなされている時、情・非情とともに受けとめうるのであろう。かくて、日蓮聖人の草木成仏の伝え方も、法華経への信・法華経へのあやまたざる把握の上において、説き出されたものであることが出来る。

(平成四年九月)

(1) 拙著『法華経における信の研究序説』、藤田宏達『原始浄土思想の研究』、平川 彰『初期大乘佛教の研究』等参照。その他、論文多数あり。

(2) KN本・三六、妙法華経には「聞弘所説則能敬信」とあり、正法華経には「悉当信衆。受持奉行」とある。大正九・六下、六九上。

(3) KN本・三八、妙法華経「能敬信此法……欲聴受弘語」、正法華経「悉当信衆……心当欽衆」。大正九・六下、

法華経における信(望月)

法華經における信（望月）

六九中。

- (4) K N本・三九、妙法華經「我今此衆無復枝葉。純有眞實。舍利弗。如是增上慢人。退亦佳矣」、正法華經「衆会辟易有竊去者。離広大誼声味所拘。又舍利弗。斯甚慢者退亦佳矣」大正九・七上、六九中。

- (5) K N本・三九、妙法華經「舍利弗。汝等當信 仏之所説言不虛妄」、正法華經「當信 如来誠諦所説深經」。誼甚微妙言輒無虚」、大正九・七上、六九中。

- (6) K N本・三一五、妙法華經「諸普賢男子。汝等當信 解如来誠諦之語」、正法華經「諸族姓子。悉當信 仏誠諦至教」。

- 勿得猶豫」、大正九・四二中、一一三上。

- (7) 勝呂信靜「初期大乘經典にあらわれた信」（『仏教思想』「信」）一五七。

- (8) K N本・二四〇、一、正法華經も多宝如来と訳している。大正九・一〇二上。

- (9) K N本・二四九、正法華經には「坐師子床肌色如故亦不枯燥。威光端正相好如畫」とある。大正九・一〇四上。

- (10) 三枝充應・久我順「中論、梵漢藏对照語彙」"bhava"の項（宮本正尊編「大乘仏教の成立史的研究」附録第二）参照。

- (11) 平川彰著作集第一巻『法と縁起』八七、三〇九～三一五、四六一等。

- (12) Saṅguta-nikāya Vol II. 115-116 (pali; Text Society)

Katamo ca bhikkhave paṭicca-samuppādo || Jātipaccaya bhikkhave jaramaraṇam uppaḍa Taṭhagataṇam anuppāda va Taṭhagataṇaṃ || phīṭa va sā dhātu dhammatthitā dhammaniyamāṇā idappaccayaṭṭa ||

Taṃ Taṭhagato abhisambujjhati abhisameti || abhisambujjhiva abhisameva acikkhati deseti paṭṭapei paṭṭapei vivarati vibhajati uttara-karoti passathai cāha ||

相應部經典二（南伝大蔵経卷十三）三六～三七（本文の訳文はこれに依った）大正二・四中（維阿含経卷第十二）「若仏出世。若未出世。此法常住。法住法界。彼如来自所覺知。為人演説。開示顯発。」

- (13) 平川彰・前掲書、三二二～三二三。

- (14) 右書、九十九。

- (15) 宗学の立場としては、日蓮聖人以降の各先師の、御書に対する注釈がある。ここではそれらに対しあまりに注意を払うことなく、直に御書を読み理解を試みたい。かるが故に素直にと表現した。

- (16) 日蓮聖人「如来滅後五百歲始觀心本尊抄」（『日蓮聖人遺文全集』）七〇三

(17) 右同・七〇四。

(18) 茂田井教亨・『観心本尊抄研究序説』六〇七。ただし同書の第一部第一章「観心解釈の問題」参照。

# クシヤンに於ける宗教の大衆化

——律蔵に於ける背の高い塔・二仏・團泥の意味するもの——

高 橋 堯 昭

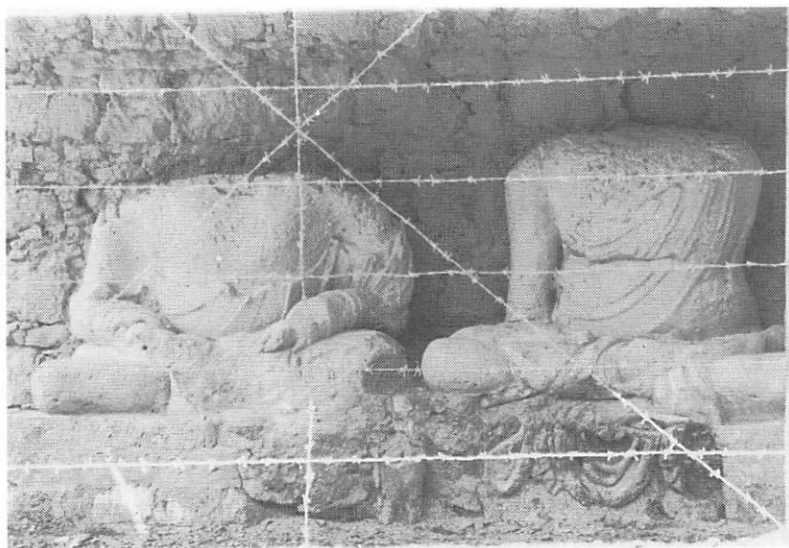
## 1

タキシラのモラモラドウ僧院に写真1・2・3の如き二仏並座像が三対現存している。然も又、かつては存在したであろうと思われるくずれた石の基壇が三つ程ある（写真5のX印参証）。共に部屋と部屋を仕切る石積み、いわば部屋の入口にある、最初は一仏であつて、後に一仏を加えたのではないのは、部屋と部屋の仕切りの石積みの巾からしてわかる。

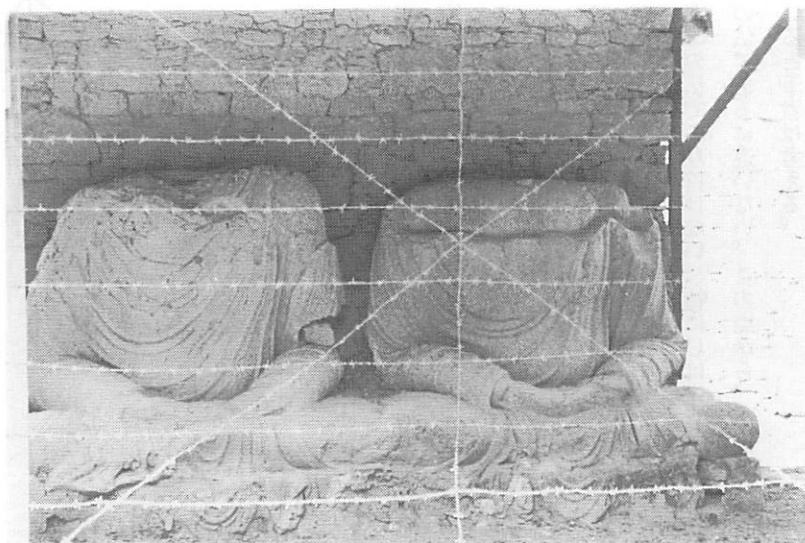
基壇はBCは、同一基準、Aは基壇の高さが五センチ程向つて左の仏の方が低い、それ程差があるとは思えない。共にストッコ製の仏である。基壇はABC共二十センチ角の石を積んだ基壇の上にストッコをぬり、この上に二仏が作られている。仏像の芯は泥で表面はストッコである。共に禅定印の仏であり首はない。特にCは光背をもつた仏が数体基壇に彫られているから、この二仏はこれらの仏菩薩以上の仏であるに違いない。この点から、生身の仏陀以上の人物、即ち久遠の本仏等の如き超越者としての仏を表現していると筆者は考える。

クシヤンに於ける諸宗教の大衆化（高橋）

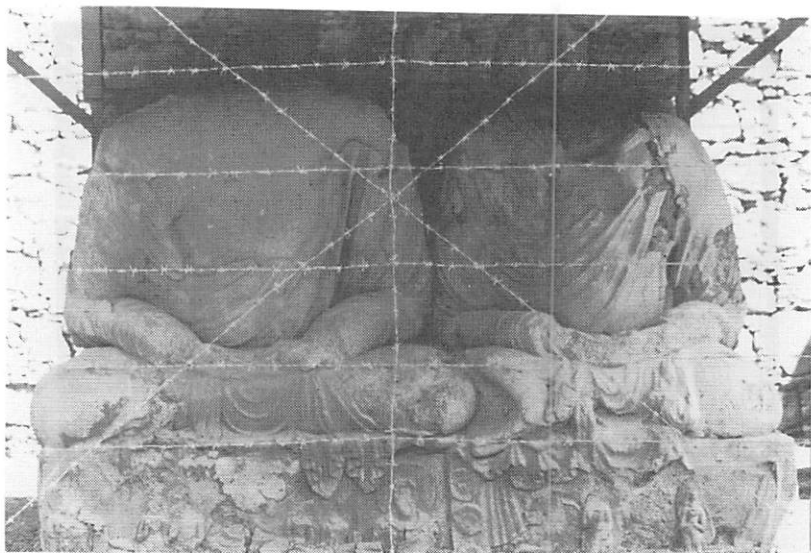




1. モラモラドウ二仏並座像A



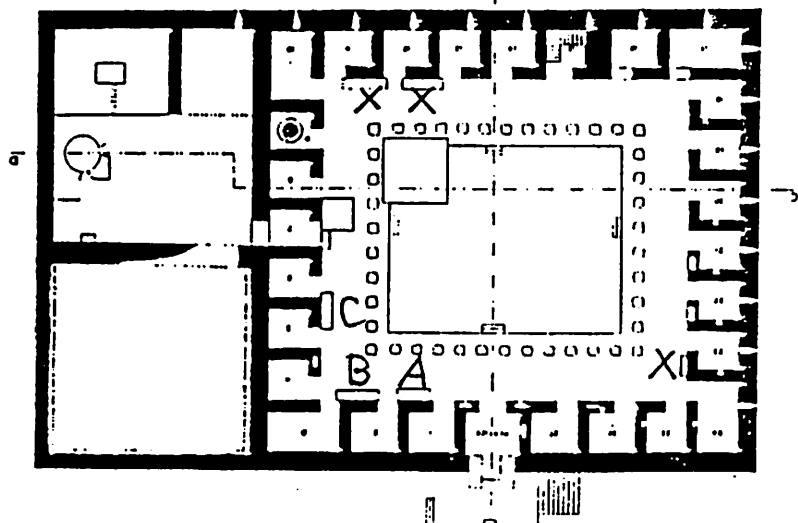
2. モラモラドウ二仏並座像B



3. モラモラドウ二仏並座像C



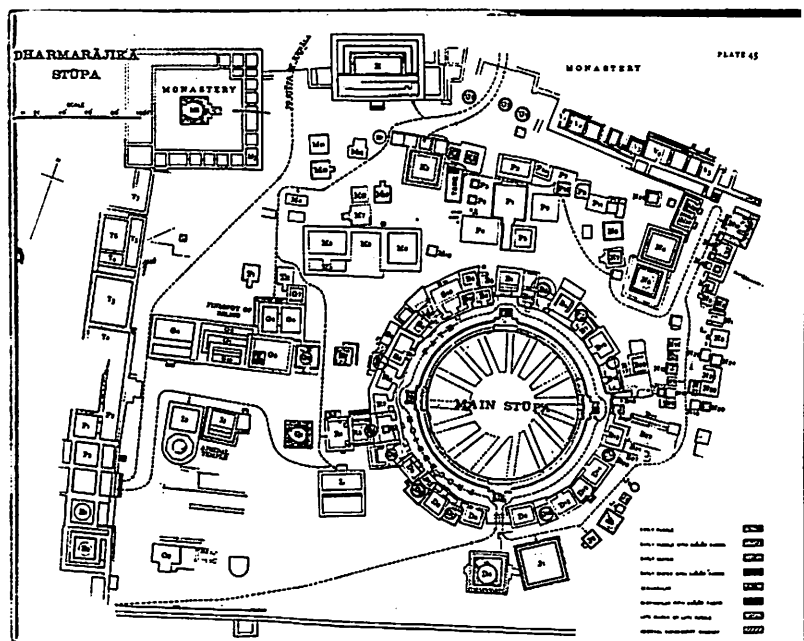
4. ダルマラージカ奉獻塔の二仏



クシヤンに於ける諸宗教の大衆化（高橋）

5. モラモドウ寺院

Xは基壇だけ



6. 繞道路（マーシャルタキシラより）

.....線—繞道

このほかダルマラージカの大塔前、奉獻塔P1とP2との間、即ちP1側の壁に二仏（写真4参照）が見られる。三十センチ角の石を積んだ基壇にストッコの仏が並んでいる。基壇や背後の壁の石碁がとれて下の石が露出しているが、石積みによる年代測定の為かえて便利である。

この二仏は奉獻塔P1の壁のスペースから見て、四仏であっても不思議はない。即ち二仏のほかに、その両側に猶夫々一仏を作る余裕はある。四仏の例はモラモラドウの大塔の基壇に作られていて、現在タキシラ博物館内に展示されている。然し、P1とP2の塔はどうしたわけか、平行ではなく、片方がつまっている。だから四仏だと繞道出来なくなってしまう。マーシャルは信者が日常繞道する參詣道を推定して、わざわざ点線をいれている（6参照）もし四仏ならば、その繞道の道がP1とP2の間を通れなくなる。従って、もともとから二仏であったことがわかる。

さて、これが法華經の釈迦多宝の二仏であるかどうか、これらの仏像はストッコといって泥と石膏造りである。ガンダーラでは二・三世紀の彫刻は黒色片岩を中心とする石製であるが、三世紀中頃ササンペルシャの侵入によって石製の製作活動は中止され、やがて四世紀末キタラクシヤンの侵入により、今度はこのストッコ製の仏像の全盛期を四・五世紀にむかえた<sup>4)</sup>。石製では製作日数と費用がかさむが、ストッコでは型を作って泥や石膏を入れ、後はヘラで顔を直せば異った仏像が沢山安直に出来るからで仏像製作の隆盛の需要に答えられるからである。

四・五世紀になると、ガンダーラは経済的にはカニシカやフヴィジカの如き昔日の面影はなくなって来たが、逆に造像活動は活発となって来た。為に安あがり沢山出来る型抜きの方法が考案され、仏像造立の活発化に拍車をかけるに至った。ヴィーマ・カドフィーセス以来ローマとの通商の活発化、カニシカ・フヴィジカの全盛期を過ぎたクシヤン朝では、経済的には衰退のの一路をたどるが、造像活動の隆盛化のため、費用の安くて大量生産の出来る方法が、

そのニーズに答えた。これがストックコの仏であったといえる。従ってストックコの仏は四・五世紀のものだし、法華經は一世紀には編纂されているといわれているから、これらの像は法華經のものといっても不自然ではない。それに玄奘は七世紀に旅した時、「タキシラはみな大乘」と述べている。従ってタキシラの小乗の寺々はいつしか大乘に変わって行ったのであろう。従って法華經の可能性は十分にある。即ち塔と僧伽の構造が律の規定に則って作られているこれらの寺々もいつしか大乘に変わって行ったと想像出来るからである。

特にダルマラージカは、もともと部派に属さない塔中心の寺であったし、（出土する碑銘は部派について言及していない）又、シルバースコロールとして有名な碑銘の中に「自分の菩薩堂の中に像を安置した」とあって、菩薩云々という言葉から大乘に近いと考えられるから、又後述の律蔵の大乘化？という点から類推してよい法華經があったといっても、言い過ぎではあるまい。

2

そもそも二仏が經典に現れるのは、次のものがある。

別訳雜阿含經卷第六

爾時尊者摩訶迦葉。在於邊遠。草敷而住。衣被弊壞。染色變脫。鬚髮亦長。來詣仏所。時諸比丘。見迦葉已。皆生是念。彼尊者。不知出家所有威儀。衣色變穢。鬚髮亦長。威儀不具。爾時世尊。知諸比丘心之所念。為欲令彼生欽尚故。遙見迦葉。即語之言。善來迦葉。尋分半座。命令共坐。

雜阿含經卷第四十一

爾時尊者摩訶迦葉。久住<sup>二</sup>舍衛國阿練若床坐<sup>一</sup>。長鬚髮著弊納衣<sup>二</sup>。來詣<sup>一</sup>所<sup>三</sup>。爾時世尊無數大衆圍繞說法。時諸比丘見<sup>二</sup>摩訶迦葉從<sup>レ</sup>遠而來<sup>一</sup>。見已於尊者摩訶迦葉所<sup>二</sup>。起輕慢心<sup>一</sup>言。此何等比丘。衣服鹿隨。無有<sup>二</sup>儀容<sup>一</sup>而來。衣服佯佯而來。爾時世尊知諸比丘心之所念<sup>二</sup>。告摩訶迦葉<sup>一</sup>。善來迦葉於<sup>二</sup>此半座<sup>一</sup>。

中本起經卷下大迦葉如來品第十二

於是摩訶葉。垂髮弊衣。始來詣<sup>レ</sup>佛。世尊遙見歎言。善來迦葉。豫分半床。命令就座<sup>⑤</sup>。(傍線筆者)

これらは生身の釈尊と大迦葉との関係の物語である。即ち大迦葉が余りにもきたない法衣を着、髭ぼうぼう、垢だらけだったので、他の弟子達が小馬鹿にした。それを見た釈尊は自分の法衣を着せて、二人並んだという話。然しタキシラの二仏は前述の如く、Cの基壇に多くの仏菩薩が彫られているし、光背をもった仏も彫られているから、阿含経等の如き生身の釈迦や大迦葉ではない。それ以上の存在であることは間違いない。

然らば、ほかに二仏があるだろうか。私は律藏の中に二仏の話を数ヶ所見出した。共に共通な考え方である。即ち釈迦仏がコーサラ国を遊行して居られると、バラモンが耕作していた。そして彼は釈迦仏をみると、鋤<sup>す</sup>を畑に突き立てて釈迦仏を礼拝した。これを見て仏は微笑された。おそばにいた弟子達は不思議に思つて仏に問うと、仏は「彼は二仏を拝んだから」だと答えられた。猶「何の二仏か」と再び仏に問うと、「私と、私の杖の下にある迦葉の塔を拝んだから、二仏を拝んだことになる」と言われた。更にその迦葉仏の塔を拝みたいと懇願すると、比丘達に、「汝、このバラモンから土塊と、この地を求めよ」といわれた。バラモンから土塊とこの地を譲りうけると、「迦葉仏の七宝塔の高さ一由延、面広半由延なる」を仏は現出されたところである。そして「百千の黄金より、一団<sup>だん</sup>泥もて敬心にて仏塔を治せんには」とさとされたところである。黄金より、まごころがある時には七宝塔は現出するというところである。即ち

クシャンに於ける諸宗教の大衆化（高橋）

(1) 摩訶僧祇律卷第三十三

塔法者。仏住拘薩羅國遊行。時有婆羅門耕地。見世尊行過。持牛杖住地礼仏。世尊見已便笑微笑。諸比丘白仏。何因緣笑。唯願欲聞。仏告諸比丘。是婆羅門今礼二世尊。諸比丘白仏言。何等二仏。仏告比丘。礼我当其杖下有迦葉仏塔。諸比丘白仏。願見迦葉仏塔。仏告比丘。汝從此婆羅門。索土塊并是地。諸比丘即便索之。時婆羅門便與之。得已爾時世尊即現出迦葉仏七宝塔。高一由旬。面広半由延。婆羅門見已即便白仏言。世尊。我姓迦葉。是我迦葉塔。爾時世尊即於彼処作迦葉仏塔。諸比丘白仏言。世尊。我得授泥不。仏言得授。即時説偈言

真金百千擔 持用行布施 不如一団泥 敬心治仏塔……………

人等百千金 持用行布施 不如一善心 恭敬礼仏塔……………

百千車真金 持用行布施 不如一善心 華香供養塔……………

百千閻浮提 滿中真金施 不如一法施 随順令修行……………

百千世界中 滿中真金施 不如一法施 随順見真諦<sup>⑩</sup>

(2) 弥沙塞部和醯五分律卷第二十六

爾時國王用非法治政暴虐無道。夢見牛頭梅檀壳與腐草同伍者。爾時釈種沙門貧利養故與白衣説法。夢見水中中央濁四邊清者。爾時仏法中國先滅邊國反盛。仏言。王十一夢所為如此。於大王身無有不祥。王即於座上勸諸群臣。所欲祠天之物今悉施以無畏。吾從今寧自失命不敢殺生。況殺人乎。不敢傷虫蟻。況女及諸人等乎。仏告阿難。彼迦葉仏般泥洹後。共王為仏起金銀塔。縱廣半由旬高一由旬。累金銀瑩一一相間。今猶在地中。仏即出塔示諸四衆。迦葉仏全身舍利儼然如本。仏因此事取一搏泥。而説偈言。

雖得閻浮檀 百千金寶利 不如一團泥 為仏起塔廟<sup>11</sup>

(3) 四分律卷五十二

爾時世尊在拘薩羅國。興二千二百五十比丘人間遊行。往都子婆羅門村到一異處。世尊笑。時阿難作是念。今世尊以何因緣笑耶。世尊不以無因緣而笑。偏露右肩脫革屣。右膝著地合掌白仏言。世尊。不以無因緣而笑。向者以何故而笑。願欲知之。仏告阿難。乃往過去世時。有迦葉仏。般涅槃已。時有翅伽尸國王。於此處七歲七月七日起大塔已。七歲七月七日興大供養。坐二部僧於象蔭下。供第一飯。時去此處不遠。有二農夫耕田。仏往彼間。取一搏泥來置此處。而說偈言

設以二百千瓔珞	皆是閻浮檀金	不如以二搏泥	為仏起塔勝上
設以金百千搏	皆是閻浮檀金	不如以二搏泥	為仏起塔勝上
設以金百千擔	皆是閻浮檀金	不如以二搏泥	為仏起塔勝上
設以金百千抱	皆是閻浮檀金	不如以二搏泥	為仏起塔勝上
設以金百千壁	皆是閻浮檀金	不如以二搏泥	為仏起塔勝上
設以金百千蔽	皆是閻浮檀金	不如以二搏泥	為仏起塔勝上
設以金百千山	皆是閻浮檀金	不如以二搏泥	為仏起塔勝上

時諸比丘比丘尼優婆塞優婆夷。皆以一搏泥著此處即成大塔<sup>12</sup>

(4) 根本說一切有部毘奈耶藥事卷第十二

是時世尊。告具壽阿難陀曰。汝來可詣都累迦城。聞教隨仏。至彼城所。有一婆羅門。而為耕墾。遙見世尊具三千クシヤンに於ける諸宗教の大衆化（高橋）



クシヤンに於ける諸宗教の大衆化（高橋）

二大丈夫相。廣如余說。作如是念。我若往礼沙門喬答摩者。靡此事業。若不往礼。失諸福利。令事不麁。使獲福利。執鞭耕犁。遙言敬礼敬礼。仏告貝寿阿難陀。彼婆羅門。自招錯咎。而於此處。有迦攝波如來全身舍利。儼然無損。若來我所。恭敬礼拜。彼便致敬二仏世尊……………

仮令百千瞻部金 積聚奉持施一切 不如有人一淨心 翹勤右邊於仏塔

是持復有一鄔波索迦。持泥置於舍利隱處。世尊為彼。亦説伽他曰

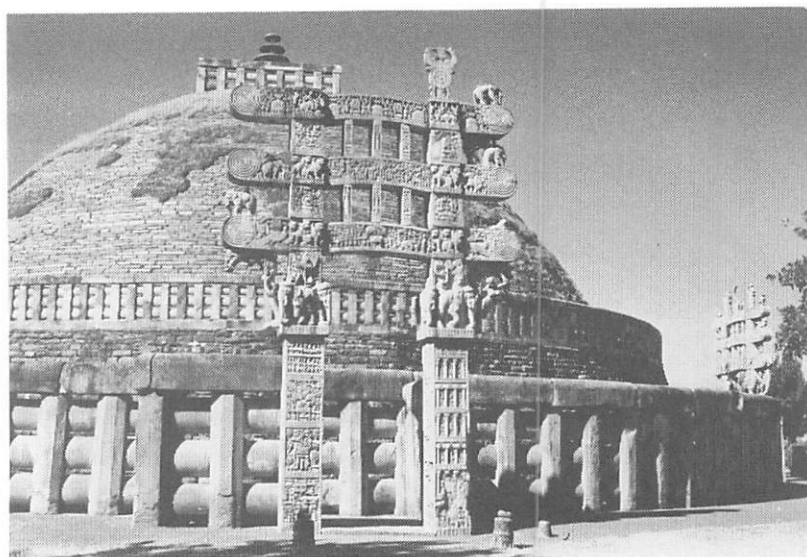
仮令百千瞻部金 恒以奉持施一切 不如有人一淨心 持泥置飾於仏塔

是時有百千人衆。聞此施泥福利。咸持泥置。或有持諸微妙花香。而散其中。仏亦為説頌曰

仮令百千瞻部金 恒以奉持施一切 不如有人一淨心 香花供養於仏塔<sup>9</sup> （共に傍線筆者）

阿含の仏と律蔵の仏の違ふのは、そこに出場して来る仏は過去仏としての迦葉仏と、この世で悟つた後の仏としての釈迦仏。過去と現在の仏である。そして又この二仏は必ず「背の高い塔」と「泥団子」、即ち「真金百千の瞻部金、持し用いて布施を行ぜんに、しかじ一団泥もつて敬心にて仏塔を治せんには」とか、「人等の百千の金、持し用いて布施を行ぜんに、如かじ、一善心にて恭敬して仏塔を礼せんには」（摩訶僧祇律）、「閻浮檀の百千金宝の利を得ると雖も、一團泥にて仏の為に塔廟を起さんには如かじ」（前掲五分律二十六、大22—一七下・一七三上の文中）「仮令、百千の瞻部金もて、翹勤して仏塔を右邊せんには」（前掲根本説一切有部業事卷十二・大24—五三上中）の如く、黄金より泥団子即ちまごころの方がということが各律共に強調されている。

然もこの二仏はかく背の高い塔と泥団子が、ワンセットになっている所が注目すべき所である。私はこの「三者の一体」はこの律蔵の成立時の社会状況、宗教のあり方を示しているように思われてならない。

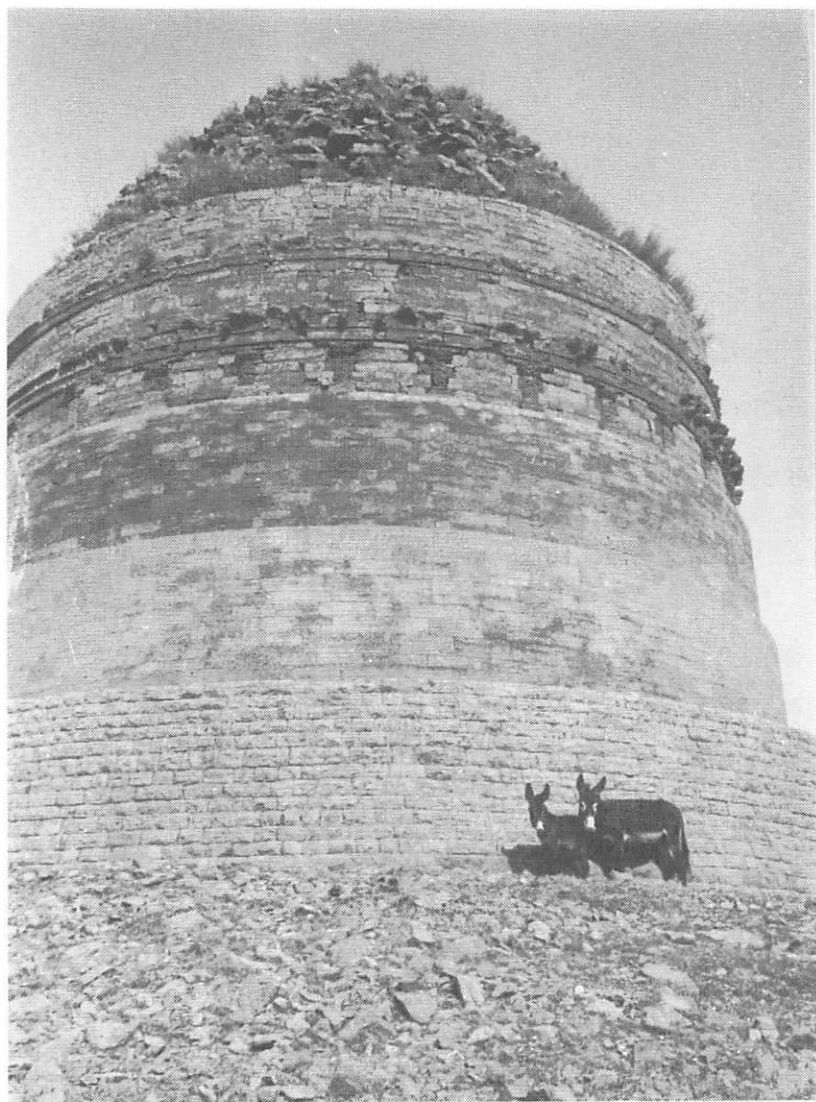


7、サンチー大塔

3

1、まず背の高い塔について、その分布はタキシラからスワット、そしてアフガニスタンに限られているから、この律蔵の話はこの背の高い塔のある場所西北インドがその舞台となっていると言えよう。インドの塔はサンチーの大塔で代表されるように背の低い土饅頭型のものである（写真7参照）。これに対して前記範囲の塔は砲弾型の塔身に何重もの円型基壇（写真8、参照）、そしてその下に四角な基壇（写真10、参照）がつけ加った背の高い宝塔で、特にジュラバードやシェバキ等、西に行く程高いとも言えよう。その範囲を图示すれば図9の如くとなる。強いて言えばクシヤンの勢力範囲となる。

筆者は塔の背が高くなるのは、仏を単なる人間釈尊以上に、即ち超越者救済者として仏陀を考える傾向にあった為と考えている。即ち、この範囲の地方に、ペルシャ等西方の「神は超越者」<sup>(1)</sup>という考え方があり、それに刺激され、



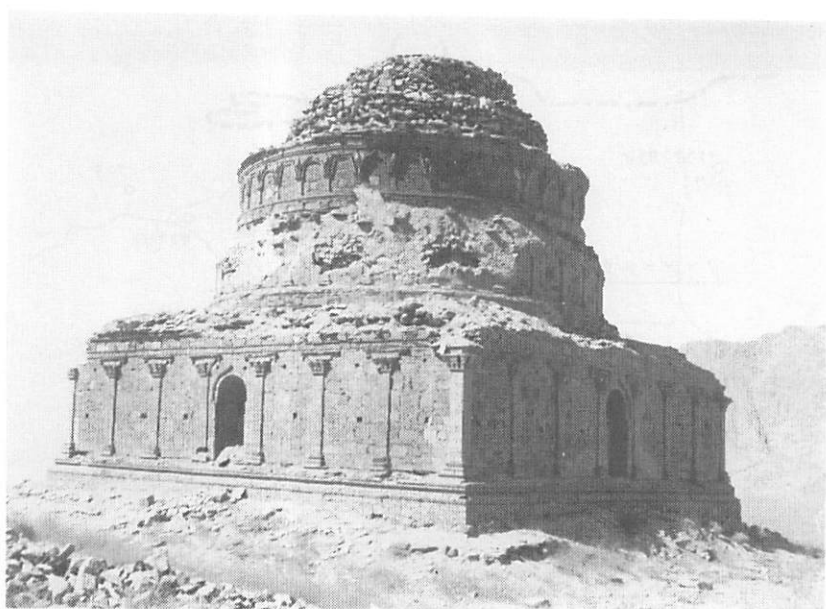
8. バラーの塔 円型基壇が三段

A hand-drawn map of the region around the Pamir Knot, showing the borders of Afghanistan, Pakistan, and India. The map includes labels for various cities and regions in Japanese, such as 'アフガニスタン' (Afghanistan), 'パキスタン' (Pakistan), and 'インド' (India). It also shows the 'ヒンドクシュ山脈' (Hindu Kush Mountains) and the 'インド川' (Indus River).

仏陀をも超越者として考える傾向があったと考えている。勿も、人間存在の有限性、実存の自覚から、仏教自体の中に、仏身觀の深化發達があったということは十分理解されるが、仏身觀の發達した大乘仏教が西北インドで起った点から考えて、西方の考え方の刺戟は十分あったとも考えている<sup>15</sup>。そして、こうした傾向が法華一乘、アミダ一尊、般若波羅密多は仏母という「一仏乘」思想となり、仏陀の墳墓をして、背の高い、或はサンチーのインド型でも、規模を巨大化（マンキアラの大塔）して、仏陀を超人として表現するようになったとも考えている。

然もこうした超越性は、又無限性とも表裏する。即ち時間的に永遠に継続する仏の生命の無窮性と、その説かれた法の恒常性である。

これを表現する方法が、現在仏と過去仏の一致、法華經では「多宝如来と釈迦仏」の並座。律蔵では「過去仏の迦葉仏と現在仏の釈迦牟尼仏」の合一、



10. グルダラー塔

「二仏並座」の姿で表現される。従って仏の超越性を示す「背の高塔」と、仏及びその説かれた法の悠久性を示す「二仏並座」は二にして一であると考ええる。

然も「超越性と悠久性」とは客観的な外なる存在ではなく、あくまでも己心の一念三千の如く主体の側にある。「浄心」「まごころ」をもって仏を信じ崇める我々の心の中に体験顕現される。物や金という信仰ではなく、心からの信仰、即ち浄心である。これが、この世の中の全黄金よりも博泥即ち泥団子の方がという前記引用の律蔵の言葉となる。仏の超越性と悠久性は浄心の中に、即ち主体の奥底に一つとなって顕現されるものとこれらの諸律は主張していると筆者は思う。

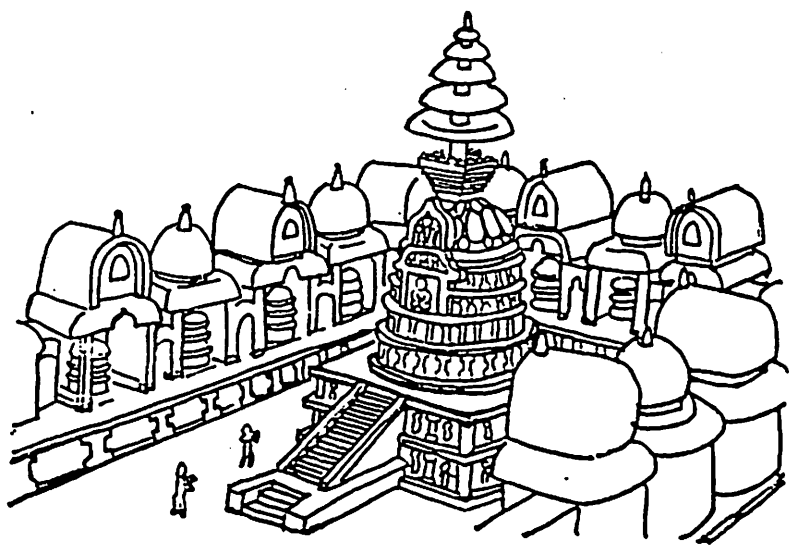
然して、こうした傾向は、造塔の隆盛とつらはらに、塔も建てられない庶民に光明を与えんとする当時の社会の要請に対応するものでもあった。それが一世紀から三・四世紀への思想的流れでもあった。いわば大乘はこうした思想の流れの一つの反映でもあったろう。

さて、これらの背の高い塔・二仏・團泥の出て来る律蔵の成立の時代性を示すものとして、

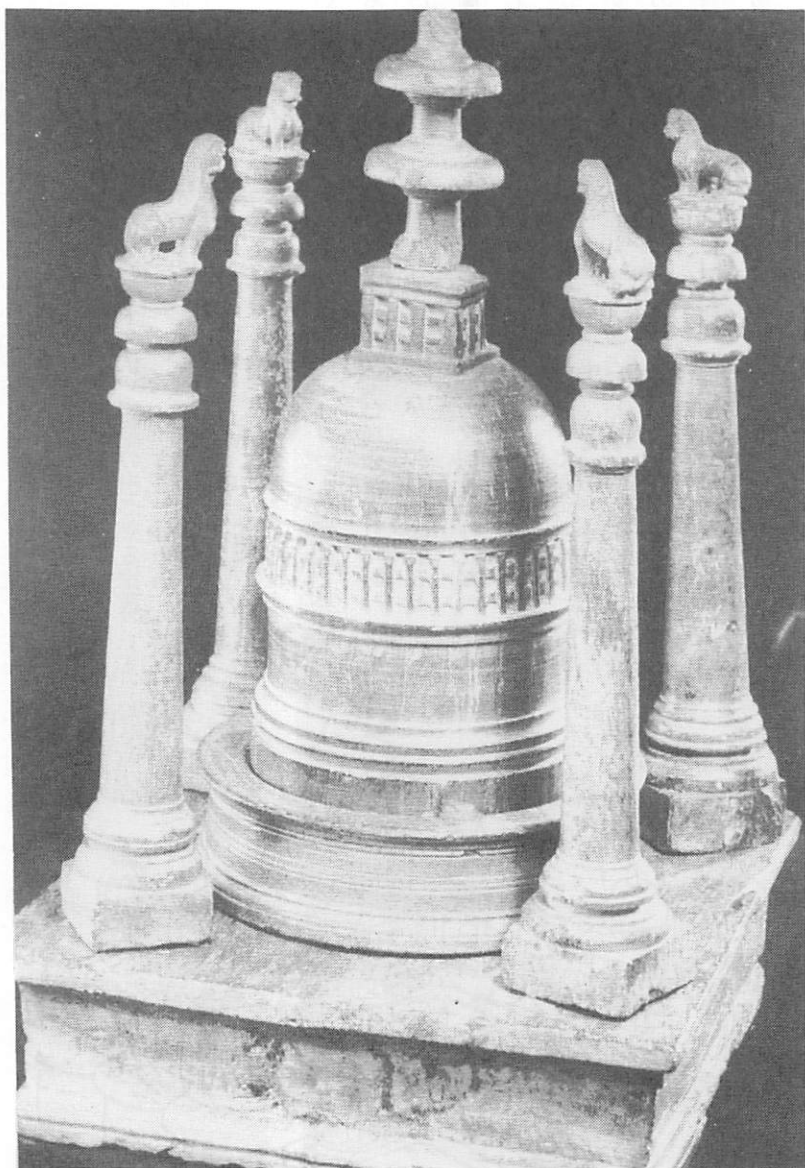
(1) 摩訶僧祇律（大四九七下―四九八上）に「作塔法有下基四方周匝欄楯。円起二重・方牙四出」とあることは大いに注目に値いする。サンチー、パールフットの欄楯で見るように、インドの塔は柵である欄楯は塔のまわりにあったが、（前のサンチー大塔写真参照）ガンダーラに至ると欄楯は基壇の中に入り、仏像や仏伝図の区切りの柱となっている。然もインドの塔はサンチーの如く円型基壇であるが、ガンダーラ以西ではこの円型基壇の下に四角（方形）の基壇が加わり（写真10、グルダラー塔参照）、この経文の如く「円基二重」の如く二段三段と重なり塔は砲弾型に背が高くなる（写真8・11参照）。だからこの律蔵の文はガンダーラの塔をさしていることであると思う。

(2) 更に「方牙四出」というのは、筆者はカニシカ大塔

クシヤンに於ける諸宗教の大衆化（高橋）



11. タフト・イーバーヒー僧院複元図（原図カラチ博）



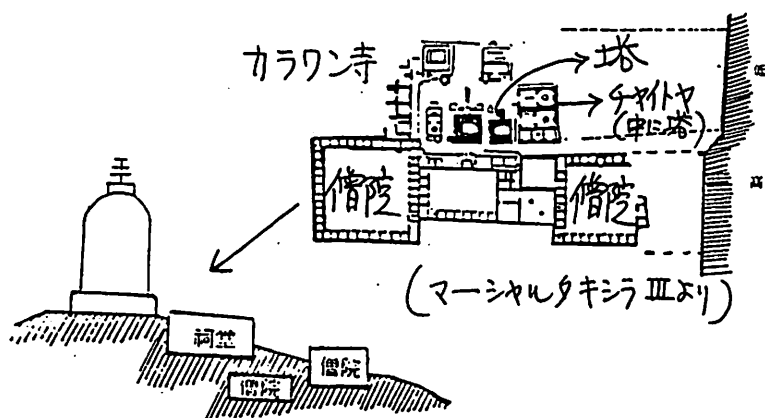
12. 方牙四出の見本（カニシカ大塔を模したと思われる）

を前提しているように思える。即ち大唐西域記によると「童子が砂で塔を作っていた。そして王に、いつか大王が来て塔を建てるであろうと言うと童子は消えてしまった。大王はここに塔を建てよとの仏の命令を感じ、早速ここに塔を建てることにした。そして塔を建て終ると思いきや、塔の四隅に四角の小塔がとび出した。これをおおうべく塔を増巾すると、又四隅に小塔がとび出す。これをくり返すうち、塔は巨大な塔になってしまったと大唐西域記では言っている。<sup>16)</sup>

法顯も「王作塔成已。小塔即自傍」<sup>17)</sup>とっているから、この話は四世紀はじめには普及していた。又カニシカ大塔の発掘による考古学的調査でも確認されているから、この律蔵の話はカニシカ大塔建立後といえる。カニシカ大塔はカニシカにはじまって次のフヴィジカ時代に完成しているから、律蔵のこの部分の成立は約西紀一七〇年以後とも言えよう。だから、小乗の律だから大乘より早いとは言えず、大乘よりおそいとも言えよう。

(3) 更にこのことは塔の位置変化についても言えよう。

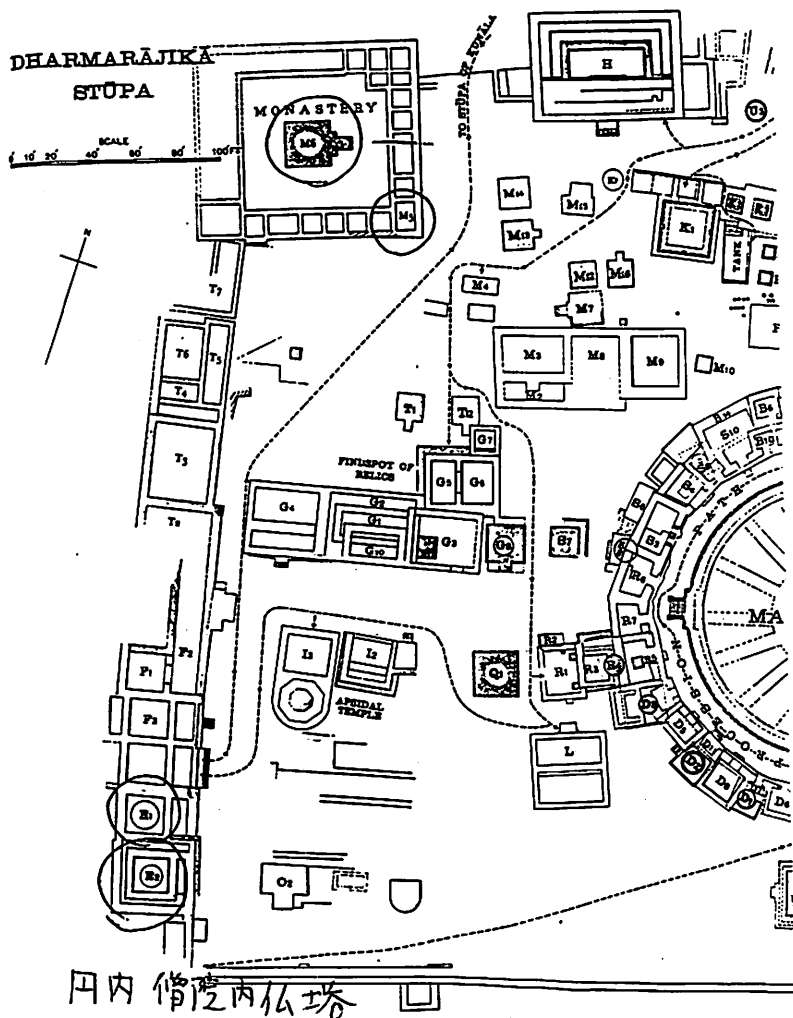
クシャンに於ける諸宗教の大衆化（高橋）



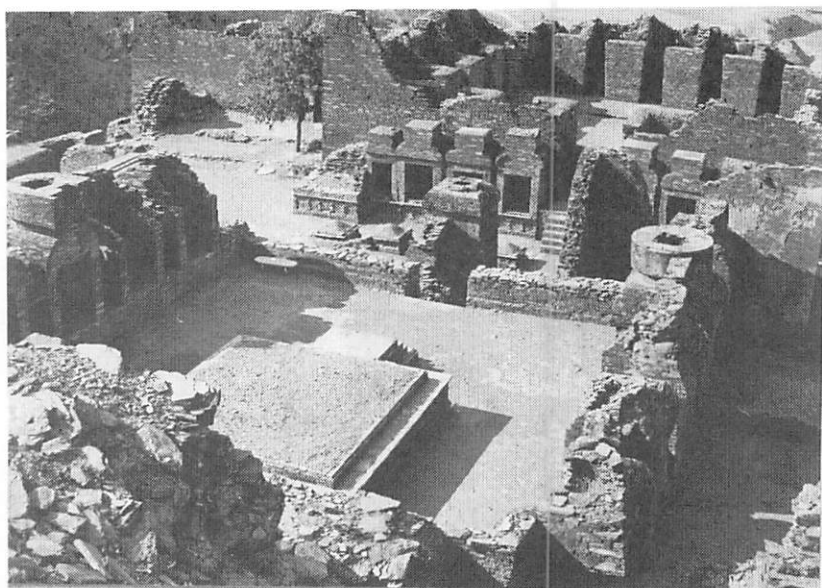
ジャマールガリ略図

13. 僧院と塔の位置の変化





14. 僧院内仏塔（マーシャルタキシラⅢより）



15. タクト・イ・バーイ

起僧伽藍時。先預度好地作塔処。塔不得在南不得在西。応在東、北。不得僧地侵仏地。仏地不得侵僧地。若塔不得近死尸林。若狗食残持来汚地。応作垣牆。応在西若南作僧坊。不得使僧地水流入仏地。仏地水得流入僧地。塔、塔心在高顯処作。（摩訶僧祇律卷第三十三）<sup>18</sup>

即ち、この律の文字は僧院と塔の分離、然も塔は僧院より高い所に作られるとある。マーシャルのタキシラによると、ピツパラやダルマジカでは僧院の内に仏塔が祀られていたが、（写真14参照）三世紀を限度として、僧院外に造られて行くとしている。<sup>20</sup>

更に、塔もカラワン（写真13参照）やギリの如く、僧院の一段下で、町から直接塔に詣でられ、僧院の修行生活でイスターブしないように、塔は作られていたが、やがて、仏塔の隆盛にともない、塔が僧院より上に作られるようになった。タフト・イ・バーイ（写真15参照）のように塔区の方が少し高くなり、遂に13の位置図の如くジャマールガリのように頂上に塔が作られ、僧院は下



16. 仏陀像 カニシカー一世金貨（2世紀）

で、各僧院の僧は山頂の塔に詣でるようになって行く。これらは石積み方法から言って三世紀以後、更にメハサンダの主塔のように四・五世紀のストッコ全盛時代にまで及ぶに至る。

(4) 又仏像の成立後を暗示する文章まである。

吉利王為迦葉仏塔。四面

起宝枝提。彫文刻鏤種種彩畫。

今王亦得作枝提。有舍利者名

塔。無舍利者名枝提。如仏生

処得道処転法輪処般泥洹処苦

薩像辟支仏窟仏脚跡。此諸枝

提得安仏華蓋供養具。(傍線

筆者)

即ちこの文章の中の「仏」という所に注目したい。「舍利あるを塔と名付け、舍利なきを枝提、と名付く」とあり、この舍利のない枝提、チャイトヤに「仏を安置せよ」とある。

即ち仏である舍利のない所に「仏を安置せよ」とあるからには明らかに、この「仏」とは仏像に他ならない。

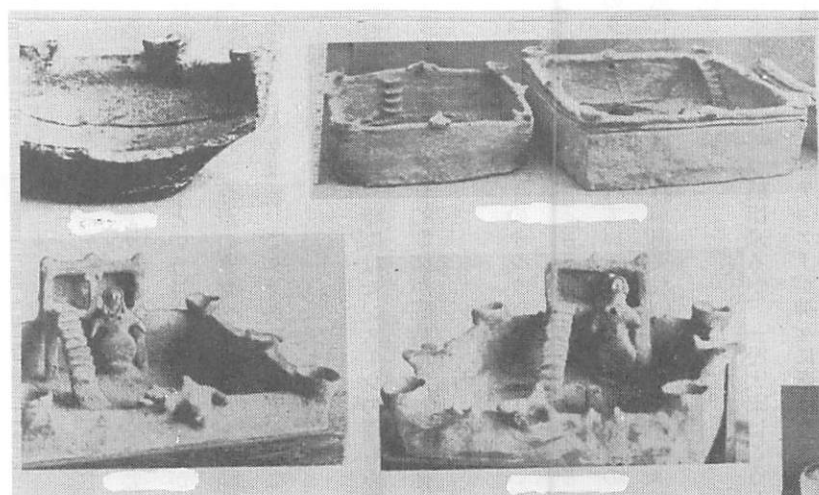
仏像の成立は一世紀、単独像の成立は二世紀のカニシカ時代といわれている(写真16参照)。なぜならカニシカコインに仏の単独像がミントされているからである。さすれば、この律蔵の話は、仏像成立以後と考えられる。こうして考えてみると、前記の如く小乗の律だから、大乘より古いというわけには行かない。特に法華経は西紀一世紀から二世紀といわれているから、釈迦多宝の二仏は律蔵の釈迦仏と迦葉仏の二仏より、大乘だからおそいということはない。むしろその逆とも言えよう。

5

マーシャルのタキシラⅡ、四六三頁やⅢの図録篇の Plate

一三六の middle から下にかけて注目すべき出土品が示されている

クシヤンに於ける諸宗教の大衆化(高橋)



17. 竜神に捧げられたミニチュアの水槽(マーシャルタキシラⅢより)

クシヤンに於ける諸宗教の大衆化（高橋）

（写真17参照）。即ち粘土細工のタンク（水槽）の出土品が十数ヶのせられている。

これに対して、Dr. Ram Sharan Sharma は、*History of Early India, munshiram monharial, Delhi 1983, p.162—3*に、ユニークな説明をしている。即ちクシヤンの時代に、西北インドではタンクを作ることが社会的要請となった。特にモンスーンの影響の少ない所では灌漑の為である。従ってタンクを作るといふ社会生活上の要請が、宗教的功德と結びついて行つた。特に竜神信仰では、竜は水に住むということから、灌漑のタンクを作ることが同時に神への奉仕ということになる。従ってタンクを作ることが一層すすめられ、人々は競ってタンクを作ることになったと記している。

筆者の体験ではパキスタンのイスラマバード以西ではモンスーンの期間も短かく、時にはモンスーンの雨も極度に少ない年もある。従って雨に恵まれない地方では、灌漑の為のタンク作りという社会的要請が同時に宗教的功德と結びついて行つたと容易に考えられる。

然し、シャルマの論文やマーシャルの写真で特に注目すべきことは、ミニチュアーのタンクが沢山出土していることである。前記マーシャルが出土品を示しているタキシラだけではなく、Hasinapur, Udaipur, Alichatra Kausanhi, Bhita (near Allahabad) 等で数多くのミニチュアーのタンクが発掘されている。社会の福祉の為のタンク作りが宗教的に大いなる功德をもたらすと考えられていたが、然し一般大衆はこれが出来ない。イミティションの儀式用タンクで満足せざるを得なかった。この傾向は中世から現代まで続いている。<sup>24)</sup>

かく述べているのは特に注目に値する。即ちお金持ちは現実の水槽を作って奉納出来るが、一般大衆はこうしたことは出来ない。そこでタキシラ出土のような手の上に乗る如き小さな泥土のミニチュアーが神々に奉げられた。こ



18. 童子供養像（筆者蔵）

れは貧しい人達にも希望を与えるという社会的要請。現実のタンクを奉納出来ない人に光明を与える傾向が、こうした土地にはあったことを物語っている。そして又、こうした傾向がクシヤンの時代であったとも言っている。

ヴィーマカドフィーセス王によってローマと同じ規格のコインが作られた程東西交易が盛んとなり、カニシカ、フヴィシカを経て強大な王国を作り、中国とローマ、インドとローマのシルクロードの主要ルートの貿易を独占したクシヤン族は、その豊かな財政で、自分の宗教のゾロアスターの巨大な神殿をスルフ・コタルに作り、統治下の領域内各地の仏教やヒンズー教の寺に塔や僧院を奉獻した。ガンダーラの山々に残る仏教寺院の遺跡から如何に造塔造伽藍の事業がさかんであったことがわかる。更に地方豪族や商人達も、「資産者」として美しい奉獻塔を数多く寄附したことが、現在遺跡をめぐるとき、その富裕さと共にひしひしと感ぜられる。

然しこうした奉獻は一般大衆には出来ない。この大衆に

光明を与えたのが在野の在家仏教（これがやがて大乘として発展するのであろうが）、「童子のたわむれに砂をもて塔を作る」という文章や、現在数多く出土している「童子の土饅頭供養像」の彫刻等（写真18参照）を考え合せると、前記諸律の「泥団子」の文章はこうした時代性を反映しているのではないか。これがシャルマの言うクシヤンの時代であった。造塔造像の極度に盛んだった時代、それと裏腹にそれが出来ない民衆のもどかしさ、淋しさ。これに手をさしのべ、光明を与える。これが「たとえ一句でも受持誦誦すれば」「一団泥」「淨心」という物から心、もとでいらずの、無一般大衆に希望を与えて来た。

そしてこうした宗教の民衆化大衆化がクシヤンの時代であった。この社会的傾向を敏感に先取したのが在野のグループ（後に大乘と発達するのであるが）であった。いつの時代でも、例えば現代に例をとっても、時代を先どりするのは民間の宗教団体である。既成のものはそうしたものにひかれながらもと容易にとり込めないというのが実情である。特に終戦直後、雨後の荀の如く新興宗教が輩出したのも、民衆のニーズをいち早く感じた為であつたろう。こうした点から類推すると、当時の新興宗教たる大乘仏教はこの時代の要請を先取りしたものであろう。

こうなると当時の既成宗教たる小乗仏教も時代の流れに案閑としてはいられなくなった。そこで前記「閻浮内の黄金より一団泥」という考え方をとり入れざるを得ない状況に追い込まれて行つた。前述の根本説一切有部薬事第十二の泥団子の話のすぐ後に、「貧者の一燈」の話が続いていることでもこの間の消息が理解されよう。

然も「泥団子」の話ののっている章は律蔵としては終りの章に近い。五分律では三十卷中三十六卷、四分律では六十卷中五十二卷、摩訶僧祇律は四十卷中三十三卷、根本説一切有部毘奈耶薬事では十八卷中十二卷、いずれも律として後半のものに属する。即ち律は僧達が現実問題に当面した時、その都度、「仏の名のもとに」戒律を規定して行つ

たものだから、こうした背の高い塔・二仏・泥団子の記された章は、そうした時代の社会環境の中で、教団は如何にあるべきかを表現しているといえよう。いわば当時の社会環境と教団とのかかわりを示していると思うのがごく自然のことではあるまいか。これがクシヤンの時代、場所は西北インド。仏教内だけではなく、それぞれの宗教が、それぞれにこうした時代的要請に対応して行ったことがわかる。<sup>88)</sup>



かくてタキシラの二仏は時代的に法華経のものであっても何ら不思議ではない。よしんば小乗仏教の律蔵の「迦葉仏と釈迦牟尼仏」であっても、こうした宗教の大衆化の時代に触発され、又、そうした時代の風潮を先取りした法華経等大乗仏教の刺戟で出現した二仏であるとしたら、その精神は法華経の二仏と何ら別物ではない。

要は、仏の超越性を表現する背の高い塔と仏の寿命、そしてその説かれた法の無窮性を示す二仏、即ち超越性と無窮性が「己心」の中に存在するのであって、それは富者も貧者も異るところはない。こうした三位一体の構造が確立して行ったのが、クシヤンの時代であった。いわばクシヤンの時代こそ、宗教の大衆化の時代であったと言える。

〔註〕

- (1) John marshall Taxila III plate 95 b
- (2) 全集 plate 93
- (3) 全集 plate 45
- (4) 高田保氏 仏像の起源 二五六頁
- (5) 大唐西域記 大51—84下
- (6) 静谷正雄 インド仏教碑銘目録 一七八八

クシヤンに於ける諸宗教の大衆化（高橋）



クシヤンに於ける諸宗教の大衆化（高橋）

- (7) 大2—四一六下
- (8) 大2—三〇二上
- (9) 大4—一六一上
- (10) 大22—四九七中—四九八の上
- (11) 大22—一七二下—一七三上
- (12) 大22—九五八上中
- (13) 大24—五三上中
- (14) G. Widengreen, *Les Religions de Iran* p.340
- (15) 樓神五十七号 筆者論文火と光參照
- (16) 大51—八七九下—八八〇上
- (17) 大51—八九八中
- (18) 大22—四九八上
- (19) 前掲「バーシャル plate 45」
- (20) 樓神六四号筆者 僧院から仏塔崇拜へ
- (21) Marshall Taxis plate 72
- (22) 前掲 僧院から仏塔崇拜へ（八十頁）
- (23) 大22—四九七上—四九八中
- (24) 前掲 Ram Sharan Sharma, *Histroy of Early India* p162—3
- (25) 全書一六二頁—一七二頁
- (26) 前掲「静谷目録 一七八六 タキシラパティカ銅板銘文等」
- (27) 法華經方便品第二（大正九—八下）
- (28) 法華經法師品第十（大九—三〇下）
- (29) 根本説一切有部業事第十二（大24—五五下—五六上）
- (30) 干潟竜祥氏は本生經類の思想史的研究の三十四頁—四十九頁で諸律の完成をAD一世紀及至一・三世紀としている。

◇研究ノート◇

智慧と慈悲 (承前No. 3)

——実践としての智慧——

町 田 是 正

智慧と慈悲、この問題が大乗仏教の根本であることは周知の所です。従って先づによって夙に論じられ、語り尽されてきたテーマではありますが、ここ数年来、再び仏教とキリスト教に於て再検討がされており、而も宗教学・仏教学の分野だけではなく、哲学・倫理学・文学・社会学・言語学の領域にまで広げられ、英、米、独、仏、伊、豪、印、比、日、などを各国の英知が此のテーマにとりこんでいます。この智慧と慈悲(愛)の問題が再検討されている今日の時代背景は、中近東及びバルカン半島で惹起されている民族紛争、或は科学技術の発達はかえって人間の尊厳性をも顛倒しかねない状況を生み出し、また地球規模で拡大されつつある環境破壊など、いずれも人類の英知を結果して解決の糸口を見いださねばならない秋にきています。こうした意味でも、智慧と慈愛の問題は今日的で而も現実的課題だと受けとめておきたい。筆者は本誌63・64号を借りて卑見を述べてきましたが、当65号にも拙文を載せていただき一応の締めくくりとしておきたい。

目 次

一、プロローグ——実践智への誘い——  
三、法華経にみる智慧の実践

二、分別智と無分別智——分析と直観——  
四、エピローグ——実践としての智慧——

智慧と慈悲(町田)

## 一、プロローグ—実践智への誘い—

大乘仏教の根本思想は「智慧」と「慈悲」にあります。而もその思想を「修すること sich schulen (D)」を強調いたします。部派仏教時代の「業 karmen (S)」(行爲)の觀念を「行願・信行・行 carita (S)・sa Eskara (S)」におき代えて、「菩薩行」と呼ばれる「修行 die Schulung (D)」を確立していきました。周知のように、菩薩行は一朝一夕にして成るものではなく、繰り返して身心を修める、所謂「修行 bhavana (S)・bhavyaman (S)」が強調されることです。仏教語では「仏道修行」と云い、常に用いる語彙です。時には「行道」と略称されることもあります。ともかく大乘仏教が大事とする一つは、坐して思念することよりも、実践することを勧めていることです。仏道修行のためには、それを修行するうえでの実践徳目がなくてはなりません。大乘仏教に於て、菩薩行に関する特有の実践徳目として勸説しているのが、「五種法師 <sup>(師)</sup> dharma-bhāṇaka (S)」と「六波羅蜜 sat-paramitah (S)」でありますことは周知の所です。

五種法師の徳目<sup>(規範)</sup>については、法華經の法師品・分別功德品・法師功德品・不輕菩薩品・如来神力品などに説示されています。例えば法師品に於て、

若復有人・受持・誦・誦・解説・書写・妙法華經・及至一偈・於此經卷・敬視如仏

(「法華經」中卷一四三頁)

と示しています。法華經に於て五種の法行<sup>(規範)</sup>が勸説されるのは、その法行を修することが「一切種智慧」(仏智慧)に到達するための根本とされているからです。

(大正藏八卷・五六頁下段)

(大正藏十二卷・二六九頁下段)

また六波羅蜜行については、摩訶般若波羅蜜經・法華經・無量壽經などに説示されていますが、殊に法華經では方便品・分別功德品で説示されている。分別功德品に於て

況復有人・能持是經・兼行布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧其德最勝・無量無辺・譬如虚空・東西南北・四維上下・無量無辺・是人功德・亦復如是・無量無辺・疾至一切種智

(「法華經」下卷六〇・六二頁)

と示して、六波羅蜜行を修する人に対して、

(限らない種々の仏智慧を得ることが出来る)

「其德最勝・無量無辺・譬如虚空」と讃歎し、更に「無量無辺・疾至

ずや仏智慧に至らん

「一切種智」と、

功德の保証がされています。即ち菩薩衆に課せられた布施 dāna (s) ・持戒 śīla (s) ・忍辱 kṣanti (s) ・精進 vīrya (s) ・禅定 dhyāna (s) ・智慧 prajñā (s) の六つの実践徳目は「最高の悟りに至る道 parama

bodhimarga (s) ・ das Heilspfad (D)」とされ、特に「智慧波羅蜜」が大事とされ、前の五つの波羅蜜行は、この

智慧に至るための実践徳目として課するとしています。

(上求菩提・下化衆生)

すでに周知されているように、法華菩薩団は自利利他の願行を標榜することで、旧来の小乗僧伽には全く見られな

かった新しい仏教人間像の形成を目指したのであった。謂うなれば、仏教における革新運動であったと云えます。こ

の菩薩団の願行精神は、時代を超えて、民族の壁を越えて、今に生かし、現在に求められている所でありましょう。

いま我々は、遠くアフリカで飢餓に喘ぐ諸民族の悲慘を思うとき、また中近東の戦禍の難民の苦難を思うとき、又

カンボジアに対する平和救援活動の報道を耳にするとき、また私自身、十有余年前に西ドイツの女子修道院内のキン

(アンメル湖畔のセントアルブ修道院)

ダーハイムに収容されていた戦災孤児達の姿を想うとき、理屈めきで菩薩行の実践が緊急であることに強い思いをす

るのです。菩薩行が智慧と慈悲に根ざして、一切衆生を利益しようとする「廻向 parināma (s)」を願行とするな

らば、その原点の思想に立ち還って、実践する菩薩行の意味を問い直すことは、今日的課題のように思えるのです。仏教は坐して思念することは大事な行法ですが、より以上に実践する事が求められているのです。

## 二、分別智と無分別智―分析と直観―

「分別」という語は、元々は仏教語ですが、この語ほど日常の中で使用される仏教語も珍らしい。

新村出編『広辞苑』には次の様に説明している。

「元来は仏教語に由来する。(感覚や想像から独立した存在……主観性)心が外界を思いはかること。事物の善悪、条理を区別してわきまえること。經典・

識見などから出る考え、判断思慮のこと。」

梅棹忠夫・金田一春彦・日野原重明・阪倉篤義監修『日本語大辞典』（講談社）では、

「経験を積んで道理をわきまえること。その能力。語釈は仏教語にあり、感覚し推量して現象を識別すること。

また区別して判断すること。」

と説明している。

※英語で「分別」に当る語を探しますと、「discretion 正しい判断力の意味をもつ分別」・「understanding 認識する意味をもつ理解」・「analysis 組成を明らかにする意味をもつ分析」などが当ると思います。またドイツ語で「分別」に当る語を探しますと、「der Verständigkeit 賢名な態度・分別」・「die Einsicht 洞察・判断・理解」があります。

光の広辞苑・日本語大辞典によりますと、元々「分別」の語は仏教語に由来し、語釈は仏教から派生したと解説している。若し仏教語に由来するとすれば、その語原と用法について一応の理解を得ておく必要があります。そこで手

許にある中村元『仏教語大辞典』（東京書籍）を参借して、筆者の補記を付しながら、主な語義と用法を摘記します。

「分別トハ、外的ナ事物ニトラワレタ断定・配分スルコト・分チ配付スルコト。」

と説明されているが、その語義の微妙なニュアンスによって、用法が幾つかにわけられています。

(1) 配分スルコト・分チ配付スルコト・その具体的な用例として、法華經の「分別功德 puṇya-pariśaya (s)」が当るとしている。

(2) 区別スル・見分ケルコト。この意に当る語に「vibhagaṃ (s)」があるとしている。

(3) 区別シテ考エル・ワキマエル・ハカライ。この意で用いられる具体的な例として、法華經の寿量品の「憶想分別 sañjñā-vikalpa (s)」(思惑・あれこれ思いめぐらす)が当るとしている。

(4) ニツ以上ノ事物ヲ分ケテ区別シテ説ク。この意味で用いられる語として、パーリ語の「vibhajjavadā」が当るとしている。

(5) 思惟スル。この意に当る語としてサンスクリット語の「kalpanā」あるとしている。

以上、「分別」の語意について見たのですが、仏教語としては通常、サンスクリットの「vikalpa」を用いて、対象を思惟する・識別する心のはたらきとしている。つまり哲学の認識作用に当るのです。然し、仏教で云う「分別」の意は、単に識別する・区別する、の意ではなく、分別するはたらきの中に智慧と慈悲の心が関わっている事に留意したいのです。例えば、方便品に於て開会している「開三頭」思想を示している

十方仏土中・唯一乘法・無二亦無三・除仏方便説……

我有方便力・開示三乘法・一切諸世尊・皆説一乘道・今此諸大衆・皆除疑惑・諸仏語無畏・唯一無二乘……

(坂本・岩本訳註「法華経」上・一〇六・一一〇頁)

右の周知の教えにしても、声聞乘と縁覺乘に向つて「仏智慧」は、甚深無量(durdśam duranubodham (s))

と説くのですが、実はそれは

(唯一の仏の乘物を三種の乘物と解説して説く)

於一仏乘・分別三(tad evakam buddha-yanaṃ tri-yaṇa-nirdeśaṇa nirdisanti (s))

(「法華経」上巻九八・九九頁)

のごとく、仏智慧(一仏乘)に至らしめるために分別して解説しているのであって、明らかに「分別智」を超越した、仏の無量の「無分別智」のはからいが強調されているのです。法華経で説示される「分別」の意味は、或る概念とか価値基準を設けて、認識したり、判断を下すという、つまり「分別智 kalpanā-jñāna (s)」のことではなくて、仏智慧の意味に当る「無分別智 nirvikalpa-jñāna (s)」を教示しようとしています。

若し「無分別智」について、仏教的表現を改めて哲学的に表現してみれば、対象(事物)を特定概念(価値基準)によって識別判断することなく、主観や客観の分別を超越した「超越した分別 transcendent der Verstand (D)」に作用する智慧を志向しているのです。

大乘仏教に於ては、分別智(哲學的觀察)に対して無分別智(仏教的觀察)の実践を勧説していることは明らかです。ところで我々が、現実の問題

として「分別智」「無分別智」の実践を問題にしようとしたとき、仏教語の分別智・無分別智という語彙をそのまま用いますと、何か高踏にすぎ違和感を覚えます。そこで日常的な語彙におき替えて、「分別智」を「分析 analyse (E)・die Analyse (D)」だ、「無分別智」を「直観 intuition (E)・die Intuition (D)」とした方が解り易く

なりましょう。端的に云えば、原始仏教（根本仏教）は分析的思维と方法をもつて論じ、大乘仏教は直観的な方法をもつて説き明そうとしています。

※「無分別 avikalpa, nirvikalpa」の語彙なり觀念が、仏教文獻に登場してくるのは、大乘仏教の成立以後、殊に空思想の後に盛んとなる如来蔵思想の發生・成立に伴うものとされている。即ち、無分別の思想が定着するためには、区別とか差別の觀念が強いと生れてきません。即ち無区別とか平等の觀念が生れることで、そこから無分別の思想が發生してくるようになる。

周知のように、釈尊は八十年の遊化の生涯に於て様々な問題を事こまかく、分析的に、論理的に説示されています。人間の問題（愛憎・心・苦悩・欲望）、自然、存在、人生觀、世界觀に及んでいます。これらの事は、『經集 Sutt a-nipata』（中村元訳注「ブツタのことば」岩波文庫）。『法句經 Dhammapada』（中村元訳注「真理のことば」岩波文庫）を披見してみれば明らかです。平易な言葉をもつて説示していますが、然しその説示の方法は、難解な問題について、具体的な例示をもつて理詰めに論理的に論を進め、極めて分析的であります。例えば『スッタニパータ』の偈の頌を參照してみれば、

どんな苦が生ずるのであろうとも、すべて識別作用に縁って起るのである。識が止滅されるならば、苦が生死するということとは有りえない。（七三四偈）

「苦しみは識別作用に縁って起るのである」と、この患いを知って、識別作用を静かならしめた修行者は、快をむさぼることなく、安らぎに歸しているのである。（七三五偈）

（中村元訳「ブツタのことば」岩波文庫二三四頁）

とあります。僅か一例にすぎませんが、全篇が右に示した方法で説示されており、極めて分析的であることが理解



されます。

釈尊滅後の僧伽は等しく悟りを目指して修行した。その修行は戒を守り、教法を研究することであつたが、その修行することが期せずして経蔵と律蔵を伝持することとなつた。周知のように「経蔵 Sūtra-piṭaka (s)」と「律蔵 Vinaya-piṭaka (s)」に説かれている仏教を原始仏教と呼び、経蔵に含まれている經典を「阿含經 āgama. sūtra (s)」と称した。原始仏教の思想の特徴は、理性的・合理的・分析的の性格が強いとされ、また倫理的な雰囲気は漂わすことも特徴とされている。

\* 原始仏教の特色が分析的・理論的であることは、例えば、阿含「増支部 Aṅguttara-nikāya」中に集成されている「四諦 catuṣ-ārya-satya」（釈尊の初転法輪における根本教説とされる）とか「八正道 aṣṭaṅga-mārga (s)」（苦悩の断滅に導く八つの正しい実践徳目）の教説は説明的であり分析的であります。また人間観察（人間存在の問題）についても、極めて分析的で精緻であつて、「五蘊 pañca-skandha (s)」と「六根 ṣaḍ-indriya (s)」の概念を導入することで合理的に説明しようとしています。

原始仏教の基本的立場は、「諸行無常 (すべての現象は変化して止むことがない) Sarvaśaṁskāra anityaḥ (s)」・「諸法無我 (すべての存在は永遠不變の本質を有しない) sarvadharmā anātmanāḥ (s)」・「涅槃寂靜 (煩悩の炎を吹き消して心が静かに安んずる) śāntaṁ nirvāṇam (s)」の三法印にあるとされている。やや具体的に繰り返して云えば、我々人間は限らない欲望と、人生無常との矛盾の渦中に投げ込まれて苦悩し、また争いを生じている。釈尊はそれらの根元が煩悩（貪瞋痴・慢心）と「無明 avidyā (s)」にあることを明らかにしていた。そして煩悩を断滅して、煩悩の束縛から離脱して心の自由自在の境地（涅槃寂靜・解脱）に至る方途（煩悩と悟りの構造）について、四諦・八正道・そして「縁起 pratyīya-samutpāda」の説をもって教えられたのであつた。

仏教の目指した目標が「智慧に至る道」にあったのですが、原始仏教と小乗教団に於ては、それを「分析の教え」（分別智）に主眼をおいて、精緻な理論を展開したのであった。現在の我々は大乗仏教の思想を享受していますから、我々の立場からすれば、原始仏教の思想は学問研究の対象としては済み尽し得ない魅力があります。然し今日の要請がされている「智慧の実践」の立場からすれば、聊か違和感を覚えるのです。然し大事なことは、（評釈は宇井伯孝博士系統）原始仏教（根本仏教）が煩瑣で分別智の教説と云うだけで、これを拒絶する態度は好ましくなく、我々は仏陀ゴータマから流れ出る智慧の泉を汲みとる努力を忘れてはならないと思います。

### 三、法華経にみる智慧の実践

仏陀ゴータマは、縁起の理法をもって、四諦・八正道の思想と実践の徳目を構築され、仏教が「智慧の道」であることを教説された。

さとれる者（仏）と真理のことわり（法）と聖者の集い（僧）とに帰依する人は、正しい智慧をもって、四つの尊い真理を見る。すなわち(1)苦しみと、(2)苦しみの成り立ちと、(3)苦しみの超克と、(4)苦しみの終滅におもむく八つの尊い道（八聖道）とを見る。

（中村元訳「ブツダの真理のことば」岩波文庫三三八頁）

右の中村博士訳注に成る『真理のことば』は、パーリ語原典では「Dhammapada」と云い、漢訳で「法句経」と称せられている。先の詩偈はダンマパダの一九〇・一九一偈のもですが、併せて二七三・二七四偈も参照されることで、仏陀ゴータマが如何なる想いを込めて教説されているのか、その想いが伝わってきます。

仏教の出発点が「智慧の道」にあるとすれば、我々はそれに帰依しなければならない。而も我々のすべてが「一切衆生・悉有仏性」（大般涅槃經・師子吼菩薩品）の可能性を有しているとすれば、原始教団・小乗教団の特定エリートの分析的思惟の領域を超越して、上求菩提・下化衆生の自利化他精神を基盤として、大衆と共に乗車できる大乘の教え、菩薩道の根幹としていくべきであると思います。

大乘仏教の教説、就中、法華經の教説（表現形式）は、きわめて文学的（譬喩的・象徴的）で而も直観的に語られており、理論や分析的方法を避けて、むしろ具体的に菩薩道（智慧の道）の実践を説示しています。

その一例として、常不輕菩薩品における不輕菩薩の但行礼拝行の説示は象徴的であります。

我深敬汝等、不敢輕慢、所以者何、汝等皆行菩薩道、当作佛

（坂本・岩本訳注「法華經」下巻・一三三頁）

避走遠住、猶高声唱言、我不敢輕於汝等、汝等皆當作佛

（「法華經」下巻二二六頁）

不輕菩薩、往到其所、而語之言、我不敢汝、汝等行道、皆當作佛、諸人聞已、輕毀罵罵、不輕菩薩、能忍受之

（「法華經」下巻一四四頁）

右の説示は、日蓮教学に於ては特別の意義を示唆している所とされ、日蓮聖人御自身も法華菩薩行の規範とされました。聖人は『寺泊御書』に於て

法華經三世説法儀式也。過去不輕品今勸持品、今勸持品過去不輕品也。今勸持品未來可為不輕品、其時日蓮即可為不輕菩薩。

（昭定遺・五一五頁）

と示して、不輕菩薩の但行礼拝と御自身の忍難色説とを照合して、法華經行者の自覺を深められている。

今は日蓮宗字に於ける教學的意義の言及は惜くとして、常不輕品に説示される但行礼拝の実践は、法華菩薩道における限らない慈悲と智慧の実践を教唆しています。どんなに悪口罵詈・杖木瓦礫に遭遇しようとも、「亦復故往、礼拝讚歎、而作是言、我不敢輕於汝等、汝等皆當作仏故」(「法華經」下卷一三四頁)と、但々ひたすら礼拝の行に徹した。礼拝行勸説で大事なことは、不輕菩薩が讚歎合掌して礼拝した対象は、決して聰明有知の人々だけではなく、無知愚昧の人々も大勢いた筈です。人々を差別することなく礼拝したことです。だから礼拝・讚歎に値いしない存在と置いていた者にとっては不快の念を生じ杖木瓦礫をもって報いたのであった。それに対して、「汝等皆行菩薩道・当作仏」と合掌礼拝したのは、<sup>(一切衆生・悉有仏性)</sup>「人々は皆、仏法の器」なることを知らしめんとする慈悲と智慧の発露であり実践であつたのです。

法華經には「七喻」の譬説が語られてきますが、その中で今、この抽論の問題志向と徹して、筆者の関心を引くのは信解品に語られる長者窮子の譬喩であります。

信解品の開卷冒頭、四人の長老声聞衆による告白から始まります。

解第一スプーティ、<sup>摩訶第一マハー・カーティヤヤナ</sup>爾時、慈命須菩提、<sup>摩訶迦施延</sup>、<sup>摩訶迦葉</sup>、<sup>摩訶目犍連</sup>……<sup>世尊に向つて合掌し世尊を仰ぎ身体をかめて礼拝す。世尊は次のように云つた。僧の集団では長老を敬まれ、船を重ね老衰していたので、さとりへの境地に達することが出来たと思ひこみ、恭敬、瞻仰尊顔、而白仏言、我等居僧之首、年竝朽邁、自謂已得涅槃、無所堪任、完全なさりを得ようと氣力もなく努力しようとしませんでした。</sup>  
不復進求、阿耨多羅三藐三菩提……

(「法華經」上卷二三頁)

右の四人の長老は、二乗声聞を代表する仏弟子たちですが、既に修行を積み小乘涅槃の証りに甘んじ、「無量の宝

aprameya ratna (s)」を得たと思ひこみ、また仏の証（仏智慧）には到底達することが難事と思ひこみ、進んで仏智慧を求めることをしなかったのです。然し同修の舍利弗<sup>智量第一シャリーリ・ブトラ</sup>に對して、大乘一仏乘の得脱の記別が授けられるのを眼前にして、二乗声聞にも無量の珍宝が得られるとの確信を得て感激を覚えていくのでした。

そこで四人の長老たちは、次の様にのべて、

世尊我等今者、樂說譬喻、以明斯義……

（「法華經」上卷二四頁）

長老たち（声聞乘）は、自らの迷惑に煩い、苦惱の世界に繫縛されていたこと、そして仏乘の世界に對して畏怖を抱いていたことを告白し、そこで「長者窮子」の譬喻を述べ、その中で仏智慧に照らされて次第に菩提の覺智に目覺めていく過程を窮子に託して述べている。

貧乏な男は、長者の莫大な財産を譲り受けるでしょう。自身に欲がなく、その中から何も買わず、一升の値の金も取り出さないでしょう。自分は身だと思ひ、從爾時窮子、即受教勅、金銀珍宝、及諸庫藏、而無怖取、一餐之意、然其所止、故在本処、  
來のようにわらわき小園に住んでいるでしょう。下劣之心、亦未能捨……

（「法華經」上卷三六頁）

右の譬說の意味は、「貧しい人 daridra-purusa」（窮子<sup>きうし</sup>）は長者（父）から沢山の財貨の管理をまかせられていながら、これを欲しいと思わず、かえって「貧しい思ひ daridracinta (s)」（二乗声聞の立場）で長者に仕えていた。随つて窮子は高度な「判斷力 udarasañña (s)」を有し、また「有能な護持者 sakta-paripalaka (s)」であるにも拘らず、自己の本性（本質）を見極め得ないでいる状態を説示しています。  
廣大な思想 能力（才能）護持者

四人の長老は、自分達が菩提の覺智に目覺めないでいる状態を次の様に述べている。

世尊、我等以三苦故、於生死中、受諸熱惱、迷惑無知、樂者小法、今日世尊、令我等思惟、顯除諸法、戲論之弊、  
我等於中、勤加精進、得至涅槃、一日之價、既得此已、心大歡喜、自以為足……

（「法華經」上卷三三八頁）

（授記偈で衆生から記別をうけた四人の仏弟子・迦葉・須菩提・迦旃延・目連）  
四人の声聞（阿羅漢）は、自己の殻にとじこもり、利他の行を欠いた修行を反省して、次のように述べている。

世尊以上便力、説如来智慧、我等從仏、得涅槃一日之價、以為大得、於此大乘、無有志求、  
我等又因、如来智慧、為諸菩薩、開示演説、而自於此、無有志願

（「法華經」上卷二四〇頁）

信解品からの参借が多くなりました。法華經は慈悲と智慧を説く經典と云われていますが、その説示の大事な点は、既に見た常不輕菩薩品・信解品の事例からも解かりますように、仏智慧に至るための実践を強く勧めていることです。法華經は坐して沈潜默想して論理の筋道を思惟することを強く斥けています。

常不輕菩薩による、但行礼拜の説示は、恣意と傲慢の態度を絶対に許さず、忍耐と精進、そして意志と行動を勧奨し、一切衆生・悉有仏性の根柢に立って、無智者の目を開かせる利他の実践が強調されています。また長者窮子の譬喩にしても、窮子に託して自閉症候群とも云える二乗声聞の殻を打破して仏智慧に至る実践が勧められています。

從地涌出品に於て智慧の実践が次のように勧奨されています。

此諸衆生、始見我身、聞我所説、即皆信受、入如来慧、除先修習、学小乘者、如是之人、我今亦令、得聞是經、入於佛慧

智慧と慈悲（町田）

（「法華經」中卷二九四頁）

阿逸汝當知・是諸大菩薩、從無數劫來、修習仏智慧……  
仏の智慧にしたがつて聲方劫の間修行した。

となく修ることがない。  
仏道教へ……

この最勝の「さとり」を得ようとして夜となく昼  
すべて勇烈を振へおこして勤り知れぬ智慧の力を磨借している。自問をもつて教えを説く。  
如是諸子等、學習我道法、晝夜常精進、為求  
志念力堅固、常勤求智慧、說種種妙法、其心無所畏

(「法華經」中卷三二〇・三二二頁)

謂うまでもなく、法華經に説示される「仏智慧 buddha-prajñā」とは久遠本仏の智慧ですが、大事なことは、こ

の仏智慧は巧説方便(種種巧便・種種に巧む)して衆生救済の機能を果すことです。即ち超越的な久遠本仏が、その智慧をもって此の娑婆の現

実を「如実知見 yathā-bhūtam jñāna-darśana (s)」して、衆生救済のための手段をなすと説示していることです。

我々は仏智慧を讃歎し、仏智慧に至るための菩薩道の実践を怠ってはならないのですが、法華經に於て仏智慧を讃

歎するとき、その表現法として「甚深無量 gambhīram aprameya (s)」とか「難信難解 dūṛdhaṁ duranubodhaṁ

(s)」のように形容詞または副詞を冠して、仏智慧に至ることは容易ではないと幽止めがされていることです。或は

回思議・深遠・福德・不可量・不度量・無上などと副詞を冠して修飾し、仏智慧が微妙で人の思维能力(分別智)を

超え、限りなく深く清浄なることを強調しています。法華經に於て仏智慧に対して最上級の修飾をもって讃歎するの

は、仏智慧が「悟り」の本質(本仏の生命)とされているからです。

過日(平成元年一月五日・新春別表)、朝日新聞紙上で我國を代表する科学者・早石修氏と 福井謙一氏が次のような発言をされていた。

早石氏は「論理(分別智)も大事だけれども、最後は直観(無分別智)だと確かに思う」と。

福井氏は「科学的直観というものは、寝ころんでいては養成されない訳で、矢張り経験・学習・情報の収集、それ

から集中的な思考などの結果だと理解すること」。

と云われていましたが、当に法華經に説示される智慧の意味と、その実践することの大事を云われている様に思わ

れる。二人の科学者とも法華經に關する仏教學的な理解はお持ちではないと思いますが、「智慧」についての理解が法華經の説示と同調することに、筆者は共鳴するのを覚えます。

#### 四、エピソード―実践としての智慧

法華經に於ける智慧の表現語彙は、通達大智（序品）・智慧甚微妙（方便品）・常修仏慧（譬喻品）・智慧深遠（藥草品）・如來無礙智（化城品）・一切種智慧（法師品）・智慧宝藏（安樂行品）・深甚智慧（涌出品）・慧光照無量（壽命品）・大善寂力（不輕品）・福德智慧（藥王品）・廣大智慧（普門品）等々、その表現の仕方は多様で而も最上級の形容修飾語を冠して説示している。

また方便品には

盡思共度量・不能測仏智……盡思共度量・亦復不能者……咸皆共思量・不能知仏智

（「法華經」上卷七二頁）

と繰り返して、人の思惟智をいくら沢山集めても仏智慧には及ばないとしている。仏智慧は人の理解する能力を超えている。だとすれば我々に残された唯一の道は、仏智慧について「あれや、これや one thing or another」と思いつめぐらすのではなく、只ひたすらに仏智慧を願ひ求めて菩薩道を実践することに意義が生まれてくるのではなからうか。

法華經では智慧を得るための実践として、六波羅蜜行を勧説しています。たとえば化城喻品の中で

以無量因縁・種種諸譬喻・説六波羅蜜・及諸神通事・分別真實法・菩薩所行道・説示法華經・如恒河沙偈

（「法華經」中卷八二頁）



と説示して、仏は菩薩団のために幾百万という譬喩を用い、神通甚深の智慧を縦横に發揮して、智慧を得る実践法として六波羅蜜を強く勧めている。

日蓮聖人は開目鈔・本尊抄に於て、無量義經の六波羅蜜の自然在前の經文は、単に經文の理だけではなくて、

妙者具足、六者六度万行（六波羅蜜の實踐…筆者注）諸の菩薩六度万行を具足するやうをきかんとをもつ

（昭定遺五七〇頁）

と強調される所で、日蓮聖人が方便品の「欲聞具足道」と釈された意味は此処にありましよう。道場内の修行と社会的実践とを兼ね備えた六波羅蜜の事行を超へて理の一乗觀法が生れ、理行の十乘觀法を超越して再び社会的実践を目指す唱題事行が生れ、此処に觀念としての智慧が打破されて、実践としての智慧が認められるのではなからうか。結論を急ぎすぎましたが、ともかく菩薩の実践倫理として、智慧の実践について往昔七百年、日蓮聖人が教唆されている事は確かであります。

# 明治四年・岡山県における

## 農民騒擾に関する裁判資料(四)

中山勝

### 目次

#### 解題

(I) 岡山県伺備前国磐梨郡田原下村農阿部清太郎発意ニテ同村農近藤嘉十郎外六名明治四年水災ニテ年貢上納シ難キ歎願及フ可クト他村ヲ誘引シ為メニ各郡村々動揺為シタルニ付処刑方ノ件

- (一) 明治五年十月二十四日付・司法省指令
- (二) 明治五年六月日欠・岡山県処刑伺……  
……以上第一回第六十二号
- (三) 阿部清太郎外七名口供書

(II) 岡山県伺備前国磐梨郡松木村農黒田小太郎外七名前件(I)の事件——中山註——ニ関シ願書ヲ執筆シ或ハ暴動ニ附従為シタルニ付処分方ノ件

- (一) 明治五年十月二十四日付・司法省指令
- (二) 明治五年六月日欠・岡山県処刑伺
- (三) 黒田小太郎外七名口供書………以上第二回第六十三号

(III) 岡山県伺備前国赤坂郡南佐古田村農清野弥代次外九名田畑改正ニテ難渋ニ付歎願ス可ク多人数寄合遂ニ大里正山口村小坂石平外二名宅へ押懸家財打碎又ハ焼捨乱暴及ヒシニ付処刑方ノ件

明治四年・岡山県における農民騒擾に関する裁判資料(四)(中山)

明治四年・岡山県における農民騒擾に関する裁判資料(四)(中山)

- (一) 明治五年十月二十四日付・司法省指令
- (二) 明治五年六月日欠・岡山県処刑伺
- (三) 清野弥代次外九名口供書……………以上第三回第六十四号

(Ⅳ) 岡山県伺備前国津高郡河内村之内山条農吉村新三外七名貢米十分一納願出可ク多人数寄合遂ニ同郡辛香村里正中山辰四郎外二名宅へ押懸ケ家財打碎又ハ放火及ヒシニ付処刑方且新三八同囚破牢ノ企アルヲ密告セシニ依リ死一等ヲ減ス可キヤノ件

- (一) 明治五年十月二十四日付・司法省指令
- (二) 明治五年九月二十四日・岡山県処刑伺および同年七月二日・吉村新三口書ならびに同年六月日欠・岡山県処刑伺
- (三) 吉村新三外七名口供書……………以上第四回本号掲載

(Ⅴ) 岡山県伺備前国上道郡百枝月村農塩見虎三郎外四名近郷村々動揺ヲ聞同断出願ス可ク寄合出張役人へ歎願書差出シ他村ノ暴動ニ関セサル

ニ依リ無罪タル可キヤノ件……………以下次号

- (一) 明治五年十月二十四日付・司法省指令
- (二) 明治五年六月日欠・岡山県処刑伺
- (三) 塩見虎三郎外四名口供書

(Ⅳ) 岡山県伺備前国津高郡河内村之内山条農吉村新三外七名貢米十分一納願出可ク多人数寄合遂ニ同郡辛香村里正中山辰四郎外二名宅へ押懸ケ家財打碎又ハ放火及ヒシニ付処刑方且新三八同囚破牢ノ企アルヲ密告セシニ依リ死一等ヲ減ス可キヤノ件

- (一) (明治五年十月二十四日付・司法省指令)

両人赤坂郡ノ挙動ヲ聞キ本村モ之ニ倣ラヒ貢米十分一上納ヲ出願スル方然ルヘシト他村ノ多衆ニ附随シ大里正迄願出ルト雖モ其説諭ヲ聞テ承服退散ス依テ新条例聚衆構訟抗官ノ兇徒ヲ以テ論シ難シ唯一村ノ首トナリ多人数ヲ以テ出願スルハ掲榜徒党ノ禁ヲ犯スヲ以テ違制ノ罪ニ擬

シ杖一百ノ処同囚ノ破牢ヲ訴ルニヨリ一等ヲ減シ

懲役九十日

吉村新三

同上違制ニ擬シ杖一百

懲役一百日

竹谷槌藏

同上附和隨行違令警告三十

贖罪金二兩一分ツ、

吉村林之次  
寺門石太郎  
逢坂熊八  
江見喜十郎  
寺門桑吉

伺之通

無罪

岸田染太郎

縣

青木

松本

松岡

江藤

不明

(二) (明治五年九月二十四日・岡山県処刑伺

および明治五年七月一日・吉村新三口書

ならびに明治五年六月日欠・岡山県処刑

伺)

扣

備前国津高郡河内村之内山条百姓吉村新三御仕置伺書

岡山県

備前国津高郡河内村之内山条百姓吉村新三吟味仕候処左之通

吉村新三

申三十九歳

右吉村新三義村方百姓竹谷槌<sup>ツ</sup>三寺門石太郎吉村林之次同村之内富谷百姓逢坂熊八其外之者共へ出訴歎願之義申談去辛未年十二月三日夕近隣村々百姓共為山訴一時ニ騒立新三義も罷越遂ニ同郡村々へ波及多人數ニ相成り同郡辛香村里正中山辰四郎同郡大里正下芳賀今井郁太郎宅へ押懸ケ家財諸道具共打碎同郡大里正白石村深井文平宅放火及ひ候右乱暴候節新三義ハ手ヲ着不居申且赤坂郡村々動揺貢米十分一ヲ願候旨右槌<sup>ツ</sup>三ヨリ承候処ヨリ心得違候ト雖前条徒党相企候始末不届ニ付絞罪可申付哉之旨先般口書相添伺中当六月廿三日相牢之内備中国賀陽郡板倉村守屋喜右衛門其外之者共破牢相企罷在候旨右新三義訴出候

付減一等准流十年可申付哉

右之通御座候御仕置之儀別帳口書一冊相添此段相伺申候  
已上

明治五年壬申九月廿四日 岡山県

江藤司法卿殿

福岡司法大輔殿

扣

備前国津高郡河内村之内山条百姓吉村新三口書

岡山県

備前国津高郡河内村之内山条百姓

吉村 新三口

申三十九歳

今般相牢之内破牢之企有之候旨御訴申上候付始末有体申  
上候様御吟味ニ御座候

私義昨辛未年十二月中同郡村々動揺之義ニ付当二月十  
五日御捕押懸牢三番へ入牢被仰付罷在候処同六月五日  
一番へ暫牢相成居申候然ル処同月廿日頃ヨリ相牢之内

備中国賀陽郡板倉村出生守屋喜右衛門大坂信濃橋通り

信濃町紀伊国屋平三郎河内国出生豊松等連立何廉察ニ

示談仕候付破牢之企ニも可有之哉与懸念罷在候処同廿

三日右喜右衛門ヨリ何卒破牢脱出致し度ニ付同意致し

呉候ハ、相牢之者共不殘同意之旨申聞候付追而返答可

及旨申出候処尚又津高郡田地子村御百姓大頭鉄五郎ヨ

リ破牢之義如何相考候哉与申候付一同之義ニ候ハ、同

意可致旨申答置一同之源意相察候処猶予仕候而ハ即夜

破牢致し候も難斗様相考甚恐入候義与存罷在候中同晚

七ツ時頃御番人様御見廻り御座候付不取敢破牢之企有

之段申上候処私義直ニ外牢へ御入替御調ニ付右之趣奉

申上候

右之通申上候付被仰聞候者斯ル所業有之故訴出候与雖其

方おゐても真以同意致し反復之者ニ可有之不包申出候様

受御吟味候得共右申上候通決而同意不仕義ニ御座候

右之通相違不申上候已上

明治五年壬申七月二日

吉村 新三

断獄御役所

扣

備前国津高郡河内村之内山条百姓吉村新三外七人御  
仕置同書

岡山県

備前国津高郡河内村之内山条百姓吉村新三外七人吟味仕  
候処左之通

備前国津高郡河内村之内山条百姓

吉村 新三

申三十九歳

右吉村新三義村方百姓竹谷榎蔵寺門石太郎吉村林之次同  
村之内富谷百姓逢坂熊八其外之者共<sub>ニ</sub>出訴歎願之義申談  
去辛未年十二月三日夕近隣村々百姓共為出訴一時<sub>ニ</sub>騒立  
新三義も罷越遂<sub>ニ</sub>同郡村々<sub>ニ</sub>波及多人數<sub>ニ</sub>相成同郡辛香  
村里正中山辰四郎同郡大里正下芳賀今井郁太郎宅へ押懸  
家財諸道具共打碎同郡大里正白石村深井文平宅放火およ  
ひ候右乱暴之節新三義ハ手ヲ着不居申且赤坂郡村々動揺  
し貢米一分一ヲ願候旨右榎蔵ヨリ承リ候<sub>与</sub>雖モ前条徒党  
相企候始末不届ニ付絞罪可申付哉

修前国津高郡河内村之内山条百姓

明治四年・岡山県における農民騒擾に関する裁判資料(四)(中山)

銀三郎倅

竹谷 榎蔵

申三十五歳

右竹谷榎蔵義赤坂郡村々動揺致し貢米十分一願出候由承  
リ村内百姓吉村新三吉村林之次寺門石太郎其外之者共へ  
右同様出訴歎願之義申談去辛未年十二月三日夕端立村方  
之者共誘出候処近郷村々一時<sub>ニ</sub>騒立遂<sub>ニ</sub>同郡村々へ波及  
多人數<sub>ニ</sub>相成同郡辛香村里正中山辰四郎同郡大里正下芳  
賀今井郁太郎宅<sub>ニ</sub>押掛家財諸道具共打碎又ハ焼捨同郡大  
里正白石村深井文平宅及放火候右乱暴之節榎蔵義ハ手ヲ  
着不居申候へ共前条徒党相企出訴致し候始末不届ニ付絞  
罪可申付哉

備前国津高郡河内村之内山条百姓

吉村 林之次

申三十一歳

寺門 石太郎

申四十歳

右吉村林之次寺門石太郎義村内百姓吉村新三竹谷榎蔵ヨ  
リ出訴歎願之義示談ニ預リ林之次義ハ村方之者へも申伝  
へ去辛未年十二月三日夕近郷村々百姓共為出訴騒立候節

両人共罷越遂ニ同郡村々江波及外多人数ニおゐてハ諸所

乱暴致し候右乱暴之節両人とも相交り不居申ニ付附随ニ

ヨリ無罪ニ可有御座哉

寺門 久米吉

申四十一歳

備前国津高郡河内村之内富谷百姓

逢坂 熊八

申三十八歳

備前国赤坂郡西中村百姓

岸田 染太郎

申五十九歳

右逢坂熊八義同郡河内村之内山条百姓吉村新三より出訴  
歎願之義申談候節同意ニも無之去辛未年十二月三日夕近  
郷村々百姓共為出訴騒立候砌一旦立出候得共眠病ニ而途  
中ヨリ罷帰候付外多人数之者乱暴相働候節右熊八義ハ相  
交り不居申ニ付附随ニ依リ無罪ニ可有御座哉

備前国津高郡河内村之内母谷百姓

江見 喜十郎

申四十二歳

右江見喜十郎義同郡河内村之内山条百姓吉村新三ニ出逢  
候節赤坂郡村々百姓共為出訴一時騒立候節罷越遂ニ外村々  
江波及多人数乱暴相働候得共右喜十郎義其節相交不居申  
ニ付附随ニ依リ無罪ニ可有御座哉

右岸田染太郎義去辛未年十二月朔日津高郡河内村之内山  
条百姓竹谷槌蔵兼而親類ニ付同人母病氣ニ罷在右見舞与  
して罷越候節槌蔵義赤坂郡村々動揺之始末相尋候付村々  
動揺致し御年貢米十分一相成候様歎願致し候由相咄候処  
ヨリ其後槌蔵義村方之者へし談津高郡村々動揺及候得共  
右染太郎義無何心相咄候趣ニ有之且同人義赤坂郡村々動  
揺之節相交り不居申ニ付無罪ニ可有御座哉

右之通ニ御座候御仕置之義別帳口書七冊并手続書三冊共  
相添此段相同申候已上

明治五年壬申六月 岡山 県

岡山  
県印

備前国津高郡河内村之内山条百姓

(三) (吉村新三外七名口供書)

扣

備前国津高郡河内村之内山条百姓吉村新三口書

岡山県

備前国津高郡河内村之内山条百姓

吉村 新三申口

申三十九歳

先般村々一同動揺仕候始末有体申上候様御吟味ニ御座候  
私儀農業専ラニ而高六石三斗所持仕居申候然ル処昨未  
年十一月下旬ヨリ磐梨赤坂岡郡村々動揺之趣承リ居申  
折柄同十二月二日津高郡金川村へ罷出帰リ掛ケ同郡河  
内村之内富谷百姓逢坂熊八方へ立寄候処同人申出候ハ  
赤坂郡内動揺出訴致し御年貢米上納十分一ニ相成候様  
願置致し候趣相咄候付出願不致而者難相叶当辺ヨリも  
出訴可致様私ヨリ申聞候処熊八相答候ハ一同之義ニ候  
得ハ訴可致旨申候ニ付其儘帰居申処翌三日朝四ツ時頃  
隣家百姓竹谷槌蔵私門前ニ而出会同人申出候者赤坂郡  
ハ動揺致し御年貢米十分一相成候様願上候趣就而者当

村も難渋不少に付御年貢米上納十分一ニ相成候様出願  
致し候而者如何哉と槌蔵ヨリ相咄候ニ付前条熊八与出  
会候節之手続相咄罷在候折柄村内百姓寺門石太郎同吉  
村林之次通り掛ケ候付右之趣私ヨリ申談置直ニ私義ハ  
隣村母谷ニ用向有之罷出候節途中ニ而不図同村百姓江  
見喜十郎ニ出逢右赤坂郡内動揺致し御年貢米十分一願  
上候趣相咄し立別連一旦母谷へ罷越帰宅仕候同夕隣家  
百姓寺門久米吉方へ入湯ニ参リ居申処村方野間ニ而多  
人数相集リ火を焚キ貝吹立居申ニ付一旦私宅へ罷帰リ  
蓑を着録を持久米吉同道立別申候尤其節ハ村々共人氣  
立居申ニ付誘引不致共一時ニ多人数ニ相成夫ヨリ南隣  
村小山村之方へ一同押行私義も附随ひ同郡辛香村へ相  
越候処同村里正中山辰四郎宅ニ他村之者多人数相越家  
財打毀乱暴仕居申候付私共も夫ヨリ猶又同郡菅野村大  
里正坂野倭三三殿宅へ一同之者罷越私義ハ同家門内ニ  
而休息一飯を請ひ翌四日晝一同之者同所立出同郡横井  
上村字白玉酒造家へ参リ候処多勢之中ニ者満腹之者共  
有之私義者同家ニ而尚又一飯を請ひ夫ヨリ村々之者共  
同郡下芳賀大里正今井郁太郎殿方へ罷越頻リニ乱暴仕  
居申候へ共私義ハ手ヲ着不申夫ヨリ同郡一宮村へ参リ  
同所ニ止リ居申候処出先村々之者共最早同郡白石村ま



て押行同村大里正深井文平殿宅放火致し既ニ銃隊御差  
向御搏拏相成候由ニ而多人數之者共一宮村迄逃歸り候  
付右始末承り居申中同所へ租税御懸り渡邊大属様同平  
野権大属様御出張願之筋可申出旨被仰聞母谷喜十郎私  
共菅野村組合為惣代願置之趣申上候処種々御説諭之上  
私共ヨリ双方理解いたし俱々引取候様被仰聞執連も直  
ニ引取候義ニ御座候

右之通申上候付被仰聞候ハ真以難渋情願之義有之候得者  
穩ニ筋々江可申出之処無其義徒党企出訴致し外多人數  
ニおゐてハ大里正里正共居宅乱暴或ハ放火致し候ニ立至  
リ其節先立候もの見覺又者姓名等伝聞且俱々手を着暴動  
致し候義可有之与再応御吟味を被り候得共前条之外差蔵  
し候義更ニ無御座段申上候処右様徒党企出訴致し郡中  
を為騷候始末不埒至極之旨御吟味を受申披無御座奉恐入  
候

右之通相違不申上候已上

明治五年壬申三月十五日

吉村 新三

断獄御役所

加

備前国津高郡河内村之内山条百姓竹谷槌蔵口書

岡山県

備前国津高郡河内村之内山条百姓

銀三郎伴

竹谷 槌蔵申口

申三十五歳

先般村々一同動揺仕候始末有体申上候様御吟味ニ御座候  
私義農業専ラニ而高拾石所持仕居申候然ル処昨未年十  
二月朔日母義不快居申候付私叔父赤坂郡西中村百姓岸  
田染太郎見廻ニ罷越候ニ付同郡内先般動揺致し候一条  
如何様之訳柄ニ候哉と相尋候処上郷村々ヨリ押懸ケ参  
リ不随者者居宅打毀チ候様与申誘引致し候所ヨリ多人  
數ニ相成御年貢米十分一ニ相成候様願立候趣被囑同人  
義翌二日朝罷帰申候然ル処昨未春已来村方田畑御改正  
ニ付私御年貢米従前より六斗四升計り多分払上候様相  
成難渋ニ付兼而何と欺相願度折柄右之咄承知仕候間同  
三日朝四ツ時頃村内百姓吉村新三ニ出逢前条之次第咄  
此最寄ニも十分一願上候而者如何哉と私ヨリ申談し候

処可然旨申尤同人義者最早前日同郡河内村之内富谷百姓逢坂熊八江出訴可致様及談示居申旨相咄罷在候折柄村内百姓寺門石太郎同吉村林之次通り掛り候付新三ヨリ兩人へも右之趣咄し合相別レ私ヨリも村内最寄之者江者不取敢伝置申候私義同夕六ツ半時迄隣家江入湯ニ参り婦宅懸ケ唯今ヨリ出訴可致旨喚立置一旦婦宅仕蓑笠ヲ着杖ヲ携村方野間へ立出候処近郷村々之者共統々罷越竹貝吹立火ヲ焚居申候処一時多人數ニ相成申候前条之外談し合致し候義ニ而者無御座候得共村々之者其人氣立候処ヨリ歎一時ニ多人數ニ相成直ニ一同下筋村々江押行既ニ先立候村々之者共同郡辛香村里正中山辰四郎宅へ相越及乱暴夫ヨリ同郡菅野村大里正坂野倭三三殿方へ罷越候処最早多勢同家へ参り居申私義ハ同家ニ而一飯ヲ請ひ休息致し翌四日曉同所立出同郡横井上村之内字白玉酒造家ニ而是又一飯ヲ請ひ夫ヨリ村々之者共同郡下芳賀大里正今井郁太郎殿方へ罷越頻ニ乱暴仕家財等焼捨候得共私義者始終乱暴者不仕多人數之話ニ随ひ同郡一宮村迄罷出候処同郡白石村大里正深井文平殿方及放火候ニ付既ニ銃隊御差向御搏拏相成候由ニ而多人數一宮村迄逃帰候付右始末承り居申中租税御懸り渡邊大属様同平野権大属様同所へ御出張ニ付右新三同

郡母谷百姓江見喜十郎共ヨリ歎願之次第申上候処速ニ引取候様一同之者へ被仰聞候付同夕引取候義ニ御座候右之通申上候付被仰聞候ハ実ニ難渋歎願之義有之候へハ穩二筋々へ可申出之処無其義徒党相企出訴致し外多人數おるてハ大里正之居宅乱暴或者致放火候ニ立至リ其節先立候者見聞いたし且俱々手を着暴動致候義可有之与再応御吟味ヲ被り候得共前条之外差蔵シ候義更ニ無御座段申上候処右様徒党相企出訴致し郡中ヲ為騒候始末不埒至極之旨御吟味ヲ受申披キ無御座奉恐入候

明治五年壬申三月十五日

竹谷 槌藏

断獄御役所

扣

備前国津高郡河内村之内山条百姓 吉村林之次  
寺門石太郎 口書

岡山県

備前国津高郡河内村之内山条百姓

吉村 林之次

申三十一歳

寺門 石太郎

申四十歳

右申口

先般村々一同動揺仕候始末有体申上候様御吟味ニ御座候  
私共義農専ラニ而林之次義高五石石太郎義高五石三  
斗所持仕居申候然ル処赤坂郡内村々動揺出訴致し候風  
聞罷在候折柄昨未年十二月三日四ツ時頃村内百姓吉村  
新三宅之前ヲ私共通リ掛候処同人并村内百姓竹谷槌藏  
居合セ新三ヨリ申出候ハ此辺も田畑御改正ニ付御年貢  
米却而多分ニ払上候様相成候者も有之難決ニ付赤坂郡  
と同様ニ御三貢米十分一ニ相成候様出願致度旨申二付  
一同之義ニ候得者如何共可致旨答置相別レ申候林之次  
義右帰リ懸村方池普請場夫役ニ参居申者共江右之趣相  
咄し候然ル処同夕五ツ時頃村方野間ニ而誰歟火ヲ焚喚  
立罷在其節村々人氣立居申折柄一時ニ村々之者共相集  
リ多人數ニ相成兩人共罷越申候夫ヨリ直ニ同郡菅野村  
江押行林之次義者同村百姓坂野鉄次郎宅ニ而一飯ヲ請  
ひ石太郎義者同村里正坂野義三郎宅ニ而一飯ヲ請ひ夫  
ヨリ翌四日朝同郡横井上村之内字白玉江押行同所酒造  
家ニ而飲食仕石太郎義同郡辛川村ニ而休息仕居申中多

人数帰来候ニ付同道仕引取申候林之次義同郡一宮村迄

罷越候処大里正同郡白石村深井文平殿宅先立候村々之

者ニ候哉放火仕過ニ砲声相聞へ候付恐敷相成一同ニ先

立帰村仕候付私共決而乱暴仕候場ニ交候義無御座候

右之通申上候付被仰聞候者右様申立候得共新三槌藏ヨリ

談し及候節事留可申筈無其義林之次義者其外江も申伝へ

俱々出願致し外多人數おゐてハ終ニ諸所乱暴致し候ニ立

至リ其節先立候者姓名等伝聞不居申与再庇御吟味ヲ受候

得共前条之外差藏し候義更ニ無御座段右申上候処右様談

ニ請参郡中ヲ為騒候始末不埒之旨御吟味ヲ受申披無御座

奉恐入候

右之通相違不申上候已上

明治五年壬申三月廿五日

吉村 林之次

寺門 石太郎

断獄御役所

扣

備前国津高郡河内村之内富谷百姓逢坂熊八口書

岡山県

備前国津高郡河内村之内富谷百姓

逢坂 熊八申口

申三十八歳

先般村々一同動揺仕候始末有体申上候様御吟味ニ御座候  
私義農業専らニ而高八石三斗所持仕居申候然ル処昨未  
年十二月二日津高郡河内村之内山条百姓吉村新三義立  
寄候ニ付私ヨリ赤坂郡内村々動揺御年貢米拾分一二相  
成候様願上致候趣風聞之儘相咄候処同人申出候ハ我々  
最寄ニも歎願可致様申談候ニ付一同之義ニ候ハ同意  
可致旨申答置相別申候然ル処同三日夕村方野間ニ而誰  
歎火ヲ焚多人數喚立居申候ニ付村内之者共騒立候ニ付  
私義も罷越候得共兼而眼痛仕居候ニ付同郡横井上村之  
内字白玉江参り夫ヨリ佐山越与申所迄罷越同所よ里引  
返し罷帰候ニ付私おゐてハ多人數之者諸所乱暴之場江  
者決而交り不申義ニ御座候  
右之通申上候付被仰聞候者村方一同之義与申立候得共無  
謂徒党ニ与し出訴致し前段新三ヨリ出訴之義申談候旨外  
方江も申談不居申与再応御吟味ヲ受候得共前条之外差蔵  
候義更ニ無御座段申上候処右様徒党ニ与し候始末不埒之  
旨御吟味ヲ受申披無御座奉恐入候  
右之通相違不申上候已上

明治五年壬申三月廿五日

逢坂 熊八

断獄御役所

扣

備前国津高郡河内村之内母谷百姓江見喜十郎口書

岡山県

備前国津高郡河内村之内母谷百姓

江見 喜十郎申口

申四十二歳

先般村々一同動揺仕候始末有体申上候様御吟味ニ御座候  
私義農業専らニ而高七石貳斗七升四合所持仕居申候然ル  
処昨未年十二月三日山勘ニ参帰路同晩七ツ時頃村内字  
片山与申所ニ而津高郡河内村之内山条百姓吉村新三  
出逢候処同人ヨリ申出候ハ赤坂郡内動揺出訴致し就而  
ハ御年貢十分一二相成候様聞へ御座候旨相咄候を承其  
場新三与相別レ帰宅仕居申候処同夜五ツ時頃近郷之者  
共多人數騒敷申村方通行何レモ罷出候様喚立候付村方  
一同罷出候趣故不取敢私義も同様罷出村々多人數ニ附

随ひ津高郡大里正菅野村坂野倭三宅へ罷越飲食等ヲ請ひ翌四日未明ヨリ同郡横井上村之内字白玉<sup>江</sup>暫ク相集り同様飲食仕夫与里同郡大里正下芳賀今井郁太郎宅<sup>江</sup>参候処先立参り候多人数之者共乱暴致し罷在候得共私義者手ヲ着不申夫ヨリ同郡辛川村名前不存酒造家<sup>江</sup>参りは又飲食等仕同郡一ノ宮村迄参り同所ニ止り居申候処先立候村々之者共最早同郡白石村まで押行同村大

里正深井文平宅放火致し候付銃隊御差向御搏拵相成候由ニ而何連も一宮村迄逃帰候旨口々申候を承居申中同村へ租税掛渡邊大属様同平野権大属様御出張歎願筋有之候ハ、申上候様被仰聞候ニ付前書新三端立私共ヨリ村方田畑御改正以来御年貢上納多分ニ相成候怀難決之廉々又ハ御年貢十分一払上ニ相成申上候処至当之義者御採用も可有之御年貢米十分一上納与申義者逆も不相叶旨穩ニ御理解有之引取候様被仰聞候付何も直ニ帰村仕候義ニ御座候

右之通申上候付被仰聞候ハ右様申出候得共多人数之中より里抽被し新三俱々出張役人<sup>江</sup>歎願申出候其方故前以出訴之談示等致し可居申又多人数之者諸所乱暴放火致し候節先立候者見聞致し且俱々手ヲ着暴動致し候義可有之与再先御吟味ヲ受候得共前条之外差蔵し候義更ニ無御座段申

上候処右様多人数ニ与し他村迄出訴致し候始末不埒之旨御吟味ヲ受申披無御座奉恐入候

右之通相違不申上候已上

明治五年壬申三月廿五日

江見 喜十郎

断獄御役所

扣

備前国津高郡河内村之内山条百姓寺門久米吉口書

岡山県

備前国津高郡河内村之内山条百姓

寺門 久米吉口

申四十一歳

先般村々一同動揺仕候始末有体申上候様御吟味ニ御座候私義農業専ニ而高六石式斗四升四合所持仕居申候然ル処昨未年十二月三日夕六半時頃村内百姓吉村新三義私宅<sup>江</sup>入湯ニ罷越居申中村内野間ニ而火ヲ焚何者歟多人数相集り竹貝吹立候ニ付其儘罷帰無程同人義私ヲ喚立候付事実委細ハ心得不申候へ共一同之義与被存候ニ付

備前国赤坂郡西中村百姓

岸田 染太郎申口

申五十九歳

直ニ立出新三同道急キ右場所ニ罷越候処最早村々之者  
共多人数相集居申直ニ一同下郷村々ニ押行私義も附随  
罷越津高郡大里正菅野村坂野倭三宅ニ参リ夫ヨリ翌  
四日早天同郡横井上村之内字白玉名前不存酒造家ニ而  
飲食仕候処存外大酔仕前後忘却同晩薄暮頃迄同村郷中  
堤ニ而快寝仕居申自覺候処最早宅人も近傍ニ不居申ニ  
付其儘生村ニ罷帰候義ニ御座候

右之通申上候付被仰聞候者事実ノ委細不心得候ヘ共村方  
一同之義ニ付集会致し候様申立候得共新三同道ニ而参里  
候其方故前以新三ニ談合居申義又ハ諸所ニ而手ヲ着暴動  
致し候義可有之ニ再応御吟味ヲ受候得共前条之外差蔵し  
候義更ニ無御座段申上候処右様多人数之中ニ加里郡中ヲ  
為騒候始末不埒之旨御吟味ヲ受申披無御座奉恐入候  
右之通相違不申上候已上

明治五年壬申四月三日

寺門 久米吉

断獄御役所

扣

備前国赤坂郡西中村百姓岸田染太郎口書

岡山県

先般津高郡河内村之内山条百姓竹谷槌蔵宅ニ而動揺出訴  
之事件相咄候始末有体申上候様御吟味ニ御座候

私義農業専ラニ而高四石六斗余所持仕居申候然ル処昨

未年十二月朔日親類津高郡河内村之内山条百姓竹谷槌

蔵宅ニ同人母不快ニ付見舞として罷越逗留中槌蔵申出

候ハ先度赤坂郡内村々動揺致し候訳如何之義ニ相尋候

付上郷村々之者共押来リ不隨者居宅打毀チ可申坏ニ誘

ひ出候勢ニ而終ニ多人数ニ相成御年貢米十分一ニ相成

候様歎願仕候旨風聞承込候儘相咄何分御上様ニ対し奉

恐入候義何心なく相咄翌二日朝同家立別罷帰申候尤

私義昨未年十一月廿八日同十二月朔日共赤坂郡内村々

動揺之節多人子之者ニ交リ不申義ニ御座候

右之通申上候付被仰聞候者右様申立候得共赤坂郡動揺之

形勢相伝煽動為致候義ニ可有之ニ再応御吟味ヲ受候得共

前条之外差蔵し候義無御座候

右之通相違不申上候已上

明治五年壬申四月三日

岸田 染太郎

断獄御役所

## 新「大学設置基準」についての一考察

渡 辺 寛 勝

当身延山短期大学々園においてここ数年来、三年制の短期大学を四年制の大学への改組転換が計画されており、文部省も平成三年六月、「大学設置基準の一部を改正する省令」を公布、それに伴って平成三年（一九九二）、七月十七・十八日、於東京タイヤモンドホテル、地域科学研究会主催、「大学・短大の新設置基準の今後の整備」〈原則抑制、質的自由競争時代の新設・改組転換〉、が開催され、それへの出席の機会に恵まれたので、今後、「教育課程」を編成する場合特に重要な問題であるので、大学設置基準、改正のポイント、課題となる点等について少し考えて見たいと思う。



## 大学設置審査内規

新「大学設置基準」についての一考察（渡辺）

平成三年六月二十四日  
大学設置学校法人審査会  
大学設置分科会決定

大学、短期大学、大学の学部、学部の学科、短期大学の学科（以下「大学等」という。）の設置及び収容定員増に係わる学則変更に関する審査は、学校教育法（昭和二十二年法律第二十六号）その他の法令並びに大学設置基準（昭和三十一年省令第二十八号）、大学通信教育設置基準（昭和五十六年省令第三十三号）、短期大学設置基準（昭和五十年省令第二十一号）及び短期大学通信教育設置基準（昭和五十七年省令第三号）（以下設置基準を総称して「大学設置基準等」という。）に定めるもののほか、この内規の定めるところにより実施する。

1、設置の趣旨等

① 教育研究上の理念、目的が具体的かつ明確に示されており、それが、学校教育法に定める大学又は短期大学の目的及び今後我が国高等教育が全体として目指すべき基本方向（教育機能の強化、教育研究の高度化、生涯学習等への対応）に照らし、適切なものであること。

② 教育研究上の理念、目的に沿った設置の構想は、実現の見通しが十分あるものであること。

③ 大学又は短期大学の名称は、設置の趣旨に照らし適切なものであること。

④ 大学又は短期大学の位置は、教育研究上適当なものであること。

2、教育研究上の基本組織

学部、学科等の教育研究上の基本組織は設置の趣旨に照らし適切に編成されているものであること。

3、教育課程等

① 教育課程は、設置の趣旨に照らし適切なものであること。

② 教育課程の編成に当たっては、大学設置基準第十九条第二項及び短期大学設置基準第五条第二項の規

定の趣旨が効果的に達成されるよう配慮されているものであること。

③ 各授業科目の名称、内容、配当年次及び単位数が適切であるとともに、履習方法及び卒業の要件が適切であること。

④ 教育課程の展開に当たっては、少人数による授業、対話・討論型、双方向的な授業の積極的な導入、十分な履習指導の実施に配慮されているとともに、授業計画の作成等についてもなるべく配慮されているものであること。

⑤ 教育課程はもとより、課外活動、施設・設備面を含め、大学教育全体を通じて設置の趣旨が達成されるよう配慮されているものであること。

4、教員組織

① 教員組織は、教育課程を展開するのにふさわしいものであること。

② 教育課程の目指すところを実現する上で主要と認められる授業科目については、専任教員が配置されていること。

③ 教員組織の年令構成は、均衡がとれていること。  
④ 実験、実習又は実技等の授業科目が開設されてい



る学部又は学科等については、助手等が配置されていること。

- ⑤ 教員組織の年次の整備は全体計画が確定しており、かつ教育に支障のない限度において認めることができることとする。

- ⑥ 教員の資格審査に当たっては、特に教育上の能力に配慮すること。

#### 5、校舎等施設

- ① 校舎等施設は、教育課程を展開する上で、必要な種類、数及び規模を有し、かつ質的に充実しているものであること。

- ② 大学と短期大学が同一敷地内にある場合の校舎等施設の共用は、教育に支障のない限度において認めることができることとする。

大学又は短期大学と高校以下の学校との校舎等施設の共用は、管理部門を除き、原則として認めないこととする。

- ③ 暫定校舎、簡易建物は、原則として校舎とは認めないこととする。なお、校舎等施設の年次の整備は、全体計画が確立しており、かつ教育に支障のない限度において認めることができることとする。

新「大学設置基準」についての一考察（渡辺）

と。

- ④ 情報処理関係の授業科目が開設される場合には、情報処理学習のための施設が備えられていること。

当該授業科目が開設されない場合においても、大学教育全体を通じて情報処理能力の育成を図る観点から学習施設が備えられていることが望ましいこと。

- ⑤ 外国語関係の授業科目が開設される場合には、語学学習のための施設が備えられていること。当該授業科目が開設されない場合においても、大学教育全体を通じて外国語能力の育成を図る観点から、語学学習施設が備えられていることが望ましいこと。

- ⑥ 大学又は短期大学の新設の場合には、体育館が備えられていること。

学部の増設又は短期大学の学科の増設の場合には、原則として体育館が備えられていること。

#### 6、校地

- ① 大学の校地の基準面積について、教育に支障のない限度において、二分の一の範囲内で校地の面積の一部を減ずることができるのは、学部の学科増、改組転換（大学の設置等の認可の申請手続等に関する規則第五条に該当するものに限る）の場合とする。

新「大学設置基準」についての一考察（渡辺）

と。なお、いわゆる大都市割引きの特例の廃止に伴う経過措置は従前どおり取り扱うこととする。

② 校地の基準面積の二分の一以上は、自己所有であること。

③ 校地については、年次的整備は認めないこととする。

7、教育研究経費

教員の研究費を含め、教育研究活動に要する経費が充実にしていること。

8、昼夜開講制

昼夜開講制により授業を行う学部、学科等における校舎面積及び専任教員数については、当該学部、学科等にいわゆる夜間主コースが置かれている場合には、それを夜間学部と見なした場合に適用される基準の特別措置を限度として、校舎面積及び専任教員数を減ずることができることとする。この場合においては夜間主コースの収容定員は昼間主コースの収容定員と分けて設定されていること。

9、学生確保

長期的に安定した学生の確保について、十分な見通しが示されていること。

10、定員超過、欠員

① 収容定員超過率が一定値以上（当面一五以上）の学部又は短期大学の学科を有する大学又は短期大学については、原則として大学等の設置及び収容定員増は認めないこととする。

② 一定期間相当程度の欠員が生じている学部又は短期大学の学科を有する大学又は短期大学については、原則として改組転換以外は認めないこととする。

11、管理運営

① 大学又は短期大学としてふさわしい管理運営が行われるため、教員の人事に関する規程、教授会等の組織に関する規程などの学内諸規程が十分に整備されていること。

② 学内諸規程は、教学組織の意向が適切に反映されるよう配慮されているものであること。

12、資産及び維持経営の方法

資産及び維持経営の方法は、安定的な大学経営の見通しが示されているものであること。

13、自己点検・評価等

自己点検・評価の実施に関する大学又は短期大学としての対応（実施方法、実施体制、結果の活用、

評価項目等）が示されていること。

備考

- 1 この内規は、大学設置基準等の改正に合わせて、平成三年七月一日から適用すること。

ただし、平成三年度の審査における体育館、情報処理学習施設、語学学習施設定員超過、欠員に関する規定の適用については、弾力的に取り扱うことができることとする。

- 2 この内規に定めるもののほか、審査上必要な事項は別に定めることとする。

◇

## 大学設置基準の一部を改正する省令要綱

### 第一 総則的事項

自己評価等に関する次のような規定を新設したこと。

#### ○ 自己評価等

- ① 大学は、その教育水準の向上を図り、当該大学の目的及び社会的使命を達成するため、当該大学における教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行うことに努めなければならない。

- ② 前項の点検及び評価を行うに当たっては、同項の趣旨に即し適切な項目を設定するとともに、適当な体制を整えて行うものとする。

### 第二 教育研究上の基本組織に関する事項

#### 1 学部

学部の種類の例示の規定を削除したこと。

#### 2 学科

専攻課程についての規定を削除したこと。

#### 3 課程

- ① 学部の教育上の目的を達成するために有益かつ適切であると認められる場合には、学科に代えて学生の履修の区分に応じて組織される課程を設けることができることとしたこと。

- ② 専攻課程についての規定を削除したこと。

### 第三 教員組織に関する事項

#### 1 学科目制

学科目を担当する教員に関する例外についての規定の整理を行ったこと。

#### 2 講座制

講座に置かれる教員及び講座の担当に関する例外についての規定の整理を行ったこと。

3 講座外授業

講座外授業についての規定を削除したこと。

4 専任教員数

① 大学における専任教員の数を、当該大学に置く学部の種類に応じ定める数と大学全体の収容定員に定むる数を合計した数以上としたこと。

② ①に関連し、専任教員数を定める現行の別表第一から第三の二までについては、入学定員に基づき算定する方式から収容定員に基づき算定する方式に改めるとともに、学部の種類例示の廃止、授業科目ごとの区分の廃止、昼夜開講制に対応した規定の整備を行ったこと。

5 兼任の教員の合計数は、全教員数の二分の一を超えないものとする旨の規定を削除したこと。

第四 教員の資格に関する事項

1 教授の資格

① 教授の資格は、各号の一に該当することに加え、教育研究上の能力があると認められる者としたこと。

② 博士の学位を有する者については、それに加え、研究上の業績を有することを必要とすることとしたこと。

③ 旧制の大学、高等学校等における教授歴を有する者に関する規定を削除したこと。

2 助教授の資格

① 助教授の資格は、各号の一に該当することに加え、教育研究上の能力があると認められる者としたこと。

② 旧制の大学の大学院の在学歴又は旧制の高等学校、専門学校等における教授歴に関する規定を廃止したこと。

第五 収容定員に関する事項

1 「学生定員」を「収容定員」に改めたこと。

2 収容定員を学則で定めるに当たっては、昼夜開講制を実施するときはこれに係る収容定員を、編入学定員を設けるときは入学定員及び編入学定員を、それぞれ明示するものとしたこと。

第六 教育課程に関する事項

1 教育課程の編成方針

教育課程の編成方針に関する次のような規定を新設したこと。

○ 教育課程の編成方針

① 大学は、当該大学、学部及び学科又は課程等の教育上の目的を達成するために必要な授業科目を開設

し、体系的に教育課程を編成するものとする。

- ② 教育課程の編成に当たっては、大学は、学部等の専攻に係る専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮しなければならない。

## 2 授業科目の区分

授業科目の区分に関する規定を削除したこと。

## 3 単位の計算方法

- ① 大学が単位数を定めるに当たっては、一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により単位数を計算するものとしたこと。

ア、講義及び演習については、十五時間から三十時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもって一単位とする。

イ、実験、実習及び実技については、三十時間から四十五時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもって一単位とする。ただし、芸術等の分野における個人指導による実技の授業については、大学が定める

時間の授業をもって一単位とする。ただし、芸術等の分野における個人指導による実技の授業については、大学が定める時間の授業をもって一単位とすることができ。

- ② 上記①にかかわらず、卒業論文、卒業制作等の授業科目については、これらの学修の成果を評価して単位を授与することが適切と認められる場合には、これらに必要な学修等を考慮して、単位数を定めることができるものとしたこと。

## 4 一年間の授業期間

一年間の授業期間については三十五週にわたることを規定することとどめ、具体的な授業日数についての定めを設けないこととしたこと。

## 5 各授業科目の授業期間

各授業科目の授業期間については、教育上特別の必要があると認められる場合には、外国語の演習、体育実技等に限らず十週又は十五週より短い特定の期間において授業が行うことができることとしたこと。

## 6 授業を行う学生数

大学が一の授業科目について授業を行う学生数は、授業の方法及び施設、設備その他の教育上の諸条件を考

慮して、教育効果を十分にあげられるような適当な人数としたこと。

#### 7 昼夜開講制

昼夜開講制に関する次のような規定を新設したこと。

#### ○ 昼夜開講制

大学は、教育上必要と認められる場合には、昼夜開講制（同一学部において昼間及び夜間の双方の時間帯において授業を行うことをいう。）により授業を行うことができる。

### 第七 卒業の要件等に関する事項

#### 1 単位の授与

卒業論文、卒業研究、卒業制作等の授業科目については、大学の定める適切な方法により学修の成果を評価して単位を与えることができるものとしたこと。

2 大学以外の教育施設等における学修、大学以外の教育施設等における学修に関する次のような規定を新設したこと。

#### ○ 大学以外の教育施設等における学修

① 大学は、教育上有益と認めるときは、学生が行う短期大学又は高等専門学校専攻科における学修その他文部大臣が別に定める学修を、当該大学におけ

る授業科目の履修とみなし、大学の定めるところにより単位を与えることができる。

② 前項により与えることができる単位数は、単位互換に関する規定により当該大学において修得したものとみなす単位数と合わせて三十単位を超えないものとする。

#### 3 入学前の既修得単位等の認定

入学前の既修得単位等の認定に関する次のような規定を新設したこと。

#### ○ 入学前の既修得単位等の認定

① 大学は、教育上有益と認めるときは、学生が当該大学に入学する前に大学又は短期大学において履修した授業科目について修得した単位（後記4の科目等履修生として修得した単位を含む。）を、当該大学に入学した後の当該大学における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。

② 大学は、教育上有益と認めるときは、学生が当該大学に入学する前に行った前記2の大学以外の教育施設等における学修を、当該大学における授業科目の履修とみなし、大学の定めるところにより単位を与えることができる。

③ 前記①及び②により修得したものとみなし、又は与えることのできる単位数は、編入学、転学等の場合を除き、当該大学において修得した単位以外のものについては、合わせて三十単位を超えないものとする。

#### 4 科目等履修生

科目等履修生に関する次のような規定を新設したこと。

#### ○ 科目等履修生

大学は、大学の定めるところにより、当該大学の学生以外の者で一又は複数の授業科目を履修する者（「科目等履修生」という。）に対し単位を与えることができる。

#### 5 卒業の要件等

- ① 卒業の要件は、大学に四年以上在学し百二十四単位以上を修得することとし、授業科目の区分に応じて修得すべき単位数についての規定は削除したこと。
- ② 前記①にかかわらず、医学又は歯学に関する学科に係る卒業の要件は、大学に六年以上在学し、百八十八単位以上を修得することとしたこと。ただし、教育上必要と認められる場合には、大学は、修得すべき単位の一部の修得について、これに相当する授

業時間の履修をもって代えることができるものとしたこと。

③ 前記①にかかわらず、獣医学に関する学科に係る卒業の要件は、大学に六年以上在学し、百八十二単位以上を修得することとしたこと。

④ 学士の種類を廃止したこと。

#### 第八 校地、校舎等の施設及び設備に関する事項

##### 1 校舎等施設

① 校舎には、なるべく情報処理及び語学の学習のための施設を備えるものとしたこと。

② 大学は、校舎のほか、原則として体育館を備えるとともに、なるべく体育館以外のスポーツ施設及び講堂並びに寄宿舎、課外活動施設その他の厚生補導に関する施設を備えるものとしたこと。

③ 夜間において授業を行う学部を置く大学又は昼夜開講制を実施する大学にあつては、研究室、教室、図書館その他の施設の利用について、教育研究に支障のないようにするものとしたこと。

④ 校舎面積に係る現行の第一表及び第二表について、入学定員に基づき算定する方式から収容定員に基づき算定する方式に改めるとともに、学部の種類の例

示の廃止、授業科目ごとの区分の廃止、昼夜開講制に対応した規定の整備を行ったこと。

## 2 図書館等の資料及び図書館

大学が備える図書及び学術雑誌の冊数及び種類数についての規定を削除し、図書等の資料及び図書館に関する次のような規定を新設したこと。

### ○ 図書等の資料及び図書館

① 大学は、学部の種類、規模等に応じ、図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他の教育研究上必要な資料を、図書館を中心に系統的に備えるものとする。

② 図書館は、前記①の資料の収集、整理及び提供を行うほか、情報の処理及び提供のシステムを整備して学術情報の提供に努めるとともに、前記①の資料の提供に関し、他の大学の図書館等との協力に努めるものとする。

③ 図書館には、その機能を十分に発揮させるために必要な専門的職員その他の専任の職員を置くものとする。

④ 図書館には、大学の研究を促進できるような適当な規模の閲覧室、レファレンス・ルーム、整理室、書庫等を備えるものとする。

⑤ 閲覧室には、学生の学習及び教員の教育研究のために十分な数の座席を備えるものとする。

## 第九 施行期日等

1 この改正は、平成三年七月一日から施行するものとしたこと。

2 この改正の施行の際、現に設置されている大学については、第八の1の②の体育館に係る部分の適用について、なお従前の例によることができるものとしたこと。



## 大学の自己点検・評価項目（例）

### ◇教育理念・目標等

○大学（学部）の教育理念・目標の設定

○教育理念・目標の点検・見直し

○大学（学部）の将来構想

○教育研究の活性化・充実のためのこれまでの取り組み

### ◇教育活動

（学生の受け入れ）

○学生募集・入学選抜の方針・方法



○学生定員充足状況（志願者数、合格者数、入学者数、在学者数等）

○編入学の方針と状況

（学生生活への配慮）

○奨学金制度（大学独自の奨学金、企業等からの奨学金等）、授業料減免の状況

○学生生活相談

○課外活動

（カリキュラムの編成）

○カリキュラムの編成方針と教育理念・目標との関係

○一般教育の内容とカリキュラム全体における位置付け

○外国語教育の内容とカリキュラム全体における位置付け

○保健体育の内容とカリキュラム全体における位置付け

○専門教育の内容とカリキュラム全体における位置付け

○カリキュラムの編成及び見直しの方法・体制（教育指導の在り方）

○各授業科目ごとの授業計画（シラバス）の作成状況

新「大学設置基準」についての一考察（渡辺）

○カリキュラム・ガイダンスの実施状況

○クラスの大きさ、編成方法

○教員一人当たりの授業時間数

○各授業科目担当者間での授業内容の調整

○演習・実験等の実施状況

○視聴覚教育の実施状況

○他学科、他学部聴講の方針と状況

○転学部、転学科の方針と状況

○他大学との単位互換の方針と状況

○進級状況（留年、休学、退学）

○教授方法の工夫・研究

○教授方法の工夫・研究のための取り組み

○教員の教員活動に対する評価の工夫（学生による授業評価等）

（成績評価、単位認定）

○成績評価、単位認定の在り方・基準

（卒業生の進路状況）

○卒業生の就職状況

○学部卒業生の大学院への進学状況

◇研究活動

○構成員による研究成果の発表状況

○研究誌の発行状況と編集方針

○共同研究の実施状況

○研究費の財源（学外からの資金の導入状況、科学研究費補助金の採択状況等）

○研究費の配分方法

○学会活動への参加状況

◇教員組織

○専任教員・非常勤講師の配置状況

○教員補助者、研究補助者の配置状況

○出身大学の構成

○年齢構成

○採用、昇進の手順・基準

○教員の兼職の方針と状況

○教員人事についての長期計画

◇施設設備

○施設設備の整備・運用状況

○図書館の利用状況

○学術情報システムの整備・活用状況

◇国際交流

○留学生の受け入れ状況（受け入れ数、奨学金、宿舍等）、指導体制

○在学生の海外留学・研修の方針と状況

○教員の在外研究の方針と状況

○海外からの研究者の招致状況

○海外の大学との交流協定の締結状況と活用状況

◇社会との連携

○公開講座の開設状況

○社会人の受け入れ（特別選抜制度、特別の履修コース等）

○教員の学外活動状況

○学外の意見を教育研究に反映させるしくみ

◇管理運営・財政

○教育研究に関する意志決定の方法・体制

○事務組織

○予算の編成と執行の方針と状況

○学外資金の導入状況

◇自己評価体制

○自己評価を行うための学内組織

○教育研究活動等の公表

○評価をフィードバックするためのしくみ

◇

大学教育において、今後の流動的かつ不透明な時代に

においても、我が国が進むべき道を自ら切り開き、あらゆる分野で活力を維持し、世界に貢献していくためには、學術の振興と人材の養成を担う大学の役割がますます重要となってくる。

特に大学教育の観点からは、社会の各方面で活躍し得る人材の養成、時代の変化や學術の新たな展開に対応し得る能力の育成に努めることが期待される。また、国民の意識や生活の多様化、社会人教育のニーズの拡大等に伴い、多様な形態での学習機会を提供することも期待されている。

各大学において、自らの教育理念・目的に基づき、かつ、學術や社会の要請に適切に対応しつつ、特色あるカリキュラムを編成・実施することが、全体としての大学教育の充実や社会が求める優れた人材の養成に資することとなる。また、このためには、必要に応じ、教育組織の柔軟な設計とその充実が求められる。

学生の学習意欲の向上を図り、学習内容を着実に消化させるためには、大学の側において、教員の教授内容・方法の改善・向上への取組み（ファカルティ・ディベロップメント）、授業計画（シラバス）の作成・公表、充実した効果的なカリキュラム・ガイダンスなどを積極的に

推進する必要がある。学生の学習の充実を図る観点から、単位制の趣旨を踏まえつつ、その計算方法の見直し、運用面の改善を図ることや学生の学習を適切に評価することも重要である。このような改善を進める際、初等中等教育の動向や実情に配慮する必要がある。

また、流動的で複雑な社会や學術の新たな展開、国際化・情報化の進展に適切に対応し得る知的・身体的能力の育成が重視されるべきであり、この意味で、自ら考え、判断させる教育、幅広く深い教養及び学問の基礎を重視したカリキュラムの編成、情報処理能力・外国語能力・表現能力等学問の基礎となる能力の訓練等が重要である。その際、例えばゼミナール形式の授業、ティーチング・アシスタントの活用等により、一方的な知識の伝達にとどまらない双方向的授業が現在以上に重視される必要があり、また、関連する情報処理・語学学習等の施設・設備の整備も重要である。

さらに、今後一層増加することが見込まれる留学生や様々な履修形態による社会人学生等の教育についても、それぞれの事情に応じたきめ細かな配慮が必要となる。

また、大学生活全体を通じて、学生の心身の健康の保持・増進に一層努めることが重要である。学生の学習活動や

快適な学生生活への配慮という観点から、大学の学習環境の整備を進めることも重要であり、このため、附属図書館の機能の充実、体育館を始めとするスポーツ施設や福利厚生施設等の整備が一層重視される必要がある。

一般教育の理念・目標が大学教育全体の中で実質的、効果的に実現されるよう、カリキュラム及び教育体制の改善が求められている一方、専門教育のカリキュラムについても、各専門分野の研究の進展、国際領域への展開、社会の多様化・複雑化等に対応して、内容の現代化、専攻領域の広がり求められている。

大学の生涯学習機関としての役割の増大に伴い、大学教育へのアクセスの多様化や授業の履修形態の柔軟化を図るなど、多様な学習機会の提供に努めることが重要になっている。

各高等教育機関が、地域社会に積極的に貢献することが要請されているが、そのためには何よりまず、各高等教育機関が優れた教育研究の実績を挙げ、社会的な評価を一層高めることが肝要である。さらに、各高等教育機関が地域の文化の中心として、また地域コミュニティの一員として、公開講座の開設、図書館・運動施設等の開放、地域の諸活動への教員の協力、地域住民への各種

情報提供サービス、産官学の研究協力等を通じ、地域社会に貢献することが期待されている。

要するに、高等教育の質的充実について、時代の変化への対応能力の育成、学生の学習に配慮した教育プログラムの提供、教員の教育能力・意欲の向上、学生の国際交流に配慮した教育内容・方法の工夫等の教育機能の強化、教育研究環境の高度化、研究の後継者たる優秀な人材の確保・育成等の世界的水準の教育研究、履修形態等の柔軟化、多様な学習成果に対する評価の工夫、地域社会への積極的な貢献等の生涯学習等への対応などである。



以上述べたように、新「大学設置基準」についての概要に少しふれてみたが、当身延山知期大学々園においても、これらのことを充分考慮に入れながら、四年制の大学への改組転換に伴う「教育課程」の編成に取り組むとともに、高等学校の「教育課程」も含めて、今後のあり方を考える必要があると思われる。

# 身延本『本朝文粹』の伝来過程

学習院大学大学院生（博士後期課程）

中 尾 真 樹

## 1 身延本の価値

『本朝文粹』は、九世紀から十一世紀初めにかけて邦人の手で作られた優れた漢詩文を類聚して、十一世紀半ばに成立した。編者の藤原明衡（九八九～一〇六六）は、漢文学の衰退期にあつて、唐風文化隆盛時代の遺産を後代に伝えるために本書を編纂したと考えられる。内容は詩賦・勅書・官符・奏状・詩序・願文など多岐にわたっており、作品の種類によって部門に分けて分類し、全十四巻に収録している。このようなジャンル別の分類形式は文選に倣ったものとされるが、結果的に本書を文章作成の際の模範例文集として利用しやすいものにした。たとえば、奏状起草する場合には奏状部を収めている巻第五・六・七を参照し、随意に作品を選んで参考にすればよい。このように実用書として享受されたので、本書の古写本は比較的多く伝存しているが、同じ理由から伝本のほとんどは全巻揃った完本としてではなく、一巻もしくは二巻のみの形で所蔵されている<sup>①</sup>。利用者は全十四巻に分類収録された様々なジャンルの中で、自分に必要な文章を含む巻だけを手元に置いておけば用は済む。たとえば願文を頻繁に作成しなければな

身延本『本朝文粹』の伝来過程（中尾）

## 身延本『本朝文粹』の伝来過程（中尾）

らない僧侶は、願文部を収めた巻第十三を参照すれば事足りるのであり、官位の昇進を求める奏状を収録する巻第六などは不用である。このような事情から、本書を享受するにあたっては、全十四巻から必要な巻だけを抜出して転写され、そのまま伝存することになったと考えられる。現在三十種ほどの古写本が知られているが、そのうち八割は零本であり、完本として残っているのは身延山久遠寺所蔵本（以下「身延本」）とその転写本のみなのである。寛永六年刊古活字本も身延本の系統を引いており、これを底本とした国史大系本が、現在もっとも利用されている本文である。したがって、『本朝文粹』の全文は身延本によって今に伝えられているのであり、書写年代が古く奥書を残していることも併せて、諸本中の最善本と目されるのである。本稿では、この最善本たる身延本について書誌的な面から考察を加え、その伝存の過程を明らかにしたい。

## 2 身延本の形態

身延本は、巻第一を欠く十三巻の卷子本で、料紙は天地28・5センチ、幅40・6センチの楮紙を用いている。烏糸欄が引かれており、界高22・1センチ、界幅2・6センチ、各紙十五行である。各紙の中ほどに縦の折目跡が残っているが、これは中世に冊子本に改装された際の名残りである。巻首から順に折目を観察すると、一つおきに糊のじみ跡が残っているので、折本の背を糊付けした旋風装であったことがわかる。装丁は昭和三十三年の修理の際に卷子本に直され、冊子本であった時の表紙は別に保存されている。表紙は白色のものと茶色のものと二種類があり、白い表紙は、天地27・9センチ、幅19・8センチ、茶色の表紙は天地28・5センチ、幅19・8センチである。本文には墨筆の仮名点・返点・声点（圈点）・異本注記・本文注記、朱筆のヲコト点が付され、紙背には、本文中の語句に關す

る注記が記されている。<sup>(3)</sup>

各巻の奥書は次の通りである。

【奥書】

(巻第二)

御本云、／文永八年二月九日、以<sub>二</sub>相州御本<sub>一</sub>、書写／点校畢。抑此御本者、最明寺禪門之／御時、仰<sub>二</sub>故教隆真人<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>点云々。

(巻第三)

文永六年五月廿一日、以<sub>二</sub>相州御／本<sub>一</sub>、書写／点校畢。抑此御本者、／最明寺禪門之御時、仰<sub>二</sub>故教／隆真人<sub>一</sub>、加<sub>二</sub>点而巳<sub>一</sub>。

(巻第四)

本奥云、／此書、於世間尤大要也。仍手身朱墨／共加<sub>二</sub>点畢<sub>一</sub>。／前參河守清原 在判

(巻第五) (奥書部分欠損)

(巻第六)

文永八年、／此書者、最明寺禪門之御時、／仰<sub>二</sub>故教隆真人<sub>一</sub>、終<sub>二</sub>朱墨／之点<sub>一</sub>而巳。

(巻第七)

本奥云、／文永七年六月廿一日、以<sub>二</sub>相州御本<sub>一</sub>、書写／点校畢。抑此御本者、最明寺禪門之／御時、仰<sub>二</sub>故教隆真人<sub>一</sub>、被<sub>二</sub>加<sub>二</sub>点<sub>一</sub>云々。

身延本『本朝文粹』の伝来過程(中尾)

（卷第八）

文永八年三月七日、以相州御／本二書写<sup>（寫本）</sup>□□□。／抑此御本者、最明寺禪門之御時、仰二故教隆真人一、被二加點二云々。

（卷第九）（卷末部分散佚）

（卷第十）

此書、於世間二尤大要也。仍手身／朱墨共加點畢。／前參河守清原 在判

（卷第十一）

本奥云、／文永七年六月廿一日、以相州御本一、書／写点校畢。抑此御本者、最明寺禪門之御時、仰二故教隆真人一、被二加點二云々。

（卷第十二）

本奥云、／最明寺禪門之御時、仰二故教隆真人一、被二加點二云々。

（卷第十三）

建治二年潤三月十六日、於三階堂杉谷一、／令二書写二畢。

本云、／最明寺禪門之御時、仰二故教隆真人一、被二加點二云々。

（卷第十四）

此書、世間流布之点雖<sup>レ</sup>□、／猶紕繆有歟。仍最明<sup>（寫本）</sup>□／禪門之御時、課二故教隆／真人一、被二加點二云々。



奥書中に見える最明寺禪門とは、執權北条時頼（一二二七—一二六三）を指している。康元元年（一二四六）に執權職を退いて出家し、最明寺入道覚了房道崇と号したので、「最明寺禪門」と呼ぶ。また、建長元年（一二四九）に相模守に任じたことから、その蔵書を「相州御本」と称しているのである。

清原教隆（一一九九—一二六五）は、明経博士家清原家の出自で、權少外記・相模介・音博士を経て仁治元年（一二四〇）に正五位下に進み、その後参河守・直講・大外記などを歴任した。兄の仲宣が朝廷に仕えたのに対して、教隆は鎌倉へ下って將軍の侍講を勤め、幕府の文教に大きく貢献した。金沢実時が教隆に師事し、のちに金沢文庫を設立するに至ったことはよく知られている。

奥書の内容を整理すると、まず、北条時頼が清原教隆に加点させた本があり、「相州御本」と呼ばれる。加点が行われたのは一二六五年（教隆の没年）以前で、教隆が鎌倉で活躍した一二五〇年代であろう。奥書の文面からすると、本文自体はそれ以前から用意されていたようである。

この「相州御本」が、文永年間に転写される。文永六年（一二六九）に巻第一と巻第三、文永七年に巻第七と巻第十一、文永八年に巻第六と巻第八の書写点校が完了しており、巻第一から順に転写されたのではない。阿部隆一氏は、北条実時が文永九年に『本朝統文粹』を書写し、金沢文庫に収蔵していることに注目し、文永年間に「相州御本」を転写したのは実時であろうとしている。

文永書写本は、さらに建治二年（一二七六）に二階堂杉谷において転写される。二階堂とは、中世に鎌倉の二階堂に伽藍を構えていた永福寺の別名で、ここの僧侶が金沢文庫の文永写本を借り受け、転写したのであろう。この作業は数人で行われたようで、巻によって筆跡が異なっている。この建治写本が、いつごろから身延山に所蔵されるよう

になったのかについては不明である。

書記形式についてみると、各巻は「本朝文粹巻第（幾）」という内題から始まる。内題は第一紙の一行目を空白にして二行目に書かれるが、この一行目に後世の書入れが記されている。巻第二・四・六・七・八・十二に「甲州身延山久遠寺公用」、巻第三・九・十三に「甲州身延山久遠寺常住」、巻第十四は巻末の奥書の後に「身延山久遠寺公用」とある。巻第五・十・十一は巻首部分が破損しており、それと同時に書入れが失われたと考えられるので、もとは全ての巻に記されたのであろう。ただ、巻第十四のみ巻末に記されていることには注意が必要で、これは書入れが行われた時に、すでに巻首が破損していたために、巻末に記したことを示している。つまり、ある時期に各巻の巻首に書入れが行われたが、その時巻第十四は巻首部分が破損していたので、巻末に書入れられた。その後、巻第五・十・十一の巻首も破損して書入れが失われたのである。

内題に続いて、それぞれの巻に収録されている作品の目録が記載される。近世の刊本などはこの部分を独立させ、全体の目録として一巻にまとめて全十五巻に仕立てており、京都大学図書館所蔵の江戸時代初期の写本もこれに倣っている。記載形式はまず天界線に接して部立ての名称を書く。項目によって下位分類されている部門の場合は一段上げて項目名を記し、その下に作品名と作者名を列記していく。この形式は諸本に共通している。目録の後に本文が始まる。身延本の本文は全文楷書で書記され、ヨコト点・仮名点・声点・返点などは本文部分にだけ施される。本文が終了すると、一行あけて「本朝文粹巻第（幾）」という尾題を書き、さらに二行ほどあけて奥書が記される。

### 3 本文の欠損部分について

身延本は室町時代以降、盛んに転写されており、各地に身延本系の写本が残されている。現在、身延本系以外の古写本がすべて断片的な形でしか伝わっていないことを考えると、身延本は明經家清原教隆の加點本の系統を引く貴重な完本として、古くから重要視されてきたことが窺われる。各巻巻首に記された「身延山久遠寺公用」・「身延山久遠寺常住」という語も、その重要性を意識したものであろう。しかし、転写を重ね閲覧の機会が増えれば、それだけ損傷を受ける危険も増大する。このような事情からか、身延本には本文が失われている箇所が散見する。

これらの本文の欠損を繕って元の文章の再生を図る際、出来る限り破損前の本文を正確に復元することが望ましいことは言うまでもない。身延本の場合、転写本が多数伝存しているので、転写が行われた後に受けた損傷であれば、これらによって本来の本文に近いものを再生することが可能である。身延本系の写本には、次のようなものがある。

①陽明文庫所蔵 室町末期写本 十四冊

卷第三・四・七・八・十一・十二・十三に身延本の文永の年紀をもった本奥書を転記する。

卷第十四に次の奥書を有す。

平々他々平々他 他々平々他々平  
他々平々々他々 平々他々々平々

ニ	ム	ヲ	コト	ハ
テ	ス	一	五	三

身延本「本朝文粹」の伝来過程（中尾）

弘安九年<sup>丙戌</sup>三月中旬、於上野国伊野郷<sup>二</sup>如<sup>レ</sup>形仏法興隆儀相存。生年廿五書了。／後見人、念仏十返、南無阿弥陀仏一。

② 静嘉堂文庫所蔵 室町末期写本 十四冊

卷第一・二・三・四・七・八・十・十一・十四に文永の本奥書を記す。

③ 大和文華館所蔵 慶長二十年写本 十四冊

卷第一・二・四・六・七・十・十一・十二・十四に文永の本奥書を記す。後表紙見返に「正五位上荒木田神主永春求<sup>レ</sup>之」という識語がある。また、巻第五に次の奥書を有す。

于<sup>レ</sup>時慶長乙卯大簇下浣、依<sup>二</sup>貴命<sup>一</sup>、穢<sup>二</sup>白紙<sup>一</sup>畢。

④ 内閣文庫所蔵 江戸初期写本 十四冊

林羅山旧蔵本

卷第四・八に文永の本奥書を記す。

⑤ 国会図書館所蔵 寛永元年写本 二卷合綴七冊

⑥ 京都大学図書館所蔵 江戸初期写本 二卷合綴七冊

右のうち、特に①④は、本文のみならず仮名点や異本注記にいたるまでかなり忠実に転写しており、身延本本文の破損箇所が多くは、これらによって補うことができる。

つぎに本文が大幅に欠落している箇所について、順次考察を加える。

a 卷第一の散佚

陽明文庫本と静嘉堂文庫本は全十四冊なので、これらの転写が行われた室町時代末期の時点では身延本も全巻揃っていたのであるが、その後間もなく巻第一が散佚したようである。近世初期にこの欠巻についての記録がある。慶長十九年（一六二四）に幕府は大規模な典籍の蒐集を始め、諸方に古書を求めて五山僧に転写させ、江戸城の富士見亭に収蔵した。このとき、身延山からも『本朝文粹』を借り受け、転写したことが『本光国師日記』・『駿府記』などの記事にみえる。

◎『本光国師日記』

（慶長二十年四月二日の条）

一同日。身延之上人状来。在府也。昨日、御礼申上忝由也。使僧アリ。金藤半右衛門。御まんさまより御使ニ被レ来。本朝文粹ニヨリ十四迄十三冊来。此時之状目安箱ニアリ。

◎『本光国師日記』

（慶長二十年六月四日の条）

一同四日。身延之物之本。本朝文粹十三冊。日下部五郎八殿へ渡。請取状有。懸硯箱ニ入置。本朝文粹十四冊にて全部之本にて候へども、同一冊前ヨリ不足にて、以上十三冊也。日下部五郎八殿ヨリ身延へ可レ被ニ返渡ニ也。

◎『本光国師日記』

（慶長二十年閏六月九日の条）

本朝文粹全部十四冊。表紙箱緒以下出来。則二条御殿へ持参、浅井七平を頼候て上申候。（中略）一ノ巻ハ身延身延本「本朝文粹」の伝来過程（中尾）

身延本『本朝文粹』の伝来過程（中尾）

ノ本も不足候ヲ、道春町ニテ尋出候て、御前へ被<sub>レ</sub>上候ヲ、我等へ被<sub>レ</sub>下候。今度写候二部共ニ全部也。道春尋出候一冊ハ、道春へ今は二条御殿にて返す也。

### ◎『駿府記』

（慶長二十年閏六月九日の条）

…金地院、持<sub>二</sub>本朝文粹兩部<sub>一</sub>、備<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>。件本者、從<sub>二</sub>甲州身延山久遠寺<sub>一</sub>到来。仍先日仰<sub>二</sub>五山僧<sub>一</sub>、令<sub>二</sub>書写<sub>一</sub>給所也。第一之卷不足之所、道春於<sub>レ</sub>京探<sub>二</sub>出之<sub>一</sub>、備<sub>二</sub>御覽<sub>一</sub>。仍急可<sub>二</sub>写補<sub>一</sub>由、仰出。一卷出来奇特之由、道春蒙<sub>二</sub>御感<sub>一</sub>云々。

### ◎『駿府記』

（慶長二十年閏六月廿二日の条）

両伝奏于<sub>二</sub>二条御所<sub>一</sub>参上、被<sub>レ</sub>謝申云、昨日將軍家御参内之事、其外公家衆多伺候。本朝文粹一部、以<sub>二</sub>兩伝奏<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>内裡<sub>一</sub>。

これによると、幕府が久遠寺から身延本を取寄せたのは、慶長二十年（一六一五）四月二日のことで、また、「同一冊前より不足にて、以上十三冊也」という記事から、巻第一はこの頃にはすでに失われていたことがわかる。そのため、林羅山（道春）が京都で別の写本を探し出して本文を補い、これらを五山僧に二部転写させた。二カ月ほど後の六月四日に、目下部五郎八を通じて原本を身延山へ返還し、巻第一は羅山に返された。転写本は閏六月九日に装丁が仕上り、その日のうちに金地院崇伝が二条城に持参して家康の閲覽に供している。二部のうち、一部は閏六月廿二日に禁中に献上した。

阿部隆一氏は、これらの記事について次のように述べておられる。<sup>7)</sup>

道春が京都に於て探り出した本というのは後掲の羅山旧藏内閣文庫現蔵本であろう。また家康が道春本によって身延本を補写せしめたというのは、この本の巻十四巻首目錄と巻末に近い部分の補写の箇所がそれに該当するものと思われる。

羅山本による補写を、巻第十四に関する記述であると解釈しているが、『本光国師日記』・『駿府記』では「二ヨリ十四迄十三冊」とあり、不足しているのは「第一之巻」である。また、内閣文庫本の巻第十四を身延本の本文と比較するとかなり異同がみられるので、身延本の補写部分の本文が、内閣文庫本の写しであるとは考えられない。したがって、補写云々の記述は巻第一を指すと考えるべきである。返却のときも巻第一を欠いた十三冊であったことが記されているので、この時身延本の本文には修繕の手を加えなかったであろう。

身延本の巻第一の欠落を、先に挙げた同系本から補うにあたっては、静嘉堂文庫本が文永の奥書を記しており、他の巻を親本と比較してもかなり忠実に転写しているので、これを用いるのが適当であろう。

#### b 巻第十二の破損

巻第十二の後半部分には、かなり広範囲にわたる虫損がある。巻末部分では紙の上部四分の一が失われているほどで、本文も相当欠損している。虫穴は二十五紙目から目立ちはじめ、以後最後の四十四紙へ近付くにしたがって大きくなっていく。旋風装の名残りである紙の折目を中心に左右対称の形をしているので、この虫損は冊子本に改装された後に受けたものである。また、陽明文庫本・静嘉堂文庫本をはじめとする身延本系の転写本は、すべてこの虫損部

身延本『本朝文粹』の伝来過程（中尾）

分を欠字にしているので、転写が行われる前の破損であることがわかる。この部分の本文を補うには他系統の写本に頼るほかないが、身延本系を除くと、卷第十二の古写本で現在知られているものは真福寺所蔵本<sup>③</sup>だけなので、これを用いることになる。

c 卷第十四の破損と修復

身延本卷第十四は、全四十二紙のうち、卷首第一紙から第二紙まで（内題・目録・本文五行分）と第三十三紙から第四十一紙までの二箇所<sup>④</sup>にわたって、建治書写の本文が大幅に失われている。後に新たに料紙を補い、本文が補写されているが、この部分はまったく筆跡が異なり、ヲコト点も附されていない。最後の第四十二紙は建治のもので、文永の奥書は残されている。この補写がいつなされたのか、また、補写部分の本文は身延本と同系であるのかという点が問題となる。

そこで、同系本の中では比較的書写年代の古い陽明文庫本・静嘉堂文庫本の卷第十四を身延本本文と比較してみると、同系本の間で本文にかなりの相違があることがわかった。次に一部分を挙げる。（岩波新古典大系本・作品番号414。行数は作品毎の行数で示す。）

【行】      【身延本本文】      【静本】      【陽本】

題名      同院周忌御願文      （同上）      朱雀院

作者      後江相公      （同上）      （ナシ）

2      普賢      （同上）      観普賢經



3	般若心等經	(同上)	(ナシ)
5	千手觀世音菩薩	(同上)	觀音
8	院司所令勤奉	(同上)	也
9	皇太后宮	(同上)	大
10	大略	(同上)	太
11	娑婆電泡之國	(同上)	絶

一見して身延本と静嘉堂文庫本が同じ本文であり、陽明文庫本は異質であることがわかる。これらの本文異同を集計すると次の様な結果が得られた。

【卷十四異同数】

	総数	補写部分
陽明文庫本	四三四箇所	五七箇所
静嘉堂文庫	三七箇所	九箇所

陽明文庫本と身延本の間では異同の総数が四百以上の多数にのぼり、建治書写部分に限ってみても三七三箇所にのぼる。陽明文庫本の他の巻は身延本を忠実に転写しており、異同も少数なので、右に挙げた数は単なる誤写とは考えられない。身延本と同じ奥書をもつ同系本でありながら、巻第十四に限ってはまったく異なった系統の本文なのであ

身延本『本朝文粹』の伝来過程（中尾）

る。

つまり、室町時代に陽明文庫本が転写された時点で、すでに身延本の巻十四は広い範囲にわたって破損していた。そこで、書写者はこの巻のみ他の系統の本文によって補ったのである。

このように考えると、陽明文庫本巻第十四に記された弘安九年（一二八六）の本奥書の解釈にも、問題が生じてくる。阿部隆一氏はこれにもとづいて、身延本が弘安九年に上野国伊野郷で転写され、これをさらに近世になってから転写したものが陽明文庫本であるとしている<sup>3</sup>。しかし巻第十四のみが身延本と系統を異にしていることを考えると、この奥書は、陽明文庫本十四冊全体の書写年次を示すものではなく、巻第十四独自のものとして、他の巻と切り離して考えるべきである。室町時代に身延本を転写した際、破損の多い巻第十四本文を補うために用意された、まったく別系統の写本の奥書なのである。

次に、静嘉堂文庫本に目を向けると、異同数が全体に少なく、身延本の建治書写部分も補写部分も、ともに静嘉堂文庫本と同じ本文である。補写部分まで一致していることは重要で、身延本の本文修復に静嘉堂文庫本を用いたケースと、身延本修復後に静嘉堂文庫本が転写されたケースとが考えられる。前者の場合、同系本を用いた修復により、身延本は成立当初の本文を保持していることが判明するのに対し、後者の場合は、補写部分の本文の素性は不明となる。そこで、仮名点やヲコト点まで詳細に両者を比較したところ、後者のケースであることがわかった。身延本には全編朱筆によるヲコト点が付されているが、巻第十四の補写部分にはこれがない。静嘉堂文庫本は、本文を転写する際にヲコト点の移点も同時におこなっているのであるが、身延本の補写部分に相当する箇所に限っては、朱点がまったく見られないのである。静嘉堂文庫本が、破損する以前の建治書写本文を転写したものであれば、このようなこと

は有り得ない。室町時代末期に静嘉堂文庫本の転写がなされた時には、すでに身延本の本文は修補されており、書写者は建治書写部分も補写部分も区別することなくそのまま書き写したのである。

したがって、身延本の破損箇所をどの様な本文によって修復したのか、身延本の同系本文による補写であるのかどうかは、判断することができない。本文の校訂作業を進める場合、底本となるテキストはなるべく一貫した本文であることが望ましいことはいうまでもないが、その点で身延本はやや疑問が残ることになる。

以上をまとめると、次のようになる。身延本巻第十四は、かなり早い時期に破損しており、その後補写された。室町末期に陽明文庫本と静嘉堂文庫本が転写されるが、この補写部分の扱いかたは異なっている。前者が素性の分らない補写本文を嫌って、巻第十四に限り別系統の写本（弘安九年奥書本）を底本としたのに対し、後者は補写された部分もそのまま忠実に転写している。補写に用いられた本文が身延本系であるかどうかについては、現時点では不明というほかはない。

#### 4 改装が行われた時期

身延本は、中世のある時期に卷子本から旋風装へ改装された。料紙に残る折目から、冊子本であった時のサイズは縦28・5センチ、幅18・4センチ前後であったことがわかる。改装が行われた年代を確定することはできないが、前節で述べてきた本文破損との前後関係はある程度推測できるので、次に考察を加える。

a 巻第五・十・十一巻首の破損

巻第五・十は巻首の一行分が失われており、巻第十一は第一紙が失われて第二紙の目録途中から始まっている。これらが改装後の破損であれば、料紙の折目は中途半端な位置に付いているはずである。たとえば巻第五の場合、巾18・4センチの冊子になった後に第一行目が失われたのであれば、巻端から始めの折目までの長さはその分短くなっているはずではない。しかし、いずれも巻端から18・4センチほどのところに折目が残っているので、改装された時には既に破損を受け、現在と同じ形であったことになる。

b 巻第十二の虫損

これについては、先に述べたとおり、折目を境に左右対称の形に穴が開いているので、改装後に受けた傷である。室町末期の転写本も、この部分は欠字にしているので、改装はそれらの転写以前にさかのぼる。

c 巻第十四の破損と補修

巻第十四は巻首と後半部分が破損しており、後に補修されている。まず、破損の時期については、他の巻の巻首にみられる「身延山久遠寺公用」・「身延山久遠寺常住」の書入れが参考になる。巻第十四のみは、この書入れが巻末に記されていることは先に述べたとおりで、書入れが行われる以前に巻首は破損していた。また、巻第五・十・十一は改装される以前に巻首が破損しており、同時に書入れも失われているので、書入れがなされたのは、改装前である。したがって、改装される以前に巻第十四は破損していたということになる。

また補修の時期が問題となるが、巻首の補修部分を見ると、内題の前はかなり広く白紙部分がとつてある。巻端から内題まで19センチほどの幅があり、端から18・4センチのところ、内題の直前部分に折目が残っている。つまり、白紙部分は、冊子本にしたとき丁度一ページ分となり、第二ページ目から内題・目録が始まる形になっているのである。もし巻子装の時に補修されたのであれば、これほどの余白を設けるのは不自然なので、修復は改装以後ということになる。

しかし、また一方で、破損したまま冊子本に改装し、後から巻首に紙をつぎたして補修したとも考えにくい。第一紙と第二紙が後補なので建治書写部分は第三紙以降であるが、補修する前に改装されたのであれば、第三紙が第一ページ目となり、右端から18・4センチ（一ページ分の幅）の位置に折目がついているはずである。ところが、折目は12・5センチのところであり、これは第一紙の端から一ページ分毎についている折目の、丁度五番目にあたるのである。したがって、改装された時には既に補修されていたことになる。矛盾しているようであるが、かえって改装時期を確定できるのであって、要するに身延本を巻子本から旋風装へ改装する時に、同時に巻第十四の補修も行ったのである。

## 5 総括

これまで論じてきた伝来の過程をまとめると、次の様になる。

- ①一二五〇年代ごろ、北条時頼が清原教隆に命じて所蔵本（相州御本）に加點させる。
- ②文永六年から八年（一二六九～一二七一）にかけて相州御本が転写される。（金沢実時による転写か）
- ③建治二年（一二七六）、鎌倉二階堂において文永本が転写される。（身延本の成立）

身延本『本朝文粹』の伝来過程（中尾）

④ 卷第十四の巻首が破損する。（この頃同時に巻の後半部分も破損したか）

⑤ 各巻の巻首に「身延山久遠寺公用」「身延山久遠寺常住」と書入れられる。この時、卷第十四は巻首が破損していたため、巻末に記された。

⑥ 卷第五・十・十一の巻首が破損し、⑤の書入れが失われる。

⑦ 卷第十四の破損部分を補修した上で、旋風装に改装される。この時補写の底本にどのような本文を用いたかは不明である。

⑧ 卷第十二の後半部分が虫損により大幅に損傷する。

⑨ 室町時代末期に陽明文庫本が転写される。この時、卷第十四だけは他系統である弘安九年奥書本を底本に用いた。

⑩ 室町時代末期に静嘉堂文庫本が転写される。この際、卷第十四の補写部分も忠実に写した。（⑨と⑩の前後関係は不明）

⑪ 卷第一が散佚する。

⑫ 慶長二十年四月二日、江戸幕府へ貸出す。幕府では、五山僧に二部転写させる。この時、林羅山は京都において巻第一を入手し、これによって身延本本文の欠損を補った。身延本は、六月四日に日下部五郎八を通して返却される。

⑬ 昭和三十三年、修理の際に卷子本に改装される。

以上『本朝文粹』の古写本中、最善本と目される身延本の伝来過程を明らかにした。本論中、卷第十四の補写本文は系統を確定できないことを指摘したが、『本朝文粹』の本文価値を論ずるとき、この点を常に考慮に入れる必要が

ある。

〔註〕

- (1) a 大曾根章介氏「本朝文粹の原形について」(『国語と国文学』昭和四十四年十一月)  
b 拙論「中世における『本朝文粹』書写事情の一側面——未紹介資料 金剛寺本巻八・大谷本巻六をめぐって——」  
(『和漢比較文学』第九号・平成四年七月) 参照。
- (2) 身延本の紙背に記された注記は「重要文化財 本朝文粹」下冊(汲古書院 昭和五十五年九月)の三四九頁に翻刻されている。
- (3) 「重要文化財 本朝文粹」下冊・解題三六五頁。
- (4) 巻第五の巻首は第一紙第二行の内題から始まっているが、紙端に第一行目の書入れの一部と見られる墨跡が残っている。
- (5) 「平々他々……」という記述に関しては註1b論文参照。
- (6) 引用文献。
- (7) 「新訂本光国師日記」(統群書類従完成会・昭和四十三年)『駿府記』資料雑纂二所収。
- (8) 「重要文化財 本朝文粹」下冊・解題三六六頁。  
愛知県真福寺には鎌倉時代に書写された巻第十二の卷子本が所蔵されている。墨筆による声点・返点・仮名点、朱筆によるヲコト点が付されている。
- (9) 「重要文化財 本朝文粹」下冊・解題三六七頁。

身延本『本朝文粹』の伝来過程(中尾)

# ◆ 学園彙報 (平成五年度)

## ◆ 図書館だより

本学園図書館では、一人一冊献本運動を展開して十一年目を経過いたしました。お蔭様にて同窓の各聖・各位・有縁の皆様方の献本運動のご協力を賜わり、献本運動の成果も上っております。平素より仁心のご高配・ご厚志に対しまして、館員一同より厚く御礼申し上げます。

### 平成四年度圖書寄贈者ご考名

- 1 愛知学院大学禅研究所殿 「禅研叢書 禅の世界 第二輯」 一冊
- 2 池原鍊昌殿 「春雷」五・六・九・十一・一月号 五冊
- 3 インナートリップ青少年センター殿 「14回全国高校生の主張 (じぶんさがしの旅)」 一冊
- 4 大倉精神文化研究所殿 「大倉邦彦傳」 一冊
- 5 猪俣日康殿 「ブリタニカ国際大百科事典」 全三十二冊
- 6 岡崎嘉平太伝刊行会殿 「岡崎嘉平太伝―信はたて糸愛はよこ糸―」 一冊
- 7 伊藤 信殿 「学園創立90周年記念誌」 一冊
- 8 新井慧誉殿 「インド見聞録4」南インドの仏蹟とヒンズー教文化を訪ねる旅 一冊

- 9 岩間日勇殿下 「遠野院 智恩院 両院僧列名帳照合本」 他五冊
- 10 木立随学殿 「Lewis & Clark College」
- 11 児島鍊戒殿 「北方領土とシベリヤ抑留」 一冊
- 12 光華会 (浄土真宗本願寺派内事部内) 殿 「親鸞と人間―光華会宗教研究論文集第二巻」
- 13 小松邦彰殿 「日蓮聖人全集 第一巻 定義1」 一冊
- 14 植藤泰隆殿 「求道の旅路」六冊 他五冊
- 15 広報室長 木下昭道殿 「そこう さらに壮大なる未来へ」 二冊
- 16 島原市福祉事務所次長兼福祉係長 森本辨修殿 「鳴動 普賢岳1991」 他一冊
- 17 浅草寺教化部殿 「佛教文化講座第36集」 二冊
- 18 視聴覚資料研究分科会殿 「視聴覚資料研究」 一冊
- 19 志摩坊殿 「水文学と水文化地質学への貢献」
- 20 財団法人 三康文化研究所殿 「財団法人 三康文化研究所報 第二十七号」 一冊
- 21 志村義雄殿 「日本のイノデ属 (シダ植物)」 一冊
- 22 薩青会事務局殿 「歎徳集」 一冊
- 23 杉野一俊殿 「法華経の数の研究」 一冊
- 24 戸田浩暁殿 「支那佛教精史」 他三二冊
- 25 田中慈妙殿 「私の気づくばりのすすめ」 他全四〇冊
- 26 大本山 誕生寺殿 「誕生寺文集」 一冊
- 27 高杉 良殿 「小説 会社再建―太閤をつかむ男―」 二冊



- 28 谷川寛徳殿 「日本名刹名僧録」 一冊
- 29 中央学術研究所殿 「平和の課題と宗教」 一冊
- 30 日蓮宗新聞社殿 「いのちを問う―生・老・病・死―」 他一冊
- 31 日蓮宗北関東教化センター殿 「佛事のしおり」 一冊
- 32 日蓮宗神奈川県第一部布教師会殿 「高座説教次第」 他一冊
- 33 中井健之殿 説 帝国連合艦隊」 他二一五冊
- 34 日本赤十字社山梨県支部支部長 天野 建 「赤十字山梨百年のあゆみ」 一冊
- 35 財団法人 日本原子力文化振興財団殿 「改訂版 プラトニウム物語」 一冊
- 36 成田山新勝寺殿 「佛教文化史論集Ⅰ・Ⅱ」 他二冊
- 37 納税協会連合会殿 「GENERAL TAX STUDIES」 (総合税制研究) 一冊
- 38 財団法人 日本語教育振興協会殿 「一九九二年度版日本語教育施設要覧(日本語版・英語版・中国語版)」
- 39 日本電信電話株式会社広報部「電気通信発展外史」編集担当殿 「電気通信発展外史」 一冊
- 40 本門社殿 「説教(クリ弁)全集 第五巻」 一冊
- 41 法華寺 銅子龍賢殿 「妙喜山 法華寺」 一冊
- 42 福代幸子殿 「世紀の遺書」 一冊
- 43 藤原 肇殿 「山岳誌」 一冊
- 44 日蓮宗布教院院報編集事務局殿 「布教院々報 平成三年度 第四十五回」 一冊
- 45 平沢 実殿「邪馬台国の民族・地理構造」 一冊
- 46 「はまなし」文化の会 山下総業株式会社殿 「はまなし」第二号 一冊
- 47 望月海淑殿 「釈尊伝」三冊 他三三三冊
- 48 松下電器産業株式会社殿 「松下幸之助発言集 三五〇四四二〇冊
- 49 松本光華殿 「民話風法華経童話」その十九・その二二・その二二・その二三・その二四・各十冊 計五〇冊
- 50 町田是正殿 「日蓮和上百遠忌記念集」 他二五五冊
- 51 三智石材殿 「心のたから」 一冊
- 52 明治製菓株式会社殿 「微生物」 二冊
- 53 妙徳寺殿 「広布山妙徳寺三百年史」 一冊
- 54 身延山久遠寺殿 「古文書時代鑑」上・下・解説本 他二冊
- 55 山梨中央銀行殿 「地域とともに」 一冊
- 56 八重洲ブックセンター河相全次郎殿 「マスコミ記事でつづる異色ドキュメント続々日本一のマンモス書店」 一冊
- 57 山梨県町村会殿 「山梨県町村会七十年史」 一冊
- 58 山梨日日新聞社・山梨放送殿 「山日YBSグループ創業120年史 1992」 二冊
- 59 山梨大学教育学部殿 「山梨大学教育学部研究報告 第四十二号」 二冊

- 60 要法寺殿 「要法寺年表」 一冊
- 61 山梨県立美術館殿 「呉 団良展」 他二冊
- 62 山梨県立文学館殿 「飯田蛇笏展 没後30年」図録 一冊
- 63 依田幸雄殿 「日本百科大事典」八冊 他十五冊
- 64 学校法人立正大学学園殿 「立正大学の120年」 一冊
- 65 立正安国会 片岡善藏殿 「日蓮聖人真蹟の世界 上」 他一冊
- 66 渡辺信勝殿 「蓮華草」第8・9号 他一冊
- 67 若狭哲六殿 「女王国邪馬台国の謎に迫る」 一冊
- 68 若野和弘・美苗子殿 「日本現代文学全集 38冊」 他十二冊
- 69 林 はるみ殿 「身延山久遠寺研究」 一冊
- 70 川島本領（本良改め）殿 十万円相当の献本
- 71 栗原 登殿（妙光寺川島本領師信徒） 八五〇〇円相当の献本
- 72 野崎俊彦殿（妙光寺信徒） 三万円相当の献本
- 今後とも、広く皆様様方の「一人一冊献本運動」の御協力を切にお願い申し上げます。本学園図書館には、外国書（原書）の本が少ないので、外国書の献本を多に歓迎しております。また、お手元にある本で、こんな本では必要なかろうという場合でも献本賜わりますれば幸甚に存じます。
- 図書館では、同窓生諸兄・有縁関係者・図書館建設資金御寄付者・献本協力者・研究者等の利用の便を計るために閲覧証

（一年間有効）を一階のカウンターにて用意しておりますので御来館の際には館員にどうかお尋ね下さい。（桑名眞正）

### ◇同窓会本部だより

身延山短期大学学園同窓会大会の開催

平成四年度、同窓会全国支部長会議（役員会）並びに同窓会大会（総会）が平成四年十月二十九日、身延山短期大学学園を会場として左記の式次第にて盛大裡に行われました。

全国支部長会議（役員会）次第 十一時～十二時

司会 桑名眞正

- (1) 玄題三唱（藤井教雄理事長）
  - (2) 開会の言葉（小崎龍雄副会長）
  - (3) 会長挨拶（松井大周会長）
  - (4) 理事長挨拶（藤井教雄理事長）
  - (5) 学長挨拶（宮崎英修学長）
  - (6) 校長挨拶（秋山智孝校長）
  - (7) 学園担当理事報告（刀刀貞如理事）
  - (8) その他（座長小崎龍雄会長を選出し、4年制改組転換について質疑応答する）
  - (9) 玄題三唱（松井大周会長）
- 支部長会議（役員会）議事録
- 1、役員会では身延山短期大学3年制を4年制に改組転換するに当り、物心両面に亘って全面的に協力することを申し

出、同窓会支部長会議の名のもとに別紙のような決議文をつくり、同窓会総会に議案提出をすることを決定した。

2、松井大周会長は多年会長を務められたので、後進にその任を譲る意向を示され会長辞任を申し出られた。

物故者追悼法要（仏殿） 十三時～十四時

大導師 岩間日勇 祝下

協導師 藤井教雄理事長・松井大周会長・岩田日成副会長・

宮崎英修学長

法要終了後仏殿前にて記念撮影

同窓会大会（総会） 次第 十四時～十五時半 司会 望月海英

(1) 玄題三唱（松井大周会長）

(2) 開会の辞（岩田日成副会長）

(3) 会長挨拶（松井大周会長）

(4) 理事長挨拶（藤井教雄理事長）

(5) 学長挨拶（宮崎英修学長）

(6) 校長挨拶（秋山智孝校長）

(7) 永年勤続職員表彰（宮崎英修学長より次の各教職員が表彰された。「宮崎英修先生」「30年」・渡辺寛勝先生「30年」・

中里悠光先生「20年」・今村良枝主任「20年」・佐野やよ

ひ主事「20年」）

(8) 協議事項

1、座長選出（小崎龍雄副会長）

2、庶務報告（桑名貫正庶務幹事）

(イ) 学園同窓会旅費交通規定と学園同窓会慶弔・表彰規定が決定したことを報告す。

(ロ) 同窓会役員の欠員及び辞任の申し出に關して、平成3年度の支部長・役員會議にて中屋教海副会長選任につき、その後任に谷川寛徳師を推挙、大石要英副会長は病氣により再々辞任の願いがあり、その後任に永田寿昶師を推挙されたことを報告す。

(ハ) 同窓会の永年役員をされた方に退任御慰勞の感謝状を贈呈する旨を報告す。

(ニ) 事務局費の計上が認められたことを報告す。

(ホ) 支部總會開催の報告。

(ヘ) 同窓会本部に各支部からの講師派遣依頼の現況報告。

(ト) 同窓会の慶弔につき、本部へ連絡がある場合、同窓会本部・同窓会会長名で祝電・弔電をお送りすること

を報告す。

3、會計報告（奥野本洋會計幹事）

別紙記載のとおりに承認された。

4、監査報告（平原要俊監事）

異議なしとの報告、また本部未納の支部に対して請求すべきことを提案される。本年度収入と支出の明細について工夫することの要望が出された。

5、役員選出

永田寿昶副会長より、松井大周会長辞任表明につき、副

会長（岩田日成・小崎龍雄・谷川寛徳・永田寿昶）各型の関係各位との協議の結果、小崎龍雄師を会長に推挙することが決められ、その旨を報告し、総会にて満場一致で承認された。なお、松井大周師と大石要英師は顧問に推挙された。

#### 6、学園理事報告（切刀貞如学園担当理事）

身延山では開宗七五〇年の大事業の一つとして身延山短期大学を4年制に改組転換し、平成7年開校を目標にして準備委員会が設置され計画を進めている報告があり、学園充実のため同窓会に物心両面の協力要請が出された。

7、各支部長現況報告については、懇親会の席上で報告することになった。

8、その他

(イ) 学園充実の要請についての討議が持たれた。役員会にて草案された決議文（案）が提出され、座長がそれを朗読し、一部の字句の訂正の後、満場一致にて別紙のとおり決議文が採択され、全国同窓生に呼びかけることになった。

(ロ) 同窓会本部会計中より、学園に二百万円を寄付することが決定された。

(ハ) 和身会より現金にて二百万円の寄付が藤井教雄理事長に手渡された。

(二) 爪田栄運理事より静岡県は現行の1支部から伊豆（小野欽祥支部長）・駿河（永田寿昶支部長）・遠州（平岡日静支部長）の3支部制にする提案がなされた。以上

支部長・総会での勧募の方法についての討議内容の報告

切刀学園担当理事より、短期大学を4年制へ改組転換するについての資金の報告があり、そのうち同窓会の方へ割り当て等の心づもりを座長が尋ねたところ、本山でも部長会で相談の結果、図書館の時に1億円近くのお金が集まった経過から2億円くらいの寄付金を希望したいとのことであった。

小崎座長が各支部長・役員に勧募方法について討議を計ったところ、下記のような意見が出された。

1、まず、本部会計にある余裕資金三〇〇万円を寄付していただき、それをもって全国役員の寄付行動の先鞭としたらいかか。（新潟・円山支部長）

2、山梨支部は平成4年6月定期総会の席に切刀貞如布教部長さんに来てもらい、開宗七五〇年に関し詳細の報告を受け、地元で応分の協力をしようということになった。平成7年開校にむけて平成5年になったら会員各位に協力をしてもいいかと思っているので、各支部も山梨支部のようにガンバッテほしい。（山梨・望月支部長）

3、勧募の件は大変結構なことである。坊さんの勧募の仕方はおうおうにして細かい勧募が出来ていない。確実に2億

円の目標が達成出来るようにしてもらいたい。(兵庫・大塚支部長)

4、学園のしかるべき人が歩かれて下さるような盛り上がり、是非歩いてほしい。地元(京都)でもセットをするので来てもらいたい(京都・奥田支部長代理)

それに対し、学園・本山は積極的に出かけたいとの、学園関係者の返答があった。

5、平成7年に開校を予定しているが、宗門からの助成も早めにお願ひしたらどうか。(青森・佐藤支部長)

6、身延で私も育った人間である。勸募は2億円という数字であるが、もっともっと集めることも可能である。本日の決議文を全国に回したら効果的である。(永田副会長)

#### 決議文

我が身延山短期大学々園同窓会は、

今般の身延山短期大学を四年制に改組することについて、宗祖の行学二道の祖訓に叶うものとして、賛意を表する

一、当同窓会は、四年制身延山大学の実現のため、物心両面に亘って協力する。

一、同窓会としては、金二億円以上を目標額として、勸募する

同窓会諸君、有縁の各聖・各位、浄業円成のため、協力を願ひ、右、決議する

平成四年十月二十九日

身延山短期大学々園同窓会全国大会

(文責 桑名眞正)

#### 研究活動報告

##### (1) 日本印度学仏教学会

第四十三回学術大会は、六月二十日(土)、二十一日(日)の両日にわたり、愛知学院大学(愛知)の主催で行われた。本学からの発表者とテーマは次の通りである。

僧院から仏塔信仰へ

——未発表の新資料を手がかりとして——

金網集の一考察

高橋 堯昭  
中條 暁秀

##### (2) 日本宗教学会

第五十一回学術大会は、九月十二日(土)～十四日(月)にわたり、淑徳短期大学(埼玉)の主催で行われた。本学からの発表者とテーマは次の通りである。

仏教と福祉——「能滅衆生闇」考

渡辺 寛勝

##### (3) 日本仏教学会

平成四年度学術大会は十月三日(土)、四日(日)の両日にわたり、種智院大学(京都)の主催で行われた。

本学からの発表者とテーマは次の通りである。

日蓮の仏土観

中條 曉 秀

#### (4)日蓮宗教学研究発表大会

第四十五回学術大会は、十一月十六日(月)、十七日(火)の両日にわたり、立正大学(東京)を会場にして開催された。本学からの発表者とテーマは次の通りである。

タキシラの二仏並座像について

高橋 堯 昭

身延山から弟子に与えられた宗祖の遺文について

上田 本 昌

#### (5)日本仏教教育学会

第一回学術大会は、十二月十二日(土)に大正大学を会場として行われた。

本学からの発表者とテーマは次の通りである。

身延山史にみる仏教教育

渡 辺 寛 勝

#### (6)仏教文化講座

本年度の「仏教文化講座」(公開)は、平成五年一月二十三日(土)に、本学園図書館五階会議室において開催された。

講師は静岡県立大学国際関係学部講師 宮田律先生。

テーマは「イスラムの世界」であった。

### 平成四年度 卒業論文一覽

日蓮聖人の人間観

叡山学僧の鎌倉仏教への展開

法華経における地涌の菩薩の一考察

新居日薩上人について — 近代日蓮宗の動向 —

日蓮宗の守護神 — 三十番神信仰 —

南部氏と実長の信仰

日親上人の布教活動とその展開

日蓮聖人の身延での子弟育成について

法華七喻の一考察

石原完爾の日蓮聖人観

日蓮宗の守護神 — 鬼子母神信仰 —

備前における不受不施の事件について

身延対論の一考察

日蓮聖人の身延期の生活の一考察

日蓮聖人の女性観

日蓮聖人の神天上法門についての一考察

我々と三国四師の正道

不変の真実 — 平成の日蓮聖人 —

日蓮聖人の本仏観

小寺 崇 友

上島 英 嗣

海野 義 明

小林 龍 永

坂本 圭 洋

清水 義 和

野口 雅 孝

藤本 潤

吉村 是 修

小向 裕 次

太田 法 広

大野 彰 正

小野 瀬 清

田 辺 学 成

中 田 亜 由 美

長 坂 直 道

永 森 仁

野 中 章 照

皆 川 尚 人

法華經と日蓮聖人——上行菩薩と不輕菩薩について——

持田善治

日蓮聖人における法華經行者の自覚

深谷幸信

Ratnākaraśānti' s Sūtrasamuccayabhāṣyaṃ Ratnālokālaṃkāra (I) (Mochizuki)

Ratnākaraśānti's  
Sūtrasamuccayabhāṣyaṃ  
Ratnālokālaṃkāra (I)

Kaie Mochizuki

rgya gar skad du/ sūtrasamuccayālaṃkārabhāṣyaṃ ratnāloka-nāma/  
bod skad du/ mdo kun las btus pa' i bshad pa rin po che snang  
ba' i rgyan ces bya ba/

'phags pa 'jam dpal la phyag 'tshal lo//

0 Introduction

<sup>(1)</sup>  
0.0 Dedicatory Verses

yon tan rin chen ri bo' rab brtan zhing//  
mtshan dang dpe byad bzang po'i 'od 'bar ba//  
nyer rten 'byung po' i dbul ba 'dor mdzad pa//  
mi shes mun bcom thub pa' i dbang po rgyal//  
rgyal bas gsungs pa' i mdo don rab zab cing//  
bdag nyid chen po rnams kyi 'ang de bzhin pa//

---

1) D ngo.



dmus long nyi bzhin mthong bar mi nus kyang//  
 yid ches lung gi tshad mas bshad par bya//  
 gang phyir zab mo' i don la rtog ge yi//  
 nus (P. 253b) pa mnyam phyir bdag nyid che 'ga' zhiḡ/  
 klu sgrub thogs med<sup>(2)</sup> tshul las' nyams de' i phyir//  
 mgon po' i thugs rjes bshad<sup>2</sup> pa klan ka med//

### 0.1 Title

rtog pa dang ldan pa rnams (D.215b) dgos pa<sup>(3)</sup> la sogḡ pa med na  
 'jug par mi 'gyur bas<sup>(4)</sup> bdag nyid chen pos rang gi bstan bcos kyi dgos  
 'brel' gsungs pa ni/ mdo sde sna tshogs las btus' pa/ theḡ pa chen  
 po rin po che' i gtam bshad par bya'o<sup>(5)</sup> zhes gsungs te/ gal te 'di'i 'brel  
 pa<sup>(6)</sup> dang brjod par bya ba<sup>(7)</sup> ma smras na 'brel pa med pa'am/ don med  
 pa dag srid pas 'di la gzhan su'ang 'jug par mi 'gyur ba' i phyir/ de  
 bzhin du 'brel pa dang brjod par bya ba yod du zin kyang bya ba' i las  
 rdzogs pa' i khyad par ma brjod pa ni sgrub par byed pa ma yin no<sup>6</sup>  
 zhes bya bas kyang sgrub pa' i tshul las nyams pa kho na'o zhes bya ba  
 'di 'thad pas so// bstan bcos gzhan la med pa' i 'jug pa'i yan lag  
 thun mong ma yin pa'i dgos pa med na (C.218b) mdo sde bsdu ba 'di  
 la dad pas' rjes su 'brang ba yang mnyan pa tsam du yang gus par mi  
 'gyur bas bya ba'i 'bras bu khyad par can der rtogs pa' i dgos pa brjod par  
 bya' o// gzhan du rtogs pa ma yin te/ 'brel pa med pa'i phyir ro//

---

1) P omits las. 2) D sa bshad. 3) P dgongs 'grel. 4) P btung.

5) P // . 6) P // . 7) C,D bas.

gzhan 'jug par bya ba' i phyir dgos pa yod pa' i tshig' dang der rtogs pa kho na brjod par bya'i/ de med pa dang gzhan du rtogs pas ni ma yin te rgyur ma gyur ba' i<sup>2</sup> phyir ro// de yang<sup>3</sup> khyad par can gyi don ston pa' i tshig la bya' i brjod par bya ba tsam mam'sgra tsam don ston pa' i nus pa ma yin pas brjod par bya ba la sogs pa de kho nar rtogs par brjod par bya'o// bya ba' i ngo bo nyid dgos pa ma yin nam zhe na/ ma yin te ngag thams cad kyang rang gi don brjod par bya ba' i ston par byed pa' i mtshan nyid kyi bya ba ni thun mong ma yin pas thams cad la grags pa' i phyir dgos par gzung bar mi bya ste/ de ni bstan bcos las gzhan du 'gyur ba med pa' i phyir ro// brjod (P.254a) bya med par dgos pa spangs pa' i phyir bstan pa ma yin te/ brjod par bya ba bstan pa nyes pa de dang bral ba' i phyir ro// de' i khyad par bstan pa' i phyir yang ma yin te/ brjod par bya ba' i khyad par bstan pa nyid kyis de bstan pa' i phyir ro// bya ba' i 'bras bu de'ang 'bras bu' i dgos pa bstan par bya ba yin te/ de med par bya ba' i 'bras bu tsam gyis 'jug par mi 'gyur ro// de' ang mngon par thob par (D. 216a) bya ba'ang 'dod pa' i 'bras bu' i mchog don du gnyer ba' i shes rab can rnam ni/ de' i thabs la 'jug pa na/ rgyu med par 'bras bu grub pa med pas thabs shes pa la bslabs na thabs las<sup>4</sup>byung ba' i 'bras bu 'byung ba' i phyir thabs rtogs par bya ba mdo'i<sup>5</sup> don bsdu ba la 'jug go// de' i phyir 'jug pa' i yan lag gi gtso bo yin pas dgos pa' i yang dgos pa<sup>(6)</sup> bstan par bya'o// de' i yang thabs su gyur pa 'brel pa la sogs pa ston pa' i gzhung gis de bstan par mi nus pas de' i dgos pa' i

---

1) D tsheg. 2) P pa' i. 3) p 'ang. 4) P 'am 5) P omits las.

6) D mdro' i.

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabāṣyaṃ Ratnālokālamkāra (I) (Mochizuki)

yang dgos pa'i thabs yang dag pa kho nar bstan pa'i phyir/ 'brel pa  
la sogs pa bshad do// de' i phyir/

'brel pa rjes su mthun pa'i thabs//

skyes bu'i don ni rjod' byed<sup>2</sup> pa//

yongs brtags dbang du byas pa'i ngag/

de las gzhan pa dbang byas min//<sup>(9)</sup>

zhes bya bas 'brel pa dang rjes su (C.219a) mthun pa'i thabs bstan par  
bya'o// de'ang bsgrub' par mi nus pa ma yin te/ snga rabs dag<sup>3</sup>  
dmigs pa' i phyir dang/ thabs nus par 'thad pa' i phyir/ thug pa  
med pa'ang ma yin te/ 'di tsam gyis don sgrub pa'i phyir la bya ba'i  
'bras bu rdzogs par<sup>4</sup> yang mthar thug pa yin pa' i phyir ro// 'dod  
par bya ba ma yin pa'ang ma yin te/ 'bras bu'i dam pa rnam pa thams  
cad mkhyen pa nyid la sogs pa ni 'dod par bya ba kho na' o// tshig  
tsam ni mi bzlogs pa ma yin no// zhes kyang brjod par bya ba ma yin  
te/ gegs<sup>5</sup> ma mthong ba' i phyir (P.254b) dang/ don 'grub pa bstan  
pa' i phyir ci ste na phrad pa srid pa'i sgo nas kyang ngo// de lta  
ma yin na ni thams cad kyang<sup>6</sup> bya ba la 'jug par mi 'gyur te/ gegs  
srid pa' i phyir ro//

rnam grangs gzhan yang 'phags pa klu sgrub ni lung bstan pa thob  
pa las kyang yid ches pa'i lung nyid pas 'di la 'jug pa yang rigs<sup>7</sup> pa kho  
na'o// 'brel pa ni logs shig tu bstan par mi bya ste/ 'bras bu med  
pas gal te gang brjod pas rtogs pa ma yin te/ de ni logs su bstan  
par bya ba<sup>8</sup> zhig na dgos pa brjod pas 'brel pa ma brjod pa ni med pa'i

---

1) D rjed. 2) P byid. 3) C ngag. 4) C,D pa. 5) P bgegs.

6) P omits kyang. 7) C rig. 8) P la.

phyir ro// de yang 'di ltar bstan bcos dang dgos pa dag ni thabs  
dang thabs las byung ba' i ngo bor bstan<sup>(10)</sup> gyi gzhan du yang ma yin pas  
'di ni dgos pa brjod pa' las logs (D.216b) shig tu brjod par mi bya  
ste/ 'di ltar 'di ni 'di'i dgos pa zhes bstan pa' na/ 'di ni 'di'i sgrub  
pa'o zhes bstan te/ gzhan du gang zhiḡ gang sgrub par mi byed pa  
de de'i dgos pa yin par 'gyur na shin tu thal ches pa' i phyir ro//  
de la brjod par bya ba ni 'dir tshul khrims dang ldan par gnas pa la  
sogs pa chos rnam pa bzhi'i ngo bo nyid rnam pa thams cad mkhyen pa  
nyid thob par byed pa'i lam mdo sde mtha' dag las bcom ldan 'das kyis  
gsungs pa yin no// dgos pa ni 'dir bcom ldan 'das kyī lung mtha'  
dag nas dam pa'i chos la brnyas pa spangs pa' dang/ bla ma la rag  
lus par bya ba'i phyir thor bur gsungs pa rnams 'phags pa klu sgrub  
gsung rab kyī don la ma rmongs shing/4 gzhan rjes su 'dzin pa' i thugs  
rje dang ldan pas gsal bar bstan pa (C.219b) yin no// dgos pa' i yang  
dgos pa ni 'dir ji skad bshad pa bzhin sgrub pa dang ldan pa las gnas  
skabs dang mthar thug pa dag tu 'bras bu'i mchog rim gyis 'grub pa  
yin no// de' i phyir lung snga ma las kyang

brjod (P.255a) par bya ba ni don ston pa' o// dgos pa ni don  
shes pa'o// dgos pa'i5 yang dgos pa ni don grub pa' o//  
'breḡ pa ni thabs dang thabs las6 byung ba'o<sup>(11)</sup>

zhes gsungs pa yin no//

de lta bas na *kun las btus pa* zhes bya bas ni dgos pa bstan te/ *theg  
pa chen po* zhes bya bas ni dgos pa' i yang dgos pa bstan to// *mdo*

---

1) P dgos pa dang brjod pa. 2) P omits. 3) P spang ba.

4) C omits /. 5) P pa. 6) P omits las. 7) P//.

Ratnākaraśānti' s Sūtrasamuccayabāṣyaṃ Ratnalokālaṃkāra (I) (Mochizuki)

*sde rin po che' i gdam* zhes bya bas ni brjod par bya ba bstan to//  
de la mdo sde rnams las gsungs pa'i don bsdus te bstan nas sa dang  
lam gyi rim pa dang 'bras bu'i don ming gis yul can du shes pa na'  
dgos pa ni don shes pa' o//

'dir smras pa/ bcom ldan 'das nyid kyis gsungs pa'i don 'chad na ni  
de zlos par 'gyur la/ 'on te ma yin no zhe na ni ji ltar lung 'chad par  
'gyur zhe na/ma yin te gsung gi don shin tu zab cing rtog ge' i yul  
ma yin la dgos pa dang tshig dang lung sna tshogs shing sna tshogs par  
bstan pa dang/ sngar bshad pa lta bu dang ldan pa rnams shin tu  
gsal zhing zur phyin la nges pa' i don du gang zag cig gis<sup>2</sup> nyams su  
blang bar bya bar gtan la 'bebs pas na nyes pa gnyi ga rgyang bsrings  
pa yin no//

rnam grangs gzhan (D.217a) yang bsdus pa zhes bstan pa las kyang  
lus ha cang rgyas pa rnams tshig nyung ngur bstan pa' i phyir dang/  
rab tu byed pa rnams bstan bcos su byas pa las kyang don 'grel<sup>3</sup> pas  
bstan bcos bsdus pa' i phyir dang/ lung nyid las ma gtogs pa gzhan  
skabs kyis 'byed pas kyang nyes pa gnyis spangs pa yin no//

de bas na *mdo sde* zhes bya bas ni rang bzo ma yin par bstan te/  
phung po la sogs pa' i don mdor ston pa' i phyir *mdo sde* zhes bya'o//  
yang na ting nge 'dzin gtso bor ston pa'i phyir yang ngo//

*sna tshogs* zhes bya bas ni nges pa' i don du bstan te/ 'og nas 'chad  
par 'gyur ro//

*btus pa* zhes bya bas ni zlos pa' i skyon (P.255b) spangs pa yin no//  
*theg pa chen po* zhes bya ba la/ theg pa'i sgra ni bzhon pa la bya

---

1) C,D ni. 2) P gi. 3) P 'brel.

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabāṣyaṃ Ratnālokalaṃkāra (I) (Mochizuki)

ste/ gzhan du khyer par byed pa'i phyir ro// chen po zhes bya ba  
ni chos chen po dang ldan pa'o// chos chen po gang zhe (C.220a)  
na/ 'phags pa klu sgrub kyi zhal snga nas

sbyin pa dang' tshul khrims dang bzod pa dang brtson 'grus dang  
bsam gtan dang shes rab dang snying rje ni theg pa chen po<sup>(12)</sup>

zhes gsungs so// 'dir 'phags pa thogs med kyi zhabs kyis ni

chos chen po las shin tu rgyas pa'i sde dang/ sems bskyed chen  
po dang/ chos chen po la mos pa chen po dang/ lhag pa'i bsam  
pa chen po dang/ tshogs chen po dang/<sup>2</sup> dus chen po dang/ yang  
dag sgrub pa po chen po dang/ rnam pa bdun ni theg pa chen po<sup>3 (13)</sup>

zhes gsungs pa' i phyir/ don gyi skabs 'dir tshul khrims dang ldan pa  
la sogs chos rnam pa lngar 'phags pa klu sgrub kyis gsungs te thams  
cad kyang rig' par bya' o// ji ltar zhe na/ 'phags pa klu sgrub  
dang 'phags pa thogs med kyis gsungs pa dag ni mthun pa nyid kyis  
chos de dag nyams su blangs pa 'di gzhi tshul khrims phun sum tshogs  
pa dang ldan pas thos shing bsams te/<sup>5</sup> bsgom<sup>6</sup> pas 'bras bu' i dam  
pa 'grub pa de bstan te/ 'phags pa thogs med kyis tshul bzhin du  
nyan pa dang/ sems pa sngon du 'gro ba'i bsgom' pa'i rnam  
pas 'jug par 'gyur la sgom pa dang ldan pas 'bras bu yongs su 'grub  
pas na nges par 'byin pa'o<sup>(14)</sup>

zhes gsungs pa' i phyir ro// nyan thos kyi theg pa dag gi spyod pa'i  
(D.217b) ming gis brtsad<sup>8</sup> par mi bya ste don gyi khyad par shin tu che  
ba'i phyir ro// khyad par<sup>(15)</sup> gang gis<sup>9</sup> she na/ nyan thos dag gis

---

1) P /. 2) P omits /. 3) P /. 4) P rigs. 5) C,D omit /. 6) P sgom. 7) P sgom. 8) P bcad. 9) P omits gis.

Ratnākaraśānti' s Sūtrasamuccayabāṣyaṃ Ratnālokālaṃkāra (I) (Mochizuki)

gzhan la gnod pa spong bar zad kyi theg pa chen pos ni phan 'dogs par  
zhugs pa dag kyang yin no// de dag ni phung po la mkhas pa la sogs  
pa yin gyi/ theg pa chen pos ni rig (P.256a) pa'i gnas mtha' dag la  
mkhas pa yang yin no// nyan thos pa dag ni mya ngan las 'das pa  
mgo bcad pa lta bur lta ba la slob pa yin pas theg pa chen po pa ni  
mi gnas pa'i mya ngan las 'das pa la slob po// nyan thos dag ni  
theg pa sna tshogs su lta ba la theg pa chen po ni theg pa gcig tu slob  
po// nyan thos dag ni rang gi theg pa la brtson par byed kyi/  
theg pa chen po pa ni theg pa mtha' dag la mkhas par byed do//  
nyan thos dag ni bdag med pa 'ba' zhis bsgom gyi theg pa chen po pa  
ni (C.220b) thabs dang shes rab zung du 'brel par sgom' par byed do//  
de'i 'bras bu mthar thug pa'ang mi thob ste/ lang kar<sup>2</sup> gshegs pa'i  
mdo las/

blo gros chen po nyan thos dang rang sangs rgyas la thar pa med  
do<sup>(16)</sup>

zhes gsungs te/re zhis pa 'di'i gnas tsam du zad do// de ltar lam  
dang 'bras bu dag ni gnas skabs dang mthar thug par dgos pa'i yang  
dgos pa bstan te don 'grub pa'i phyir ro//

theg pa chen po'i dpe gang zhe na /rin po che zhes smras<sup>4</sup> te/ rin  
po che ni chos rnam pa bzhi dang ldan te/ gnod pa nye bar zhi bar<sup>5</sup>  
byed pa dang/ mun pa' i nang du 'od 'byin pa dang/ dbul ba 'dor ba  
dang/ dga' ba rgyas par byed pa'o// de bzhin du theg pa chen po  
yang yon tan bzhi dang ldan te/ sdom pa'i tshul khrims dang/ dge  
ba'i chos sdud pa dang/ sems can gyi don byed pa'i tshul khrims dag<sup>(17)</sup>

---

1) P bsgom. 2) P langkar. 3) P /. 4) D spras. 5) P omits zhi bar.

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabāṣyaṃ Ratnālokāṃkāra (I) (Mochizuki)

ni yid dga' ba rgyas par byed pa'i rgyu yin pa'i phyir dang/ ji skad  
bshad pa'i thos pa'i rnam pa dag ni 'phags pa'i nor bdun bskyed pa'i  
rgyu yin pas dbul ba 'dor bar byed pa dang/ ming dang don gyi yul  
can gyi bsam pa'i shes rab rnam pa bzhi ni ma rig pa rnam pa gsum  
sel ba'i rgyu yin pas mun pa'i nang du 'od 'byin pa dang/ don gyi  
yul can bsgom pa' i shes rab rnam pa gsum ni mthong ba dang bsgom'  
pas spang bar bya ba'i sgrib pa 'joms pa'i rgyu yin (P.256b) pas spang  
(D.218a) bar bya ba'i gnod pa nye bar zhi bar byed pa ste/ 'di dag  
ni rgyas par bshad pa ni 'og nas 'chad do//

*gtam* zhes bya ba ni thams cad du sbyar bar bya ste/ 'khor 'dus  
pa la gsungs shing bshad pa'o// *bshad par bya'o* zhes bya ba ni dam  
bca' ba' o// 'brel pa ni shugs kyis go bas' na thabs dang thabs las  
byung ba'i mtshan nyid kyis brjod do//

### 0.3 Outline of the Sūtrasamuccaya

da' ni mdo' i don bshad par bya ste/ bcom ldan 'das kyis shes rab  
kyi pha rol tu phyin pa chen mo las ji skad du/

grogs po dag sangs rgyas 'byung ba ni dkon no// mir skye ba  
'thob pa ni dkon no//dal ba phun sum tshogs pa ni dkon no//  
'khor ba las thar ba ni dkon no'<sup>(18)</sup>

zhes gsungs pa ni mdo' i don 'phags pa klu sgrub kyis 'chad par bzhed  
nas rnyed par dka' ba bcu gcig tu gsungs (C.221a) te<sup>(19)</sup>/ sangs rgyas  
'byung ba shin du rnyed par dka' ba nas bzung ste/ tha ma che ba

---

1) P sgom. 2) P ba. 3) P de. 4) P //.



Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabāṣyam Ratnālokālamkāra (I) (Mochizuki)

rgya chen po la mos pa rnyed par<sup>1</sup> dka' ba'i bar du' o// de la rnyed par  
dka' ba dang po gsum gyis ni<sup>(20)</sup> sgrub pa'i rten dal 'byor dang ldan pa  
bstan to// dad pa dang byang chub tu sems bskyed pa dang<sup>2</sup> snying  
rje rnyed par dka' ba gsum gyis ni<sup>(21)</sup> byang chub tu sems bskyed pa brtan  
pa bstan to// byang chub sems dpa' la rma 'byin pa'i las kyi sgrib  
pa spang ba la sogs pa<sup>(22)</sup> ni tshul khrims rnam par dag pa' bstan to//  
dmigs pa la spyod pa la sgrib pa med de zhes bya ba la sogs pas<sup>(23)</sup> ni thos  
pa' i rnam pa bstan to// mya ngan 'das las pa'i rang bzhin la mkhas  
par bya ba la sogs pas<sup>(24)</sup> ni bsam pa'i shes rab bstan to// 'jam dpal  
rnam par 'phrul pa' i le'u nas bstan pa la sogs pa<sup>(25)</sup> ni bsgom pa'i shes  
rab bstan to// sangs rgyas dang byag chub sems dpa'i che ba rgya  
chen po<sup>(27)</sup> bstan<sup>5</sup> pa ste/ rnyed par dka' ba tha mas ni 'bras bu' i don  
bstan to// de ltar na chos 'di bzhi dang ldan na 'bras bu' i mchog  
'grub pas mdo' i tshig 'di bzhis skyes bu' i don 'grub (P.257a) pas 'di  
las gzhan du ma bstan pa yin no//

## 1 Chapter 1 : The Utmost Rareness of a Buddha's Appearance

### 1.0 Introduction

de la rten dal 'byor gyi mtshan nyid bstan pa' i phyir sangs rgyas  
'byung ba shin tu rnyed par dka' ste zhes dam bca' ba<sup>6</sup> yin no<sup>(28)</sup>// de  
la mi khom pa brgyad las log pas na dal ba' o<sup>(29)</sup>// 'byor pa ni bcu<sup>(30)</sup>

---

1) P pa. 2) P /. 3) P omits pa. 4) P pas. 5) P omits pa.

6) P bcas pa.

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabāṣyaṃ Ratnālokalaṃkāra (I) (Mochizuki)

ste/ rang (D.218b) gi 'byor pa lnga dang<sup>(31)</sup>/ gzhan gyi 'byor pa  
lnga'o// de la gzhan gyi 'byor pa lnga ni 'di lta ste sangs rgyas rnams  
'byung ba dang/ dam pa'i chos ston pa dang'<sup>(32)</sup>/ chos bstan pa rnams  
gnas pa dang/ chos gnas pa rnams rjes su 'jug pa dang/ gzhan gyi  
phyir rjes su snying brtse<sup>2</sup> bar byed pa'o<sup>3</sup>//

de la sangs rgyas rnams 'byung ba gang zhe na/ 'di ltar 'di na la la  
sems can thams cad la dge legs dang/ phan pa'i bsam pa bskyed nas/<sup>4</sup>  
dka' ba stong phrag mang po dang/ bsod nams dang ye shes kyī tshogs  
chen pos bskal pa grangs med pa gsum gyis tha ma'i lus phyi ma thob  
nas byang chub kyī snying po la 'dug ste/ sgrib pa lnga spangs nas dran  
pa nye bar gzhag pa bzhi la sems legs (C.221b) par gnas te/ byang  
chub kyī phyogs kyī chos sum cu rtsa bdun bsgoms nas bla na med pa  
yang dag par rdzogs pa'i byang chub mngon par rdzogs par 'tshang rgya  
ba yin te/ de ni sangs rgyas 'byung ba zhes bya'o// 'das pa dang/  
ma 'ongs pa dang/ da ltar byung ba'i dus rnams su yang sangs rgyas  
bcom ldan 'das thams cad de kho na bzhin du 'byung ba yin no//

dam pa' i chos ston pa gang zhe na/ sangs rgyas bcom ldan 'das de  
dag nyid dang/de dag nyid kyī<sup>5</sup> nyan thos rnams 'jig rten du byung  
nas/ 'jig rten la rjes su thugs brtse ba' i phyir 'phags pa'i bden pa  
rnams las brtsams nas 'di lta ste gsung rab yang lag bcu gnyis ston  
par mdzad pa yin te/ de ni dam pa' i chos ston pa<sup>(33)</sup> zhes bya' o//  
dam pa'i<sup>(34)</sup> chos de<sup>6</sup> ni dam pa<sup>8</sup> sangs rgyas rnams dang/ sangs rgyas

---

1) P omits dang. 2) D brtsa. 3) p do. 4) P omits/. 5) P kyis.

6) P bya ba. 7) ŚBh omits dam pa' i. 8) ŚBh 'di. 9) ŚBh dam pa  
yang.

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabāṣyam Ratnālokāṃkāra (I) (Mochizuki)

kyi nyan thos kyis<sup>1</sup> gdams<sup>2</sup> shing bstan pa'am bsngags pa yin pas de' i  
phyir dam pa'i (P.257b) chos te/ de bshad pa gang yin pa de ni<sup>3</sup> dam  
pa'i chos ston pa zhes bya'o//

chos ston pa rnam s gnas pa gang zhe na/ sangs rgyas bcom ldan  
'das 'tsho zhing gzhes la chos kyi 'khor lo bskor te/ dam pa'i chos  
bstan pa nas sangs rgyas bcom ldan 'das yongs su mya ngan las<sup>4</sup> 'das  
pa'i bar gyi<sup>5</sup> dus ji srid par bsgrub pa mi nyams pa dang/ dam pa'i  
chos mi nub pa yin te/ de ni dam pa'i chos gnas pa zhes bya'o//  
gnas pa de yang don dam pa'i chos mngon sum du bya ba'i tshul  
(D.219a) gyis yin par rig par bya'o//

chos gnas pa rnam s rjes su 'jug pa gang zhe na/ dam pa' i chos rtogs  
pa gang yin pa de nyid kyis skye bo rnam s la dam pa'i chos mngon<sup>6</sup>  
du bya ba'i skal ba dang/ mthu yod par rig nas/ ji ltar rtogs pa  
kho na dang rjes su mthun pa'i gdams shing rjes su bstan pa la rjes su  
'jug par byed pa yin te/ de ni chos gnas pa rnam s rjes su 'jug pa zhes  
bya'o//

gzhan gyi phyir rjes su snying brtse bar byed pa gang zhe na/ gzhan  
zhes bya ba ni<sup>7</sup> sbyin pa po dang<sup>8</sup> sbyin bdag rnam s te</><sup>9</sup> de dag gis<sup>10</sup>  
'tsho ba'i yo byad rkyen du 'bab pa 'di lta ste/ chos gos dang bsod  
snyoms dang/ mal cha dang/ stan dang/ nad kyi gsos<sup>11</sup> sman dang/  
yo byad gang yang rung ba<sup>12</sup> de dag gi phyir rjes su (C.222a) snying brtse  
bar byed pa yin te/ de ni gzhan gyi<sup>13</sup> phyir rjes su snying brtse bar

---

1) C gyis. 2) SBh brtags. 3) P/. 4) P omits las. 5) P omits gyi.  
6) SBh mngon sum. 7) C na. 8) P omits sbyin pa po dang. 9) ŚBh  
Tib. / 10) C.D gi. 11) P gso. 12) P pa. 13) P gis.

byed pa zhes bya ste/ de ltar gzhan gyi 'byor pa lnga mtshon pa'i don  
du sangs rgyas 'byung ba smos so// 'dir dang po gzhan gyi sbyor ba  
smos pas/ go rim' las 'gal ba'i rgyu mtshan gang zhe na/ sangs  
rgyas 'jig rten du byung ba la sogs pa ni rang gi 'byor pa thob pa'i rgyu  
yin pa'i<sup>2</sup> phyir ro//

sangs rgyas zhes bya ba ni spangs pa dang ye shes kyi don te/ ji  
skad du/<sup>3</sup>

sgrib pa kun gyi<sup>4</sup> dri med pas//

rnam pa thams cad mkhyen nyid thob//

rin chen snod ni phye ba ltar//

sangs rgyas nyid ni yang dag ston//<sup>(35)</sup>

ce' o// 'byung ba zhes bya ba ni 'og min gyi gnas su/ chos dang  
longs spyod rdzogs pa'i (P.258a) skur mngon par sangs rgyas pa'i mod  
las/ 'dzam bu'i<sup>5</sup> gling la sogs par shā kya thub pa'i sku mngon par  
'byung ste ji skad du/

rin chen sna tshogs mdzes pa yi//

'og min gnas ni nyams dga' bar//

yang dag sangs rgyas der sangs rgyas//

sprul pa po ni 'dir 'tshang rgya//<sup>(36)</sup>

zhes 'byung ba'i phyir ro// *shin tu* zhes bya ba ni mchog tu zhes bya  
ba'i don te/ mos pas spyod<sup>6</sup> pa'i sa la gnas pa dag <gi> spyod yul  
yin pa'i phyir te/ ji skad du/<sup>9</sup>

1) C,D rims. 2) P omits rgyu yin pa' i. 3) P. omits/. 4) P gyis.

5) P omits //. 6) P 'dzambu'i. 7) P /. 8) P omits pas spyod.

9) P omits

de tshe chos kyi rgyun la ni//  
 sangs rgyas rnam la zhi gnas dang//  
 ye shes yangs<sup>1</sup> pa thob bya'i phyir//  
 gdams ngag rgya chen thob par 'gyur//<sup>2</sup>(37)

zhes 'byung bas mos pas spyod pa'i sa la gnas pa ma (D.219b) gtogs  
 pa dag gis sprul pa'i sku ni mi<sup>3</sup> mthong ba'i phyir<sup>4</sup> rnyed par dka'  
 zhes smos pa yin no// 'o na mdo las

gang dag bde ba can du smon lam 'debs pa de dag ni tshe dpag  
 tu med pa mthong bar 'gyur ro//de bzhin du yang dag par rdzogs  
 pa' i sangs rgyas mtshan legs par yongs su bsgrags pa<sup>(38)</sup>

zhes bya ba dang/

shin tu yongs rdzogs dpal dang/rnam pa thams cad du cher mchod  
 pa' i dpal<sup>(39)</sup>

zhes bya ba dang/

yang bcom ldan 'das shā kya thub pa' i mtshan 'dzin pa de dag  
 kyang phyir mi ldog cing sangs rgyas dang phrad par 'gyur<sup>(40)</sup>

zhes 'byung ba dang/ 'gal bas ci mngon zhe na zhes rgol ba la/ lan  
 ni 'gal ba med de/ de dag ni sa bon rgyud la bskyed pas dus gzhan  
 la dgongs<sup>5</sup> pa yin la/ 'o na tshogs kyi sa la sangs rgyas dang phrad  
 par 'gyur ba bstan pas de dang (C.222b) 'gal lo zhe na ma yin te/ sangs  
 rgyas dang phrad pa'i dgos pa ni chos thos pa yin la/ de'ang mos  
 pas spyod pa'i sa chen po la 'byung ba'i phyir dang/ chos ma thos  
 par ni spang bya la sogs pa<sup>6</sup> shes par mi 'gyur bas' na don med par

---

1) C,D spangs. 2) P omits //. 3) P ma. 4) C,D phyir de' i phyir  
 5) P dgos. 6) C par. 7) P ba.

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabāṣyaṃ Ratnālokalampkāra (I) (Mochizuki)

'gyur ro// de lta ma yin na tha mal pa dag las kyang chos thos pa  
'byung bas sangs rgyas dang phrad pa ci dgos she na/ de dag kyang  
sangs (P.258b) rgyas kyi mthus gdul bya rgyud dang/ sa dag la snang'  
bas na sangs rgyas kyis byin gyis brlabs<sup>2</sup> kho nar 'dod de/ dper na/

sangs rgyas 'jig rten phan pa drang srong che//

bskal pa bye ba brgya lam 'byung bar 'gyur//

da lta dal ba dam pa rnyed pa las//

gal te thar 'dod bag med spang bar gyis/<sup>(41)</sup>

zhes bstan pa lta bu'o// de bas na de dag kyang chos kyi rgyun thob  
pa la 'dod do// gzhan dag ni sa bon rgyud la bskyed pa'i rgyu yin  
pas 'gal ba med do<sup>3</sup> zhes bya ba ni lung gi rigs pa'o// lung dngos  
bstan pa ni *mdo sde du ma tshad mar gyur pa las shes te* zhes bstan  
te/ rang bzo ma yin pas *mdo sde* zhes bya' o// nges pa' i don du  
bstan pas na *du ma* zhes smos te/ lung gi don rigs pas brtags pa  
dang/ lung bstan pas nang<sup>4</sup> byan byas pa dang/ lung gi don lung  
gis bshad pa dang/ lung gi don lung dang mi 'gal bar bstan pa ste/  
mtshan nyid 'di bzhis na nges don du shes par bya la de bzhin mtshon  
pa'i (D.220a) phyir lung gi don lung dang mi 'gal ba dang/ lung gi  
don lung gis bshad pa smos so// de nyid kyis mi bsu<sup>5</sup> ba' i phyir<sup>(42)</sup>  
*tshad ma* zhes bya ste/ yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas kyi gsung  
yin pa'i phyir ji skad du/

dge slong dag sa ni nam mkha' la 'phags kyang srid/ nyi ma dang  
zla ba ni sa la lhung yang srid/chu klung ni rgyun nas ldog kyang

---

1) P gnang. 2) C,D sangs rgyas kyi byin gyi rlabs. 3) P //.

4) C,D na 5) D bsru.

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabāṣyaṃ Ratnālokalaṃkāra (I) (Mochizuki)

srid<sup>1</sup>/ de bzhin gshegs pa'i bka' ni gzhan du 'gyur mi srid do<sup>2</sup>  
zhes gsungs pa lta bu'o//

1.1 Saddharmapuṇḍarīkasūtra<sup>(44)</sup> (P.172b4, D.148b2, T.49c20,  
BP.1.12)

ji skad du gsungs she na/ dge slong dag ces smos te/ nyon  
mongs pa bcom pa'i phyir dang/ gsol ba dang bzhi'i las kyis bsnyen  
par rdzogs pa' i phyir dge slong dag ces gsungs so// de la phyin ci  
ma log pa gsungs pas na *de bzhin gshegs pa* zhes bya'o// thob par bya  
ba'i don thams cad brnyes<sup>3</sup> pa dang/ bsod nams kyi zhing bla na med  
pa yin pa'i phyir mchod (C.223a) par 'os pa yin pas *dgra bcom pa* (P.  
259a) zhes bya'o// chos rnam ji lta ba bzhin du don dam par<sup>4</sup> thugs  
su chud pas *yang dag par rdzogs pa' i sangs rgyas* zhes bya' o// sku  
tshe dang/ mtshan dang/ sku dang rigs ma gtogs pa tha dad pa  
med pas<sup>(45)</sup> *rnam* zhes bya' o// *bskal pa* zhes bya ba ni bar gyi bskal  
pa brgyad cu ste/ bskal pa chen po<sup>(46)</sup> o// de nyid gcig nas gnyis su  
bgrangs pa ni *stong phrag mang po'o*// de la brgya stong phrag  
brgya na *bye ba' o*// bye ba rang gi 'gyur nas gnas bzhi pa ni<sup>5</sup> *khrag*  
*khrig go*//<sup>6</sup> 'jig rten ni stong gsum du'o//

1.2 Nirṇayaśāntasūtra<sup>(47)</sup> (P.172b6, D.148b3, T.49c23, BP.1.19)

dpe sgrub pa ni *kun dga' bo* zhes smos te/ kha dog ces bya ba ni

---

1) P srid kyī. 2) P ///. 3) P brnyed. 4) P pas. 5) P omits ni.  
6) D //.

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabāṣyaṃ Ratnalokālaṃkāra (I) (Mochizuki)

bstan pa'i tshig go/<sup>1</sup> *gsal ba* ni rang bzhin gyi mdog go/<sup>2</sup> 'od 'byin  
pas na 'od bzang po'o// *dpag tshad* ces bya ba ni/

lcags chu ri bong lug dang glang//

nyi zer rdul dang sro ma dang//

de las byung ba<sup>3</sup> de bzhin du//

sor ni<sup>4</sup> nyi shu bzhi la khru//

khru bzhi la ni gzhu 'dom gang<sup>5</sup>//

gzhu 'dom<sup>6</sup> lnga brgya rnam la ni//

rgyang grags de la dgon par 'dod//

de brgyad dpag tshad ces bya'o/<sup>(48)</sup>

de' i yon tan gzhan bstan pa ni mig gi *rab rib* sel' ba dang/ yid kyi  
*dran pa* *gsal bar byed pa* dang/ lus kyi *nad* sel ba dang/ sna'i dbang  
po la phan (D.220b) 'dogs pas me tog de ni rab rib med par byed pa la  
sogs pa tshig bzhi smos so// gong du 'od bzang po smos pa ni *snang*  
*bar yang byed* ces bya ba ste gzugs mthong ba'i phyir ro// de la  
sna'i dbang po'i mi mthun pa spong bas na *sel ba'* o// mthun pa  
bskyed pas na 'byin pa' o// o' na sna'i dbang por zad dam zhe na/  
*kham bzhi dang bar byed pa* ste lus kyi dbang po dang/ lce dang/  
mig dang/ rna ba'i dbang po dag ni sa'i kham dang/ chu dang/  
me dang/ rlung gi kham yin la/ de dag la phan 'dogs pas dang bar  
'gyur ba'o// 'o na 'khor los sgyur ba'i rgyal po ni mtshan bzang po  
sum cu dang ldan pas de'i tshe 'byung ngam zhe na 'khor los sgyur ba'i  
*rgyal po thams* (P.259b) *cad la yang* zhes bya ba la sogs pa gsungs te/

---

1) D // . 2) D // . 3) C,D pa, AKK dang. 4) AKK mo.

5) AKK gang ngo. 6) AKK de dag. 7) D sal.



'khor los sgyur ba zhes bya ba ni/

gser dngul zangs lcags 'khor lo can//

de deg gling gcig gling gnyis dang//

(C.223b) gsum dang bzhi la mas rim bzhin//

phas su rang 'gro g-yul bshams dang//

mtshon brtsams las<sup>(49)</sup> rgyal gnod pa med//

ces bya ba'o// *tshul khrims 'chal pa* ni rnam pa gnyis te/ma thob  
pa'i nyams pa dang/ thob pa'i nyams pa'o// yang tshul khrims  
'chal ba ni bzhi ste/ rtsa ba'i ltung ba lhag par spyad pa dang/  
so sor lta ba dang/ yongs su ma dag pa'i chos 'chad pa dang/ nyan  
thos dang rang rgyal ba' i bsam pa bskyed pas nyams pa' o// dus  
mnyam pa nyid ni *mtshungs pa' o*//

1.3 Avadāna<sup>(50)</sup> (P.173a1, D.148b5, T.50a5, BP.2.11)

de' i yon tan ni bshad mod kyi/ 'on kyang dbyibs dang/ kha dog  
dang/ gnas dang/ dus ma brjod pas 'dri ba ni/ *me tog de ci 'dra*  
*gang du nam<sup>2</sup> skyes she na* zhes bya' o// de la gang du skye ba  
bstan pa ni *mtsho chen po ma dros pa* zhes bya ba la sogs pa ste/

'di nas byang du ri nag po//

dgu 'das gangs ri'o<sup>3</sup> de nas ni//

spos ngad ldan pa' i tshu rol na//

chu zheng<sup>4</sup> lnga bcu yod pa' i mtsho//<sup>(51)</sup>

zhes bya ba ste/ dmyal ba'i mes kyang dro bar mi nus pas ma dros

---

1) AKK pas. 2) C ha na. 3) RA i, AKK o. 4) P mchu zhing.

pa'o// yang rgyal po brtsams kyi' 'bras bu'i<sup>2</sup> don yin pas na dron  
 po blugs pa grangs<sup>3</sup> par gyur pas *ma dros pa*<sup>(52)</sup> zhes bya'o// yang na  
 klu'i rgyal po ma dros pa zhes bya ba gnas pas<sup>4</sup> *ma dros pa* zhes  
 bya'o// nam skye ba bstan pa ni *nam sangs* (D.221a) *rgyas bcom*  
*ldan 'das dag* ces bya ba la sogā pa ste/ *sangs rgyas* zhes bya ba'i  
 don ni bshad zin to// yang na don dang ldan pa'i chos kyi tshogs  
 dang/ don dang<sup>5</sup> mi ldan pa'i chos kyi tshogs dang/ don dang ldan  
 pa yang ma yin don dang mi ldan pa yang ma yin pa'i chos kyi tshogs  
 mtha' dag rnam pa thams cad du mngon par rdzogs par thugs su chud  
 pas na *sangs rgyas* zhes bya' o// bdud dpung dang bcas pa thams  
 cad kyi g-yul chen po (P.260a) bcom pas na *bcom ldan 'das* zhes bya'o//  
 yang na/

dbang phyug dang ni gzugs bzang dang/

dpal dang grags dang ye shes dang/

brtson 'grus phun sum tshogs pa yi//

drug po dag la ldan zhes bshad//<sup>(53)</sup>

ces pa'i tshul gyis kyang bcom ldan 'das so// sprul pa'i sku rnam  
 mtshungs pas na *dag* ces bya' o// *dga' ldan* zhes bya ba<sup>(54)</sup> ni 'dod pa'i  
 lha rigs bzhi pa ste<sup>(55)</sup> gzigs pa mtha' yas<sup>6</sup> la gzigs nas 'dzam bu'i' gling  
 du byon pa' i tshe/

glang chen thal kar (C.224a) mche ba drug ldan pa//

rkang gnyis mchog dang ldan pas zhal bzhes nas//

drang strong gnas zhes pa ni ji bzhin du/

---

1) P tsam gyi. 2) C knu' i. 3) C drangs. 4) C,D pas na.

5) P omits dang. P 6) C,D dag. 7) P 'dzambu' i.

yum gyi lhums su 'jug pa nyid du bstan /<sup>(56)</sup>  
 zhes<sup>2</sup> bya ba'i tshul gyis zhugs pa' o // 'phags pa byams pa chos kyi rgyal  
 tshab tu dbang bskur bas na *babs pa*' o // lha'i 'khor du mas bskor  
 nas byon pas na *ris* zhes bya'o // mgo lcogs pa ni *kha 'bu ba*' o //  
 lum pa' i tshal du shing plak sha' i<sup>(57)</sup> yal g-yum gyis bzung ste / glo g-yas  
 pa dral ba'i tshe yang tshangs pa dang brgya byin gyis blangs pa'i tshel<sup>(58)</sup>  
 ha'i bus khrus byas shing ma brten par gom pa bdun bor<sup>(59)</sup> ba ni *bltams*<sup>(60)</sup>  
*pa*' o // me tog gyes pa ni *kha 'bye*' o // rdo rje'i gdan du rdo  
 rje'i skyil mo krung gis rdo rje lta bu'i ting nge 'dzin la brten nas  
 rang nyid kyi slob dpon med par chos thams cad rnam<sup>(61)</sup> pa' thams cad  
 du mngon par rdzogs par sangs rgyas pa ni *nam bla na med pa* zhes bya  
 ba la sogs pa ste / nyan thos dang<sup>8</sup> rang sangs rgyas kyi rtogs pa las  
 khyad zhugs pas na *bla na med pa*' o // phyin ci ma log pa'i don<sup>9</sup>  
 khong du chud pas na *yang dag pa*' o // spangs pa dang ye shes mthar  
 thug pas na *rdzogs pa*' o // zad pa dag mi skye ba shes (D.221b) pa'i  
 ye shes ni *byang chud* ces bya ste /

dri ma zad dang mi skye ba' i //

ye she byang chub ces brjod de //

zad med skye med phyir de dag /

go rim<sup>10</sup> bzhin du shes par bya /<sup>(62)</sup>

zhes pa'o // de nyid mngon sum du mdzad pas (P.260b) *mngon par*  
*rdzogs par sangs rgyas pa* zhes bya'o // rab tu rdzogs par smin<sup>11</sup> pas

1) P /. 2) P ces. 3) C,D plag sha' i. 4) P bong. 5) P bltam.

6) C snyam. 7) P omits thams cad rnam pa. 8) P omits dang.

9) P omits don. 10) C,D rims. 11) P smon.

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabāṣyaṃ Ratnālokalaṃkāra (I) (Mochizuki)

na rgyas pa' o// gdul bya'i gang zag ma gzigs pas gzhan skyo ba  
bskyed' pa'i phyir sprul pa'i sku'i snang ba nub par byed pas na 'dzam  
bu'i<sup>2</sup> gling du dgung lo brgyad cu rtsa gcig la byon pa ni tshe'i 'du byed  
gtong bas na bor ba ste/ rnam par nyams pas na tshal rnyings  
pa'o// nam tha ma'i gsol ba pa'i don grub nas gyad kyi nye 'khor  
ku sha'i grong du glo g-yas pa phab<sup>3</sup> pa'i tshe'<sup>64</sup> jig rten du cho 'phrul  
chen po ma byung ba dang/ nyid kyi thub pa'i bka'i mes bzhen zhing<sup>4</sup>  
'dzam bu'i<sup>5</sup> gling gi rgyan nub pa ni yongs su mya ngan las 'das pa ste/  
sa'i steng du lhung bas na me tog la sogs (C.224b) pa lhags pa' o//  
mdzad pa dag ni bcu gnyis su bstan pa ma yin nam/ ci'i phyir bzhi  
smos she<sup>6</sup> na/ bden mod kyi/ 'on kyang 'dir mdzad pa bzhi ni sangs  
rgyas thams cad kyi thun mong ma yin te/ bltams' pa dang/ mngon  
par rdzogs par 'tshang rgya ba dang/ chos kyi 'khor lo bskor ba dang/  
mya ngan las 'da' ba med pa gang du yang mi srid la/ dka' ba spyod  
pa la sogs pa ni thams cad du nges pa med de gbul bya rgyud dag pa  
dag la mdzad pa bzhis don 'grub pa'i phyir dang/ kha cig srod la  
mngon par rdzogs par sangs rgyas nas/ de nyid kyi tho rangs yongs  
su mya ngan las 'das pa dag la<sup>8</sup> mdzad pa bcu gnyis su rigs pa ma yin  
no// ci 'dra ba<sup>9</sup> zhes bya ba che khyad ni shing rta'i 'khor lo tsam  
zhes bya'o// kha dog dang ldan zhing gsal te zhes bya ba la ni ji ltar kha  
dog dang ldan zhing gsal zhe na/ kha dog dkar rab tu 'gyur ro zhes bya  
ba ni rgyal rigs kyi nang du 'byung ba' i tshe' o// dkar por 'gyur  
ro zhes bya ba ni bram ze'i rigs kyi nang na 'byung ba'i tshe' o//

- 
- 1) P skyed. 2) P 'dzambu' i. 3) P pab. 4) P cing. 5) P 'dzambu' i.  
6) P zhe. 7) P bltam. 8) P omits la. 9) P omits ba.

Ratnākaraśānti' s Sūtrasamuccayabāṣyaṃ Ratnālokalamkāra (I) (Mochizuki)

ci'i phyir rigs gnyis kho na smos she' na/ 'jig rten na mthun pa dang/  
dbang che bar grags (P.261a) pa'i rigs ni gnyis te/ mdun na 'don pa'  
dang/ rgyal rigs so// de la gal te rgyal rigs mchog tu byas na ni  
rgyal rigs su skye ba bzhes la mdun (D.222a) na 'don mchog tu bya ba  
ni/ bram ze'i rigs su skye bar 'gyur te/ ci'i phyir zhe na/ des gzhan  
'dul ba' i phyir ro//

1.4 Bodhisattvapiṭaka<sup>(65)</sup> (P.173a6, D.149a2, T.-, BP. 3.9)

padma dkar po'i mdo ni<sup>3</sup> drang ba'i don yin no zhe na/ gnyis pa  
nges pa'i don du bstan pa'i lung ni<sup>(66)</sup> byang chub sems dpa' i sde snod'  
las kyang<sup>(67)</sup> zhes bya'o// kye zhes bya ba ni brgyad pa'i sgra'o<sup>(68)</sup>//<sup>5</sup>  
rgyal ba' i sras zhes bya ba ni rigs 'tsho ba' i phyir byang chub sems  
dpa'i ming gi khyad par te/

byang cub sems dpa' sems dpa' che//

blo dang ldan pas gsal ba'i mchog//

rgyal sras rgyal pa'i gzhi dang ni//

rgyal ba'i myu gu rnam rgyal byed//

rtsal dang ldan pa 'phags pa'i mchog/

ded dpon grags pa chen po ste//

snying rje can dang bsod nams che//

dbang phyug de bzhin chos dang ldan//<sup>(69)</sup>

zhes bya ba lta bu'o// ri mor byas pa la sogs pa mthong ba yang

- 
- 1) P zhe. 2) P omits pa. 3) C,D na. 4) C,D sned. 5) P omits//.  
6) P /.

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabāṣyaṃ Ratnālokalaṃkāra (I) (Mochizuki)

tshogs bsags pa la (C.225a) rag lus pas na rnyed par dka' ste zhes bya'o//  
bskal pa grangs med pa dang po la mthong ba<sup>(70)</sup> la mchog tu smos so//

1.5 Bhagavajñānavaipulyasūtra<sup>(71)</sup> (P.173a7, D.149a3, T.50a14,  
BP.3.12)

mos par spyod pa'i sa la sangs rgyas mthong ba ma yin pa tshogs  
kyi' sa la 'dod pa dgag pa<sup>2</sup> ni grogs po dag' ces pa la sogs pa ste/  
sangs rgyas 'byung ba'i dgos pa'i chos bstan pa yin/ bag yod pa'i  
chos ston pa zhes bya ba ste/<sup>4</sup> chos thos<sup>5</sup> pa la brten nas nyes pa ma  
byung gi snga rol la sogs pa' i bag yod pa<sup>6</sup> rnam pa lnga yin pa ni/  
bag yod pa ni mya ngan las 'das pa<sup>7</sup> thob par byed pa'i phyir te/

bag yod 'chi med gnas yin te//<sup>8</sup>

bag med pa ni 'chi ba'i gnas//<sup>9</sup>

bag yod 'chi bar mi 'gyur te//

bag med pa ni rtag tu 'chi//<sup>10</sup> <sup>(72)</sup>

zhes gsungs pa dang/ bag yod pa'i legs pa lnga ste/<sup>(73)</sup> longs spyod rgya  
chen po thob cing de las mi nyams pa dang/ phyogs mtshams su grags  
pa chen po 'byung ba (P.261b) dang/ 'khor thams cad du zhum pa med  
pa dang/ 'chi ba'i tshe 'gyod pa med pa dang/shi ba'i 'og tu lha'i  
'jig rten du skye'o zhes bya ba la sogs pa bstan pas bag yod pa ni chos  
thams cad kyi rtse ba yin pa'i phyir ro//

---

1) P kyis. 2) P dga' ba. 3) P and N,P of SS gang. 4) P bya' o//.

5) P thob. 6) P omits pa. 7) P 'das pa las. 8) P /. 9) C,D /.

10) P /.

1.6 Candragarbhaparivarta <sup>(74)</sup> (P.173bl, D.149a4, T.-, BP.3.18)

gong du u du mba ra'i' me tog bzhin no zhes 'byung ba <sup>(75)</sup> ni drang  
don de dpe mi byed pas so zhe na/ zla ba' i snying po'i le'u las kyang  
bstan te zhes bya ste/dper brjod pa ni (D.222b) mdo<sup>2</sup> gzhan dag las  
so//

1.7 Gaṇḍavyūhasūtra <sup>(76)</sup> (P.173bl, D.149a4, T.50a17, BP.3.22)

'o na sangs rgyas dang phrad pa la yon tan ci yod ce na/ yon tan  
gyi sgo nas bstan pa ni/gang dag mthong zhing thos pa dang<sup>3</sup> zhes  
bya ba la sogs pa ste/don yod pa zhes bya ba ni thams cad la sbyar  
bar bya' o//

gang phyir rgyal ba dbang po dag/

mthong na ye shes mthong phyir ro// <sup>(77)</sup>

zhes bya ba la sogs pas ni mthong ba don yod pa bstan to// rin chen  
gtsug tor gyi mtshan lan gsum thos pas sum cu rtsa gsum gyi lhar  
skyes <sup>(78)</sup> so zhes bya ba la sogs pa de ni thos pa don yod pa' o// bsnyen  
bkur byas pa don yod pa ni khye' u glang po skyong lta bu' o// mthar  
mya ngan las 'das pa thob par byed pas na 'dren pa' o// kha cig na  
re mthong ba dang thos pa dang bsnyen bkur bya ba ji ltar don yod  
ces (C.225b) 'jig rten 'dren pa'o' zhes bya'o zhes 'chad do// byed pa  
ni mtshon pa'i don to//

---

1) C,D and C,D of SS u dum va ra' i. 2) D mde. 3) C,D //.

4) P //.

1.8 Bhadrakalpikasūtra<sup>(79)</sup> (P.173b2, D.149a5, T.50a18, BP.4.6)

gong du de bzhin gshegs pa mthong yang srid mi mthong yang srid  
ces bya ba de lta bu zhe na/ *bskal pa bzang po' i mdo las kyang zhes*  
*gsungs te/ bskal pa drug cu dang/ brgyad khri dang sum brgyar ni*  
*mi mthong bar 'gyur ro// bskal pa 'di dang/ bskal pa skar ma lta*  
*bu dang/ yon tan bkod pa rnam la ni mthong yang srid pa' o//*  
sangs rgyas 'byung ba rnyed dka' ba bshad zin to//

1.9 Colophon

mdo sde kun las btus pa'i bshad pa lung gi tshad mar sbyar ba las/  
sangs rgyas 'byung ba rnyed dka' ba'i gtam ste dang po'o//

Notes

- (1) There are many open questions as regards the quotations in the Sūtrasamuccaya (SS) . In order to find out which SS quotations are referred to by Ratnākaraśānti in his SS commentary and how they are commented upon by him, it is for the sake of convenience that I have prepared this critical edition of the first chapter of the Sūtrasamuccayabāṣya (RA) .
- (2) In this text Nāgārjuna and Asaṅga are treated equally. But Ratnākaraśānti does not emphasize Nāgārjuna's Madhyamaka thought, and he only sits it in with his Yogācāra leadings conveniently. Thus it is clear that this text was written from a Yogācāra's point of view. Cf. Seyfort Ruegg (1981) , p.124, Umino (1985) , pp.55—56
- (3) Skt. : prayojana ; cf. NVT (D) , Stcherbatsky (1927-8) . Ichigō (1985, pp.1-11) treats the function of the terms "purpose" (prayojana), "relation" (sambandha) , "object" (abhidheya) and "purpose of the



purpose" (prayojanasya prayojana) as employed by Vinītadeva, Dharmottara and Kamalaśīla. As for this topic, see the beginning of the Pramāṇa-vidhvamsana-tippitāka-vṛtti (=PVTV, D.3904, P.5300. The author is unknown) ; cf. Kajiyama (1989) , p.361.

(4) PVTV, D.,293b3 :

gang zhiḡ dgos pa la sogs pa ma brjod na rtog pa dang ldan  
pa rnam s 'jug par mi 'gyur te/

NBT (V) , P., she 2a4-5, la Vallée Poussin (1984) p.31.12-15, Gangopadhyaya (1971) , p.3.14-16, 80.6-9,

'di ltar 'brel pa med pa dang/dgos pa med pa dang brjod par  
bya ba med pa' i bstan bcos sam rab tu byed pa ni rtog pa sngon  
du gtong ba rnam s khas mi len te/

(5) Though in the Tibetan title of the Sūtrasamuccaya is *mDo kun las btus pa* and it is often used in this commentary, the correct one might be *mDo sde sna tshogs las btus pa theg pa chen po rin po che'i gtam*. Not only is this longer version of the SS title provided with glosses, but it is also the latter which is rendered in Chinese. In order to make the SS's sentences clear, I write them in italic letters.

(6) Skt.: sambandha. See note (3) .

(7) Skt.: abhidheya. See note (3) .

(8) Skt.: prayojanasya prayojana. See note (3) . Dharmottara did not refer to this term.

(9) PVK 1.214, Miyasaka (1971-2) , pp.146-7, Gnoli (1960) p.108.9-17, Yaita (1987) ,p.7.5-8,

sambaddhānuguṇōpāyaṃ puruṣārthābhidhāyakam/  
parikṣādhikṛtaṃ vākyam ato 'nadhikṛtaṃ param//

Tib.: 'brel pa dang ni rjes mthun thabs//  
skyes bu' i don ni rjod byed dang//  
yongs brtags dbang du byas yin gyi//  
de las gzhan pa' i dbang byas min//

(10) Skt.: upāyōpeyabhāvaḥ. NBT (D) , Stcherbatsky (1918) , p.2.15, Stcherbatsky (1932) , p.3.9-10,

upāyōpeyabhāvaḥ prakaraṇa-prayojanayoḥ sambandhaḥ.

NBT (V) , P.,she 2b5-6, la Vallée Poussin (1984) , p.32.11-12, Gangopadhyaya (1971) , p.3.14-16, 80.6-9 (but Gangopadhyaya read thabs

kyis for thabs dang thabs kyis.) :

de lta bas na rab tu byed pa dang/ dgos par thabs dang thabs  
kyis bsgrub par bya ba' i mtshan nyid kyis 'brel pa yin te/  
and PVTV, D.,294a1-2  
dgos pa ni de las byung ba ni/'dir yang thabs dang thabs las  
byung ba dang/ rgyu dang 'bras bu'i tshul gyis 'brel pa yin  
no//

(11) This is not identified yet, but it is different from those definitions in Dharmottara, Vintādeva and PVTV.

(12) Ratnāvalī 4.80, M.Hahn (1982) p.122, 123 and 180

dāna-śīla-kṣamā-vīrya-dhyāna-prajñā-kṛpātmakam/  
mahāyāna-mataṃ tasmin kasmād dur-bhāṣitaṃ vacaḥ//  
Tib., sbyin dang tshul khrims bzod brtson 'grus//  
bsam gtan shes rab snying rje'i bdag//  
theg chen yin na de yi phyir//  
'di la nyes bshad ci zhig yod//

(13) BBh Wogihara (1971) , p.297.7-298.2 :

saptēmāni mahattvāni yair yuktam bodhisattvānāṃ yānaṃ mahā=  
yānaṃ ity ucyate. katamāni sapta. dharma-mahattvaṃ. . .cittōt=  
pāda-mahattvaṃ. . . adhimukti-mahattvaṃ. . .adhyāśaya-maha=  
ttvaṃ. . . saṃbhāramahattvaṃ. . . kāla-mahattvaṃ. . .samud=  
āgama-mahattvaṃ. . .

Tib ; P. shi 177b1-6, Chi ; T.p.548c13-22:

(14) This is not identified yet.

(15) It is not clear on which textual authority these seven characteristics are based.

(16) LA, Nanjio (1918) , p.63.3-4,17-64.1.

yad-uta śrāvaka-yānābhisamayagotrāṃ pratyeka-buddha-yāna-  
abhisamayagotrāṃ. . .dharma-nairātmya-darśanābhāvān nāsti  
mokṣo mahāmate/

(17) Skt.: saṃvara-śīla, kuśala-dharma-saṃgrahakam-śīla and sattvārtha-  
kriyā-śīla. See MSA; Lévi (1907) , p.108.14, Lévi (1907) , p.191.4-5,  
Bagchi (1970) , p.106.3, BBh; Wogihara (1971) , p.138.22-23, Tib ; P.shi  
85b8, Chi ; T.p.511a14-15.

(18) This is not identified yet.

- (19) Chr. Lindtner (1982, pp.172-175) divided the Sūtrasamuccaya into thirteen sections. Dīpaṃkaraśrījñāna analyzed these eleven chapters, but he classified them into seven parts. See Mochizuki (1991) .
- (20) The chapters of SS are entitled as follows ; Sangs rgyas 'byung ba rnyed par dka' ba (chap.1) , mi lus thob pa rnyed par dka' ba (chap. 2) and dal ba 'byor pa rnyed par dka' ba (chap.3) . See Pāsādika (1989) , IX—X.
- (21) Dad pa rnyed par dka' ba (chap.4), byang chub tu sems bskyed pa rnyed dka' ba (chap.5) and snying rjes rnyed par dka' ba (chap.6) .
- (22) Bar du gcod pa' i chos spang ba rnyed par dka' ba (chap.7) .
- (23) sGrud pa rnyed par dka' ba (chap.8) .
- (24) Mya ngan las 'das pa la mos pa rnyed par dka' ba (chap.9) .
- (25) Mañjuśrīvikṛīḍitasūtra. This sūtra is quoted three times in SS.
- (26) sPyod pa'i khyad par rnyed par dka' ba (chap.10, Theg pa gcig la mos pa'i sems can in SS) .
- (27) Rgya chen po la mos pa rnyed dka' ba (chap.11) .
- (28) Dīpaṃkaraśrījñāna subsumes the first three SS chapters under this topics. See Mochizuki (1991) .
- (29) These eight inopportune conditions are ( 1 ) naraka, ( 2 ) tiryak, ( 3 ) preta, ( 4 ) dīrghajīvadeva, ( 5 ) pratyantajanapada, ( 6 ) indriyavaikalya, ( 7 ) mithyādarśana and ( 8 ) tathāgatanām anutpāda. See Rigzin (1986) pp.312-313.
- (30) See Rigzin (1986) p.190.
- (31) This term is treated in the next chapter according to Śrāvakabhūmi.
- (32) The following tallies with the explanation given in the Śrāvakabhūmi. So it must be a quotation from that text. ŚBh, Shukla (1973), p.7-8, Shōmonji Kenkyū-kai (1981) , pp.18-23,  
para-sampat katamā/tad-yathā buddhānām utpādaḥ, sad-dharma-  
deśanā, deśitānām dharmanām avasthānam, avasthitānām cānupra=  
vartanam, paratāś ca pratyanukampā//  
tatra buddhānām utpādaḥ katamaḥ /yathāpihaikatyāḥ sarvaṃ  
[Tib. om.] sarva-sattveṣu kalyāṇaṃ [Tib. ṇa] hitādhyāśayam  
utpādyā prabhūtail duṣkara-sahasrair mahatāca puṇya-jñāna-sam=  
bhāreṇa • • • ātma-bhāva-pratilambhe bodhimaṇḍe niṣadya, pañca  
nivarāṇāni prahāya, caturṣu smṛty-upasthāneṣu sūpasthita-cittaḥ,

sapta-triṃśad bodhi-pakṣyān dharmān bhāvayitvānuttarāṃ samyak-  
sambodhim abhisambudhyate/ ayam ucyate buddhānām utpādaḥ/  
atitānugata-pratyutpanneṣv adhvasu evam eva . . .

<saddharma-deśanā katamā/>ta eva buddhā bhagavanto loka  
utpadya tasyaiva ca śrāvakā lokānukampām upādāya catvāry  
ārya-satyāny ārabhya duḥkha . . . sadbhir ayañ ca dharmo nir-  
yāto deśitaḥ praśasto buddhaiś ca buddha-śrāvakaiś ca . . . //  
deśitānām dharmānām avasthānām katamat/ deśite sad-dharme,  
pravartite dharma-cakre, yāvac ca buddho bhagavān jivati tiṣṭhati  
ca, parinirvṛte ca buddhe-bhagavati yāvata kālana pratipattir na  
hiyate, sad-dharmaś ca nāntardhiyate/ idam ucyate sad-dharma=  
syāvasthānaṃ/ yāva- [vasthānaṃ . . . veditavyam] //  
avasthitānām dharmānām anupravartanaṃ katamat/ yat ta eva-  
adhigantāraḥ sad-dharmasya, sad-dharma-sākṣāt-kriāyayai  
bhavyāṃ pratibalaṭāṃ janatāṃ viditvā yathādhigatām  
evānulomikim avavādānuśāsanīm anupravartyantidam ucyate  
avasthitānām dharmānām anupravartanaṃ//  
parataḥ pratyanukampā katamā/ para ucyante dāyaka-dānapata=  
yaḥ, te yañi tasyānulomikāni jvitopakaraṇāni, taiḥ pratyanukam=  
pante, yad-utacivara-piṇḍapāta-śayanāśana-glāna-pratyaya-bhaṣaj=  
ya-pariṣkārair, iyam ucyate parataḥ pratyanukampā//

Tib ; P.wi 4b5-5b4, Chi ; T.p.396c9-397a7.

(33) ŚBh, Tib. : sdug bsngal ba dang/ kun 'byung ba dang/'gog pa  
dang/ lam rnam. See Shōmonji Kenkyū-kai (1981) , p.20.5-6.

(34) ŚBh, Tib. : mdo'i sde dang/dbyang kyis bsnyad pa'i sde dang/  
lung du bstan pa'i sde dang/tshigs su bcad pa'i sde dang/ched  
du brjod pa' i sde dang/gleng gzhi'i sde dang/rtoḡs pa brjod pa'i  
sde dang/de lta bu'i byung ba'i sde dang/skyes pa rabs kyi sde  
dang/shin tu rgyas pa'i sde dang/rmad du byung ba'i chos kyi  
sde dang/gtan la phab par bstan pa'i sde'i chos. See Shōmonji  
Kenkyu-kai (1981) , p.20.7-12.

(35) MSA 9.2, Lévi (1907) , p.33.16.-17, Lévi (1911) , p.68.8-10, Bagchi  
(1970) , p.37.5-6,

sarvākāra-jñatāvṛptiḥ sarvāvaraṇa-nirmalā/  
vivṛtā ratna-peṭheva buddhatvaṃ samudāhṛtam//

(36) This verse is not identified yet.

(37) MSA 14.3, Lévi (1907) , p.90.14-15, Lévi (1911) , p.161.17-19, Bagchi (1970) , p.88.10-11,

dharma-srotasi buddhebhya 'vavādaṃ labhate tadā/  
vipulaṃ śamatha-jñāna-vaipulya-gamanāya hi//

(38) This is not identified yet.

(39) This is not identified yet, either.

(40) This is not identified yet, either.

(41) This verse is not identified, either.

(42) This explanation may be a quotation from a pramāṇa text.

(43) This is not identified yet.

(44) SDP, Kern (1908-12) , p.319.11-13 (chap.15)

tathā hi teṣāṃ sattvānāṃ bahubhiḥ kalpakoṭi-nayuta-śata-mahasrair  
api tathāgata-darśanaṃ bhavati vā na vā/ tataḥ khalv ahaṃ kula-  
putrās tad ārambaṇaṃ kṛtaivaṃ vadāmi/ durlabha-prādurbhāva  
hi bhikṣavas tathāgatā iti/

and ibid., p.39.8 (chap.2)

tad-yathāpi nāma śāriputrōdumbara-puṣpaṃ kadā-cit karhi-cit  
saṃdrśyate, evam-eva śāriputra tathāgato 'pi kadā-cit karhi-cid  
evaṃ-rūpāṃ dharma-deśanāṃ kathayati/

Tib. P.chu 138a8-138b2

rigs kyi bu dag de bzhin bshegs pa thabs mkhas pas dge slong  
dag de bzhin gshegs pa dag 'byung ba ni shintu rnyed par dka'o  
zhes tshig de skad gsung ngo//de ci'i phyir zhe na/ 'di ltar  
sems can de dag gis bskal pa bye ba khrag khrig brgya stong  
mang pos/de bzhin gshegs pa mthong bar 'gyur yang srid mi  
'gyur yang srid de/

ibid. P.chu 18b6-7

'di lta ste dper na/u dum ba ra'i tshal la me tog ni brgya la  
res 'ga' 'byung ngo//shā ri' i bu de bzhin gshegs pa yang brgya  
la res 'ga' zhig chos bstan pa 'di lta bu gsung ngo//

(45) Cf.AKK 7.34cd, Pradhan (1967), p.415.13, la Vallée Poussin (1971),  
tome 5, p.79.23-24,

śamatā sarvaṃ-buddhānāṃ nāyur-jāti-pramāṇataḥ//34

Tib. ; mnyam pa nyid de sku tshe dang//

- rigs dang sku bong tshad kyis min//
- (46) Cf. AKK 3.93cd, Pradhan (1967) , p.180.22-181.3, la Vallée Poussin (1971), tome 2, p.187.22, 188.5 (See note 1 in p.188), Yamaguchi (1955), pp.461.15-463.15,
- te hy aśtīr mahā-kalpaḥ tad-aśaṃkhyā-trayodbhavam//93
- buddhatvan
- Tib.; de dag brgyad cu la bskal chen//
- de grangs med gsum la sangs rgyas//
- (47) Because this text has not yet been identified, the Sanskrit title is tentatively restored according to Pāsādika (1989) ; its Tibetan version is rnam par gtan la dbab pa' i rgyal po' i mdo.
- (48) AKK 3.86-88a, Pradhan (1967) , pp.176.16-177.6, la Vallée Poussin (1971) , tome 2, pp. 178.3-179.7, Yamaguchi (1955) , pp.444.6-445.11,
- lohāp-śaśāvi-go-cchidra-rajo-likṣās tadudbhavāḥ/  
yavas tathāṅguli-parva jñeyaṃ sapta-guṇōttaram//86
- catur-viṃśatīr aṅgulyo hasto hasta-catuṣṭayam/  
dhanuḥ pañca-śatāny eṣāṃ krośo raṇyaṃ ca tan matam//87
- te 'ṣṭau yojanam ity āhuḥ
- (49) AKK 3.95cd-96, Pradhan (1967) , pp.184.5-186.6, la Vallée Poussin (1971) , tome 2, pp.196.23-197.4, Yamaguchi (1955) , pp.479.11.480.1, 483.14-484.8,
- suvarṇa-rūpya-tāmrāyaś-cakriṇas te 'dhara-kramāt//95
- eka-dvi-tri-catur-dvīpāḥ na ca dvau saha buddhavat/  
pratyudyāna-svayaṃ yāna-kalahāstra-jito 'vadhāḥ//96
- (50) Kṣemendra' s Avadānakalpalatā, 80.29ab,33,34, Das (1910) , pp.648-551. See Pāsādika (1979) , note 5.
- kālenodumbaravane ramyaḥ kusumasamcayaḥ/29ab . . .
- puṣpāṇy etāni jāyante sugatasyaiva janmani/  
anuttara-jñāna-lābhe vīkasanti samantataḥ//33
- āsanne parinirvāṇe mlāyanti nipatanti ca/  
ihate parinirvāṇaṃ kuṣipuryāṃ tathāgataḥ//34
- Tib.; me tog nyams pa de mthong nas/  
rab bzang mya ngan rgya yis thebs/29ab
- bde gshegs nyid ni 'khrungs pa na/  
me tog 'di dag 'byung 'gyur te/

bla med ye shes brnyes pa na/  
 kun nas rab tu rnam par rgyas/33  
 mya ngan 'das la nye ba ni/  
 nyams pa dang ni lhung bar 'gyur/  
 ku sha' i grong na de bzhin gshegs/  
 yongs su mya ngan 'das par bzhed/34

- (51) AKK 3.56, Pradhan (1967) , p.162.14-18, la Vallée Poussin (1971) ,  
 tome.2, p.147.8-10, Yamaguchi (1955) , pp.379.11-380.3,

ihottareṇa kiṭādrinavakāḍ dhimavān tataḥ/  
 pañcāśadvistṛtāyāmaṃ saro 'rvāg gandha-mādanāt//

- (52) See Encyclopaedia of Buddhism, vol.1, pp.580-581.

- (53) This verse has not yet been identified, but it is quoted in the  
 Buddhahūmivakhyāna. See Nishio (1982) , p.29 ;

rang dbang shin tu sbyangs pa dang//  
 gzugs bzang ba dang grags pa dang//  
 dpal dang bdag nyid che sogs pa//  
 drug la skal ba shes bshad do//

- (54) According to Buddhist tradition, Gautama lived in Tuṣita Heaven  
 before he was born. See LV, Lefman (1902) , p.14, Saṅgabhedavastu,  
 Gnoli (1977) , pp.39-40.

- (55) Cf. AKBh 3.1, Pradhan (1967) , p.111.5-8, la Vallée Poussin (1971) ,  
 tome 2, p.1.7-13, Yamaguchi (1955) , p.3.11-15,

naraka-preta-tiryāṅco manuṣyāḥ śaḍ divaukasah/  
 kāma-dhātuḥ/labc

catasro gatayaḥ śaḍ ca deva-nikāyās tad-yathā catur-mahā-rāja  
 kāyikās trāyastriṃśā yāmās tuṣitā nirmāṇa-ratayah para-nirmita-  
 vaśavarttinās cāty eṣa kāma-dhātuḥ saha bhājana-lokena/

- (56) Dharmasubhūtivibhāṣya. But I have not yet been able to identify  
 this text. This verse is quoted in the Abhidharmakośabhāṣya, chapter  
 4, hence Ratnākaraśānti might have taken this quotation. Cf. Pāsādika  
 (1989b) p.54 and AKBh, Pradhan (1967), p.124.9-10, la Vallée Poussin  
 (1971) , tome 2, p.44.14-17, Yamaguchi (1955) , p.114.11-15,

vāraṇatvam upagamya paṇḍaram śaḍviṣṇavaruciraṃ catuṣkramam/  
 mātṛgarbhāṣayanaṃ viveśasaṃprajānaṃ ṛṣir āśramaṃ yatheti//

- (57) Lumbini, where the Buddha was born. See LV chap.7.

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabāṣyaṃ Ratnālokālamkāra (I) (Mochizuki)

- (58) LV chap.7, Skt., Lefman (1902), p.83.5; plakṣaśākhāṃ. Tib., Foucaux (1847), p.77.1-2; plag sha'i yal ga las bzung ste.
- (59) LV, Skt., Lefman (1902), p.83.10; mātūr-dakṣiṇa-pārsvān-niṣkramati. Tib., Foucaux (1847), p.77.7; glo g-yas pa nas dran zhing shes bzhin du.
- (60) LV, Skt. Lefman (1902), p.83.12-14; śakro devānām-indro brahmā ca sadvāmpatiḥ . . . pratighṛītaḥ sma. Tib., Foucaux (1847), p.77.9-12; de' i tshe lha' i dbang po brgya byin dang/mi mjed kyi bdag po tshangs pa gnyis . . . de gnyis kyis . . . blangs so.
- (61) LV, Skt., Lefman (1902), pp.84.19-85.3; sapta-padāni prakrāntaḥ. Tib., Foucaux (1847), p.78.17-80.2. In LV he took seven steps forward in all directions.
- (62) AAK 5.18, Obermiller (1924), p.29, Conze (1954), p.85.20-24, kṣayānutpādayor jñānaṃ malānāṃ bodhir ucyate/ kṣayābhāvād anutpādāt te hi jñeye yathākramam//
- (63) Kuśinagarī, where the Buddha died.
- (64) Cf. MPS, V,I, DN, vol.2, p.137.
- (65) P.760.12, T.310.12. Unfortunately I have not yet been able to identify this passage.
- (66) Ratnākaraśānti thinks of SPS as a nītārthasūtra. This interpretation can be seen in his Prajñāpāramitōpadeśa, too. See PPU, D.hi 135b7.
- (67) I have not been able to identify this passage in the Bodhisattvapiṭaka.
- (68) Abhyankar (1986), p.49, explains the 'aṣṭama' as a term used by ancient grammarians for the vocative case.
- (69) BBh, Skt., Wogihara (1971), p.299.16-20, tad-yathā. bodhisattvo mahā-sattvaḥ dhīmān uttamadyutiḥ jina-putraḥ jin'ādharāḥ vijetā jināmkuraḥ vikrāntaḥ param' āryaḥ sārtha-vāho mahāyaśāḥ kṛpālur mahāpuṇyaḥ īśvaro dhārmikaś cēti. Tib ; P. shi 178b6-7, Chi.; T.p.549a26-b1.
- (70) Cf. MSA 14.lab, Lévi (1907), p.90.7, Lévi (1911), p.161.4-5, Bagchi (1970), p.88.3, kalpāsamkhyeya-niryāto hy adhimuktiṃ vivardhayan/
- (71) P.No.767. But I have not yet been able to identified this passage.
- (72) Udānavarga 4.1, Bernhard (1965), p.126, Dietz (1990), p.60. This



verse is quoted in the Yogācārabhūmi (Tib.dzi 279b8, Chi.379a23), too. See Schmithausen (1970), p.50.

apramādo hy amṛtapadaṃ pramādo mṛtyunaḥ padam/  
apramattā na mriyante ye pramattāḥ sadā mṛtāḥ//

Dhammapada 2.1

appamādo amatapadan, pamādo maccuno padan/  
appamattā na miyanti, ye pamattā yathāmata//

- (73) I do not know which text is the authority for this fivefold classification. There is an explanation of apramāda by means of a fivefold classification in BBh, which, however, differs from Ratnakaraśānti's. Cf. BBh, Wogihara (1971), p.142.-143.4, T.p.512a20-23.

- (74) T.No.397. But I have not yet been able to identify this passage. This sūtra has not yet been identified either. Ratnakaraśānti does not make any comment.

- (75) This sentence is a quotation from SPS and appears in the beginning of this chapter. See note (44) and Pasādika (1989) p.1.17.

- (76) GV 37-25, Vaidya (1960) p.212.21-22

durlabhāḥ kalpakoṭībhīr loke lokavināyakāḥ/  
amoghaṃ śravaṇaṃ darśanaṃ paryupāśanam//

Tib. P.ed., hi 14a1-2

mthong zhing bsnyen bkur byas pa dang//  
thos pa don yod gyur pa yin//  
'jig rten mgon po 'jig rten du//  
'byung ba bskal pa byed bar dkon//

- (77) This verse has not been identified yet.

- (78) This passage has not been identified.

- (79) P.No.762,i374a1-375a2,

bskal pa bzang po pa' i de bzhin gshegs pa de dag ni de'i tshes  
de'i dus na sras stong du gyur to . . . (374b6) bskal pa drug bcu  
rtsa lnga'i bar du 'tshang rgya bar mi 'gyur ro/de'i 'og tu bskal  
pa grags pa chen po zhes bya ba zhig byung bar gyur te bskal pa  
gcig po de la de dag byang chub mngon par rdzogs par tshang  
rgya bar 'gyur ro gang dag blong po brgyad khri po de dag ni  
bskal pa grags pa chen po 'das nas bskal pa brgyad bcu'i bar du  
'tshang rgya bar mi 'gyur ro/de'i 'og tu bskal pa skar ma lta

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabāṣyaṃ Ratnālokālamkāra (I) (Mochizuki)

bu zhes bya ba zhing 'byung bar 'gyur te/ de la blon po brgyad  
khri po de dag byang chub mngon par rdzogs par 'tshang rgya  
bar 'gyur ro bskal pa skar ma lta bu 'das nas bskal pa sum brgya  
na sangs rgyas 'byung bar 'gyur ro/ de' i 'og tu bskal pa yon tan  
bkod pa zhes bya ba zhing 'byung bar 'gyur te/ de la btsun mo  
brgya khri bzhi stong po de dag byang chub mngon par rdzogs  
par 'tshang rgya bar 'gyur ro/

Chi : T.p.65a25-65b3

- (80) According to the context of SS it means mahāyaśaskalpa (bskal  
pa snyan pa chen po) .

Abbreviations

- C. Co ne edition (from the microfiche ed. published by the Institute  
for Advanced Studies of World Religions, New York) .  
D. sDe dge edition (Tibetan Tripiṭaka, sDe dge edition, bstan 'gyur,  
dBu ma, Sems tsam, Tshad ma, Univ. of Tokyo, Tokyo) .  
P. Peking edition, The Tibetan Tripiṭaka, ed. by Suzuki, D. T.,168  
vols, 1955-61, Tokyo-Kyoto.  
PS. Pāsādika (1989) .  
T. Taishō Shinshū Daizōkyō.

Abbreviations and Original Sources

- AAK Abhisamayālamkāraśāntikā  
Skt. : Stcherbatsky (1929) .  
Tib. : Stcherbatsky (1929) .  
AKK Abhidharmakośakārikā  
Skt. : Pradhan (1967) with AKBh.  
Tib. : D.4089, p.5590.  
Chi. : T.1560.

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabhāṣya Ratnalokāṣṭkā (I) (Mochizuki)

- AKBh Abhidharmakośabhāṣya  
Skt. : Pradhan (1967) .  
Tib. : D.4090, P.5591.  
Chi. : T.1558, 1559.
- BBh Bodhisattvabhūmi  
Skt. : Wogihara (1971) .  
Tib. : D.4037, P.5538.  
Chi. : T.1579.
- GV Gaṇḍavyūhasūtra  
Skt. : Vaidya (1960) .  
Tib. : P.761.  
Chi. : T.278, 279.
- LA Laṅkāvatārasūtra  
Skt. : Nanjio (1923) .  
Tib. : P.775.  
Chi. : T.670, 671, 672.
- LV Lalitavistara  
Skt. : Lefman (1902) .  
Tib. : Foucaux (1847) .  
Chi. : T.186, 187.
- MSA Mahāyānasūtrāṣṭkārahāṣya  
Skt. : Lévi (1907), Bagchi (1970).  
Tib. : D.4026, P.5527.  
Chi. : T.1604.
- NBT (D) Nyāyabinduṭīkā by Dharmottara  
Skt. : Stcherbatsky (1918).  
Tib. : Stcherbatsky (1904).  
Index. : Stcherbatsky (1927, 1928)
- NBT (V) Nyāyabinduṭīkā by Vinītadeva  
Tib. : de la Vallée Poussin (1908-13)
- PPU Prajñāpāramitopadeśa  
Tib. : D.4079, P.5579.
- PV Pramāṇavārttikakārikā  
Skt. : Miyasaka (1971-2).  
Tib. : Miyasaka (1971-2).

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabhāṣyaṃ Ratnālokālaṃkāra (I) (Mochizuki)

RA	Sūtrasamuccayabhāṣyaṃ Ratnālokālaṃkāra Tib. : D.3935, P.5331.
SBh	Śrāvakabhūmi Skt. : Shukla (1974), Shōmonji Kenkyū-kai (1981-). Tib. : P.5537. Chi. : T.1579.
SDP	Saddharmapuṇḍarikasūtra Skt. : Kern (1908-12) Tib. : P.781 Chi. : T.262, 263, 264.
SS	Sūtrasamuccaya Tib. : Pāsādika (1989), D.3934, P.5330. Chi. : T.1635

See Bechert (1990) also.

Translations and Secondary Sources

Abhyankar, K.S.

1986 A Dictionary of Sanskrit Grammar, with J.M.Shukla, Baroda.

Bagchi, S.

1970 Mahāyānasūtrālaṃkāra of Asaṅga, BST 13, Darbhanga.

Bechert, H.

1990 Abkürzungsverzeichnis zur buddhistischen Literatur in Indien und Südostasien, Göttingen.

Bernhard, F.

1965 Udānavarga, Band 1, Göttingen.

Conze, E.

1954 Abhisamayālaṃkāra, Roma.

Das, S.C.

1888—1917 Avadāna Kalpatā, BI, New Series, 1257, Calcutta.

Dietz, S.

1990 Udānavarga, Band 3, Göttingen.

Foucaux, P.E.

1847 Rgya tch'er rol pa, ou Developpement des Jeux, Paris.

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayaśāstra Ratnalokalaṃkāra (I) (Mochizuki)

- 1884 La Lalita Vistara, Paris.
- Gangopadhyaya, M.
- 1971 Nyāyabindhu-ṭīkā, Calcutta.
- Gnoli, R.
- 1960 The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti, Roma.
- 1977 The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, Roma.
- Hahn, M.
- 1982 Nāgārjuna's Ratnāvalī, Bonn.
- Ichigō, M. 一郷正道.
- 1985 中観莊嚴論の研究 Chūgan-shōgon-ron no kenkyū, Kyoto.
- Kajiyama, Y. 梶山雄一.
- 1989 Studies in Buddhist Philosophy, Kyoto.
- Kern, H.
- 1908—12 Sadharmapuṇḍarikasūtra, BBu 10, St. Petersburg.
- la Vallée Poussin, L.de.
- 1971 L' Abhidharmakośa de Vasubandhu, 6 tomes, MCB 16.
- 1984 Tibetan Translation of the Nyāyabindhu of Dharmakīrti with the Commentary of Vinitadeva, BI, New series 171, Calcutta, repr. of 1907-13.
- Lefman, S.
- 1902 Lalita Vistara, 2 vols, Halle.
- Lévi, S.
- 1907 Asaṅga, Mahāyānasūtrālaṃkāra, tome 1, Paris.
- 1911 Asaṅga, Mahāyānasūtrālaṃkāra, tome 2, Paris.
- Lindtner, Chr.,
- 1982 Nāgārjuniana, Copenhagen.
- Miyasaka, Y. 宮坂有勝.
- 1971—2 Pramāṇavārttika-kārikā, インド古典研究 Acta Indologica 2.
- Mochizuki, K. 望月海蔵.
- 1991 Atiśa の Sūtrasamuccayaśāstra について  
On the Sūtrasamuccayaśāstra of Atiśa, IBK, 40-1.
- Nanjio, B. 南條文雄.
- 1923 梵文入楞伽經 The Laṅkāvatāra Sūtra, Kyoto.
- Nishio, K.
- 1982 仏地経論の研究 The Buddhābhūmi-sūtra and the Buddhābhūmi-

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabāṣyaṃ Ratnalokālaṃkāra (I) (Mochizuki)

vyākhyāna of Śīlabhadra, Tokyo.

Pāsādika, Bhikkhu

1978—82 The Sūtrasamuccaya, An English Trnslation from the Tibetan Version of the Sanskrit Original, Linh-So'n, 2-20.

1979 Nāgārjuna's Sūtrasamuccaya- I, The Journal of Religious Studies, 7-1.

1989 Nāgārjuna' s Sūtrasamuccaya, a Critical Edition of the mDo kun las btus pa, K øbenhavn.

1989b Kanonische Zitate im Abhidharmakośabhāṣya des Vasubandhu, Göttingen.

Pradhan, P.

1967 Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu, Patna.

Rigzin, T.

1986 Tibetan-English Dictionary of Buddhist Terminology, Dharmasala.

Schmithausen, L.

1970 Zu den Rezensionen des Udānavargaḥ, WZKS 14.

Seyfort Ruegg, D.

1981 The Literature of the Madhyamaka School of Philosophy in India, Wiesbaden.

Shōmonji Kenkyūkai 声聞地研究会.

1981—90 梵声声聞地 Bonbun shōmon-ji, 大正大学綜合仏教研究所年報 Taishō Daigaku Sōgō-bukkyō-kenkyū-jo Nenpō 3-9.

Shukla, K.

1973 Śrāvakabhūmi of Ācārya Asaṅga, Patna.

Stcherbatsky, T.

1904 Nyāyabindhuṭikā, (Tib.ed.), BBu. 8, Leningrad.

1918 Nyāyabindhuṭikā, (Skt.ed.), BBu. 7, Leningrad.

1927 Indexes verborum, Sanscrit-Tibetan to the Nyāyabindhu of Dharmakīrti and the Nyāyabindhuṭikā of Dharmottara, BBu. 24, Leningrad, with E. Obermiller.

1928 ibid., Tibetan-Sanscrit, BBu. 25. Leningrad.

1929 Abhisamayālaṅkāra-prajñāpāramitā-upadeśa-śāstra, BBu 23, with E. Obermiller. Leningrad.

1930—32 Buddhist Logic, 2 vols, BBu 26, Leningrad.

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabāṣyaṃ Ratnālokalaṃkāra (I) (Mochizuki)

Umino, T. 海野孝憲.

1985 ラトナーカラ・シャーンティと龍樹 Ratnākaraśānti to Ryūju,  
真宗教学研究 Shinshū Kyōgaku Kenkyū 9

Vaidya, P.L.

1960 Gaṇḍavyūhasūtra, BST 5, Dharbhanga.

Wogihara, U. 荻原雲来.

1971 Bodhisattvabhūmi, Tokyo, reprint.

Yaita, H. 矢板秀臣.

1987 Dharmakīrti on the Authority of Buddhist Scriptures (āgama),  
南都仏教 Nanto Bukkyō 58.

Yamaguchi, S. 山口 益.

1955 俱舍論の原典解明—世間品— Kusharon no genten kaimei -sekenbon-  
with I. Funahashi, Kyoto.

Here I express my gratitude to Prof. Dr. L. Schmithausen who made valuable suggestions upon my Sanskrit reading, and Dr. Bhikkhu Pāsādika who gave me some critical comments and patiently corrected my English.

## ◇編集後記◇

本学に永年お勤めになられた秋山智孝先生が、古稀をお迎えになりました。本号は、先生の多年に亘る業績と学恩を報ずる記念号として、学内外諸先生の御賛同を得て多数の玉稿を賜り発刊いたしました。

本学の前身である祖山中学・身延山専門学校の頃より約半世紀を伴として歩まれた先生の御苦勞には、戦後の動乱期から高度経済成長期を経て現在に至るまで、筆舌には語れないものがあつたことを窺っており、本学の現在の陣容があることを思うと、教職員一同深甚より感謝申し上げますにはおられません。

また、大学教育は転換期を迎え、本学も社会の様々な

ニーズに対応でき得るように、新たに組織体制そのものを改組し、四年制大学へと転換しようとしております。

文部省が示した新大学設置基準を照合し、問題点を一つづつ解決せねばならないことは、小規模校にとって多大な時間的・人為的勞力を必要とします。

しかしながら、有為な人材を育成し、法器養成を至上としつつ、一般にも開かれた学際的な教育を施せるような体制の構築を模索し、現在、全学を挙げて邁進しております。

同窓・会員諸兄には、意を充分にお汲みいただき益々の御理解・御支援を賜りたくお願い申し上げます。

(池上 記)



望	中	渡	中	町	高	望	中	冠	宮	庵	上	浅
月	尾	辺	山	田	橋	月	尾		崎	谷	田	井
海	真	寛		是	堯	海		賢	英	行	本	円
慧	樹	勝	勝	正	昭	淑	堯	一	修	亨	昌	道
(ハンプルグ大学客員研究員)	(学習院大学大学院生)	(身延山短期大学助教)	(身延山短期大学講師)	(身延山短期大学教授)	(身延山短期大学教授)	(身延山短期大学教授)	(立正大学文学部教授)	(立正大学仏教学部教授)	(身延山短期大学教授)	(立正大学仏教学部教授)	(立正大学仏教学部教授)	(立正大学仏教学部教授)

平成五年三月二十五日 印刷  
平成五年三月三十日 発行

印刷者 宮田如龍

甲府市中央一丁目十二—三十二

印刷所 大宣堂印刷

電話 (055) 二五一二六〇

山梨県身延山東谷

(四〇九—二五)

發行所 身延山短期大学学会

振替(甲府)五―二七五番  
電話(〇五六)二―〇一〇七

# THE SEISHIN

The Journal of Nichiren and Buddhist Studies

No. 65

## CONTENTS

Preface.....	Eishu Miyazaki
A Meaning of 'the Perfect Teaching'.....	Endo Asai... 13
The Maṇḍala by Nichiren of Minobu Period.....	Honsho Ueda... 25
A Meaning of 'Revealing the True Teaching'.....	Gyoko Otani... 43
A few Problems on the Demise of Nichiren.....	Eishu Miyazaki... 51
The Manuscripts of Nichiren's Writings in the Middle age.....	Kenitsu Kanmuri... 73
Use of Nichiren's Writing Paper.....	Takashi Nakao... 91
Faith of the Lotus Sutra.....	Kaishuku Mochizuki...111
Popularization of Various Religions in the Kushan Period.....	Gyosho Takahashi...129
Wisdom and Compassion.....	Zesho Machida...155
Historical Document of the Peasant Uprising in Okayama Prefecture.....	Masaru Nakayama...171
Note—On "The new Basis of Establishing a University".....	Kansho Watanabe...185
On the Transmission of <i>Honcho-monzui</i> in the Possession of Minobu-san.....	Masaki Nakao...199
Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabhāṣyaṃ Ratnālokālaṃkāra (I).....	Kaie Mochizuki... 1

---

Edited by

Minobusan College

Minobu, Yamanashi, Japan.